

MACROSS—A. D. 2048—

eisyama

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

西暦2048年。

統合軍士官学校より統合軍の掃き溜めと呼ばれる部隊ブラックバルチャー隊に配属される事となった二人の少年。

果たして二人を待ち受ける運命は？

pixiv掲載版からの転載ですが、加筆修正や追加エピソードを加えています。

もしよろしければ今後の自身の文章力向上の為、色々とアドバイス等が頂ければ幸いです。

# 目次

プロローグ	1
第1話ブラックバルチャー	5
第2話ファースト・ミッション	43
第3話ユナイテッドフロント	76
第4話メモリー・オブ・ドルチェフ	122
第5話カムフラージュ	170
第6話バルチャースクープ	207
第7話デンジャラススクープ	247
第8話レディ・リーダー	284
第9話レディーズ・ファイト	325
第10話スナイプ・スナイパー	367

第11話デビル・リゾート	404
第12話アフター・イン・ザ・ダーク	443
第13話フラッシュユ・イン・ザ・ダーク	480
第14話デストラクション・オブ・バルチャー	519
第15話プロジェクト・エスペランサ	555
第16話アイドル・オーデイション	588
第17話デビル・オブ・エンジェル	626

第18話 HEXAGRAM | 665

第19話 ニュー・ホーム | 703

第20話 ボーイズ・ミーツ・ガール

745

# プロローグ

西暦1999年、突如地球に飛来してきた謎の宇宙船は、人類の想像を遙かに越えたテクノロジーを持っていた。

統合戦争と言う長く苦しい道のりを乗り越えて人類は、この船をSDF―Iマクロスと命名し修復する。

その10年後の2009年。

大規模な異星人の攻撃により地球は焦土と化した。

マクロスと異星人の戦いが熾烈を極める中、一人の少女が戦況を変える事となる。

リン・ミンメイ

少女の歌声は異星人達に文化を教え、人類との共存への道を作り出す。

少女の歌声に感化して人類と共存の道を作り出す事で、やがて戦争は終結を迎える。

戦争が集結した人類は種族繁栄の為、新たな植民地を見つけべく銀河系へと旅立つて行く。

そして、時は流れて戦争終結の2010年から38年後の西暦2048年。

二人の少年パイロットの物語が始まろうとする。

タクヤ・バーズラッド・・・18歳

統合軍航空士官学校卒業

学力ランクE― 技術ランクE―

エスター・ワードナ・・・18歳

統合軍航空士官学校卒業

学力ランクA+ 技術ランクA―

狭い部屋で男は机の上に座り、タバコをふかしつつ書類に目を通してている。

男の風貌は少し厳つい顔立ちと人を寄せ付けないような雰囲気を持ち、書類に目を通す度に厳つい表情が更に険しくなる。

時々、吸い終えたタバコを灰皿に押し付けた後に再びポケットからタバコを取り出してライターで火を点けて啜える。

その動作が3、4回程行われる。

「ふう……」

書類に目を通し終えた男は、啜えていた7本目のタバコを灰皿に押し付けて深い溜息を吐く。

そして、首を横に振った後に目頭の辺りを右親指と人差し指で強く押さえる仕事をす  
る。

「どうしました？ 隊長。そんなに深い溜息を吐いて」

先程から男の傍に立っていた女性が男に問い掛ける。

女性の風貌は赤く長いストレートヘアを緩く結い、少しキツめの瞳。

そして、一番わかりやすい特徴として巨人族の特徴である尖った耳を持つ。

彼女は、女性ばかりの巨人族メルトランデイである。

「まあ、見てみる」

男は、先程見ていた書類を女性に渡す。

書類に目を通す女性も書類に目を通す度に表情が段々と険しくなる。

「……確かに隊長の言うとおり、士官学校も偏った人材をこちらに寄越してきましたね」

男から受け取った書類を一通り見た女性も書類を見終わった後に男と同様に険しい表情をしたまま深い溜息を吐く。

「どうだ、今度来るヒヨっ子達は？」

「そうですね……書類を見ただけでは酷いと言えませんが、もしかしたら化ける可能性もあるかも知れません」

「そうか。まあ……来たら来たで俺がたつぷりとかわいがつてやるさ」

男は不敵な笑みを浮かべつつ、再びポケットから本日8本目のタバコを取り出して口に咥えてライターで火を点ける。

「ウチの部隊では、初めての士官学校からの配属ですからね。ココに来て早々、すぐに逃げ出したりしなければ良いですけど……」

男に釣られて女性も少しだけ笑みを浮かべる。

「そうだな」

男は、タバコの煙を一旦鼻から吐き出して、そのまま窓のブラインドの隙間から空を見上げる。

紫色に濁った空を見上げると、ちょうど偵察から戻ってきたバルキリーが滑走路へと向かっていく姿が見えた。

「少しは楽しませてくれよ、新人さん」

男は、そう呟きニヤつく。



## 第1話 ブラックバルチャー

地球から何万年も離れた場所にある移民惑星ローグ。

大きな的には、太陽系内で言う水星とほぼ同じ程の大きさである。

今から十数年前にとある移民船団がこの惑星を発見して調査を始める。

しかし、調査の結果、気候や生活環境等のデータが移民基準値に殆ど満たない為、移民船団は移民計画を中止し、その後もこの惑星への移民予定が無いまま、しばらくの間は放置されていた。

それから数年後、統合軍は、この惑星を開拓して簡易基地を建造して利用していたが、数年前からは統合軍の掃き溜めと呼ばれる部隊ブラックバルチャー隊の基地として使用されている。

いつしか統合軍内では、使えない人員達がそこへ左遷されると風の噂で流れていた。

その統合軍の掃き溜め部隊と呼ばれる基地がある、この惑星に1隻の小型艇がフォールドアウトする。

フォールドアウトした小型艇は、そのまま惑星の気圏内へと突入を開始する。

気圏内へ突入を終えた小型艇は、そのままブラックバルチャー基地へと航路を向け

る。

「タクヤ、エスター。基地に到着するから、そろそろ起きろ」

ガツチリした体格に刈り上げた髪型。

いかにも体育会系の外見が特徴な男性がシートで眠っている二人の少年に声を掛ける。

「ふあゝあ、やつと着いたかあ……」

体育会系の男に起こされたブロンドヘアーにツンツン髪の少年、タクヤはアイマスクを外して大きな欠伸をしながらシートに腰掛けたまま背伸びする。

ブロンドヘアーでツンツン髪の少年、タクヤは「やんちや坊主」と言う言葉が似合いそうな風貌を持つ。

「おい、エスター。着いたぞ、起きろよ」

タクヤは、隣に座る青髪の少年、エスターをゆさぶり起こす。

「僕なら、もう起きてるよ」

エスターは、アイマスクを外して膝元に置いた眼鏡を掛ける。

青髪の少年、エスターは中性的な顔立ちが特徴的で。パツと見では女性と間違えてもおかしくない風貌である。

「俺達の向かう基地ってどんな所なんだろう？」

「自然が綺麗な所だと良いなあ……」

「俺は、カワイ子ちゃんがいるなら何でもいいや♪」

二人が思い思いの事を考えているうちに、しばらくして窓の防護シャッターが開き、外の景色が映し出される。

突然の明るさに二人は一瞬、目を覆うが、次第に明るさに慣れたのか景色に目を向ける。

「……な、何だこりゃ」

「……凄い所だね」

二人は、窓に映る外の景色を見て目を白黒させる。

二人の視界に映る景色は、まさに人が移住をしているような雰囲気ではなかった。

地面は所々がひび割れ、周辺には森林が生い茂り、町らしき建物は全く無く、空は日が差さず、少し暗めの薄紫がかった空色しか見えない。

まるでファンタジー小説の物語にでも出てくるような風景に二人は、言葉を失っていた。

「うわあ……俺達、これからマジでこんなヤバイ所で生活するのだよ」

景色を見渡しながらタクヤは、ゲツソリした表情で呟く。

「あ、あの……教官。ここには、本当に人が住んでいるんですか？」

外の景色を見て不安を感じたエステルは、不安な表情を浮かべたまま二人を起こした男である教官に質問する。

「人が住んでるに決まってるじゃないか。そもそも人が住んでいなかっただら、ここまで来るわけないだろ」

教官は、不安そうな表情で質問するエステルに対して少しぶつきらぼうに答える。

「で、でもさあ……コレって、どう見ても人が住んでいる様なレベルじゃなくね?」

「そ、そうだよね」

外の景色を見て不安な表情を見せるタクヤの言葉にエステルは、思わず同意して頷くと同時に不安な気持ちは、いつそう強くなっていた。

そんな二人の気持ちをよそに小型艇は、ブラックバルチャー基地へと進路を向けて進んでいく。

「つべこべ言っていないで、早く下船準備をしろ!」

「へいへい」

教官に急かされて二人は、シート上部のカーゴ内から荷物を取り出して下船準備を始める。

しばらく進むと正面の森林の間から、やっと建物らしき物が見えてくる。

「タクヤ、見て」

窓越しから建物を見つけたエステルは、建物に指を差す。

「お、やっと建物らしき物が見えてきたか！」

今までの景色が森林しか無かった為、森林以外の物を見たタクヤは、思わずテンションを上げる。

「それにしてもタクヤはともかく。エステル、お前までタクヤと一緒にこんな場所に来なくても良かったろうに」

教官は下船準備をするエステルに同情的な声を掛ける。

タクヤとエステルは、士官学校入学時から、ふとした切っ掛けで出会う事となる。

出合いの切っ掛けは、入学時に上級生に絡まれていたエステルをタクヤが助けた事だ。

しかし、実際はケンカ早い割には実力は伴わず、タクヤは上級生にボコボコにされると言う結末だった。

例えばボコボコにされたとは言え、結果的に助けてくれたタクヤにエステルは、とても感謝をしていた。

それを機に二人は友達となり、お互いに学校生活を送る。

タクヤは、やんちゃ坊主の特徴通りに勉強はからつきダメ、バルキリーの操縦ですらままならなく、時には授業をサボったりする事もあった。

対するエスターは、真面目で勉強ならびにバルキリーの操縦も上位に食い込む程の實力を見せ、所謂エリートコースまっしぐらだった。

元々ブラックバルチャー隊への配属はタクヤのみであり、エスターは統合軍特殊部隊への配属が決まっていた。

人伝いにタクヤの配属先の情報を知ったエスターは、タクヤのみでは不安的な部分が多くなると思い、あえて自身の配属先を断り、タクヤと同じ配属先を希望していた。

「いえ、僕はタクヤと一緒にの方が安心できます」

同情的な教官の声掛けに対してエスターは、わざとらしく笑みを返す。

エスターからの予想外の反応に教官は、不服そうな表情を浮かべる。

やがて小型艇はランディングギアを展開し、ブラックバルチャー基地の滑走路へと着陸を開始する。

小型艇のエンジンが止まり、搭乗口よりタラップが展開する。

搭乗口から教官が先にタラップを降り、後に続いてタクヤとエスターが降りる。

タクヤ達が基地に降り立つと、一人の男が腕を組んで立っていた。

先程、部屋で書類を読んでいた厳つい表情の男だ。

「よく来たな」

出迎えた男の少し無愛想な言葉に教官は、少しだけビクビクしながら敬礼をする。

「タクヤ・バーズラッド、エスター・ワードナ、二名。本日より貴殿の部隊へと配属になります。不束者でございますが、よろしく願います。ほら、お前達も敬礼しないか！」

教官に急かされて二人もならって男に敬礼する。

教官の態度は、タクヤとエスターに対しての高圧的な態度と違って、出迎えた男に対しては、やけにおべっかを使っている感じだった。

「わかった、後の事は任せておけ」

男は、タクヤとエスターを下から舐めるように見ながら教官に返事をする。

「はー、では、二人をよろしく願います」

それだけ言うと、教官は小型艇へとそそくさと戻っていく。

教官が戻るのを確認すると小型艇は急上昇をして、そのまま速度を上げて飛んで行く。

その様子を見ていたタクヤとエスターは呆気にとられた表情をしていた。

「なんだよ、教官のあの態度。俺達にはエラそうにしゃがって」

タクヤは、教官の態度を思い出して不満を愚痴りだす。

「そうだよね……」

そんなタクヤの言葉にエスターも思わず苦笑する。

「お前達、ムダ話はいいから荷物を持って着いて来い」

男に言われて二人は、荷物を手にして男の後に着いて基地の中へと入る。

基地内部は少し薄暗く、人の気配すら無い雰囲気だった。

聞こえてくるのは、三人の足音と時々聞こえてくる水滴の音のみだった。

時々ひんやりとした空気が流れて来るので余計に不気味な感じが増してくる。

（うへえ、気味わりい……今にも何か出そうな雰囲気だあ……）

タクヤは、不安げな表情で歩きながら基地内をキョロキョロと見ている。

タクヤの様子を見たエスターも釣られて辺りをキョロキョロと見回す。

「なあなあ、何か出てもおかしくない雰囲気だよな？」

基地内の雰囲気を見ていたタクヤは、エスターにそつと耳打ちする。

「う、うん……何だかそんな感じだよね」

タクヤの耳打ちにエスターは同意して頷く。

不安げな表情をしつつも二人は基地内を見渡しながら男の後を着いて行く。

「ここだ」

しばらく歩き、男はドアの前で立ち止まる。

男は胸ポケットからカードキーを取り出してドアロックを解除し、ドアを開けてそのまま部屋に入る。



「入れ」

男に声を掛けられて、二人は部屋の中に入る。

部屋の中は閑散としており、目に付くのは机と本棚らしき棚、机の上に置いてある端末のみだった。

「紹介が遅れたな、俺がブラックバルチャー隊隊長のドルチェフ・ブライアんだ。ひとつ、よろしく頼む」

少々無愛想な態度でドルチェフは挨拶する。

「隊長、質問いースか？」

ドルチェフの挨拶が終わると同時にタクヤは、手を挙げて質問する。

「何だ？」

「ここに来るまで景色を見ていたんだけど、街みたいな物は無いんスか？」

「街か……残念ながら、そんな物は一つもない」

タクヤの質問にもドルチェフは、相変わらず無愛想に答える。

「ちえー、なんだよ。何かつまんねえ所だなあ……」

ドルチェフの言葉にタクヤは、口を尖らせて不満そうな表情を浮かべる。

非番時には、街に繰り出して遊びたかったのだろう。

「タクヤ、そんな言い方は……」

不満を呟くタクヤをエスターは咎める。

「いや、彼の言う通りだ。ハッキリ言って、ここはつまらん場所だ。俺がこの場所に来た時も同じ事を思ったもんだ」

タクヤの態度を咎めるエスターにドルチェフは、基地配属当時の感想を正直に話す。

ふと、エンジン音が耳に入ったドルチェフは、部屋の窓のブラインドを指で折り曲げて空を見上げる。

空には、ちょうど偵察を終えたバルキリーが滑走路に向かっていた。

「ちようどいい。偵察部隊が帰ってきたみたいだから、他のヤツにお前達の部屋と格納庫を案内させる。少し待っている」

ドルチェフに言われて二人は、ドルチェフの部屋で案内係が来るのをしばし待つ事となる。

ドルチェフは机の角に腰掛けて目を閉じ、タクヤは退屈そうな表情をしながら時々欠伸をし、エスターは不安げな表情をしながら待っていた。

コンコン

「隊長、よろしいでしょうか?」

「入れ」

しばらく待っていると、ドアがノックされて一人の女性がドルチェフの部屋に入って

来る。

先程ドルチェフと一緒に書類を見ていた女性だった。

「マリア・ランカスター他二名、偵察任務完了しました。こちらが偵察報告書です」

マリアは、ドルチェフに敬礼をして偵察報告書を渡す。

「ご苦労だったな、マリア。紹介しよう、コイツらが今日から俺達の部隊で世話をする新米達だ」

報告書を受け取り、ドルチェフはマリアに二人を紹介する。

ドルチェフに紹介されてエスターは、少し緊張した面持ちになる。

マリアは、ドルチェフに紹介された二人を見る。

「よく来たわね、二人共。私はマリア・ランカスター、階級は大尉。ここでは副隊長も兼ねているから、よろしく頼むわね」

マリアは、二人に敬礼する。

「エ、エスター・ワードナです。こ、こちらこそ、よろしく願います」

エスターは、緊張した面持ちでマリアに挨拶をして敬礼をする。

「ちいっす！ 初めまして、タクヤ・バースラッドです。こちらこそ、よろしく願います」

エスターが緊張した面持ちで挨拶をする一方、タクヤは少しふざけた感じでマリアに

挨拶をする。

タクヤのふざけた態度にマリアの表情は険しくなり、そのままタクヤに歩み寄る。そして、マリアはいきなりタクヤの頬をひっぱたく。

「いつてえな、いきなり何するんだよ！」

突然の事にタクヤは、ひっぱたかれた頬を押さえて思わず目を大きく見開いてマリアを怒鳴りつける。

しかし、マリアはタクヤの怒鳴りつける態度を無視したまま胸倉を強引に掴む。

「あなたは、士官学校で上官に対しての礼儀を習わなかったのかしら？」

「んだとー！」

タクヤは、胸倉を掴んでいるマリアの腕を乱暴に振り解く。

二人のピリピリした様子にエスターは、ただ何もせずにオロオロしていた。

「あなた、タクヤだったかしら？ あなたの資料を見させてもらったけど、あんな最低な成績でよく士官学校を卒業できたわね」

マリアは、タクヤの成績表を思い出して薄ら笑いをする。

マリアの馬鹿にしたような様子にタクヤは怒り心頭になる。

「くっ……女でも言つて良い事と悪い事の区別はつかねえのかよ！」

タクヤは、怒りに任せてマリアに殴りかかろうとする。

だがその時、ドルチェフは突如二人の間に割って入り、タクヤの腹に蹴りを喰らわせる。

ドルチェフに腹を蹴られたタクヤは、蹴られた勢いで壁まで吹き飛ぶ。

「う、うえっ……ゲホッゲホッ……」

タクヤは蹴られた腹を押さえて、呻き声を出しながらうづくまる。

「タクヤ！」

もがき苦しむタクヤの様子に心配そうに駆け寄るエスターをドルチェフは押しつけて、うづくまるタクヤの胸倉を強引に掴む。

「タクヤ。今のは、お前が悪い……ガキじゃねえんだから、それくらいはわかるよな？」

ドルチェフは、タクヤを鬼のような形相で睨み付ける。

「……う、うう……ぐ、ぐうう」

腹を蹴られたダメージが大きいのか、タクヤは声もロクに出ない様子だった。

「ちゃんと謝れ」

「……くっ」

「返事は？」

「……」

黙り込むタクヤに追い討ちを掛けるかの如く、ドルチェフは無言でタクヤの額に頭突

きを喰らわす。

「ぐっ！ うう……」

ドルチェフの頭突きを喰らい、タクヤの額に青あざができる。

「返事は？」

「……ず、ずびば……ぜん」

ドルチェフの頭突きが効いたのか、タクヤは弱々しい声で応える。

「すみませんじゃないだろ！ 申し訳ございませんだろうが！」

ドルチェフは、再びタクヤに頭突きを喰らわす。

二度の頭突きを喰らいタクヤは目を白黒させる。

「た、隊長。あまりやりすぎるとタクヤが……」

タクヤの様子を見て心配するエスターは、ドルチェフに声を掛けるが、その声は少し

震えていた。

「フン、これぐらいでくたばる位ならウチの隊にはいらん！ さあ、どうした！」

ドルチェフは、タクヤの胸倉を掴んでいる腕に更に力を入れる。

「……も、もうしわ……け……ぎ……ぎいま……せん」

蚊の鳴くような声でタクヤは、ドルチェフに謝る。

「聞こえねえぞ、バカ野郎！」

弱々しい声で謝るタクヤの態度にドルチェフは、更に怒鳴り散らす。

「も、申し訳ございません！」

タクヤは、腹の底から精一杯の声を出して謝る。

「フーン！」

ドルチェフは、タクヤの胸倉を掴んでいた手を強引に離す。

ドルチェフから開放されたタクヤは、尻餅を付いてそのまま床に倒れ込む。

「タクヤ、だ、大丈夫？」

エステーが心配そうにタクヤに駆け寄り、表情を覗き込む。

「だ……大丈夫じゃねえ……」

タクヤは、既に元気が出ないくらいのグロッキー状態で起き上がれる気力すら無かった。

「まったく……このバカのお陰で時間がムダに過ぎたな。マリア、とりあえず二人を部屋に案内した後、格納庫に連れて機体の確認をさせろ」

ドルチェフは、イラついた態度でマリアに命令する。

「了解。二人共、着いてきなさい」

エステーは自分とタクヤの分の荷物を持ち、フラフラ状態で立ち上がる気力の無いタクヤを支える感じでドルチェフの部屋を後にしてマリアの後を着いて行く。

先程通った薄暗い通路を三人は歩いていく。

「あ、あの……」

先程のピリピリした雰囲気息が詰まりそうな状態に耐え兼ねたエステーがマリリアに恐る恐る声を掛ける。

「何かしら？」

「タクヤが失礼をして、申し訳ございません」

エステーは、タクヤに肩を貸したまま頭を下げる。

「あら、あなたが謝ることないわよ」

「そうだそうだ、お前は悪くない。ケンカを売ってきた、そつちが悪いんだ」

エステーの肩に凭れながらタクヤが不平不満を言う。

「あなたねえ……もう一回殴られたい？」

タクヤの悪びれない態度にマリリアは指を鳴らす素振りを見せる。

「タクヤ！」

自分が悪い事をしていると思っていないタクヤをエステーは、慌てて一喝する。

「……」

エステーに一喝されたタクヤは、そつぽを向いてふてくされた表情をする。

反省している様子の無いタクヤを見たエステーは、深い溜息を吐く。



「確か、エスター君だったかしら？」

「は、はい！」

マリアに声を掛けられてエスターは、少しビクツとする。

「あなたもこんなのと一緒で大変ね」

マリアは、哀れみの表情でエスターを見る。

その目は同情をする様な感じではなく、少し小馬鹿にしたような感じである事にエスターは気付いていた。

「で、でも……タクヤにも良い所はあると僕は思っています」

士官学校で共に過ごしてきただけにエスターは、タクヤの良い部分を知っていた。

初対面だけでは、全てを把握はできないからこそである。

「ふーん……そう」

エスターは、タクヤをフォローするもマリアは何も感じる事も無く、少し呆れたような表情をする。

しばらく歩いた所で部屋のドアが見えてくる。

その部屋のドアの前でマリアが立ち止まる。

「この部屋よ」

マリアが鍵を開けて部屋のドアを開けると、少しカビ臭い匂いが鼻をつく。

マリアが部屋に明かりを点けた後、明るくなった部屋の中を二人は見渡す。

部屋の中は少し狭い感じはするが、そこそこ綺麗に掃除された部屋だ。

「ここがあなた達の部屋よ。部屋に着いて早速だけど、これから格納庫へ案内するから荷物だけ部屋に置いて」

エスターは自分とタクヤの分の荷物を部屋に置き、マリアの後に着いて格納庫へと向かう。

先程の部屋からしばらく歩くと大きな入り口が見える。

今までの暗く不気味な雰囲気から一転、基地内が明るく見えてくる。

「ここが基地の格納庫よ」

格納庫は思った以上に広く、各々の機体が戦闘機形態であるファイター形態のまま配備されている。

「スゲー……」

「結構広いですね」

タクヤとエスターは辺りを見回し、格納庫内の広さを実感する。

格納庫の奥では、数人のメカニックマンが作業用デストロイド等で作業をしている姿が見える。

「質問していいですか？」

エステターの肩に凭れつつタクヤが質問の手を挙げる。

「どうしたの？」

「何だか、ここに配備されてる機体って古くね？」

タクヤの言う通り、格納庫内に配備されている機体は、現在統合軍の主力機で新星インダストリー社製のVF-11サンダーボルトとその主力機の座を争った対抗機であるゼネラルギヤラクシー社製のVF-14ヴァンパイアしか見当たらなかった。

「仕方がないわ……私達の部隊は統合軍からは厄介者扱いだから。その証拠に、ここに配備されているVF-11は全部旧式のB型だし、宇宙戦装備のスーパーパックすら無い状態よ」

自分達の部隊が厄介者扱いされる事にマリアは険しい表情をする。

マリアの表情を見たエステターは、この部隊の闇の部分を少なからず感じていた。

「確か、今はアビオニクス改良のC型が主力でしたよね？」

「あら、詳しいわね」

「ホント、エステターは勉強大好きだもんなあ」

エステターの知的な部分を誉めるマリアにタクヤは、エステターに皮肉めいた言葉を言う。

「……あなたも少しは彼を見習って勉強してみたら？」

エスターに皮肉を言うタクヤをマリアは、冷ややかな視線で見る。

「ハッ、俺は俺のやり方があるからいいんだよ！」

「はいはい。じゃあ、あなた達の機体を案内するわ」

タクヤの言葉を適当にあしらひ、マリアは二人の機体を案内する。

「これがあなた達の機体よ」

案内された場所には、2機のVF-11が配備されていた。

しかし、配備されたその機体もどことなく古ぼけた感じがしており、機体の所々は傷や汚れが目立っていた。

その機体の状態に二人は、何とも言えないような表情をする。

「とりあえず、11番機がタクヤで12番機がエスターだから覚えておいてね」

「はい」

「ちえ、なんだよ。旧式のVF-11にしか乗れないのかあ……俺、VF-19に乗りたかったなあ」

配備されたVF-11を見たタクヤは、ふてくされて愚痴をこぼす。

「あなたにはVF-11すら勿体無いわよ」

配備された機体に愚痴をこぼすタクヤにマリアは皮肉を言う。

「別に理想ぐらい言っちゃっていいだろ！」

マリアの皮肉にタクヤは食って掛かる。

「二人共、ケンカは止めてください！」

状況を見かねたエスターが二人を抑える。

「さて、部屋の内と機体の確認は終わったから、後は自由にしていいわよ。それから18時にブリーフィングルームでブリーフィングがあるから遅れないでね」

「ブリーフィング？」

「マリア大尉、ブリーフィングルームの場所は？」

「この格納庫から、そう遠くは無いわ。それに案内板を見れば5分も掛からないから大丈夫よ。じゃあね」

簡単な説明だけしたマリアは、そのまま格納庫を後にする。

気が付くと格納庫には先程までいたメカニックマンの姿も見えなくなり、二人だけになっっていた。

「あーあ……つたく！ 何か俺達、とんでもねえ所に配属されちゃったなあ」

タクヤは、辺りを見回して愚痴をこぼす。

「そうだね」

タクヤの愚痴にエスターは苦笑いする。

「なあエスター、別にお前まで俺に着いて来なくて良かったんだぜ。お前の実力なら特

務部隊の配属だったのにさ」

成績が悪く配属先をたらい回しにされて最終的に自分だけが配属される予定だったが、わざわざ自分に着いて来たエスターに対してタクヤは少なからず罪悪感があった。

「うーん、何て言うのかな……何だかタクヤの事、ほっとけなくてさ」

罪悪感を感じているタクヤに対して、少し照れながらエスターは答える。

「……そうか、ありがとなエスター」

エスターに礼を言いつつタクヤはエスターの腕を退ける。

「大丈夫なの？」

「ん？ ああ、何とかな」

タクヤは右腕をグルグル回して笑顔で応える。

「このタクヤ様がアレくらいでへばるかって……あ、痛ついてて……」

しかし、すぐにドルチェフに頭突きと蹴りを喰らった部分を手で押さえて前屈みになる。

「もう、すぐに調子乗るんだから……無理はよくないよ」

そんなタクヤを見て、思わずエスターは溜息を吐く。

「よお、見かけない顔だな」

一人の男が格納庫にやって来る。

男は浅黒い肌を持つ黒人系の青年だった。

「初めまして。本日付けで配属になりました、エスター・ワードナです」

「お、同じくタクヤ・バーズラッドです」

二人は浅黒い肌の男に敬礼をする。

タクヤも流石に学習したのか、ふざける事なく真面目に挨拶をする。

「そうか、俺はレオン・フレデリック。よろしくな。お前達、機体の確認は済んだのか？」  
「ええ、先程マリア大尉に教えてもらいました」

「そうか。機体、酷いだろ？」

レオンは配備されているVF-11を見て、二人に問い掛ける。

「見た見た。いくらなんでもヒドいっすよね」

レオンの問い掛けに古ぼけたVF-11を見たタクヤは不満を漏らす。

「メンテナンスはちゃんとしとけよ。結構酷い任務をやらされたりして、すぐに機体がガタが来るからな」

「え？ メカニックがやってくれるんじゃないの？」

自己メンテナンスを推奨するレオンにタクヤは驚く。

機体のメンテナンス等は専属のメカニックが行うものだと思っていたからだ。

「残念ながらウチの部隊はメカニックが五人しかいないのさ。だから基本的にメンテナ

ンスは各自で行うように隊長に言われているのさ」

「そうなんですか」

レオンの言葉にエスターは、少し不安な表情をする。

「俺達の部隊は、掃き溜め部隊だからロクな物資も人材も来ないのさ。タクヤだっけ？

お前さんはメンテナンスは？」

レオンに聞かれてタクヤは首を横に振る。

士官学校時代に一応、機体メンテナンスの科目もあつたが、タクヤは授業を度々サボつていた為、メンテナンスの知識は殆ど無い状態である。

「一応言つとくけど、あんましメカニックを酷使するなど隊長から命令が出てるからな。命令違反は隊長にブン殴られるぞ」

「うええ……マジかよおお」

既にドルチェフに頭突きと蹴りを入れられたタクヤは、レオンの言葉に嫌そうな顔をする。

「ハハッ、そんなにビクビクするなよ。半分冗談だからな」

レオンは笑つて言うが、タクヤには冗談には聞こえなかった。

「じゃあ、タクヤの機体のメンテナンスは僕も手伝うよ」

「お、さすが我が友エスター君！ 頼りにしてるぜ！」



エステーの手助けにタクヤは急に元気になりエステーの背中をバンバン叩く。

「痛いからそんなに叩かないでよ」

「ああ、悪い悪い」

（……このタクヤつての大丈夫か？）

調子づくタクヤを見たレオンは、他人事ながら一抹の不安を感じていた。

「エステー、部屋に戻ろうぜ」

「うん。レオン先輩、失礼します」

エステーはレオンに一礼して、先に行ったタクヤの後を追い掛けていく。

部屋に戻ったタクヤはベッドに横になり、エステーは荷物の整理をしていた。

「いって……まだ痛むぜ」

タクヤは頭突きを喰らった場所をさすっていた。

「大丈夫？」

「ああ、なんとかな」

「それにしてもタクヤはタフだよ。あれだけ隊長に殴られたのに動けるんだから……」

僕が同じ事をされたら動けないな」

エステーはタクヤのタフさに感心する。

「あのおっさん、いつかぶっ飛ばしてやるぜ！」

タクヤは右ストレートを突き出す素振りをする。

「やめなよ、また殴られるよ。それより、もうすぐミーティングの時間だから行こうよ」  
「えー、もうそんな時間かよ。あー、ブリーフィング行くのめんどくせえなあ……」

ミーティングへ行くのが面倒くさく思いつつもタクヤは、ベッドから嫌々起き上がる。

「そんな事を言うと、また隊長に殴られるよ」

「はいはい、わかりました」

素っ気ない返事をするタクヤを連れて、エスターはブリーフィングルームへと向かう。

部屋を出て案内板に従って歩くと、マリアの言う通りに5分も掛からないうちに辿り着く。

ブリーフィングルームに入ると既に数人が着席しており、メンバー同士が会話をしている。

「タクヤ、何処に座る？」

「んなの、後ろの隅っこに決まってるだろ」

タクヤは一番後ろの隅側の座席に座り、エスターもその隣に座る。

ブリーフィング開始時間が近づくに連れて次々とメンバーがブリーフィングルーム

にやって来て着席していく。

しばらくして、その後からドルチェフと二人のオペレーターがやって来る。

ドルチェフは、そのまま教壇に立ち、二人のオペレーターは教壇横の席に着く。

教壇に立ったドルチェフは、部屋の中を見回して全員が揃っているかを確認する。

「よし、みんな揃ったな。ブリーフィングを始める前に本日より我が隊に配属になった

新米達を紹介する。新米、前に出てこい」

ドルチェフに呼ばれてタクヤとエスターは教壇の前に出て行く。

「お前達、自己紹介しろ」

「じゃあ、俺から。タクヤ・バーズラッド、18歳。バルキリーパイロットに憧れて入隊

しました。よろしくお願いします」

自己紹介を終えたタクヤはVサインをする。

「エスター・ワードナ、18歳です。不束者ですが、皆さんのお役に立てるように頑張りますので、よろしく願いします」

エスターは自己紹介を終えて深くお辞儀をする。

二人の自己紹介が終わると周りから拍手が湧く。

マリアとレオンが手を振っているのに気付いたエスターは軽く手を振る。

「タクヤ、エスター。彼女達は作戦遂行時にオペレートするエミリアとアイナだ」

ドルチェフはタクヤとエスターに二人のオペレーターを紹介する。

「エミリア・ガーフィールドです。よろしくお願いします」

少し幼い顔立ちに薄桃色のストレートヘアを靡かせて、エミリアは二人に敬礼をする。

「同じく、アイナ・エルラインです。よろしくお願いします」

栗色のボブカット、そして大人の女性の雰囲気漂わせるアイナもエミリアに続いて敬礼をする。

「よろしくお願いします」

二人もエミリアとアイナに敬礼をする。

（おおお！ マリア以外にも、こんなカワイイ子や綺麗なお姉さんがいるなんて、こつてスゲエ良い所じゃん）

マリア以外の女性を見たタクヤは心の中でテンションを上げていた。

「タクヤ、鼻の下を伸ばすのは構わないが、人の見えない所でやれ」

エミリアとアイナに鼻を伸ばしているタクヤをドルチェフは咎める。

その様子に気付いたエミリアとアイナはクスクスと笑う。

「以上だ。お前達、席に戻れ」

自己紹介を終えて二人は席へと戻る。

「よし、これよりブリーフィングを始める。先日の任務で俺達が壊滅させた反統合政府の残党が潜伏しているアジトだが、どうやらアレは囷だと言う事が判明した。ここ数日の偵察で、マリアが情報を掴んだようだ。報告してくれ」

「はい。では、スクリーンを見てください」

マリアが卓上の端末を操作をするとスクリーンに基地と資料らしき映像が映し出される。

「先日の統合軍からの依頼のあった反統合政府軍基地襲撃後に再度、基地周辺を偵察した所、資料らしき物を発見。内容は武装関連の取引でした。ただ、一部が焼けていたので詳しい事までは分かりませんが、明日ここから28000km離れたポイントガンマにある放棄された施設で行われるとの事です」

「マリア、この取引をどう見る?」

「距離が離れている所と施設の大きさから見て、恐らく大型兵器の搬入もあると思われるます」

「大型兵器?」

「放棄された施設は大型であり、放棄されているとは言えど恐らく施設内の機能は生き可能性がありますので、そこを隠れ蓑に大型兵器を搬入するには、うってつけの場所だと思います」

「敵の数は？」

ドルチェフの問い掛けにマリアは少し険しい表情をする。

「予想が難しいですね。距離が離れているので少数で行うかも知れませんが、逆に大型兵器搬入で嚴重にしている可能性もあります」

「この場所を攻めるなら何処がいい？」

「その件に関してはカイルが計算してありますが、出せそうかしら？」

「ええ、出せます」

マリアに声を掛けられてカイルは立ち上がる。

カイルの風貌は、いかにも学者と云う言葉が似合いそうな感じの外見だった。

カイルがマリアと同じく卓上の端末を操作をすると、スクリーンの映像が宇宙空間座標に切り替わる。

「ポイントガンマ付近は小惑星群が多いのと先程の放棄施設がある為、よく闇取引の場所に使用されているようです。私の計算してみた所、攻撃ポイントは4時の方向が一番やりやすいですね」

スクリーンに映し出されるポイントガンマに対して、時計の4時方向から攻撃するシミュレーションが表示される。

「ただ、小惑星群が少ないのが難点ですが、こちらからジャミング電波を流して敵の通信

網を混乱させてしまえば一気にに行けそうです」

スクリーンにはジャミング展開を行い攻撃をする映像が映し出される。

カイルの説明を聞いたドルチェフは納得して頷く。

「よし、そこを攻め込むとしよう。とりあえず部隊コードはバルチャー2と5をファイヤー、バルチャー6と10をウインド、俺と新米二人はウォーターで行く。なお、素敵とジャミングはカイルとトールの2名で行う。出撃は明日02:00だ。ここままで質問のあるヤツは？」

ドルチェフは質問を投げかけた後、辺りを見渡す。

ふと、後ろの席で居眠りをしているタクヤを見つけたドルチェフは、ゆっくりとタクヤの方に歩み寄る。

「タクヤ、起きなよ」

「んだよ、うるせえなあ……」

ドルチェフが近付いてくるのに気付いたエスターがタクヤの身体を揺さぶって急いで起こそうとするが時既に遅く、ドルチェフの鉄拳がタクヤの脳天に炸裂する。

「い……ててて」

ドルチェフの鉄拳を頭に受けてタクヤは頭を押さえる。

「ブリーフィング中に居眠りとは、新人なのになかなかナメたマネをしてくれるな。え

？」

ドルチェフの言葉に周りからは冷ややかな視線が二人に注がれる。

冷やかな視線にエスターは思わず居た堪れなくなる。

「とりあえず解散だ。各自、出撃前に機体のチェックをしておけ」

メンバーは白い目でタクヤとエスターを見つつ、ブリーフィングルームを後にする。

「タクヤ、俺はお前のようなヤツをパイロットと認めたくは無い。だが、ここに来た以上はパイロットとしての心得を骨の髄まで教えてやるから覚悟しておけ。ふざけたマネをしようものなら、遠慮無く撃ち殺してやるからな」

ドスを利かせた声でタクヤに警告を入れたドルチェフは、ブリーフィングルームを後にする。

「タクヤ……」

「……クソ、あの野郎……俺の实力を見てビビんなよ！」

心配するエスターをよそにタクヤは怒りに任せて壁を思い切り殴る。

「イテ、いってて……」

しかし、壁を思い切り殴りつけた為、後になって痛みが増してタクヤは壁を殴った拳をさする。

（本当に大丈夫かなあ……）



そんな痛がるタクヤを見たエスターは、深い溜息を吐く。

「タクヤ、とりあえず部屋へ戻ろうよ」

「おう」

ブリーフィングを終えた二人は、誰もいなくなつたブリーフィングルームを後にして部屋へと戻る。

「それにしても、あのおっさんムカつくなあ……」

タクヤの自分勝手に自分が悪い事をしているのに反省する様子も無く、他人のせいになっている部分を見ているとエスターはタクヤと一緒に着いて来て良かったのかと今更ながら後悔の念を感じずにはいられなかった。

部屋へ戻る途中、格納庫が慌ただしい様子だったので二人は覗いてみた。

「隊長のVF-14の弾倉補填が終わつたら、次は4番機と8番機の電子戦装備換装を急げ！」

「チーフ、9番機の弾倉装填完了しました」

「よし、そのままアビオニクスと電装系のチェックをやってくれ」

「了解」

帽子を被つたメカニックマンが他のメカニックマンに指示を出しながらリストを見ている。

「忙しそうっスね」

タクヤは帽子を被ったメカニックマンに声を掛ける。

「ああ、まあね。そう言えば君達、見掛けない顔だよね。あ、もしかして隊長が言っていた今日配属されたのって君ら？」

「はい、エスター・ワードナです。よろしくお願いします」

エスターは帽子を被ったメカニックマンに敬礼する。

「俺、タクヤ・バーズラッド。よろしく！」

タクヤはVサインをする。

「そうか。俺はミラン・フォスターだ、よろしくな。一応、ここの部隊で整備士長をやってる」

ミランは帽子を深く被り直して二人に挨拶をする。

「俺と一緒に妹もやってるんだ。ちよつと待ってなよ。おい、メイア」

ミランはマリア機の作業している少女に声を掛けて呼ぶ。

「なあに？ お兄ちゃん」

ミランに呼ばれた少女は、作業を止めてミランの元に駆け寄って来る。

少女はショートカットの髪型に少し幼い感じがする容姿だった。

「この二人が隊長さんの言っていた新人さんらしい」

ミランがメイアにタクヤ達を紹介する。

「そうなんだ。初めまして、メイアです。よろしくお願いします」  
メイアは二人に頭を下げる。

「エステル・ワードナです。こちらこそ、よろしくお願いします」  
エステルはメイアに敬礼をする。

「わわ、そこまで堅くならなくてもいいですよ」

エステルの真面目な対応に思わずメイアは焦る。

「エステルはホント固いんだよなあ。あ、俺、タクヤ・バーズラッド。よろしく！」  
タクヤは、いつもの調子でメイアに挨拶する。

「こちらこそ、よろしくお願いします」

堅い挨拶のエステルに対して、調子のいい挨拶をするタクヤにメイアは思わず笑顔を見せる。

「それにしても、女の子がメカニックやってるなんて珍しいなあ」  
「そうだね」

タクヤの言葉にエステルも珍しそうにメイアを見る。  
「おかしい……ですか？」

二人の言葉にメイアは少し悲しげな表情を浮かべる。

男性の多い職場に女性がいる場合、珍しがられる事はよくあるが、メイア自身は、そう思われる事が嫌だった。

「いやいや、そんな事ないよ。な、なあエスター」

「う、うん。女の子がメカニックをして偉いなあと思ってた」

落ち込む様子のメイアを見たタクヤとエスターは慌ててフォローする。

「あ、いえ……私こそ、ごめんなさい。気にし過ぎちゃって……お兄ちゃん、マリアさんの機体整備は終わったよ」

「そうか。じゃあ、トールさんとカイルさんの電子戦装備換装作業を手伝ってきてくれ」  
「うん。じゃあ、タクヤさん、エスターさん、また後で」

三人と別れてメイアは、そのまま他のメカニックマンの作業の手伝いに戻っていく。  
整備士をしていたミランに憧れて、メイアは自ら進んで整備士の道を目指していた。

特に女性の整備士が少なかった為、メイアは周りから珍しがられたり、時にはからかわれたりしていた。

周りからの影響で挫けたり落ち込みそうになった時には、ミランが影から支えてくれたお陰でメイアは兄と同じ整備士に就く事ができた。

「悪いな、メイアは変に特別扱いされたりするのを嫌っていてね」

「いや、俺達の方こそ」

「すみません、ミランさん」

ミランはメイアの方に視線を向ける。

メイアは他のメカニックマンと共にツールとカイルの機体の換装作業を手伝っていた。

「悪いな、俺も作業に戻るよ。また暇な時にでも声を掛けてくれよ」

「そうするよ」

「わかりました」

ミランは作業に戻り、二人は格納庫を後にする。

「タクヤ、作戦時間までまだありそうだから、もう寝ようよ」

「え、もう寝るのかよ?」

まだ19時を過ぎた時間帯で寝ようとするエスターにタクヤは驚く。

「でも、今から休んでおかないと後でしんどくなるよ」

「はいはい、わかったわかった」

二人は作戦開始時間まで体力温存の睡眠を取る為、自室へと戻る。

「あーあ、それにしても今日は最悪な日だぜ。来て早々にマリアにはビンタされるし、おっさんには蹴られるわ頭突きされるわで……ホント最悪。早く昇進して、こんな部隊とは、とつとオサラバしたいよ」

ベッドの中でタクヤは今日の出来事の不満をぶちまけていた。

「でも、あれはタクヤも悪いと思うよ」

「そうかあ？ あんな事くらいで怒るのも、俺はどうかと思うぜ」

エスターの忠告を聞いたタクヤは悪びれる事も無く屁理屈をこねる。

そんな反省の色を見せる事が無いタクヤの態度にエスターは溜め息を吐きつつ、いつしか眠りに入っていた。

## 第2話ファースト・ミツシヨン

……ヤ

……きてよ

何処からともなく声が聞こえる。

「うーん……うるさいなあ」

……てば

「眠いから寝かせろよ」

ゴン！

声が聞こえなくなると同時に突如、重い打撃音と共にタクヤの頭に激痛が走る。

「いつてえええ！」

タクヤは頭に走る痛みを耐えかねて起き上がる。

ガン！

更に追い討ちを掛けるかの如く、起き上がった拍子に天井に頭をぶつけてタクヤは頭を抱えてうずくまる。

「つう……いつててて……」

「目は覚めたか、このバカ野郎が！」

怒鳴り声に気付いたタクヤが顔を上げると鬼のような形相のドルチェフと心配そうに覗くエステターの姿が映る。

「いつてえな……何も殴る事な……」

「とつとと支度しろ！ この大馬鹿野郎！ のんびり寝てるのはテメエだけぞ！」

タクヤが文句を言おうとした瞬間にドルチェフはタクヤの胸倉を強引に掴み怒鳴り散らす。

「隊長、僕が急がせますから早くみんなの所へ向かってください」

「頼むぞ、エステター」

タクヤをエステターに任せてドルチェフはタクヤの胸倉を掴んでいた手を離して部屋を出て行く。

「タクヤ、早く支度をして」

「うっさいな、わかってるよ！」

タクヤはブツブツ文句を言いながら支度をしてエステターと共に格納庫へと向かう。

格納庫では作業用ウインチアームにより機体が次々と強襲艦に艦載されていた。

「タクヤ、エステター、早く乗れ！」

「了解」



ドルチェフに急かされて二人は強襲艦に急いで搭乗する。

ドルチェフはブリッジへと向かい、そのまま艦長席へと座る。

ブリッジではオペレーターのエミリアとアイナが艦艇の状態と機体の艦載作業の確認を行っていた。

「隊長、機体の艦載ならびにパイロットの収容は全て完了しました」

「隊長、艦の方のシステムもオールグリーンです」

「よし、発進！」

エミリアとアイナの報告にドルチェフは発進許可を出す。

『カタパルトオープン』

エミリアの通信を受けた監視室は基地地表のカタパルトを展開させる。

カタパルト展開と同時に強襲艦が地下よりエレベーターで上昇し、ゆつくりとカタパルトへと進んでいく。

「メインエンジン、サブエンジン良好。メインシステム、サブシステム、オールグリーン。発進します！」

エミリアは操縦桿を握り、ロケットを点火させてエンジンの出力を上げる。

強襲艦は大気圏突入用ブースターを吹かして、カタパルトから宇宙へ向けて発進する。

やがて大気圏突入を終えた強襲艦は、大気圏突入用ブースターを切り離してポイントガンマ付近まで進路を進める。

強襲艦ブローニング。

統合軍の中型強襲艦であり、現行機VF-119で採用されたアクティブステルス技術を導入しており、強襲艦でもかなりの性能を誇る。

艦載機も14機まで収容が可能で発進用カタパルトがそれぞれ独立しており、更にバトロイド形態でも射出可能なのが最大の特徴。

また、コンピュータ制御によるオートシステムを搭載し、無人でもある程度は船体の操作や火器制御が可能である。

これだけの性能を持つ強襲艦が何故、掃き溜め部隊に供給されたのかは全くの謎である。

「隊長、本艦は無事に大気圏を突破。これよりポイントガンマへと向かいます」

「わかった、引き続き頼む。アイナ、熱源反応ならびに敵の反応は？」

「現状況では特にありません」

「わかった。そのまま索敵を続けてくれ」

「了解」

エミリアとアイナに指示を出した後、ドルチェフはシートに座り、任務資料を読み始

める。

(今回のポイントガンマにある施設……)

前回の任務での戦闘の舞台となった場所で回収した資料に書かれた場所。

元々は統合軍の施設であったが小惑星群の増加と共に運用が困難となり施設ごと放棄されている。

しかし、施設そのものは存在している為、風の噂では反統合軍やマフィア等の取引場所に利用されている。

割り当てられた部屋でタクヤとエスターは出撃命令があるまで待機していた。

「あくあ、つたく……やる事が無くて暇だなあ。ヒマヒマヒマああああ！ ああ、早く出撃してえええ！」

特にやる事が無くて暇なのか、タクヤは二段ベッドの上でゴロゴロと転がりながら時間を潰している。

「どした、エスター？ 暗い顔なんかしちゃってさ」

一言も話さないエスターが気になったタクヤが下段ベッドを覗き込むとエスターは、ベッドで膝を抱えてうずくまっていた。

「タクヤは……怖くないの？」

初めて赴く戦場にエスターの声は少し震えていた。

「何が？」

「だって、これから僕達は戦うんだよ。シミュレーションじゃなくて、実戦で……もしかしたら死ぬかもしれないのに。本当にタクヤは怖くないの？」

「は？　なに言ってるんだよ。このタクヤ様に怖いものなんて、あるわけねーよ！　大丈夫大丈夫、いざとなったら俺が助けてやるから、な」

タクヤは得意気に豪語しながらも塞ぎ込むエスターを励ます。

（本当にタクヤは気楽で良いなあ……）

エスターは内心、能天気を考えるタクヤを呆れつつも逆に羨ましくも思っていた。

そんな能天気に考えるタクヤを見ているうちにエスターは少しだけ元気が出ていた。

「まもなく、ポイントガンマ付近です」

エミリアはドルチェフに状況を伝える。

「よし、出撃準備！」

『パイロットに通達、本艦はまもなくポイントガンマに到達。各パイロットは出撃準備。繰り返す……』

エミリアの艦内放送が流れると同時にパイロット達は格納庫へと向かい、機体に搭乗して出撃を待つ。

「来た来た来た来た！　エスター、さあ行くぜ」

「う、うん」

ヘルメットを抱えてタクヤとエスターも格納庫へと向かう。

初めての出撃にテンションが上がっているタクヤは急ぎ足で格納庫へと向かい、遅れてエスターも格納庫へと到着する。

格納庫へ到着した二人は各々の機体に搭乗して他のパイロット達と同様に出撃を待つ。

「これが俺の機体なんだよなあ……」

初めて搭乗する自分に割り当てられた機体にタクヤは益々テンションを上げる。

確かに機体の一部は傷が付いていたり塗装が剥けているが、これから出撃をする事を思えば、そんな事は全く気にならなくなる。

『バルチャーより各機へ、出撃後はフォーメーションを組んで小惑星群に突入。小惑星群を抜けたら、ロングレンジミサイルで奇襲攻撃を行う。その後は部隊毎に迎撃態勢に入れ。なお、敵艦への攻撃は砲台のみとする。それから索敵、ジャミング担当機のバルチャー4、8の護衛も忘れるな。』

『了解』

ドルチェフからの命令にパイロット達は応答する。

『タクヤとエスターは出撃後、俺に着いて来い、いいな』

『了解』

『りよ、了解』

ドルチェエフの通信を受けて二人は通信に応える。

「あー、何だろう……すっげえ身体がウズウズしてくるぜ。うおおおお、早く敵をバンやっつけてえ！」

タクヤは初の実戦に浮かれてワクワクしていた。

今まで士官学校の授業でのシミュレーションでしか経験が無い為、実際にバルキリーを操縦して戦えるので尚更テンションが高くなる。

「初めての实戦か……神様、どうか無事に生きて帰れますように」

エスターは両手を合わせて神に祈りを捧げていた。

戦場で生きるか死ぬかの常に隣り合わせの状況下の中、生き残れるように強く願を架ける。

初の実戦にタクヤもエスターもそれぞれの思いを寄せていた。

『隊長、全機出撃準備が整いました』

『わかった、全機出撃！』

マリアからの準備完了の連絡を受けたドルチェエフは出撃の合図を出し、それを受けたアイナはコンソールを操作してプロウニングの下部カタパルトを展開させる。

展開した下部カタパルトよりドルチェフのVF-14SとマリアのVF-14Fを先頭に次々とブラックバルチャー隊のVF-111が出撃する。

『バルキリー隊、全機出撃を確認。本艦は作戦空域から離脱後、ステルスモードに入ります』

エミリアの通信後、ブrowningはステルスモードを起動させて作戦空域から離れる。

出撃したタクヤとエステーのVF-111は、ドルチェフのVF-14の後を着いて行く。

『タクヤ、エステー、大丈夫か？』

ドルチェフは二人の様子を確認する為、通信を入れる。

『僕は大丈夫です、隊長』

相変わらずエステーは不安げな表情でドルチェフの通信に応える。

『俺なら平気平気♪ もう全然余裕っすよ』

不安な表情を見せるエステーとは対照的にタクヤはデイスプレイ越しにVサインをする。

『タクヤ、戦場ではテメエのようなヤツが一番最初に死ぬのを覚えとけよ』

ドルチェフはタクヤの余裕な態度を見兼ねて釘を刺す。

余裕な気持ちも大事だが、過剰になるとそれが命を落とす事にもなりかねないからだ。

「何だよ、偉そうにさ。まあ俺の実力を見れば、おっさんも俺の偉大さが分かるさ」

ドルチェフの忠告も今のタクヤには全く意味が無かった。

しばらく進むと小惑星群が見えてくる。

『ホークス2から各パイロットに通達。まもなく小惑星群に入ります』

エミリアから小惑星群到達への通信が入る。

『バルチャー1から各機へ、これより小惑星群に突入する。全機、計器に目を配れ』

ドルチェフの通信にパイロット達は息を飲み、計器に集中しながら慎重に小惑星群に突入していく。

照明を灯せば敵に気付かれる為、パイロット達は暗く、多数の小惑星が浮遊する中を進む。

計器を注意深く見ながら進まなければ小惑星に激突してしまう為、パイロット達は固唾を飲みながら計器に目をやり、小惑星の中を慎重に進んでいく。

計器の確認を怠り小惑星群に激突して死んでいったパイロットも少なくなき、戦場へ行くまでも常に気を抜く事は許されない状況だった。

『タクヤ、エスター、お前達も気を付けるよ。ここはシミュレーションなんかじゃねえ、



一瞬の油断が命取りだ。例えば小惑星にぶつかって死んでも二階級特進なんて無いからな！」

『了解』

ドルチエフからの忠告にエスターは思わず息を飲む。

「んだよ、おっさんの野郎。それぐらいで脅かしやがってよ。それに、これくらいなら楽勝勝勝！」

暗闇しか見えない小惑星を進む恐怖を知らないタクヤは、ドルチエフの忠告に対しても気楽な考えで機体の速度をそのまま上げて小惑星群に突入する。

「タクヤー！」

「あのバカー！」

エスターとドルチエフは無謀に小惑星群へと突っ込むタクヤの機体をレーダーで見つけて、機体の速度を上げて追いかける。

『タクヤ、速度を落として！』

『素人が無茶するな！』

エスターとドルチエフが必死にタクヤに呼びかける。

「二人共、うるさいなあ。こんなの楽勝楽しよ……？ うわ、うわわわわ！」

暗闇から突然目の前に小惑星が現れ、タクヤは急いで機体をバトロイドの脚部を展開

した姿、ガウオーク・ファイターに変形させて急ブレーキを掛けつつスロットルペダルを思い切り踏み込んで脚部バーニアを吹かせて逆加速をする。

「んなくそおおおおお！」

タクヤは思い切り操縦桿を引いてスロットルを切りつつ、バトロイドの脚部で小惑星を蹴り上げて振り切り、再び機体をファイターに変形させる。

「ふう……危ねえ危ねえ」

小惑星を振り切ったタクヤはホッと胸を撫で下ろす。

『この大バカ野郎！ 勝手な行動をするんじゃない！』

ドルチェフの怒号がタクヤの耳に響く。

あまりの怒号の煩さにタクヤは、思わずヘルメット上から耳を塞ぐ。

『今度やったら絶対に撃ち殺してやるからな！』

『わ、わかったよ』

『わかったよだあ？』

ふざけた態度のタクヤにドルチェフは鬼のような形相でタクヤを睨む。

『りよ、了解であります！ 隊長殿』

ドルチェフからの通信を急いで切った後、タクヤは舌を出す。

『タクヤ、ダメだよ無闇に飛び出しちゃ』

タクヤを心配してエスターは通信を入れる。

『悪い悪い、ちよつとばかり調子に乗りすぎたわ』

エスターの心配もよそにタクヤは悪びれた様子も見せず、気を取り直して再び小惑星群を進んでいく。

ある程度進んでいくと、小惑星群の数も徐々に少なくなってくる。

「よつしゃ、そろそろ大方の小惑星群は越えたかな？ あーあ、それにしてもこうやってただ飛んでも退屈だなあ……そうだ、エミリアさんかアイナさんとお話でもすつかなあ〜♪」

小惑星群も少なくなり、ただ飛ぶだけで暇に感じたタクヤはブラウニングへの通信回線を開ける。

『あー、あー、こちらタクヤ・バースラッド。エミリアさん、もしくはアイナさん応答願います』

『はい、何でしよう？』

タクヤの通信にエミリアが対応する。

『お、エミリアさん。ちよつと良かった』

エミリアの顔を見るなり、タクヤは上機嫌になる。

『何でしよう？』

『あのさ、この作戦が終わったらさ、どっかに遊びに行かぬ?』

『……はい?』

任務中にも関わらず、タクヤの脳天気な発言にエミリアは呆れた表情をする。

『バースラッド伍長、現在作戦遂行中ですし、この通信が傍受される可能性がありますので無駄な通信は極力控えてください』

タクヤの脳天気な会話にエミリアは冷静に対応する。

『そんな、カタイ事を言わないでさあ……』

『それから、ふざけた通信をしていると隊長に怒られますよ』

『おっさんの事なんて関係ないって!』

エミリアの冷静な対応を無視してタクヤは更に食いついていく。

『タクヤ! テメエ、作戦遂行中に何をしてやがる!』

タクヤとエミリアの通信に気付いたのか、ドルチェフは二人の通信に割り込み、そのままタクヤの回線に怒号を浴びせる。

「うわわわわ、あぶ、あぶ……」

ドルチェフの突然の怒号にタクヤは思わず機体のバランスを失い掛けそうになる。

『お前……今、何をしていた?』

『え、えーと……その……』

ドルチェフの鬼の形相にタクヤは蛇に睨まれた蛙の如く、表情と身体が固まる。

『テメエ、女と通信している余裕ぶっこいてるヒマがあつたら任務に集中しろ！』

『りよ、了解』

タクヤは慌てて操縦桿を握り直す。

そんな二人のやりとりを見ていたエミリアは少しだけ笑う。

その後もタクヤは真面目に機体を操縦し、難なく小惑星群の中を進んでいく。

他のブラックバルチャー隊も次々と小惑星群を突き進む。

『各パイロットに通達。まもなく小惑星群を抜けます。敵の機体データを確認できましたので転送します』

エミリアから送られてきたデータをドルチェフは確認する。

「敵はアーマード装備のVF-1にVF-5000か……」

反統合政府軍の機体の殆どは旧式が多いのには理由がある。

第一次星間大戦時に反統合政府軍は殆どの機体を失った為、統合軍と繋がりのあるコネクションより機体を調達している。

しかし、その殆どが軍用機の払い下げである為、旧式の機体が多い。

だが旧式の機体とは言えど、パイロット達は強者揃いが多い為、油断をすると返り討ちにされる可能性もある。

『こちらバルチャー4、これよりジャミング電波を発信します』

『こちらバルチャー8、同じくジャミングを展開します』

『わかった、二人共頼むぞ』

バルチャー4ことカイルとバルチャー8ことトールから通信が入る。

ドルチェフとの通信後、カイルとトールのVF-11は電子兵装用に搭載されたEW AC装置を起動させて妨害電波を発信させる。

『バルチャーより各機へ。敵さんはアーマードVF-1とVF-5000だ。旧式如きに負けるんじゃないぞ！』

『了解！』

何も知らないパイロット達からはブラックバルチャー隊は統合軍の掃き溜めと呼ばれてはいるが、殆どは腕の立つパイロット達で占められている。

また、部隊から負傷者が殆ど出ないのもドルチェフの鬼のようなシゴキと的確な作戦指示によるものである。

ドルチェフ自身もパイロット達を信頼し、またパイロット達もドルチェフを信頼して命を預けている。

「ハッ、旧式如きに負けるタクヤ様じゃねえっての」

敵部隊の殆どが旧式と判明した時点でタクヤは強気に出る。

『バルチャー、エネミータリホー』

小惑星群が徐々に少なくなり、ドルチエフの視界に敵部隊が姿を現す。

『全機、ロングレンジミサイルスタンバイ！』

ドルチエフの掛け声と共にブラックバルチャー隊は、ロングレンジミサイルに装備を切り替える。

『アタアアアック！』

ドルチエフの号令と共にブラックバルチャー隊は、小惑星群を抜けると同時にロングレンジミサイルを発射して反統合政府軍に奇襲攻撃を仕掛ける。

カイル機とトール機のジャミングによる妨害電波の影響で索敵できなかつた為、突然の事に反統合政府軍は狼狽えるが、艦隊付近の部隊はすぐに迎撃態勢に入る。

ブラックバルチャー隊と反統合政府軍の戦いが始まり、戦場では至る所で爆光が輝いていた。

「よっしやあ！ 俺の本当の実力を見せて、おっさんを見返してやるぜ！」

ドルチエフに自分の実力を見せ付ける為、タクヤは一人で先走って辺りを見回しながら敵機を探す。

「敵機確認。これでも喰らいやがれ！」

丁度正面から来る1機のVF-5000にターゲットを合わせてタクヤはトリガー

のボタンを押してミサイルを発射する。

しかし、ミサイルは正面真っ直ぐに飛んでいるだけの為、簡単に動きを読まれて回避行動と共にチャフをバラまかれて全弾回避された挙げ句、後ろに回られてしまう。

「クソ、避けてんじやねえよ!」

ミサイルを全弾回避された事にタクヤは苛立ち、怒りに任せてコンソールパネルを叩く。

「クソ、振り切れねえ!」

タクヤは後ろを振り返りつつ機体速度を上げたり色々方向へ飛んだりするが、VF—5000は完全にタクヤの動きに合わせて後ろに着いていた。

「ちくしょー……後ろをチヨコマカと……」

タクヤ機は頭部レーザー機銃で攻撃するが、VF—5000はあっさりとかわすと同じ時にガンポッドで反撃する。

「うわわわ、あつぶねえ!」

何とかガンポッドをギリギリでかわすが、追い討ちを掛けるかの如くミサイルが発射されてタクヤ機を追いかける。

「え!? ちよ、待てよ! うわつ、ヤベエ、マジでヤベエ!」

タクヤはレーザー機銃でミサイルを撃ち墜とそうとするが、恐怖感で手が震えて照準



が合わない為、レーザー機銃を撃つてもミサイルには全く当たらなかった。  
「くっそー、着いてくんなよ！」

レーザー機銃を撃ちつつタクヤは機体の速度を上げて振り切ろうとするが、それでもミサイルは追い掛けてくる。

「え、えーつと……こういう時って、えーつと……どうすんだっけ？」

恐怖感が気が動転してパニックになり、タクヤは頭の中で次の行動に移ろうと思っても身体が金縛りの様に固くなり、動きが取れなかった。

「うわあああああ！ 死ぬ死ぬ死ぬ、まだ死にたかねえよおおお！」

刻一刻と迫る死の恐怖にタクヤはコックピット内で絶叫する。

人間、死期が近付くと今までの思い出が走馬灯の様に駆け巡る時がある。

今のタクヤは、まさにその状態であり、自分自身の楽しかった事や辛かった事の思い出が次々と甦って来ていた。

タクヤがコックピット内で絶叫を上げている間にタクヤ機を追い掛けていたミサイルは次々と撃ち抜かれて爆光を上げる。

『タクヤ、大丈夫？』

タクヤの様子を心配してエスターから通信が入る。

『エ、エスターー！』

エスターからの通信に先程までどん底状態の表情で絶叫していたタクヤは、涙目になりつつも安堵の表情を見せる。

エスターは、そのまま機体を旋回してタクヤを追い回していたVF-5000の後ろに回り込んで追撃をする。

VF-5000はタクヤ機の追撃を止めてエスター機を振り払うかのように機体の速度を上げる。

速度を上げて逃げるVF-5000を追うべくエスターもスロットルペダルを深く踏み込んで同じように速度を上げる。

「う……っくー！」

VF-5000を追い掛ける度にエスターの身体にGがのし掛かる。

（く、訓練と違って……か、かなりキツイ）

エスターは初めての実戦でのGにひたすら耐える。

エスターは改めてシミュレーションと実戦での違いを認識する。

やがてVF-5000はエスター機と距離を取った状態から人型形態のバトロイドに変形してガンポッドで応戦する。

エスター機もVF-5000のガンポッドを回避しつつバトロイドに変形させて、そのままブースターを吹かせた勢いでVF-5000目掛けて体当たりを食らわせる。

「い、今だ」

体当たりを食らってバランスを崩したVF-5000の隙を見て、エスターはトリガーを引いてガンポッドを発射する。

VF-5000に次々とガンポッドが命中し、蜂の巣になったVF-5000は火花を吹いて爆発する。

「はあ……はあ……な、なんとか生きてる」

エスターは初めての戦闘を終えて息が上がリ手も震えていた。

そして、無事に生きている事に心の中で感謝する。

『サンキュー、エスター！ お前がいてくれて助かったぜ』

戦闘が終わったのを確認したタクヤからお礼の通信が入る。

『だ、大丈夫？ タクヤ』

『ああ、大丈夫大丈夫！』

タクヤはディスプレイ越しのエスターに向けてVサインをする。

『エスター、お前こそ息が上がってるけど大丈夫か？』

『ほ、僕なら……大丈夫』

エスターは笑顔でタクヤに伝えるが、声が若干上擦っていた。

『タクヤ！ テメエ、また勝手に突っ走ってんじゃねえぞ！』

再びドルチェフの怒号がタクヤの耳に響き、タクヤは思わずヘルメット上から耳を塞ぐ。

『エスターがいなかったら、お前はとっくに死んでたんだぞ！』

『了解、以後気をつけます』

ドルチェフの怒号に対してタクヤは、少しふてくされ気味に返事をする。

『これから敵艦付近の敵を叩く。着いて来い！』

『了解』

合流した3機は、そのまま敵艦へと進路を向ける。

敵艦付近には3機のアーマード装備のVF-1が護衛していた。

ドルチェフ達の接近に気付いた3機のアーマードバルキリーは、ガンポッドと多数のミサイルによる弾幕を張る。

『こいつ等は俺が相手をする。その間にお前達は敵艦の砲台を攻撃しろ』

ドルチェフ機はミサイルに向かって突進し、ぶつかる少し手前で急上昇してチャフをバラ撒いてミサイルを回避し、残ったミサイルもバレルロールで次々と回避する。

そして、すぐさま敵艦前のアーマードバルキリー目掛けて急降下をしてガンポッドとミサイルをバラまく。

「うおおおおー！」

いずれの攻撃もアーマーを小破する程度しか効果がなかったが、ドルチェフ機は一気に距離を縮めて機体をバトロイドに変形させた状態で、そのままアーマードバルキリーの頭部を踏み潰す。

更に肩に乗り上げた状態で踏み潰した頭部に目掛けてガンポッドを連射してアーマードバルキリーを撃破する。

『す、すげえ……』

『うん……』

二人はドルチェフの戦闘スタイルに思わず固唾を飲む。

『何をボサつとしている！ お前達は敵艦の砲台を叩け！』

『了解』

ドルチェフの戦いぶりに思わず見とれてしまい行動を移さない二人にドルチェフの怒号が響き、我に返った二人は敵艦へと向かう。

敵艦からの攻撃を回避しつつ、2機は砲台に攻撃を仕掛けようとするが、残りのアーマードバルキリーの攻撃と砲台からの対空砲火をかわすのがやつとで、なかなか攻撃を当てる事ができなかった。

『隊長、すみません。敵の攻撃が激しくて、なかなか敵艦へ攻撃ができません』

『タクヤ、エスター、俺が囨になるから、その間に砲台を叩け』

『了解』

なかなか敵艦への攻撃が進まない2機を見兼ねて、ドルチェフは自分を囿にして敵の攻撃を引きつけている間に二人に再び砲台に攻撃をさせようとするが、それでも敵艦からの攻撃は激しいままだった。

『せっかく隊長が囿になってくれているのに……』

『くつそー、これじゃラチがあかないぜ!』

2機が敵艦からの攻撃を避けている間に後方からミサイルが接近して、そのまま敵艦に命中する。

『二人共、大丈夫?』

マリア機を先頭に他のブラックバルチャー隊が援護にやって来て敵艦へと攻撃を続ける。

『ありがとうございます』

『エスター、今のうちに攻撃するぜ!』

『うん』

味方の援護支援を受けたお陰で敵艦からの攻撃も少なくなり、2機は敵艦の砲台目掛けてミサイルを発射して次々と砲台を破壊していく。

そして、タクヤ機は、そのまま敵艦ブリッジまで飛び、機体をバトロイドに変形させ

てブリッジにガンポッドを突き付ける。

『無駄な抵抗は止める！ 抵抗したら、即座にぶつ放すぞ！』

(くうううう♪ このセリフを言ってみたかったんだよなあ)

よく海外ドラマ等で警官や刑事が犯人に対して言う様な台詞。

そのシチュエーションに憧れていたのか、タクヤはシチュエーションが決まった事の優越感に浸っていた。

『くおの大バカ野郎があああ！』

ドルチェフの怒号と共にドルチェフ機の鉄拳がタクヤ機に炸裂し、タクヤ機は殴られた勢いでクルクルと回転する。

「どわああああああ！ め、目が回るううう！」

タクヤは回るコクピットの中で目を回しながら絶叫する。

「タクヤー！」

エスター機はタクヤ機が吹っ飛ばされた方向へ飛び、タクヤ機をある程度追い越した辺りで機体をバトロイドに変形させてブースターの出力を全開にしてタクヤ機を受け止める。

『ヤ……さんきゅう……』

タクヤは回転の影響をモロに受けてグロッキー状態だった。

『もう、世話掛けさせないでよ』

そんなタクヤを見てエスターは、少し呆れ顔で言う。

戦力を失った反統合政府軍は、そのままブラックバルチャーに投降した。

船舶内の貨物物資の殆どはバルキリーやデストロイド等の兵器類であり、今後は兵器の入手ルートの調査が行う必要がある。

『ある意味、この場所は兵器等の取引をするには、もってこいの場所だったな』

『そうね。早い所この施設を撤去しないと、また武器等の取引場所に使われてしまうわ』

『そうだな。だが、今の統合軍がそこまでしてくれると思うか？』

『……』

ドルチェフやマリアの視点から見て、既に統合軍自体が腐りきっている事は想像できている。

恐らく、この件を報告したとしても統合軍は動く事は無く黙殺されるのがオチであろう……

ブラックバルチャー隊の通報により銀河パトロール隊の機体が駆けつけ、施設や反統合政府軍の調査を開始する。

『よし、ご苦労だった。バルチャーよりホークスー、これより帰投する』

『了解』



調査を銀河パトロール隊に任せてブラックバルチャー隊は基地へと帰還していく。任務を終えたパイロット達は、次の任務が入るまでの間しばしの休息に入る。

その一方、タクヤは任務終了後にドルチェフに出頭を命じられ、彼の部屋の前まで来ていた。

タクヤの表情は心無しか微妙に引きつっていた。

「タクヤ・バーズラッド、入ります」

一声掛けてタクヤは部屋に入る。

だが、その声は、いつもと違いボソボソと小さめの声だった。

部屋に入るとドルチェフは腕を組んだまま仁王立ち状態でタクヤを迎える。

「来たか。こつちへ来い」

部屋に入ると同時にタクヤはドルチェフの前へ呼ばれる。

「タクヤ、お前が何故ここに呼ばれたかは……わかるな？」

ドルチェフは鋭い目付きでタクヤを睨み付けながら質問をする。

「え、えーと……ご、ご褒美が頂ける……わけないですよねえ」

タクヤは苦笑しながらドルチェフの質問に答える。

「当たり前だ、バカ野郎！」

ドルチェフはタクヤの胸倉を乱暴に掴んで怒鳴る。

「今日のお前の行動は何だ？ 勝手に小惑星群に突っ走って隊列を乱すわ、エミリアとムダ話をするわ、勝手に敵に突っ込んで死に掛けるわ、敵艦の前でバカをやるわ……お前がバカやるお陰で隊全体に迷惑を掛けてるのが分からねえのか！」

ドルチェフはタクヤを思い切り怒鳴りつけ、そのまま壁に思い切り突き飛ばす。

「くっ……」

ぶつけられた痛みでタクヤはうめき声を出す。

「何とか言え！」

謝罪の一つも無く、ただ黙り込むタクヤの態度にドルチェフは、ますます苛々を募らせる。

「……すみません」

ドルチェフの恐ろしい形相にビビったタクヤは弱々しい声で謝る。

「すみませんだあ？ すみませんで済んだら軍隊も警察もいらんわ！ いいか、本来なら営倉入りにする所だが、あいにくウチは物資も人員も足りない状況だ。お前のようなヤツでも人数に入れてる事を忘れるんじゃねえぞ！」

「……」

ドルチェフの怒号混じりの説教を聞いてタクヤは黙り込む。

ただし、腹の中でタクヤは反省をすることでどこるかドルチェフに対しての不満を募らせて

おり、自分の軽率な行動が部隊に迷惑を掛けて怒られている事に全く気付いていなかった。

「もういい、とつとと自分の部屋へ戻れ！」

ドルチェフの説教が終わり、タクヤは精神的に参ったのか少しフラついた状態で無言で部屋を出ていく。

「何だよ、あのおっさん！ 偉そうに説教しやがって。別に悪い事した訳でもないし、少しくらい目立っても良いじゃねえかよ！」

タクヤはドルチェフに説教された事に対して文句をブツブツ言いながら部屋へと戻る通路を歩いていく。

「よお、タクヤ。今日はお疲れさん」

部屋へ戻る途中、レオンがタクヤに労いの声を掛ける。

しかし、今のタクヤはドルチェフに説教された事で不機嫌な状態の為、レオンの労いの言葉も耳に入らないまま歩いていく。

「何だよ、アイツ」

レオンの言葉をよそにタクヤは、不機嫌そうな表情のまま部屋へと戻っていく。

「お帰り」

不機嫌な表情を浮かたまま無言で部屋に入るタクヤにエスターは声を掛ける。

ちやうどエスターは、部屋に備え付けのテレビでニュースを見ている所だった。

「ああ……」

「その様子だと隊長に結構怒られてきたみたいだね」

エスターは不機嫌そうなタクヤを諭しながらドルチェフに怒られている様子を思い浮かべる。

恐らくタクヤの事だから自分が悪い事をしていると思わずに反省している様子が無かった為にドルチェフの怒りを更に買ったのだろうと。

まさに火に油を注ぐとはこの事を言うのだろう。

「確かにやりすぎたとは思うけどさ、あそこまで怒る事ないと思うぜ」

タクヤはブツブツと不満を言いながら椅子に座り、背もたれ部分に身体を持たれさせたまま机の上に足を乱暴に乗せる。

その様子にエスターは溜め息を吐く。

「……タクヤは、まだ学生気分が抜けてないんだね」

「は？ 何言ってるんだよ。学生気分なんて、とっくに抜けてるよ」

「全然、抜けてないよ！」

反省する素振りのないタクヤにエスターの声が少し厳しくなる。

突然のエスターの厳しい声にタクヤは、ギョつとする。

「タクヤ、ここは軍隊だよ。少しのミスや自分勝手な行動をするだけで死ぬ確率は大きくなるんだよ。今日の出撃だって初めてだったのもあったけど、いつ死ぬんじゃないかと内心、恐かったよ。それに僕が怖がってた時、タクヤ言ったよね? 『俺が守ってる』って」

「……あ、ああ……えーと、そ、そうだったけ?」

プロウニングの待機室で初めての实战で不安がっていたエステルに自信満々で守ると言った言葉をタクヤは完全に忘れていた。

「ちゃんと聞いていたよ! 僕、覚えているし」

タクヤのいい加減さにエステルは思わず詰め寄り、タクヤはそのまま仰け反る。

「でも、結局は全然僕を守ってないよね? それどころか僕がタクヤを守っているし」

「い、いや、それは、その……」

エステルに自信満々に話していたタクヤも結局、戦場では何もできなかった挙句に逆にエステルに助けられてしまった事を詰め寄られて、しどろもどろになる。

「タクヤの事だから戦果を挙げたい気持ちは、僕にも分かるよ。でも、自分勝手な行動は死に繋がるから、それだけは覚えておいてよ!」

「……わかったよ。俺が悪かったよ」

エステルの言葉にタクヤは頭を掻きながら申し訳ない表情をする。

「本当にわかった?」

「わかってるって」

「本当に?」

エステルは覗き込む感じでタクヤを見る。

「しつけえな、もう!」

「うん、なら大丈夫だね」

少し厳し目と言ったお陰なのか、タクヤは表情や声のテンションから少しは反省している様子だった。

そんなタクヤの表情を見て安心したのか、エステルは少しだけ笑う。

「じゃあ、これからシミュレーションルームで特訓だね」

「ああ、わかった……って、えええ! ちよつ、カンベンしてくれよお」

エステルのシミュレーションでの特訓提案にタクヤは嫌そうな表情をする。

「ダメダメ。タクヤには強くなってもらわないと、またみんなに迷惑を掛けちゃうよ」

エステルはタクヤに笑顔を見せる。

しかし、その笑顔はタクヤから見たら悪魔の微笑みにしか見えなかった。

「ちよ、マジでカンベンしてくれよおお!」

「聞こえなくい」

タクヤの叫びを無視してエスターは、嫌がるタクヤの背中押してシミュレーションルームへと向かう。

こうして、二人の初めての実戦の1日は過ぎていった。

## 第3話ユナイテッドフロント

タクヤとエスターが実戦に参加してから数日が過ぎた。

エスターによる日々の特訓のお陰でタクヤは、何とか戦闘技術がマシな状態になっていった。

タクヤは日に日に戦闘技術が上がっている事を実感し、エスター自身も喜んでいた。

そして、今日もシミュレーションルームでの訓練が続いている。

『タクヤ、後ろから3機』

エスターからの通信を受けてタクヤは振り返る。

モニター後方からCGで造られた男ばかりの巨人族ゼントラーデイ軍の戦闘ポッドであるリガード3機が追撃をする。

リガードはゼントラーデイ軍の主力機であり、卵に足が生えたような形が特等的な機体である。

所謂数で押すタイプの兵器であるが、宇宙空間での機動性自体は侮れない性能を持ち、統合軍の主力機であるVF-1でも油断をすれば手強い相手にもなる。

「ハッ、ゼントラーデイの雑魚如きに、このタクヤ様がやられるかつてのー」



タクヤは余裕の表情でスロットルペダルを思い切り踏み込んで速度を上げる。

加速するタクヤ機の動きに合わせて3機のリガードも後を追うように続いて加速する。

「もうちよい、もうちよい……」

タクヤ機はリーダーを見ながら追い掛けてくる3機のリガードとの距離を合わせる。

しばらくして3機のリガードはタクヤ機の射程圏内に追い付く。

「よし、今だー」

リガードとの距離を見極めたタクヤは、機体をガウオーク・ファイターに変形させて逆加速をしつつリガードをやり過ぎす。

「後ろガラ空きだぜ」

そして、そのままガンポッドとミサイルを発射してリガードを次々と撃墜する。

「よっしゃ、やりいー!」

全機撃墜に成功したタクヤは指を鳴らす。

『油断しないで、続いて上から2機』

『何?』

エスターの通信を聞き、見上げるとCGで造られた同じくゼントラーデイ軍の戦闘ポッドであるヌージャデル・ガー2機が攻めてくる。

リガードと違い人型を形成した機体であり、リガードよりも機動力や武装が上である。

「くっそー、おらおらおらおらあー！」

タクヤはヌージャデル・ガーの攻撃を避けながら機体をバトロイドに変形させると同時にガンポッドとミサイルで攻撃して1機を撃ち落す。

しかし、残った1機が接近して殴りかかる。

「うわ、ヤベー！」

すかさず回避しようとしたが、間に合わずコクピットに攻撃を喰らう。

コクピットに攻撃を喰らうと同時にコクピットシートが大きく揺れだす。

「うわああああー！」

コクピットシート揺れにタクヤは思わず前屈みの態勢になるが、シートベルトに引っ張られてシートに身体を打ち付ける。

「いつてえー！」

ディスプレイが赤色で表示され、そこに白い文字で「YOU DEAD」と表示される。

「うわっちゃあ……んだよ、結構いい線まで行つてたのになあ」

タクヤは自分のシミュレーション結果に納得がいかず頭を掻く素振りをする。

『お疲れ様、タクヤ』

シミュレーションが終わり、エスターから通信が入る。

タクヤがシミュレータータマシンを降りると同時にエスターが駆け寄る。

「お疲れ様」

そして、クタクタなタクヤに缶ジュースを渡す。

「サンキュー」

エスターから缶ジュースを受け取ったタクヤは蓋を開けてジュースを一気に飲み干す。

「えーと、ゴミ箱は……」

飲み終えた空き缶を手にしたままタクヤは辺りを見回す。

「缶なら僕が……」

「お、あつた」

空き缶を代わりに捨てようとするエスター静止してタクヤは、ゴミ箱を見つける。

ゴミ箱はタクヤ達のいる場所から4 m程離れていた。

「見てろよ……」

離れているゴミ箱を目掛けてタクヤは空き缶を投げる。

弧を描きながら空き缶は、ちょうどいい具合にゴミ箱の中に収まる。

「どうよ！ 見た見た？」

上手い具合に空き缶がゴミ箱に入り、思わずタクヤはテンションを上げてガッツポーズをする。

「凄いね」

そんなタクヤの凄さにエスターも感心する。

「それよりもエスター、もうチョイ手加減してくれよ」

タクヤは鉄格子に腰掛けてエスターにシミュレーションレベルに対して愚痴をこぼす。

「そうは言うけど、シミュレーションでの戦闘技術レベルは最初に比べたら結構上達しているよ」

エスターは、シミュレーション成績表を確認しながらタクヤの上達ぶりを誉める。

最初の頃はリガードー機を撃墜するのに時間を掛けていたタクヤだったが、エスターの分かり易い指導のお陰で少しずつタクヤはパイロット技術が向上していった。

飽きっぽく、かつ堪え性の無い性格だと分かっていたエスターはタクヤに親切丁寧に心掛けつつタクヤのやる気も引き出していた。

「まあ、俺が本気を出せばこんなもんだよ」

余裕綽々に答えるタクヤにエスターは苦笑いをする。

「あー、腹減ったから飯でも食いにっこうぜ」  
「うん」

二人はシミュレーションルームを後にして食堂へと向かう。

食堂へ向かう途中、二人が格納庫を覗くとメイアがリストを見ていた。

「おいつス」

「おはよう」

「おはようございます」

挨拶する二人にメイアは笑顔で返す。

「いつも大変だよね」

「最初は色々大変でしたけど、もう慣れちゃいました」

エスターの労いの言葉にメイアは少し苦笑いして答える。

「二人とも、おはようさん」

ミランが二人に声を掛ける。

「おはよつス！」

「おはようございます」

「そう言えばタクヤ。隊長から聞いたけど、この前の出撃の時やらかしたんだって？」

「ま、まあ……色々」と

ドルチェフから話を聞いたミランの問い掛けにタクヤの目が泳ぐ。

ミランは、よくドルチェフから色々な愚痴を聞く事がある。

任務の事、パイロットの事、組織のやりくりの事、機体のメンテナンスなど数えた  
らキリがない程の事を愚痴る。

隊長として且つ部隊の責任者としてのプレッシャーもあるのだろう。

普段は部隊の事を考えて厳つい表情をして怒鳴っているが、それでも気を抜きたい時もある。

そんなドルチェフの一面を知っているからこそ、ミラン自身もメカニックチーフとして妹のメイアを始めとするメカニックマン達を纏め上げる事の大変さを理解している。

時には飲み物を飲みながら人を纏め上げる大変さについて語り合う事もある。

「まあ、お前さんの性格なら何かするとは思ってたけど、もう少し人の迷惑とか考えて行動してくれよ。機体を壊して、こっちの仕事を増やされるのもカンベンして欲しいし」

「ほら、やっぱり言われた」

「ちえー」

ミランやエスターのツツコミにタクヤは、ふてくされた表情をする。

そんな三人のやり取りを見ていたメイアはクスクスと笑う。

「そこ、笑わない」

「(´・ω・)めんなさい」

笑うメイアにタクヤはツッコミを入れる。

ツッコミを入れて謝るメイアだが、その表情はどことなく笑っていた。

「それはそうと、二人共機体の整備はちゃんとやってるか？」

「もちろん、バッチリっすよー！」

ミランの問い掛けにタクヤはVサインで応える。

ブラックバルチャー隊にはミランを含めて五人しかいない。

その辺りも考慮してかドルチェフからは、機体のメンテナンスは極力自分達で行う様に言われている。

タクヤとエスターも配属当時にレオンから聞いている為、機体のメンテナンスは自分達で行っている。

「あれ？ でも、この間はエスターさんと二人で整備をしていませんでした？」

メイアのツッコミにタクヤの表情が固まる。

「あ……あはは。いやあ……相変わらずメイアちゃんは、ツッコミが厳しいなあ」

タクヤは表情を強ばらせながらメイアに話す。

「タクヤ、やっぱり自分でできるようになろうよ」

そんな表情を強ばらせるタクヤにエスターは溜め息を吐く。

パイロット技術以外にも整備すらロクにできないタクヤにエスターは毎回付き合っており、今まで学校をサボっていたツケが、この部隊に配属になってから色々と返ってきている様だ。

「まったく、しょうがないな……タクヤのヤツ。よし、今回はエスターも入れて二人の機体は俺達が特別に整備しておくよ」

「え!?! マジで!」

「僕もいいんですか?」

ミランの気遣いにタクヤとエスターは驚く。

「ああ。ただし、今回だけだぜ」

「いやあく、さつすがミランさん。頼りになるなあ〜♪」

自分でメンテナンスをする必要がなくなったタクヤは、機嫌を良くしてミランに擦り寄る。

「お前、ホントに調子いいなあ……」

そんなタクヤにミランとエスター、メイアは苦笑する。

「二人共、そこにいたか」

レオンが息せきかけて格納庫にやって来る。

「レオンさん」



「どうしたんですか？」

「統合軍参謀本部から任務が入って、これからブリーフィングをやるみたいだから、すぐに来てくれて」

「了解」

「出撃前には整備を終わらせておくから、行つてきな」

「お願いします」

エスターはミランに頭を下げた後、タクヤと共にレオンとブリーフィングルームへと向かう。

「レオンさん、どんな任務なんですか？」

ブリーフィングルームへ向かう途中、任務内容が気になったタクヤはレオンに質問する。

「さあ？ まあ、毎度の事ながらラクな任務じゃないのは確かだな」

統合軍の掃き溜め部隊と呼ばれているだけに殆どの任務は汚れ仕事ばかりだ。

基本的に援軍や特別な物資の補給等の支援は得られず、基地に保有してある物資や資材で行う。

また、任務遂行中に機体の損傷や故障等が発生した場合でも代わりの機体が配備される事は全くない。

「うええ……カンベンしてくれよ」

レオンの言葉にタクヤは、苦虫を噛み潰したような顔をする。

「そんな顔をしてると、隊長にブン殴られるぞ」

レオンは笑いながらタクヤの右肩をポンと叩いて励ます。

「そっちの方がもつとカンベンして欲しい」

タクヤは自身がドルチェフに殴られる姿を想像して身震いする。

「あ！ そう言えば俺……まだ飯を食ってなかった」

食堂へ向かう途中に格納庫へ寄っていた為、タクヤは何も食べていなかった事に今頃になって気付く。

「そんなの我慢しろ」

「トホホ……」

空腹のまま任務に出撃する事になり、タクヤはガツクリと肩を落とす。

三人がブリーフィングルームに到着した頃には、殆どのパイロット達が着席していた。

「三人共、ここを空けておいたわよ」

三人を見掛けたマリアが手招きで呼び掛ける。

「ありがとうございます、マリア大尉」

三人は、マリアが空けておいてくれた席に着席する。

しかし、その席はかなり前の方だった為、タクヤは不満げな表情を浮かべる。

(うへえ、結構前の方かあ……これじゃあ居眠りもできないじゃん)

そんなタクヤの思いをよそにドルチェフを先頭にアイナとエミリアがブリーフィングルームに入る。

「15:34、ブリーフィングを始めます」

アイナのブリーフィング開始の合図にドルチェフは資料を読み始める。

「先程、統合軍参謀本部からテロリスト討伐任務が来た」

ドルチェフが一旦、資料を読み終わるとスクリーンに資料が映る。

「現在、ポイントデルタ付近に放棄された大型宇宙ステーション、オルフェウスにテロリストが集結しているとの情報が来ています。ブラックバルチャー隊は、これを殲滅してください。なお、オルフェウス付近には改修された自動迎撃システムが設置されています」

アイナが資料を読み終わると、スクリーンに自動迎撃システムが拡大されて映る。

主にテロリスト等の襲撃に備えて配備された拠点防衛用迎撃システムだが、闇ルートによりテロリストや反統合政府軍が保有し、同じように運用される事もある。

「自動迎撃システムはオルフェウスからの誘導電波による管理の為、前回同様今回も

ジャミング兵器を使用します。それから現在判明している敵の情報データを映します」  
アイナが資料を読み終えてスクリーンにテロリストの情報が表示される。

「テロリストはレッドバタフライ。メンバーは主にゼントラーディ、メルトランディ等の巨人族で構成されていますが、主な兵器はゼントラーディやメルトランディの戦闘ポッドになります。首謀者はネル・ヤギアス、メルトランディの血縁者です」

第一次星間大戦以降、地球人はゼントラーディ人達との共存の道を歩み始めた。

しかし、元々戦闘種族であるゼントラーディ人達の中には地球人との共存を拒み争い続ける者もあり、2048年現在でも、その傾向は減る事は無く統合軍は手を焼いていた。

スクリーンにはゼントラーディとメルトランディの戦闘ポッドの映像が映し出されて機体データが表示される。

続けて表示された女性、ネル・ヤギアスはダークグリーンのショートヘアに鋭い目付き、そしてスラツとした細身の体型だった。

「ほお、メルトランディらしく気が強そうだな……女だからと言って甘く見ると痛い目を見るぞ。わかつてるか？ タクヤ」

「え、何で俺!?!」

突然ドルチェフに名指しで指名されてタクヤは驚く。

「この中では、お前が一番女を甘く見てるからな」

ドルチェフの言葉に周りは誰一人として否定せず、首を縦に振って頷いていた。

「よし、チーム編成ならびに索敵とジャミングは前回と同じで行く。これより30分後に出撃するから各自出撃準備に入れ」

ブリーフィングが終わり、パイロット達はブリーフィングルームを後にする。

「タクヤ、女だからってデレデレしてると撃墜されちゃうぞ」

「そうね、気を付けなさいよ」

ドルチェフの言葉を思い出してレオンとマリアがタクヤをからかう。

「ちよ、カンベンしてくださいよ。いくら俺でも戦闘中にデレデレしないでしょ」

レオンの弄りにタクヤは苦笑いしながら応える。

その様子にエスターも苦笑いしていた。

「タクヤさん、エスターさん」

ブリーフィングルームを出る二人の姿を見たメイアが声を掛ける。

「メイアちゃん、わざわざ待っててくれたの？」

「はい」

「ありがとう、メイアちゃん」

「お兄ちゃん曰く『機体の整備はバッチリ』だそうです」

メイアはミランの言葉を真似して少し笑いながら話す。

「私、まだ仕事があるので失礼します」

メイアは二人に頭を下げて格納庫へと走っていった。

「タクヤ、僕達も出撃準備をしよう」

「ああ」

出撃準備をする為、二人は部屋へと戻っていく。

パイロット達が出撃準備をしている間にもミラン達メカニックマンも機体の最終整備と調整を行う。

「チーフ、全機体の最終点検完了です」

「チーフ、全ての機体への弾倉装填完了しました」

「よし、各機体のブローニングへの艦載を急げ！」

メカニックマン達の整備があるからこそパイロット達は、自由に空を飛ぶ事ができるのだ。

30分後、バルキリーを艦載したブローニングはポイントデルタへ向けて発進する。

ポイントデルタに到着するまでの間、ドルチェフは資料に目を通す。

「まもなくポイントデルタです」

レーダーでポイントデルタ到着を確認したエミリアは、ドルチェフに伝える。

「よし、出撃準備！」

『各パイロットに通達、まもなくポイントデルタに到達。各パイロットは出撃準備。繰り返す……』

エミリアの艦内放送が流れて待機室で待機していたパイロット達は、格納庫へと向かい、機体に搭乗して出撃準備をする。

『バルチャー1から各機へ。出撃後は各自フォーメーションを組んでオルフェウスへ進撃。バルチャー4、8のジャミング電波の発信を確認後、自動迎撃システムを破壊。その後は、オルフェウス内のテロリストを殲滅する』

『了解』

ドルチェフの作戦内容の確認通信にパイロット達は応答する。

『出撃！』

ドルチェフの出撃命令と共にブラウニングの下部カタパルトが展開し、バルキリー隊は次々と出撃する。

『バルキリー隊、全機出撃を確認。これより本艦は作戦空域から離脱後、ステルスモードに入ります。なお、目標のオルフェウスまで、あと2,000kmです』

エミリアの通信後、ブラウニングはステルスモードを展開しながら作戦空域から離れていく。

『各機警戒を怠るな。既にテロリスト達のテリトリーだから、いつ敵が襲ってきてもおかしくない状況だ』

ドルチェフの通信を受け、ブラックバルチャー隊は周囲に気を配る。

既に作戦空域の為、敵襲が来てもおかしくない状況の為、パイロット達はレーダーに気を配りつつ目標地点を目指す。

『3時の方向より敵機確認！ その数、6機』

電子戦装備を施したトールのVF-11が敵機を捕捉する。

「くっ、思ったより早いな……」

予想より早い敵襲にドルチェフの表情が険しくなる。

しかも敵機の数も6機とは言え、迎撃に向かわせるパイロットの人数を調整しなければ目標地点に辿り着く前に再び敵に遭遇した場合はパイロット不足で満足に迎撃態勢が取れない状況下に陥る。

また、目標地点に辿り着いても同じくパイロット不足で返り討ちに合う危険性も考えられる。

『隊長、私とレオンで迎撃に向かいます』

マリアがドルチェフに通信を入れる。

『お前達二人だけで大丈夫か？』



『私とレオンの実力は、隊長が一番分かっているでしょ?』

二人だけで迎撃に向かう事にドルチェフは氣遣うが、マリアはウィンクして返事をする。

マリアとレオンはブラックバルチャー隊創設時から配属されている初期メンバーであり、パイロット技術としての腕が確かなのはドルチェフも認めていた。

『……わかった、二人共頼んだぞ』

『了解。レオン、行くわよ』

『了解です』

ドルチェフの了承を得たマリア機とレオン機は敵機迎撃に向かう。

『よし。残りは、このままオルフェウスへ向かうぞ』

残りのメンバーはオルフェウスを目指して進んでいく。

大型宇宙ステーション、オルフェウス。

統合軍がポイントデルタを拠点に活動する為に建設した宇宙ステーション。

巨人族であるゼントラーデイ人達が働ける環境を考慮して、ゼントラーデイ居住区も兼ね備えている為、宇宙ステーションとしては破格の大きさを誇っていた。

しかし、ポイントデルタに代わる新たな拠点が見つかったのと、ステーションの大きさが故に運用費も馬鹿にならないと言う統合軍参謀本部の決定によりステーションは解

体費用も出し惜しみする為に放置される事となった。

しかし、それが仇となり巨人族が大多数を占めるレッドバタフライにとっては、格好の拠点地となってしまった。

『オルフェウスまで、あと500……?!? ドルチェフ隊長、オルフェウスから通信です！』

『何だと?』

ブロウニングからの通信にオルフェウスからの通信が割り込む。

敵側からの突然の通信にドルチェフは驚く。

通信パネルに一人の女性が映し出される。

ブリーフィングでスクリーンに映し出されたメルトランデイ人、ネルである。

『ようこそ、統合軍のみなさん。歓迎するわ』

ネルは落ち着いた物腰でブラックバルチャー隊に挨拶をする。

所謂、好戦的で戦闘種族と呼ばれている巨人族の割に落ち着いた雰囲気を見せるネル。

しかも、わざわざ歓迎の挨拶までする余裕さから恐らく地球人と接触して文化に触れたのだとドルチェフは予測する。

『確かネルとか言ったな。軍からは殲滅命令が来ているが、俺からの計らいだが……』

うだ、無益な殺傷は止めて今からでも遅くないが投降する気は無いか?」

ドルチェフはネルに投降しよう交渉を持ちかける。

ネル自身が文化に触れている事を悟り、少しでも交渉をする余地があると睨んでいたからだ。

普段は無愛想なドルチェフだが、あくまでも彼なりに女性への紳士的な対応でもある。

そんなドルチェフを見たタクヤとエスターを除く他のパイロット達は、少し驚いていた。

『クツ、ククク……アーツハツハツハツハ！』

ドルチェフの交渉を聞いたネルは、大声で笑い出す。

『何がおかしい?』

『だって、だってさあ……何を言い出すかと思つたら……投降しろって? 残念だけど、アタシは統合軍のようなゲスに投降するくらいなら戦つて死んだ方がマシよ』

ドルチェフの交渉に対してネルは眉を釣り上げて怒りを露わにする。

『なあ、俺は、お姉さんみたいな美人と戦いたくないんだ。頼むから投降してくれよ』  
タクヤ自身もネルとは戦いたくないのか、ドルチェフとネルの通信に割り込む。

勿論、そこには下心も多少なりとも含まれているのは言うまでもない。

『ハン！ ネンネのボウヤが何を言い出すかと思つたら……アタシもナメられたもんだねえ』

『俺はボウヤじゃねえよ！』

『タクヤ、お前は黙っている！』

ネルに挑発されていきり立つタクヤをドルチェフは一喝する。

『せっかくのお客様だ。丁重に歓迎してやるわ』

オルフェウス付近の自動迎撃システムがブラックバルチャー隊を確認して攻撃を開始すると同時に女ばかりの巨人族の戦闘ポッド、クアドラン・ローと男ばかりの巨人族の戦闘ポッド、リガードとヌージャデル・ガーがオルフェウスのカタパルトから次々と出撃する。

『くつ、カイルとトールはジャミングを展開。他は各自フォーメーションを組んで先に迎撃システムを破壊しろ。タクヤとエスターは俺に着いて来い』

『了解』

パイロット達は、フォーメーションを組んで敵機の攻撃を回避しつつ迎撃システム破壊に向かう。

タクヤとエスターもドルチェフの後に続いてフォーメーションを組む。

カイル機とトール機は、戦線から離れた場所へと移動してジャミングシステムを起動

する。

2機から発信されたジャミング電波により、自動迎撃システムは一時的にシステムダウンさせられて攻撃が停止する。

『隊長、ジャミングにより自動迎撃システムの機能が停止しました』

『全機、攻撃開始！』

カイルから自動迎撃システムの機能が停止した通信を受けたドルチェフは、パイロット達へ攻撃命令を出す。

ブラックバルチャー隊は、機能を停止した自動迎撃システムをミサイルとガンポッドで次々と破壊していく。

『自動迎撃システムの全機破壊を確認』

自動迎撃システムの反応がレーダーから全て消えた事を確認したカイルがドルチェフに通信を入れる。

『よし。各機、散開して敵機の迎撃に当たれ』

ドルチェフの通信を受けてブラックバルチャー隊は、戦闘ポッドの迎撃に向かう。

『タクヤ、エスター、来ぞぞ！』

クアドラン・ローラー機とヌージャデル・ガー2機の混成部隊が3機に仕掛けてくる。

3機は散開して迎撃態勢を取る。

ドルチェフ機は、ヌージャデル・ガーヘミサイル発射後、一気に間合いを詰める。

そして、発射されたミサイルを避けようとするヌージャデル・ガー2機をガンポッドで瞬く間に撃破する。

「クソ！ やっぱ、つええなあ……よし、俺だつて！」

『タクヤ』

タクヤの様子を見たエスターが加勢に入ろうとする。

『エスター、手出しすんな。特訓の成果を見せてやるぜ！』

タクヤは加勢するエスターを引き止めて、単独でクアドラン・ローと対峙する。

タクヤ機は向かってくるクアドラン・ローに攻撃を仕掛ける。

クアドラン・ローはメルトランデイ軍の主力機であり、ゼントラーデイ軍の戦闘ポッドと違い、高い機動力とミサイル搭載数に長けた機体である。

タクヤは照準を合わせてガンポッドを連射するが、見事に避けられてミサイルを発射される。

「来やがったな、特訓の成果を見せてやるぜ！」

タクヤは機体を上昇させてチャフをバラまきつつミサイルを回避して、そのまま機体を反転させながらクアドラン・ローの後ろに何とか回り込む。

「今だ！」

タクヤは機体をバトロイドに変形させて、そのままガンポッドを撃つ。

タクヤの攻撃に回避が遅れたクアドラン・ローの背中にガンポッドが全弾命中し、クアドラン・ローは爆発する。

「やったぜ！」

タクヤは思わずガッツポーズをする。

『やったね、タクヤ』

クアドラン・ローを撃破して喜ぶタクヤにエスターから通信が入る。

『ああ、これもエスターのお陰さ』

タクヤは満面の笑みを浮かべながら応える。

『ほお、少しはやるようになったな』

最初の頃より戦闘技術が向上したタクヤを見て、ドルチェフが通信を入れる。

『ま、俺が本気出せば、こんなもんですよ♪』

ドルチェフからの通信にタクヤは余裕を見せる。

『いつまでもふざけるな、いくぞー！』

調子づくタクヤを一喝し、ドルチェフはオルフェウス目指して進み、2機も後に続く。

「フン、マイクローン達め。なかなか、やるじゃないか」

ブラックバルチャー隊の戦闘をスクリーンで見ていたネルは、満足そうな表情を見せ

る。

「アタシも出る。後は任せただぞ」

オルフェウスの指揮を部下に任せてネルは、格納庫へと向かう。

『よし、もうすぐオルフェウスだ……!? 来たか』

オルフェウスから出撃する黒いクアドラン・ローを見たドルチェフは、ネルの存在を  
確認する。

『タクヤ、エスター、本命の登場だ。援護しろ』

『了解』

3機はネルのクアドラン・ローに次々とミサイルを発射するが、瞬く間に回避されて  
間合いを詰められる。

「もらったよ」

ネル機は両腕のパルスキャノンをドルチェフ機に目掛けて撃つが、ドルチェフ機はギ  
リギリでかわす。

背後からタクヤ機とエスター機の援護射撃も入るが、ネル機は巧みにかわしてミサイ  
ルを2機に撃ち込む。

「くっそー。あの姉ちゃん、やるな」

ネルになかなか攻撃が当たらずタクヤは、悔しさのあまり歯軋りをする。



『どうしたどうした！ もっとアタシを楽しませてよ』

3機掛かりでの攻撃でもネルは、余裕の表情を見せながら回避する。

そして、ネル機は不規則な軌道を描きながら3機に近付きミサイルを撃つ。

『タクヤ、エスター、俺に考えがある。手を貸せ』

ドルチェフは案を閃き、急いでタクヤとエスターに通信を入れる。

『何だよ考えって？』

『とにかく手を貸せ！』

『了解』

3機は、ミサイルを回避して散開をする。

そして、ドルチェフ機はネル機に向かってそのまま突撃するが、不規則なネル機の軌道にドルチェフ機は無理矢理合わせる。

「く……ぐつ、ぐうううう」

従来のクアドラン・ローをカスタムして性能を上げたネル機の機動性と、その不規則な軌道に合わせて速度を上げている為、強烈なGがドルチェフの身体にのし掛かる。

『アタシの軌道に付いてくるなんて、やるじゃないか』

ネルは自分に着いてくるドルチェフに関心しつつ、ドルチェフ機に向けてミサイルを発射する。

「くっ……かわせるか……」

ドルチェフ機はチャフをバラまきつつ、不規則な軌道を描きながらもギリギリのタイミングで次々とミサイルを全弾回避する。

『タクヤ、エスター。ヤツの動きを止めろ！』

ドルチェフの通信を受けてタクヤ機とエスター機は攻撃するが、ネル機は機動力を活かして次々とかわしていく。

「ヤツの回避パターンは……そこか！」

2機の攻撃を回避するネル機の回避パターンを先読みしたドルチェフは、機体をバトロイドに変形させて突進し、ネル機を無理矢理羽交い締めにする。

『捕まえたぞ、このオテンバ娘が！』

『しまった。クソ、離せ！』

ネル機は必死にもがくが、機体は完全に手足を抑え込まれて動けなかった。

ネル機を羽交い締めにしたままドルチェフは、全通信回線を開ける。

『テロリストに告ぐ、お前達のリーダーは人質に取った。俺の計らいで殺しはしない。大人しく投降しろ』

ドルチェフの通信を聞いたテロリスト達はネルが捕らえられたのに気付き、次々と動きを止める。

その様子を見たブラックバルチャー隊も攻撃を中止する。

『それで脅しのつもりか？　マイクローン』

突如、オルフェウスから通信が入る。

モニターには、大きめの体格に髪をモヒカンにしたゼントラーデイ人が映し出される。

『どう言う意味だ？』

『そんな女、死んだって構わないさ。それにそいつが死ねば俺が次期リーダーだからな』

男は不敵な笑みを浮かべる。

『エリック、貴様あああああ！』

エリックと言う名のモヒカン男の身勝手な言葉にネルは激怒する。

『誰なんだ、アイツは？』

『アイツはアタシの片腕の男だ』

『お前さんは、アイツに見捨てられたと言う事か』

『見捨てられた？　ハン、舐めるなよ。あんな奴アタシの方から見捨ててやる』

ドルチェエフの憐れむ様な言葉にネルはムキになったのか強がりと言う。

『そもそも、このアタシを殺そうだなんて一千万年早いわ！』

『クッククク……相変わらず減らず口だけは一人前のようだなあ？　だが、その減らず

口もすぐに言えなくなるようにしてやる』

ネルがエリックの裏切りに怒り狂う中、突如オルフェウスが爆発し始め、中からバルキリーよりも二周り以上大きな巨大兵器が現れる。

「で、でけえ……」

タクヤはオルフェウスから現れた巨大兵器の大きさに固唾を飲む。

勿論、タクヤだけでなくブラックバルチャー隊全員が巨大兵器の大きさに圧倒されていた。

まるで十字の形をした巨大兵器は、肩部分から収納されていた両腕を展開して戦闘態勢を取る。

『貴様、本当に味方を裏切るのか!?!』

戦闘態勢を取る巨大兵器を見たネルは疑心暗鬼になりつつもエリックに通信を入れる。

ネルの問い掛けに対してエリックは、感情を高ぶらせて言い放つ。

その様子を見たネルは、もはやエリックは自分にとつては片腕ではなく敵である事と思いきらされる。

そして、その事を理解したネルは怒りの感情を露わにする。

『クッククック……貴様が闇取引で手に入れた、このブラッド・ザンバインの実力を身を

持って知れ！」

ブラッド・ザンバインはネル機とドルチエフ機に向けて肩部分に搭載されたビーム砲で攻撃を開始する。

『いつまで掴んでる、とつとと離せ！』

ネルの通信を受けたドルチエフ機はネル機を解放し、2機は急速離脱でビームを回避する。

「クッ、すばしっこい奴らめ」

攻撃を回避されたエリックは悔しさのあまり操縦席のパネルを叩く。

『くっえ、エリック！』

ネル機は怒りに任せてミサイルとパルスキャノンとブラッド・ザンバインに向けて撃つが、ミサイルは次々と軌道を逸れ、パルスキャノンは機体に命中するも弾かれてしまう。

『最新型ジャミングシステムにバリアフィールド。お前が仕入れた、このブラッド・ザンバインが役に立つとはなあ！』

ブラッド・ザンバインの機体能力の高さにエリックは勝ち誇った笑みを浮かべる。

『それにしても素晴らしい性能だ。こんな素晴らしい物をお前なんかを使うには勿体無いな』

『クソ！』

エリックの言葉にネルは悔しさのあまり齒軋りする。

『なあ、何かヤバくないか？』

『このままではネルがやられてしまう』

『俺達で助けに行こう』

様子の異変に気付いた他のテロリストメンバーがネルに加勢し始める。

『ネル、俺達に任せろ』

テロリストメンバーはブラッド・ザンバインに向けて攻撃を仕掛けるが殆どが跳ね返されてしまう。

『やめろ、お前達では無理だ！』

『雑魚が、纏めて消えろ！』

ブラッド・ザンバインは背面部からミサイルと肩部のビームキャノンで攻撃し、テロリストの機体を次々と撃墜していく。

『隊長、遅れてすみません』

ブラックバルチャー隊が戦況を見守る中、マリアとレオンが遅れて戦線に復帰する。パイロット達が全員揃った時点でドルチェフは、この状況を見て重い口を開く。

『バルチャーから各機へ、状況が変わった。俺は……あのメルトランディを援護する。』

着いて来たい奴だけ着いて来い。無理強いはしない』

ドルチェフは味方の裏切り行為がどうしても許せない気持ちになり、ネルを助ける意向をブラックバルチャー隊全員に示す。

『水臭いですよ、隊長』

カイルがドルチェフに通信を入れる。

『そうですよ、俺は隊長に着いて行きますよ』

バルチャー10ことポールも続いて通信を入れる。

『俺達は、この隊に入った時から隊長に命は預けてますからね』

バルチャー5ことアーサーは、笑ってドルチェフに通信を入れる。

ブラックバルチャー隊パイロットは、ドルチェフの意向に次々と賛成する。

ブラックバルチャー隊は統合軍からは掃き溜め部隊と罵られ、パイロット達からは左遷候補とまで言われる程だった。

しかし、そんな事はお構いなしにドルチェフは配属されて来たパイロットを信頼して来ていた。

『お前達……嬉しい事を言うじゃねえか。』

次々とパイロット達から来る同意の声にドルチェフの目にうつすらと涙が浮かぶが、ドルチェフは涙が零れるのを見せまいと咄嗟に目頭を押さえる。

ブラックバルチャー隊に左遷させられて来た当時は、ネガティブなイメージを持っていたパイロット達に対して厳しさと信頼を説いてきたドルチェフ。

そのパイロット達が今では自分を信頼して着いて来てくれる事に心の中で感謝をしていた。

『あれれ？ 隊長、もしかして感動して泣いちゃってるとか？』

その様子を見たタクヤがニヤニヤしながら茶化すようにドルチェフに通信を入れる。

『バカ野郎！ 泣くわけないだろう。タクヤ、エスター。お前達はどうする？』

タクヤの茶化した通信を受けたドルチェフは、元の厳つい雰囲気に戻る。

『俺は、あの姉ちゃんを助きたい』

『僕もタクヤと同じです、隊長』

タクヤとエスターは真剣な眼差しでドルチェフに伝える。

『よし、決まったな。バルチャーより各機へ、俺達の敵は、あの大型機動兵器だ。全機突撃！』

『了解！』

ドルチェフに続き他のブラックバルチャー隊もネルの援護に向かう。

『オラオラ、さっきの勢いはどうした？』

エリックはビームやミサイルで攻撃しながらネルを挑発する。



「クソ！ エリックの奴」

必死に攻撃をかわしながらネル機は反撃をするもビームは弾かれ、ミサイルもまたジャミングシステムにより無効化されてしまう。

「ビームもミサイルも効かない……いったいどうすれば……」

攻撃が全く効かず、手の打ちようの無い状況にネルは既に死を覚悟していた。

『加勢するぞ、ネル』

突然のドルチェフからの通信にネルが振り返ると、遠方からブラックバルチャー隊が加勢にやって来る。

『やめろ！ コイツにはビームもミサイルも効かない。お前達の武器では無理だ！』

ネルはブラッド・ザンバインに攻撃が効かない事をブラックバルチャー隊に通信を入れる。

「ビームもミサイルも効かない……」

ネルの通信を聞いたエスターは頭の中で対策方法を考える。

『隊長、僕に考えがあるのでやらせてください』

エスターは策を考えたのかドルチェフに通信を入れる。

『わかった、やってみろ』

『了解』

ドルチェフの了承を得たエスターは、機体をブラッド・ザンバイン目掛けて突撃を開始する。

『まだ雑魚がいたのか。雑魚が何機来ようが無駄だ！ 死ねえええ！』

ブラッド・ザンバインはエスター機目掛けてミサイルを発射する。

エスター機は、きりもみをしながら迫り来るミサイルを回避し、ブラッド・ザンバインの右肩へ接近すると同時に機体をバトロイドに変形させる。

『ビームやミサイルがダメならこれで！』

そして、ガンポッドから銃剣を展開させたエスター機は、そのままブラッドザンバインの右肩へ銃剣を突き刺す。

「な、なにいいいー！」

銃剣が突き刺さった右肩から火花が上がる。

今まで攻撃が全く通用せず勝ち誇っていたエリックは、銃剣を刺されて火花を上げるブラッド・ザンバインに驚く。

『スゲー！ やるな、エスター』

タクヤは、エスターの作戦に感心しながら通信を入れる。

『隊長、格闘兵器なら攻撃が効くかも知れません』

エスターは、格闘兵器がブラッド・ザンバインに有効である事をドルチェフに伝える。

『わかった。バルチャーより各機へ、ヤツは格闘兵器が弱点だ。思いつきりやつてやれ!』

『了解』

ドルチエフの命令を受けてブラックバルチャー隊は、次々とブラッド・ザンバインに突撃する。

「クツ……ク、クソオオオ!」

エリックは予想外の事に混乱しながらもビームやミサイルを乱射してブラックバルチャー隊を攻撃する。

『全機、フォーメーション!』

マリアのVF-14を先頭に5機のVF-11がバトロイドに変形してガンポッドでミサイルを撃破し、残りのVF-11がビームをかわしつつブラッド・ザンバイン付近でバトロイドに変形してガンポッドの銃剣を次々と突き刺していく。

「バ、馬鹿な……こ、こんな筈では……」

火花を散らすブラッド・ザンバインにエリックは狼狽していた。

ビームやミサイル等の遠距離攻撃を受け付けない為、ほぼ負ける事はないと思つていた故に格闘戦の事は考えていなかった。

『おい、トドメはアタシにやらせろ!』

エリックの裏切りや犠牲になった仲間への敵討ちとして一太刀報いたいネルが通信を入れる。

『いいだろう』

『じゃあ、僕のガンポッドを使ってください』

エスター機は、ネル機にガンポッドを渡す。

ガンポッドを受け取ったネル機は、火花を散らすブラッド・ザンバイン目掛けて飛ぶ。

『援護するぜ、姉ちゃん』

ブラッド・ザンバインに向かうネル機の援護にタクヤ機が加わる。

『アタシの足でまといにならないように頼むぜ、ボウヤ』

『だからボウヤじゃねえって！』

ネル機とタクヤ機は巧みなコンビネーションでブラッド・ザンバインに接近する。

ネル機のコクピットモニターにブラッド・ザンバインのデータが表示される。

「コクピットは……ここか」

コクピットモニターからブラッド・ザンバインのコクピットを確認したネルは機体をブラッド・ザンバインの背後へと回し、その後をタクヤ機も続く。

「クソ！ 動け、動けよお！」

ブラックバルチャー隊の攻撃で既に火花を上げるブラッド・ザンバインのコクピット

の中で、エリックは必死にトリガーを動かす。

しかし、動力回路系をやられている為、エリックが必死にトリガーを動かしても、もはや動く気配すらなかった。

そんなエリックの目の前にネル機が姿を現す。

「こんのおおおー！」

ネル機はガンポッドの銃剣を展開して大きく振り上げる。

「ひ、ひいいいいい！」

ブラッド・ザンバインのkokopittoにガンポッドの銃剣が刺さる。

「ついでに、こいつも喰らいやがれ！」

タクヤは照準をブラッド・ザンバインのkokopittoに合わせてトリガーを引いて、ガンポッドを撃ち放つ。

銃弾がkokopittoに次々と命中すると同時にブラッド・ザンバインは各部から次々と火花を上げる。

『急げ、爆発に巻き込まれるぞ！』

『お、おう』

ネル機とタクヤ機は、急いでブラッド・ザンバインから離れるとブラッド・ザンバインは大爆発を起こす。

『やったな、姉ちゃん』

『ああ』

タクヤ機とネル機は、互いにハイタッチをしながら笑顔を見せる。

『いや、まだだ』

タクヤとネルの通信にドルチェフが割り込む。

『どういう事だよ?』

せつかくの雰囲気の水を差すように割り込むドルチェフにタクヤは食って掛かる。

『タクヤ、今回の俺達の任務の目的は何だ?』

『任務の目的? 目的って確かテロリストの殲滅……ああ!』

任務内容を思い出すと同時にタクヤの表情は強張る。

『そう言う事だ』

ドルチェフ機はガンポッドをネル機に向ける。

『待てよ、助けるんじゃないのかよ?』

『悪いな……気が変わった』

『……え!』

先程まで助けると言っていたドルチェフの変わり様にタクヤは言葉を詰まらせる。

『隊長、お願いです。考え直してください!』

ドルチェフの急な心変わりによりエステルは通信を入れて説得する。

『フン、やっぱりそう言うことか……好きにしたら？ もうアタシには帰る場所も仲間も失ったんだ』

エリックにより仲間を殺されて帰る場所も失ったネルは、ドルチェフ機にガンポッドを向けられたまま既に覚悟を決めていた。

『そうか、わかった』

『止めてくれよ、隊長！』

『隊長！』

タクヤとエステルの静止も虚しくドルチェフは、トリガーを引いてガンポッドを撃つ。

しかし、ガンポッドの銃口はネル機ではなく真上を向いていた。

『今でネル・ヤギアスは死んだ。タクヤ、エステル……これでいいだろうか？』

ドルチェフはタクヤとエステルに通信を入れる。

その口元は微かに笑っていた。

『隊長……』

『な、なんだよ。脅かしやがって』

『安心しろ。俺はそう簡単に信念を曲げたりはしないさ』

ドルチェエフの言葉にエスターの表情は明るくなり、タクヤは安堵の表情をする。

『……………どうして助けた?』

本来、抹殺対象である自分を殺さないドルチェエフにネルは問い掛ける。

『男は女を殺したくはないし、気は引けるものだ。まあ……………俺の気まぐれみたいなものだ』

ネルの質問にドルチェエフは、少し照れ臭そうにネルに応える。

その答えにネルは少し呆れた表情をしていた。

男と言うのは、こうも女に対して単純なんだと。

『どうだ、ネル。ここで会ったのも何かの縁だ。俺達の部隊に入らないか?』

『……………』

ドルチェエフの入隊勧誘にネルは黙り込む。

『俺達の部隊にもゼントラーデイもいるし、メルトランデイもいる。まあ、無理強いはないが……………』

『……………断る。アタシは統合軍のゲス共は大嫌いだ!』

ドルチェエフの誘いにネルは感情的に応える。

『……………そうか』

ネルの返答にドルチェエフは、少し肩を落とす。



『……だが……お前達の部隊は面白そうだし、退屈しなさそうだしな。だから……入ってやってもいい』

ネルは照れ隠しの笑顔をドルチェフに見せる。

ネルの返事を聞いたドルチェフは、素直にならないネルの態度に思わず口元を緩ませる。

『わかった、よろしく頼む。よし、全機帰還する』

『了解！』

ドルチェフはプロウニングに通信を入れる。

『バルチャーよりホークスへ。任務完了、これより帰還する。』

『ホークス了解。皆さん、お疲れ様です』

『ああ、それから大きな荷物があるからカタパルトを一つ空けておいてくれ』

『コラ、アタシを荷物扱いするな！』

ドルチェフの通信にネルはツツコミを入れる。

『フフ、了解しました』

ドルチェフとネルのやりとりにエミリアは笑って応答する。

他のパイロット達も任務からの開放感からか笑顔を見せていた。

任務を終えて、ブラックバルチャー隊は基地へと帰還する。

ブラックバルチャー隊と共に基地へと帰還したネルは、基地内のマイクロローン装置でマイクロローン化してマリアに基地を案内してもらっていた。

「一応、基地の施設の案内は大丈夫かしら？」

「ああ、大丈夫だと思う……多分」

マリアに基地内を案内される最中、ネルはキョロキョロと見回していた。

恐らくネルも基地の中の雰囲気は珍しいのだろう。

しばらくして部屋の前でマリアは立ち止まる。

「……この部屋を使ってね」

マリアは部屋のドアを開けて照明を点ける。

「ありがと……？　ねえアンタのその耳……もしかして、アンタもメルトランディ？」

ネルはマリアの尖った耳に気が付いたのか、ふと問い掛ける。

「ええ、そうよ。良かったら仲良くしてね」

マリアは少しだけにはかんだ笑顔を見せる。

同じメルトランディ人の同胞が増える事にマリアは内心嬉しかった。

「あ、ああ。しかし、アンタみたいなのが何でこんな部隊にいるのさ？」

マリアに基地施設内を案内されたネルは、暗い雰囲気のある基地と劣悪な環境惑星にいる

マリアが不思議で仕方がなかった。

「私は、ここに飛ばされたのよ。正確に言うとかクヤとエスターを除く、ここの人達全員ね。」

ネルの質問にマリアの表情が少しだけ曇る。

「飛ばされた？ 飛ばされたって、どう言う事？」

マリアの言葉にネルは驚く。

「私達の部隊は、あなたの嫌いな統合軍によって飛ばされた軍人達で編成されているのよ」

「そ、そうか……アンタも色々あったんだな。悪かったな、へんな事を思い出させて」  
マリアから事実を知らされたネルは申し訳なさそうな表情をする。

「もう慣れたわ。それに、これぐらいでへこたれていたらフィリアに笑われるわ」

「フィリア？」

「妹よ、私にとつて唯一の家族。今はマクロス8船団でパイロットをしているわ」

先程の曇っていた表情から一転してマリアは笑って応える。

「そうか。いいな……アタシには家族と呼べる人なんていなかったな。両親の顔も知らず、物心ついた時にはテロリストの一員になってたし……」

ネルは自分の生い立ちを思い出して憂鬱な表情を見せる。

ちようどネルが生まれた時、ゼントラーデイ軍の強襲により誘拐されてテロリストの

一員として育てられていた。

両親の愛情も貰えず、見ず知らずのゼントラーデイ人との生活が当たり前となっており、家族の温かさを知らなかった。

「だったら、これからは私達があなたの家族ね」

「え？」

マリアの家族と言う言葉にネルは、きよとんとする。

「いきなりは無理でしょうけど、みんな話せば分かってくれるわ」

「そうかなあ？」

マリアの言葉にネルは疑問を感じていた。

先の戦闘で同胞の裏切りにあったので、疑心暗鬼になるのも無理はなかった。

「隊長だって分かってくれるわ」

「隊長って、あのイカつい顔のおっさんでしょ？」

ネルはドルチェフの顔を思い浮かべる。

「ええ、そうよ。まあ……確かに怖そうな顔をしているけど、部下からの信頼は大きいわ」

「確かに怖そうだけど、アタシを殺さずに受け入れてくれたから良い人なのかもな」

ネルはドルチェフの行動を思い出して、とりあえず納得する。

「そこは私が保証するわ。そうそう、あなたの機体も手配が済んでいるから次からの出撃は、その機体でお願いね。バルキリーを操縦した事は？」

マリアの質問にネルは首を横に振る。

元々テロリストとしてクアドラン・ローに搭乗していたネルは、バルキリー自体を操縦する事は全く無かった。

「じゃあ、明日から私が特訓してあげるわ」

「はは……お手柔らかに」

マリアの言葉にネルは苦笑いをする。

しかし、その表情には仲間としての温かみによる嬉しさを覗かせていた。

## 第4話メモリー・オブ・ドルチェフ

タクヤとエスターがブラックバルチャー隊に配属してから1カ月が過ぎた。

少しずつ部隊の雰囲気にも慣れてきたのか、最近ではエスターと共にメンバー達と交流したり訓練を行う事もあった。

ある日、ブラックバルチャー隊基地に1隻の補給艦が着陸する。

「よく来たな、ラナ」

「バーミリオンセイバー隊以来ね」

「はい、これからよろしくお願いします」

ドルチェフとマリアは、補給艦から降りてきたラナと呼ばれる少女と会話をしている。

少女はライトブルーのショートカットに銀縁眼鏡を掛けているが、少し冷たい感じがする瞳が特徴的だった。

しかし、ドルチェフとマリアとの会話で覗かせる目元は何処と無く笑っていた。

「あゝ、終わった終わった」

タクヤはエスターとレオンと共に哨戒任務を終えて戻ってくるなり、ヘルメットを外

して首を思い切り左右に振る。

「二人ともお疲れ」

レオンがコクピット上から劳いの言葉を二人に掛ける。

「レオン先輩もお疲れ様です」

レオンの言葉にエスターは笑顔で応える。

「腹減ったし、とつとと帰ってメシにしようぜ……つて、あれ？」

タクヤは少女と会話をするドルチェフ達の方に視線を向ける。

「おっさんとマリア、誰と話してんだ？」

「見かけない人だね」

タクヤの言葉にエスターとレオンも一緒に覗く。

物資の補給は時々あるが人員の補充は殆ど来ない為、三人にとっては物珍しく感じていた。

「うーん……顔は、なかなかイケるんだが、何か冷たい感じだなあ」

ラナを見たレオンは第一印象を呟く。

冷たさを感じさせる瞳の印象はレオンだけでなくタクヤも気付いていた。

「レオンさんも、そう思う？」

「ああ。俺は、ああいう女とは、お近づきにはなりたくないな」

「あの様子からして、絶対性格も暗いと思うぜ」

「ああ、間違いない」

ラナを見たタクヤとレオンは意見が一致したのか、お互いに顔を合わせて頷く。

その日の午後、急遽ブリーフィングが開かれる事となり、パイロット達はブリーフィングルームへと集まる。

「本日より我が隊に配属になった、ラナ・ルピナス少尉だ」

ドルチェフの紹介を受け、ラナは一礼する。

「ラナ・ルピナスです。よろしくお願いします」

ラナは冷たい表情のまま淡々と挨拶をする。

冷たい瞳と物静かな雰囲気、ブリーフィングルーム内は、微妙な雰囲気を醸し出されていた。

ラナの挨拶が終わるとドルチェフとマリアが率先して拍手をする為、周りも空気を読んで拍手をする。

「彼女のオペレーターとしての実力は、俺が保証する。何かと迷惑を掛けるかも知れんが、そこは許してやってくれ。何か質問は？」

話を終えてドルチェフは辺りを見回すが、特に誰も手を挙げる様子はなかった。

「よし、以上でブリーフィングは終了だ。各自トレーニングするなり、飯なり食ってこ



「い

ブリーフィングが終わり、パイロット達はブリーフィングルームを後にする。

「なんだよ、あの暗くて辛気くせえ女。これから出撃の度にあんな暗い雰囲気で指示されると思うと、こつちまで気分が暗くなるぜ」

ブリーフィングルームからの帰路、タクヤはラナの暗い雰囲気に対して文句を垂れる。

「タクヤ、そんな事は思っていないと言わない方が良いよ」

タクヤの人を見かけで判断するような言い方にエステルは苦言する。

「じゃあ、エステルはどう思うよ？」

「え？ うーん……まあ、ちよつと物静かで大人しい感じかな？」

タクヤの問い掛けにエステルは無難に応える。

「まあ、お前ら似たり寄つたりだしな」

ラナもエステルもパツと見の印象は、大人しいので雰囲氣的にも似ていた。

その雰囲気の中で比較しながらタクヤは、エステルに聞こえないように皮肉を吐く。

タクヤとエステルが部屋へ戻る途中、格納庫で普段よりも騒々しい音が聞こえたので、二人は格納庫へと足を運ぶ。

格納庫では、メカニックマン達が作業用デストロイドで届いた物資の積み込み作業を行っていた。

「何か新しい機体とか入って来ないかなあ」

「入って来るといいよね」

二人は、格納庫内に積まれている物資をキョロキョロと見回す。

「お？ タクヤにエスター。ちょうど良い所に。すまないけど手が空いてるなら手伝ってくれないか？」

格納庫を覗いている二人にミランが声を掛ける。

「いいですよ」

ミランの依頼にエスターは即答で応える。

「すまないな」

「……ちよつと待てよ。俺は手伝いたくねえよ」

エスターとは対照的にタクヤは嫌そうな表情を見せる。

只でさえ任務や訓練もない貴重な非番の時間を余計な事で使いたくなかったから尚更である。

「物資搬入の手伝いをしたら、もしかしたら補給物資の中身がいち早く見れるかもなあ……」

エスターはタクヤにやる気を出させる為、少しだけ悪戯ぽく言う。

「……わかったわかった。手伝えれば良いんだろ？」

物資の中身が人一倍気になるタクヤは、エスターの言葉を汲々了解する。

「どうすればいいですか？」

「とりあえず、バルキリーを使って荷物を全部格納庫に入れてくれ」

「わかりました」

ミランの指示で二人はバルキリーに乗り込み、エンジンを始動させる。

『タクヤ、ガウオークの方が早く運べるよ』

『そうだな、ガウオークでササッと運ぶか』

二人は機体をガウオークへ変形させて補給艦からの補給物資を次々と格納庫へと運んで行く。

物資に貴重品があると思ったエスターは、丁寧に両手のマニピュレータで一つずつ物資を掴んで速度を落としてゆっくりと運んでいく。

『オラオラどけどけ、タクヤ様のお通りでい！』

そんなエスターとは対照的にタクヤは、物資をマニピュレータで持てるだけ持つて一気に加速して運んでいく。

運ぶ途中で進行方向の邪魔になる作業用デストロイドを巧みにかわしながら格納庫

へと運んで物資を下ろす。

「タクヤ、もうちよつと大切に運べ！」

その様子を見ていたミランは、大声でタクヤに叫ぶ。

『ほいほい』

ミランの大声に気付いたのか、タクヤは一度に掴む物資を減らして運ぶ。

タクヤとエスターが手伝ったおかげで搬入作業は予定よりも早く終了した。

「いやあ、二人のおかげで助かったよ。俺達だけだったら、まだ片付かなかったな」

搬入作業が早く終わり、ミランはニコニコ顔で二人を労う。

「お役に立てて良かったです」

ミランの労いにエスターは笑顔で答える。

「ミランさん、さっき運んだ物資って何が入ってたんスか？」

物資の中身が気になるタクヤがミランに問い掛ける。

「ん？ あれか。ちよつと待ってよ、えーと……」

ミランはポケットから到着した物資のリストを取り出す。

中身が気になるのか、タクヤがミランの隣から覗き込む。

「とりあえず、予備用のV F—11が3機にスーパーパックが15セット、アーマードパックが4セットに雑貨品やら食料とかその他諸々だな」

ミランはリストを指差し確認しながら搬入物資を読み上げる。

「おお！ ついにスーパーパックとアーマードパックが入ったかあ♪ じゃあ、次の出撃の時はアーマードパックを使うぜ！」

新しい装備にタクヤの目は輝かせていた。

ブラックバルチャー隊は厄介者扱いの為、VF-11用の装備は追加されず、標準装備での任務遂行が主だった為、今回の補給物資はタクヤに限らず、パイロットにとつては有り難い事だった。

（まだ、タクヤの物と決まったわけじゃないのに……）

エスターは浮かれるタクヤを見て苦笑いする。

「そうだ。ついでと言っちゃあ、なんだけど……オポジションパーツの換装作業も手伝ってくれないか？」

ミランは笑顔で二人に換装作業をお願いするが、その笑みには手伝えと言う微妙な圧があった。

「いいっすよ！」

「僕も構わないですよ」

「え、マジで？」

嫌がる所か即答する二人にミランは驚いた表情を見せる。

「またバルキリーで作業すれば良いですよね？」

「あ、ああ。頼むよ」

二人はバルキリーに乗り込み、機体をバトロイドに変形させて他の作業用デストロイドと共にオプシオンパーツの換装作業を行う。

「オプシオンパーツは、予備が無いから優しく扱ってくれよ。それから予備の1機だけフルアーマード装備を取り付けてくれ」

ミランは作業をする二人に指示を呼び掛ける。

（てつきり断られると思ったんだが……まあ、あの二人のおかげで他の作業ができるからいいか）

二人の作業ぶりを見ていたミランは、感心しつつ自分の作業に没頭する。

ミランの指示通りに2機は、丁寧に格納庫内の全てのVF-11にスパーパックを取り付けていく。

フルアーマードパーツは、予備機のうちの一機をバトロイドに変形させてから取り付ける。

『各パイロットに通達。パイロットは至急ブリーフィングルームに集合せよ。繰り返し……』

ラナの声でパイロット召集命令が基地内に流れる。

「何だ？」

「お前達、行った方がいいぞ」

「でも……」

エスターは、作業中の状況を見て少し躊躇する。

まだいくつかの機体がスーパーパーパックへの換装作業が済んでいないからだ。

「お前達の本職はパイロットだろ？ 後の作業は、俺達の本職だから任せておけて」

躊躇するエスターを見てミランは、右親指を突き出す。

「わかりました」

「じゃあ、行つて来ます！」

ミランの言葉を受けて二人は格納庫を後にし、ブリーフィングルームへと向かう。

「13:42、これよりブリーフィングを始めます」

今回のブリーフィングからラナも参加していた。

「先程、統合軍ライザンバー基地よりウチの部隊に護衛任務の指令が出た。内容は、超空間共振水晶体を積んだステルス艦ハルカをポイントイプシロンへの護衛だ」

ドルチェフは資料を読み上げて任務内容を説明する。

「隊長、しつもん！」

タクヤが威勢良く手を挙げて質問する。

「何だ、タクヤ」

「その超空間なんちゃらって、なんですか？」

「超空間共振水晶体だ」

「そう、それぞれ」

あやふやな言葉にドルチェフは正しい言葉を説明し、その言葉にタクヤは頷く。

「あー……それはだな……」

ドルチェフはタクヤの質問に答える為、資料のページをパラパラとめくる。

「2043年に発見された水晶体。特定の波長の振動を与えることにより空間共振現象を引き起こし、次世代の通信や超空間航行を可能にする新たな鉱物です。この回答でよろしいですか？ タクヤ伍長」

ドルチェフが資料を探している間にラナはタクヤの質問に黙々と答える。

「あ……あんがと」

ラナの的確な回答にタクヤは、思わず呆気にとられる。

「すまないな、ラナ」

「気にしないでください。隊長をサポートするのが私の役目ですから」

ドルチェフの劳いの言葉にラナは僅かに微笑む。

「ポイント地点、ディスプレイに映します」



ラナはボタンを押してディスプレイに映像を映す。

「ステルス艦ハルカとはライザンバー基地から少し離れたポイントエータで合流。その後、ポイントイプシロンまで護衛してください。なお、今回は交代制少人数による護衛任務になります。2チーム編成で1チームがステルス艦ハルカの護衛、もう1チームがブローニングの護衛です」

ディスプレイの映像を切り替えつつもラナは淡々と任務内容を説明する。

「聞いている通りだ。チームは1チーム4機での護衛になる。チームはバルチャー3〜6がシャーク隊。バルチャー7〜10がパンサー隊。俺とマリア、タクヤ、エスターがイーグル隊だ」

ディスプレイに分隊振り分けを映しながらドルチェフは、パイロット達に分隊説明をする。

「ちよつと待て、アタシは出撃しないのか?」

一人だけ番号を呼ばれなかったネルがドルチェフに質問する。

「すまないが、今回はブローニングで留守番をしてくれ」

「ええええ! アタシだけ留守番? なによそれ!」

ドルチェフから留守番扱いされて出撃ができない事にネルは不満げな態度を取る。

「そう言うな、いざという時にはブローニングの援護に出て貰わなければならならな」

「……はいはい、わかったわよ」

ドルチェフの説得にネルは渋々了解するが、その表情はふてくされていた。

「これより1時間後に出撃する。各自出撃準備に入れ」

ブリーフィングが終わり、パイロット達はブリーフィングルームを後にする。

タクヤとエスターは部屋に戻って準備を済ませ、機体のチェックをしに格納庫へと向かう。

辺りはメカニックマンやパイロット達が機体の最終チェックや整備を行っていた。

「タクヤ、エスター」

タクヤとエスターの姿を見掛けたミランが声を掛ける。

「ミランさん」

「お前達が手伝ってくれたお陰で作業も早く終わったよ。ありがとな」

ミランは二人にお礼を言う。

「お役に立てて良かったですよ」

「まあ、俺達の手に掛かれればコレくらい余裕っすよ」

ミランのお礼にタクヤは得意げに話す。

「おーし、それだけ余裕があるなら機体を壊さずに帰って来いよ！」

調子づくタクヤにミランは、悪戯っぽい口調で機体を無傷で帰還する事を約束させ

る。

「げげっ、それはカンベンしてよ」

ミランの言葉にタクヤは嫌そうなを浮かべる。

「ははは、半分冗談だ。二人共、頑張れよ」

笑いながら冗談を言った後、ミランはタクヤとエスターに軽く敬礼する。

タクヤとエスターもミランに軽く敬礼を返して機体確認に向かう。

V F—11には既に大気圏外用装備のスーパースティックが装備されている。

「ついにスーパースティック装備で出撃かあ……」

タクヤは新装備の嬉しさに浮かれていた。

「タクヤ、早く最終チェックをしないと、また隊長に怒られるよ」

喜びに浸りきっているタクヤをエスターが急かす。

「わーっただわーっただ」

エスターに急かされてタクヤは、自分の機体チェックを行う。

1時間後、V F—14と宇宙戦装備を施したV F—11を艦載したブローニングは、ステルス艦ハルカとの合流ポイントであるポイントエータへ向けて発進する。

（今回は輸送物資の護衛か……それにしても超空間共振水晶体の輸送とはな。護衛中に悪い事が起こらなければいいが……）

ドルチェフは、資料を読みつつも頭の中で色々物思いに耽る。

超空間共振水晶体自体は貴重な鉱物であり、2048年現在この鉱物を用いた通信技術は少しずつ増えてきており、その通信技術は目を見張るものがある。

しかし、この鉱物自体は希少価値がある為、マフィアやシンジケート達の間では多額の金額で闇取引がされている。

その為、その鉱物を狙って輸送船が襲われるケースも少なくはない。

『これより本艦はポイントエータへ向けてフォールドを開始します。各員はフォールド態勢の準備をせよ。繰り返し……』

ラナの艦内放送が流れ、プロウニングはポイントエータへのフォールド態勢に入る。

「フォールドなんて、ここの部隊に来る時以来だよなあ」

「そうだね」

タクヤとエスターは、割り当てられたパイロットルームで初めての出撃を懐かしんでいた。

「しかし、あのラナって女、もう少し愛想良くできないもんかなあ。あれで愛想良けりゃ、お付き合いしたいんだけどなあ……ホント勿体ねえよ」

タクヤはベッドに寝転がりラナの話をする。

ラナに対して、ぶつくさと文句を言っている割にはタクヤ自身もラナに気があるよう

だ。

「うーん……彼女にも彼女なりの事情とかがあるんじゃないかな？　ほら、隊長とマリ  
ア大尉の前では楽しそうに話してたし」

エステルはドルチエフ達と楽しそうに会話をするラナを思い出す。

普段の会話では冷たい視線で黙々と話す彼女がドルチエフやマリアの前では嬉しそ  
うな表情を見せていた印象がエステルには強く残っていた。

「事情ねえ……そんなもんなのかなあ？　それはそうと、俺達のチームは偵察いつだっ  
け？」

「確か、明日の2時からだよ」

エステルはポケットからメモを取り出して自分達の任務時間を確認する。

「そっか。じゃあ、時間まで寝てるから時間になったら起こしてくれ」

「うん、わかった」

エステルに時間になったら起こしてもらおうように頼み、タクヤは眠りにつく。

日中の補給物資の運搬作業で疲れていたのか、しばらくしてタクヤの寝息が聞こえて  
くる。

しばらくしてブロウニングは、ポイントエータ付近へフォールドアウトをする。

「フォールドアウト完了。ポイントエータまで後5, 400km」

「各部異常はありません」

ラナ達の状況報告にドルチェフは無言で頷く。

「ラナ、身体は大丈夫か？」

「私なら大丈夫です。状況通達、入れます」

ドルチェフに少しだけ微笑み、ラナは艦内回線を開ける。

『各パイロットに通達。ポイントエータまで後5，400km。繰り返す……』

ラナの艦内放送が流れ、ポイントエータまでの距離が案内される。

初陣を任されているパイロット達は格納庫へと向かい出撃準備に入る。

「もう少しか……」

艦内放送を聞き、エスターは少し緊張したのか胸が張り裂けそうな気分になる。

ブラックバルチャー隊に配属されて既に4回目の任務に出撃をして多少は場慣れし

たとは言え、任務の時間が近付いてくるとまだまだ気が張り詰めてくる。

ふと、時計を見ると21時を過ぎていた。

「僕も少しだけ寝ておかなきゃ。寝不足でみんなに迷惑掛ける訳にもいかないしね」

少しでも疲れを取る為、エスターは椅子にもたれて座り仮眠を取る。

「まもなく合流ポイントです。ハルカからの通信、入ります」

合流ポイント付近へと近付いたブrouニングにハルカからの通信が入る。

ハルカからの通信を受けるとモニターに男の姿が映る。

男の風貌は、落ち着いた感じがする優男だった。

「こちら統合軍ライザンバー基地所属、タイラー・ライネルです。よろしくお願ひします」

タイラーと名乗る優男は礼儀正しく深々とお辞儀をする。

「統合軍ブラックバルチャー隊所属、ドルチェフ・ブライアンです。こちらこそ、よろしく」

タイラーの丁寧な挨拶に対してドルチェフも思わず席を立ち、タイラーにならない深々とお辞儀をする。

「早速ですが、こちらから護衛機4機をそちらに向かわせます」

「了解しました。こちらにも護衛機を出しますが生憎、今回の任務が隠密行動故に護衛機が4機しかないもので、とても助かります」

タイラーから支援感謝の言葉を述べられて通信は切れる。

「ふう……どうも堅苦しい挨拶は苦手だ」

統合軍入隊後、あまり普段から堅苦しい挨拶等をしていなかった為、タイラーとの通信が切れた後、ドルチェフはシートに座り、堅苦しきからの開放感からか思わず溜め息を吐く。

「ラナ、シャーク隊とパンサー隊に出撃命令だ」

「了解」

ドルチェフの指示を受け、ラナは艦内放送の回線を開ける。

『シャーク隊、パンサー隊、出撃。出撃後、シャーク隊はハルカ、パンサー隊はブロウニングの護衛に回れ』

ラナの管制指示によりブロウニング下部カタパルトが展開し、8機のVF-11が出撃する。

出撃後、各隊は二手に分かれてハルカとブロウニングのそれぞれの艦の護衛に回る。

「各部隊、それぞれの所定位置に着きました」

「うむ」

ラナの報告にドルチェフは頷く。

「それにしても、ラナまで私達の部隊に回すなんて……」

マリアはラナが掃き溜めと呼ばれる自分達の部隊に転属させた統合軍のやり方に納得できず、眉間にしわを寄せる。

ラナ自身は特に業務上でも問題もなく、与えられた仕事はソツなくこなしていた為、尚更疑問に感じていた。

「恐らく、ラナをこの部隊に寄越したのは……アイツの意向だろうな」



「……そうね」  
「……そうね」

その人物に対して今は何もできない事にマリアは悔しさのあまり思わず奥歯を噛み締める。

「私なら大丈夫です……心配しないで」

そんな二人を見ていたラナは心配掛けまいと声を掛ける。

「ラナ、これはお前だけの話じゃない。俺達全員に関わる話だ。アイツのおかげで今の統合軍は腐りきったも同然だ」

「そうね、いつか私達も部隊ごと消される事もあるし……」

ドルチェフの言葉にマリアは不安げな面持ちを持つ。

ブラックバルチャー隊も統合軍の掃き溜めと呼ばれているだけあって、任務も過酷な内容の物が統合軍本部から頻繁に来る事がある。

だからこそ、いつ部隊が捨て駒として全滅してもおかしくない状況であった。

「私は、二人に生きていて欲しい……だって、私にとっては大切な二人だから」

「ラナ……」

ラナの胸の内の想いを聞いたドルチェフとマリアは、お互いに顔を見合わせる。

「そうだな、俺達は全員で生き残る……いや、生き残らなければならない」

「ええ」

「はい」

ドルチェフの固い想いにマリアとラナは頷く。

(そして、俺だけでもアイツに制裁を加えてやらなければならない)

その胸の中でドルチェフは復讐を誓っていた。

今の統合軍を腐らせ、統合軍の掃き溜め部隊に無理矢理転属させた張本人に。

「ねえ隊長。盗み聞きで悪いけど、ラナさんとはどんな関係なんですか?」

三人の話の聞いていたアイナがドルチェフに問い掛ける。

「はいはい、私も気になるなあ〜♪」

アイナ同様にエミリアも興味津々な目をしている。

「それに関しては後で説明する。それに今は任務中だから仕事に戻れ」

「えー……」

ドルチェフに激を飛ばされて二人は不満そうな表情を浮かべる。

どちらかと言うとラナとの過去話を話してラナに余計に負担を掛けさせたくないと言おう彼なりの親心でもあった。

「あ、もしかして……隊長って、ロリ……」

エミリアがドルチェフを茶化すような言葉を言い終えようとした時、ドルチェフの殺

気立った眼差しがエミリアに突き刺さる。

「ひっ！」

その眼差しを受けたエミリアは恐怖におののく。

「エミリア、何か言ったか？」

「い、いえ……な、何も言っていない」

殺気立った眼差しを向けられてエミリアは全身から冷や汗を流しつつ身体をガタガタと震わせていた。

「二人共、今は任務中よ。モニターやリーダーから目を離さないで」

「はーい……」

マリアの注意に二人は不満げな表情のまま、お互いに顔を見合わせる。

……クヤ

……きてよ

「うーん……」

……つてば

「もう少し寝かせてくれよ……つて、ヤバ！」

エスターの声に気付いたタクヤは目が覚めて勢いよくベッドから起き上がる。

「あ、起きた」

勢いよく起き上がる姿を見ると同時に不安そうな表情だったエステーの表情は明るくなる。

「お、おっさんは？」

前回エステーに起こしてもらっても何時までも寝ていてドルチェフに殴られた為、目が覚めると同時にタクヤはビクビクしながら辺りを見回す。

「隊長なら、まだ来てないよ」

「あー、よかつたあ……また殴られるかと思つたぜ」

ドルチェフがいない事を確認したタクヤは、ホッと息を吐く。

そして、額に汗をかいている事に気付き汗を拭う。

「そろそろ時間だから行こう」

「ああ」

二人は出撃準備をして格納庫へと向かうが、その途中タクヤは休憩室へと向かう。

「どうしたの？」

「ちよつと腹減つちやつてさ」

タクヤは休憩室に備え付けの自販機でジャンクフードとジュースを購入して食べ始める。

「今食べるとトイレが近くなるよ」

「へーきへーき」

エスターの忠告を聞き流しつつもタクヤは食事を終えて、再び格納庫へと向かう。

二人が格納庫に向かうと、ちょうどシャーク隊がローテーションを終えて戻って来ていた。

「お疲れ様です、マルス先輩」

「おお、お疲れ」

頭にターバンを巻いた男、バルチャー6ことマルスは眠たそうな顔をしながら他の二人のパイロット達と歩いてくる。

「眠そうっスね」

「まあな……敵さんが来ないと暇でな……ふあくあ……じゃあ、お前ら頑張れよ」

マルスは、大きな欠伸をしながら他のパイロットと格納庫を後にする。

「なくんか暇過ぎて退屈な任務になりそうだなあ」

マルス達の様子を見たタクヤは、敵が殆ど攻めて来ない様子に不満げな表情を見せる。

「敵が来ないのは良い事だよ」

逆にエスターは敵が来ない事の方が内心嬉しかった。

マルス達と別れた二人は機体に入り込み、出撃命令が出るまで待機をする。

『バルチャーより各機へ。まずはブラウニングの護衛を2時間行い、その後パンサー隊と入れ替わりでハルカの護衛を行う。タクヤ、エスター、護衛だからって気を抜くんじゃねえぞ!』

『了解』

『タクヤ、特にお前が一番気を抜くんじゃねえぞ!』

『りょかい!』

ドルチェフの忠告にタクヤは、カチンと来たのかヤケクソに返事をする。

『イーグル隊、出るぞ!』

ドルチェフの通信を受けてブラウニングの下部カタパルトが展開し、イーグル隊のバルキリーが発進する。

『バルチャーより各機へ。フォーメーション2で待機』

イーグル隊はフォーメーション2を編成し、ブラウニング周辺で待機する。

『ラナ、敵影は?』

『現在ハルカならびにブラウニングの半径2,000km以内に敵影は見当たりません』  
『わかった』

ラナの敵影未確認の報告にドルチェフは多少の安堵感を持つ。

『隊長、質問いいですか?』

タクヤがドルチェフに通信を入れる。

『どうした?』

『ラナと隊長は、どんな関係なんですか?』

『タクヤ!』

『タクヤ、失礼よ!』

タクヤのドルチェフとラナの関係に対する質問にエステルとマリアが回線に割り込む。

『何だよ、別に聞いたっていいじゃん』

エステルとマリアの割り込みにタクヤは口を尖らせる。

普段は厳つい表情をするドルチェフ。

そして、普段は冷たい表情をするラナ。

この二人が楽しそうに会話をするのを見たタクヤは、どうしても気になって仕方がなかった。

『……タクヤ、お前の様なヤツなら聞いてくると思ったさ。いいだろう、特別に教えてやるから耳の穴をかつぽじってよく聞け。……あれは、7年前の事だ。俺は、あの頃は統合軍特務部隊バーミリオンセイバーに所属していた』

『こちらバーミリオン1、これより帰投する』

『デルター1了解』

基地からの帰投承認の通信を受けてVF-119Aを先頭に3機のVF-114が次々と滑走路へと着陸する。

そして、着陸した4機の機体は、そのまま格納庫付近の滑走路へと向かい停止する。

「お疲れ様です、ガルス少佐」

メカニックマンがVF-119から降りてきた男、ガルスに声を掛ける。

ガルスの風貌はガツチリした体格だが、どことなく無愛想な表情をしている。

機体から降りるなりガルスは、メカニックマンにゆっくりと歩み寄る。

「貴様、あのスロツトルとインテークの調整は何だ？」

機体を降りたガルスは、迎えに来たメカニックマンを見るなり突然胸倉を掴む。

「じ、自分は、きちんと確認しましたが……」

「貴様が良くても俺は、おかしいと言っている」

ガルスは、そのままメカニックマンを殴り飛ばして胸倉を再び掴む。

突然の事にメカニックマンは怯えた表情をする。



「も、もも……も、申し訳ございません」

ガルスはメカニックマンの謝罪も受け入れずにを殴り飛ばし、さらに追い打ちを掛けるかのごとく倒れたメカニックマンの腹を何回も蹴り飛ばす。

「も、申し訳ございません！ 申し訳ございません！」

メカニックマンは、ガルスに腹を蹴られつつも必死に謝る。

必死の謝罪の言葉にガルスは耳を傾ける事はなく、ただひたすらメカニックマンの腹を蹴りまくる。

ガルスに腹を何度も蹴られた影響なのか、しばらくするとメカニックマンから謝罪の言葉も聞こえなくなり既にグツタリとしていた。

「おいおい、どうした？ 謝罪の言葉が聞こえんぞ？ クツクツク……貴様のようなヤツは一度は痛い目を見ないと」

腹を蹴られてグツタリしたメカニックマンの身体にガルスは更に右足を乗せて思い切り体重を掛ける。

「ひ、ひいいい……ぐわあああああ！」

ガルスの暴行にメカニックマンの悲痛な叫びが格納庫内に響く。

「フハハハハハハ！ どうだ、どうだあああ！ ああ？ 俺に逆らった気分は？ ハーッハッハッハ！」

メカニックマンの悲鳴にガルスは、見下したような目つきをして勝ち誇ったように笑う。

それはまさに奴隷を扱うような態度だった。

このような悲惨な状況が続いても、周りは誰も止めようとしなかった。

いや、正しくは止める事ができなかったと言うのが正しいのかも知れない。

統合軍エリート特務部隊バーミリオンセイバー。

統合軍の中でもかなり位の高いエリート部隊であり、この部隊に配属できる事は統合軍パイロットにとって荣誉ある事だった。

メンバーはドルチェフ・ブライアン、マリア・ランカスター、ギブソン・ディクソン、そして隊長のガルス・バルディアの4名。

中でもガルスは、性格が横暴で両親が統合軍参謀本部関連に配属されているのを良い事に好き勝手にやりたい放題だった。

彼に逆らう者は男女構わず鉄拳制裁、左遷、酷い時になると戦闘中の誤射扱いにより撃墜される事もある。

逆らえば酷い仕打ちが待っている為、誰も意見を述べる事はできなかった。

また、彼自身も度々軍規違反を犯していたが、その度に親の権力を振りかざしては隠蔽工作を行っていた。

まさに彼が部隊に配属されて来た場合、彼の言動そのものが軍規の象徴であると言っても過言ではない。

ある日、統合軍参謀本部よりバーミリオンセイバー隊に任務が下る。

反統合政府軍テロリストによって都心部を制圧された中立地区のジェニオスシティからテロリストを排除すると言う内容だった。

任務を受けたバーミリオンセイバー隊は、直ちにジェニオスシティへと向かう。

テロリストの兵器の殆どが旧式の機体やデストロイドだったお陰でテロリストの排除はたやすかった。

しかし、ジェニオスシティの市長が統合政府を制圧する為に裏で半島号政府軍と手引きしていたと言う裏情報を掴んだガルスは、恐ろしい作戦を実行しようとする。

「反応弾?!」

「隊長、正気ですか?」

突然の作戦にドルチェフ、マリア、ギブソンは驚き、ガルスに抗議をする。

「この中立地区の市長は、反統合政府軍と裏で繋がっていた。このままでは他の地区に悪影響を及ぼすから排除する。俺は当たり前前の事をしてるだけだろう」

三人の抗議に対してガルスは淡々と話す。

「この都市には無関係の人達も大勢いるんですよ。だからと言って、それは許される事

では……」

ギブソンの言葉を断ち、ガルスはギブソンの胸倉を掴む。

「貴様、上官に口答えする気か？」

マリアがガルスとギブソンの間に割って入る。

「隊長、今一度、考え直してください」

「うるさい！」

反応弾発射を止めさせようと説得するマリアをガルスは殴り倒す。

「マリア！」

殴り倒されたマリアをギブソンは抱え起こす。

「全く、お前達は揃いも揃って口答えしやがって」

ガルスは三人を上から目線で見る。

ピピィ

ガルスに通信が入ったのか、通信機が鳴り出す。

『ガルス少佐、まもなくジェニオシティに到着致します。少佐の命令で、いつでも反応弾は発射可能です』

四人が空を見上げると反応弾を搭載した3機のVF-11が飛来して来る。

その様子を見たギブソンは絶望的な表情をしていた。

「くっ……隊長……いや、ガルス！ 俺は……俺は、貴様のやり方にはもう我慢できん！」

突如ギブソンは、ガルスを殴り飛ばす。

そして、そのまま馬乗りになりガルスを殴り続ける。

「やめろ！ やめるんだ、ギブソン！」

ドルチェフがギブソンを羽交い締めにする。

「離せ、ドルチェフ！ 俺は……俺はこいつのやり方が許せなくて今まで我慢してきたんだ！」

「頭を冷やせ！」

ドルチェフは熱くなり見境の付かないギブソンを殴り飛ばす。

「クッ……き、貴様あ！ この俺を……よくも……よくも……」

ギブソンから解放されたガルスは起き上がり歯軋りをする。

そして、ギブソンに殴られた事により唇からの出血を拭い、殺気立った眼差しでギブソンを睨む。

今まで親に叱られた事も殴られた事も無かったガルスにとって、部下から殴られた事は生まれて初めての屈辱だった。

『ガルス少佐、どうしました？ 早く御命令を……』

なかなか反応弾発射の指示を出さないガルスに疑問を感じたパイロットがガルスの通信機に通信を入れる。

「発射だ、発射しろ！」

パイロットからの通信にガルスは荒々しく命令する。

「やめろ、やめろおお！」

ギブソンの必死の抵抗虚しく、3機のVF-11から反応弾が1発ずつ発射される。

「恨むなら反統合政府軍と繋がりがあつた市長を恨めよ」

発射された反応弾の軌道を見ながらガルスは反応弾の爆発に巻き込まれないように自分の機体に取り込みエンジンをつけて即座に撤退を始める。

「ギブソン、逃げるぞ。この場所も反応弾に巻き込まれる」

ドルチェフは呆然と立ち尽くすギブソンに声を掛ける。

「ギブソン！」

呆然と立ち尽くして動こうとしないギブソンにドルチェフは声を掛けつつも身体を揺さぶるが、もはやドルチェフの声すら届いていない状態だった。

「マリア、無理やりにもギブソンを連れて行くぞ！」

「了解」

呆然と立ち尽くすギブソンをドルチェフとマリアは、強引に連れ出してバルキリーへ

と戻る。

三人は、バルキリーを緊急発進させて反応弾の範囲から撤退をし始める。

「ギブソン、貴様だけは許さん……許さんぞー！」

先に撤退していたガルスは同じく撤退するドルチェフ達を見掛ける。

そして、機体の速度を落として、そのままギブソン機の後方に着く。

「死ねー！」

ガルスは、トリガーを引いてガンポッドでギブソン機を攻撃する。

突然の攻撃にギブソン機は回避できず、ギブソン機は火花を散らす。

「な、何だ!?!」

突然の後方からの攻撃を受けてギブソンは振り返る。

振り返った先にはガルスのVF-19が見えた。

『!?! ガルス、何をする!?!』

『隊長!?!』

突然のガルスの行動に三人は戸惑う。

『フン、俺に逆らった罰だ! ギブソン、貴様は死んで詫びろ!』

ガルス機は更にギブソン機にミサイルを撃ち込む。

ギブソン機は回避運動をしようとするが、先程のガルス機の攻撃で思うように動け

ず、ミサイルは命中してしまふ。

『ぐああああああ！』

『ギブソン！』

ガルス機の攻撃を喰らい、ギブソン機は火花と黒煙をあげながら、そのまま墜落していく。

『ギブソン、今助ける！』

『ドルチェフ、もう間に合わないわ！』

マリアの制止を振り切り、ドルチェフは機体を反転させて墜落するギブソン機の救出に向かう。

『く……来るな……ドルチェフ……お前まで俺と一緒に死ぬ事はないだろ……』

息も絶え絶えにギブソンがドルチェフに通信を入れる。

『しかし……』

『ドルチェフ……お前は……生き残れ。生き残って……腐った統合軍を正しい道に……』

しばらくして、発射された反応弾はジエニオスシティに到達し、都市は爆煙と炎に包まれていく。

爆発の中心地の建築物は、まるで高熱に晒された飴の様にドロドロと溶け、市民達は



瞬く間に蒸発する。

更に爆風により周辺の建築物や市民達は吹き飛ばされる。

その光景は、あまりにも惨たらしく悲惨だった。

反応弾の爆発を確認したドルチェフは、機体を急速反転させてスロットルを上げて最大出力で爆炎から遠ざかる。

やがて、ギブソン機は反応弾の爆炎の中へと消えていく。

『ギブソン、ギブソオオオオン！ うおおおおおおお！』

ドルチェフの悲しみの叫びがコクピット内に虚しく響く。

マリアは爆炎の中に消えていくギブソン機を見て、声押し殺して涙を流す。

「フン、バカが……俺に逆らうからだ」

二人が同僚を失う悲しむ中、爆炎を見ながらガルスは不敵な笑みを浮かべていた。

『ドルチェフ、マリア、わかってているな……ギブソンは事故死だ』

「……」

気に入らない相手を殺し、あまつさえそれを捏造するガルスの言葉に二人は奥歯を噛みしめていた。

反応弾発射から10時間以上が経過し、ドルチェフとマリアはガルスの命令で崩壊したジェニオスシティの調査をする事となった。

反応弾の爆発によりジェニオスシテイは既に死の街と化していた。朝方とは言え、まだ辺りは暗い為、余計に不気味さを増している。

「酷い……」

マリアは廃墟と化した町並みを見てポツリと眩く。

『この有り様じゃ生存者はいないだろうが、とにかく調査しよう。マリア、二手に別れるぞ』

『了解』

ドルチェフ機とマリア機は二手に別れて北東方面へ調査に向かう。

ドルチェフ機は、ガウォークに変形して廃墟と化した市街地を進んでいく。

「やはり、生存者は見当たらないか……ん？」

リーダーが生体反応をキャッチする。

ドルチェフは生体反応付近で機体を停止させてシート後部から護身銃と懐中電灯を取り出し、バルキリーから降りる。

そして、生体反応の場所へとゆっくり近づいていく。

反応先は崩れた一軒家だった。

「(ト)か」

ドルチェフは、懐中電灯を点けて生体反応が出ていた崩れた家の中へと入る。

崩れた家の中は、灯りが無く真つ暗だった。

「誰かいるか！」

建物の中にドルチェフの叫びはこだまするが、全く返事は無かった。

この様な状況下でも場合によっては敵対勢力もしくは火事場泥棒が潜んでいる可能性がある為、油断はできない。

周囲を警戒しながらドルチェフは、ゆっくりと玄関から廊下を歩いていく。

懐中電灯の灯りだけを頼りにドルチェフは家の少し奥へ進む。

建物自体は、ある程度崩れてはいるものの丁度高層ビルに近い場所のお陰で多少は奥へと進む事ができた。

「?!」

少し進んだ場所でドルチェフは僅かなうめき声を聞く。

「この辺りか」

うめき声が聞こえる場所は、瓦礫に埋もれていたのでドルチェフは瓦礫を手で退ける。

瓦礫を少し退かすと、女性と少女の姿が見える。

「おい、大丈夫か！」

ドルチェフの声掛けに対して女性からは応答は無かった為、女性の手を触るが体温自

体は感じず、既に事切れていた。

その女性に覆い被されるかの様に倒れている少女の僅かなうめき声をドルチェフは確認して、急いでマリアに連絡を入れる。

『マリア、生存者を確認した。ポイントM13地区だ』

『了解、すぐに向かうわ』

ドルチェフの通信を受けたマリアは、ポイントM13地区へと向かう。

しばらくしてマリアがやって来る。

「マリア、こいつを退かせるからライトを頼む」

「ええ」

マリアの照らす懐中電灯の光を頼りにドルチェフは、少女ごと女性の身体を瓦礫から引き上げる。

女性の身体を引き上げると無残にも両脚は切断されていた。

「……」

その無残な姿に思わずドルチェフは言葉を失う。

「ドルチェフ……」

ドルチェフの様子が気になりマリアが心配そうに覗き込む。

「見るな！」

ドルチェフは覗き込もうとするマリアを静止する。

「うう……マ……マ」

微かだが少女の声が聞こえる。

「大丈夫だぞ。もう少しの辛抱だ」

少女を励ますかの様にドルチェフは声を掛ける。

「マリア、急いで救護隊を呼んでくれ」

「ええ」

マリアが建物の外で救護隊に連絡する間にドルチェフは、少女の身体を抱きかかえて建物から出る。

少女は、まだ幼さが残る顔つきで身体には反応弾の爆発や建物倒壊時の煙で汚れているが、ドルチェフは身体の汚れを手で軽く払って落とす。

「はい、ジェニオスシティの生存者です……!?! 何ですって！ 人の命が掛かっているのよ！」

突然マリアは通信機に向かって声を荒げる。

「どうした？」

マリアの様子を気にしてドルチェフが声を掛ける。

「それが……ジェニオスシティは、反統合政府軍と繋がりがあから救護隊は出せない

と……」

マリアの声は震えていた。

統合軍のあまりにも冷たい対応に信じられない様子だったのだろう。

「何だと?! クソ……統合軍は、どこまで腐っていやがるんだ!」

マリアの説明にドルチェフは、統合軍の冷酷な対応に怒りを露わにする。

少女に何も罪は無い。

ガルス横暴の為に住んでいた街を焼かれて怪我をしただけである。

それなのに街が反統合政府軍と繋がっていると、言う理由だけで救援すらできないと言う理不尽な理由。

「……仕方がない、近くの病院までバルキリーを飛ばすぞ」

「ええ」

「お嬢ちゃん、すまないがもう少しだけ辛抱していてくれ」

少女の容態を確認しつつ二人はバルキリーに乗り込み、少女を近くの病院まで運んでいく。

幸いジェニオステイから少し離れた街で何とか病院を見つけた二人は、少女を搬送し、少女は緊急手術を受ける事となる。

「……大丈夫かしら」

マリアは不安げな表情で手術室のランプを見る。

二人が少女を病院に搬送した時には、かなり容態も危ない状況だった。

「今は、あの子が助かる事を祈るしかない」

ドルチェフは不安げな表情をするマリアの左肩に手を置く。

ピピピ

ドルチェフの通信機が鳴り、ドルチェフは周りに迷惑の掛からない少し離れた場所で通信に応答する。

『はい』

『ドルチェフ。貴様、いつまで道草を食っている』

声の主はガルスだった。

『……申し訳ございません』

『すぐに戻ってこい、いいな』

『了解』

それだけでガルスからの通信は切れる。

「マリア、隊長が呼んでいる」

通信を終えたドルチェフは、手術室の前に立ち尽くすマリアに声を掛ける。

「う、うん……」

ドルチェフは帰ろうとするが、マリアは手術室が気になっている様子だった。

「後でこつちに連絡を貰えるように俺から伝えておく」

「……ありがとう」

病院に連絡先を伝えて二人は基地へと急いで帰還する。

それから2日が過ぎ、病院から少女の手術が無事に終了したと言う連絡が入る。

しかし、まだ面会できる状態ではない為、改めて連絡を貰う事にした。

ジェニオスシティへの反応弾による被害は悲惨な結果となった。

死者は推定約280,000人、反応弾使用に関して統合政府は過去にジェニオスシティ上層部に対して反応兵器の保有に関して再三警告したが聞き入れず、反応兵器使用の意図を見せた為のやむを得ない手段と発表。

しかし、統合政府のやり方に対して批判的な声を唱える者も少なくなかった。

元々は、ガルスの手先な判断で発射された反応弾。

しかし、この事件の首謀者であるガルスは謝罪はおろか名前すら出ていない所からして既に統合軍参謀本部が裏で隠蔽工作をしていたのだろう。

このニュースの内容に関して当事者であるドルチェフとマリアは納得がいかなかった。

少女を救出してから3週間が過ぎる。



既にニュースでは、あの事件が扱われなくなり、まるで何も無かったかの様に時が過ぎていく。

その後も特に大きな紛争等は無く、平穩無事な日々が過ぎて行つた。

そして、1ヶ月が過ぎようとしたある日、病院から面会可能の連絡が入り、ドルチェフはマリアと共に少女の面会へ向かう。

病室に入ると少女は、身体中を包帯で巻かれていた状態でベッドに寝かされていた。

「お嬢ちゃん、わかるか？」

ドルチェフが声を掛けると少女は、瞳だけをドルチェフに向ける。

「……マ……マは？」

少女は、弱々しい声でドルチェフに問いかける。

「……」

少女の問い掛けに二人は、顔を見合わせる。

少女の母親は、既にこの世には存在しない。

その事実を少女に伝えるべきかドルチェフは頭の中で考えていた。

まだ親に甘えたい年頃でもあるだけに今の状況で事実を伝える事は、肉体的にも精神的にもショックは大きい。

しかし、少女の母親が既に亡くなっている事も後で知る事になる為、伝えなければな

らないのも事実である。

「マ……マに、ママに会い……たいよお……」

只でさえか細い声の少女の声は、今にも泣きそうな声だった。

「お嬢ちゃん……」

少女の今後の事を考えてドルチェフは、少女に事実を伝えようと決心する。

そして、ドルチェフが少女に事実を伝える為に話し掛けようとした時、マリアが止める。

「お嬢ちゃん……お嬢ちゃんのパパはね……天国に行ったの。わかるわね？」

マリアは、少女に語りかける様に呟く。

痛々しい少女の心境に同情しているのか、その声は涙声に近かった。

「……ママは……死んだの？」

少女の問い掛けにマリアは、ゆっくりと頷く。

「いや……イ……ヤだよ！ ママ、マ……マ……私を置いて……てつちやイヤだよ！」

マリアの答えに少女は嗚咽交じりの泣き声で泣き出す。

反応弾の爆風に巻き込まれて気付いた時には、病院のベッドで寝かされ、そして訳も分からない状態で母親の死を聞かされる。

少女にとって、今まで生きて来た人生の中でこれ程までに辛い事は無いだろう。

泣きじやくる少女の頭をマリアは優しく撫でる。

そのマリアの目には涙が浮かんでいた。

直接的ではないにせよ、少女を辛い目に合わせてしまった事への申し訳なさとももできなかつた事への悔しさでいっぱいだったのであろう。

・  
・  
・

『その後、身寄りの無いラナは俺が引き取った。勿論マリアのサポートもあつたからこそまで来れたわけだ』

『そう……だったんですか……』

ドルチェフの思い出話にエスターは、少し涙ぐんでいた。

『隊長も苦労してたんだなあ……』

ドルチェフの話にタクヤは、しみじみと答える。

『あ、隊長、もう一個質問！ 何で隊長つてブラックバルチャー隊に飛ばされたんすか？』

『まったく……お前は聞きたがりなヤツだな』

タクヤの聞きたがりな性格にドルチェフは呆れた表情をする。

『いや、だって、ここまで話を聞いちゃあ聞きたくなくなるもんですよ。なあ、エスター？』  
『僕に振らないでよ。それに僕は、そこまで詳しく聞きたいとは思わないよ』

唐突にタクヤに話を振られてエスターは苦笑いをする。

聞きたがりのタクヤとは対照にエスター自身は特に話を聞きたいとは思っていなかった。

恐らくドルチェフ自身も過去の事には、あまり触れて欲しくないのが本心なのだろう  
と思い、エスターは敢えて空気を読んでいた。

『まあ、この話はまたの機会だ。そろそろハルカの護衛に廻る時間だ』

丁度ブロウニングの護衛から2時間が経過しており護衛艦の交代時間だった事もあり、ドルチェフにとっては幸いだった。

『ちえー』

話をはぐらかすドルチェフにタクヤは不満そうな表情を浮かべる。

『タクヤ、今は任務中よ。任務に集中しなさい』

『はいはい、了解了解』

マリアの忠告にタクヤは、投げやりに応えて通信を切る。

『こちらイーグル、これよりハルカの護衛に回る』

『了解。シャーク隊を出撃させます』

ドルチェフがブラウニングに通信を入れた後、イーグル隊はローテーションでハルカの護衛へと向かう。

## 第5話カムフラージュ

『バルチャーよりハルカブリッジ』

プロウニングからハルカへ移動をしてドルチェフは、ハルカに通信を入れる。

『こちらハルカブリッジ』

『これよりイーグル隊が貴艦の護衛に廻る』

『了解』

ハルカとの通信を終えてイーグル隊は、ハルカの護衛に就く。

『た……隊長』

ハルカの護衛に就いた途端にタクヤがドルチェフに通信を入れる。

しかし、その表情は青ざめていた。

『どうした?』

『ト……ト、トトトトイ……レ……』

『何だと!?』

『も、もう……が……ガガガガマンで……でき、できねえ……』

青ざめた表情でトイレを訴えかけるタクヤにドルチェフは呆れた表情をする。

なんとかトイレを我慢しようとタクヤは、必死の形相を見せたりキャノピーを叩いたりするが、その行為が尚更ドルチェフを呆れさせていた。

『タクヤ、どうしたの？』

『どうしたの？』

コクピット内のタクヤの様子がおかしいと気付いたエスターとマリアがタクヤに通信を入れる。

『ト、トイレ……も、ももも漏れそう……ぐ、ぐおおおお』

『トイレって……』

トイレを必死で我慢するタクヤにマリアもドルチェフ同様に呆れた表情をしていた。

『トイレパックもダメなの？』

パイロットスーツは、宇宙空間においてのパイロットの生命を維持する為の維持装置の他にパイロットの生理現象を考慮してトイレパックも備え付けており、通常であれば約3回は排泄物を溜めておく事が出来るようになっていた。

『も、もう……いっぱい』

タクヤの表情がどんどん苦痛にゆがみ、只でさえ青ざめている表情が更に青ざめる。

『出撃前に食べたりするからだよ』

格納庫へ向かう前にタクヤは、空腹感を満たす為に休憩室でジャンクフードを食べて

いた。

エスターは控えるように忠告したが、その忠告を聞き流したツケが今頃になってやって来たのだ。

『つたく……バルチャーよりハルカブリッジ』

タクヤの状況を見兼ねたドルチェフは、再びハルカへ通信を入れる。

『こちらハルカブリッジ』

『僚機が体調不良を起こした。すまないが、トイレを貸してくれ』

『了解』

『タクヤ、早く行け!』

『うおおおおお、漏れる漏れる漏れるううううう!』

ドルチェフに急かされてタクヤは、機体をハルカのカタパルトに向けて飛ばす。

『まったく、アイツは部隊の恥だ!』

タクヤの行動にドルチェフは、怒りのあまり思わず歯軋りをする。

・  
・  
・

「はああああ……ギリギリ、セーフ!」



ハルカのカタパルトへ着艦すると同時にタクヤは、必死の形相でトイレの場所を聞くと同時に猛ダツシユをして、なんとか漏らす前に間に合う事ができた。

トイレで用を足したタクヤは、先程の青ざめた表情とは対照的にスッキリした表情をしている。

「ふう……一時は、どうなるかと思つたぜ。さてと……そろそろ戻らねえと、おつさんに怒られちゃうな」

このままトイレでのんびりと過ごしてから帰りたいのが本音だが、そんな事したらドルチェフからの鉄拳制裁が待っている事が容易に連想できた。

「それにしても護衛に来たブラックバルチャー隊もバカだよな」

「ホントホント」

タクヤが用を足して部屋を出ようとした時、ドアの向こう側から声が聞こえた。

（何だ？ 俺達の事を話してんのか？）

タクヤは声押し殺して、そつと聞き耳を立てて二人の会話を聞く。

「この後、ブラックバルチャー隊の奴らは全員殺されるのにな」

「艦長も艦長だよな。反統合政府軍に寝返る為に、わざわざこの任務に志願するなんて」

「まあ、いいんじゃない？ 俺は今の統合軍のやり方は好きじゃないしな」

「ある意味、今回の任務が寝返る機会だったかもな」

「ああ」

しばらくして用を足し終えたのか、二人の声と足音は遠ざかっていく。

タクヤは、ドアをゆつくりと開けて辺りを見渡す。

「うわあ……俺、マジでヤベエ事を聞いちゃったよ。早く戻って、みんなに知らせねえと……」

タクヤは急いでバルキリーに戻り、ドルチェフ達と合流する。

ハルカから戻ったタクヤは、トイレで盗み聞きした内容を伝える為、ドルチェフに通信を入れる。

『隊長、大変だ』

『今度は何だタクヤ?』

先程からタクヤの行動にイラつかせられてばかりだった為、ドルチェフも思わず怒鳴り散らす。

『そんなに怒るなよ。実はさつき、トイレで凄い事を聞いちゃったんだよ』

『凄い事だあ?』

『実は……』

タクヤはトイレで盗み聞きした話の内容をドルチェフに話す。

『……なるほど』

タクヤの話にドルチェフは頷く。

『だから、今すぐにでもこの艦を攻撃……』

『タクヤ、落ち着け。確かに今の話が本当なら攻撃しても悪くはない。だが、俺達の任務は何だ？』

焦り出すタクヤにドルチェフは、再度タクヤに任務内容を質問する。

『えーと、超空間なんちゃらを届ける事……』

『そのとおりだ。だから今は任務遂行が優先だ』

『……了解』

自分の想像していた事とは違った対応をするドルチェフにタクヤは、ふてくされた表情をする。

『まあ、向こうが本性を見せたら、遠慮無く攻撃させて貰うつもりだ』

『隊長……』

思い掛け無いドルチェフの言葉にタクヤの表情が明るくなる。

『だからタクヤ、今は任務に集中しろ。いいな』

『了解！』

自分の言葉を信用してくれるドルチェフの対応にタクヤは、俄然気合を入れ直して任

務に望む。

ドルチェフはブラックバルチャー全隊員に通信を入れる。

『バルチャーより全隊員へ。どうやら今回の任務は、一癖ありそうだ。最後まで油断するなよ』

ドルチェフの言葉にブラックバルチャー隊は、気を引き締める。

超空間共振水晶体を輸送する輸送艦の艦載機が4機と少なすぎる事自体にドルチェフは、微妙な違和感を感じていた。

しかし、タクヤが盗み聞きした言葉が確実であれば、自分の部隊は反統合政府軍により全滅させられる事は間違いない。

ドルチェフ自身も慎重になりつつ、この任務の行方を様子見る。

『ホークス3より各機へ。11時の方向より敵影確認。機影はリガード、ヌージャヤデル・ガークラスの機体15機』

数分後、ラナから敵機確認の通信が入る。

「平和な時間は、ここで終わりか」

ラナの通信を聴いたドルチェフは、操縦桿を握る手に力を入れる。

『約1分後に本体と接触。至急迎撃態勢を取れ』

ハルカとブロウニングは、迎撃用機銃とミサイルハッチを展開して迎撃態勢を取る。

『バルチャーより各機へ。艦を護衛しつつ迎撃態勢を取れ』  
『了解』

各艦の護衛機は迎撃態勢を取りつつレーダーで敵影を確認する。

徐々に接近する15機の戦闘ポッド部隊は、途中で二手に分かれて各艦へ突撃を開始する。

『全艦砲撃開始！』

ハルカとブロウニングの艦砲射撃ならびにミサイル斉射を皮切りにブラックバルチャー隊と戦闘ポッド部隊の戦いの火蓋が切られる。

ハルカとブロウニングの攻撃をかわしながら、2機のヌージャデル・ガーが MARIA 機とエスター機に攻撃を仕掛ける。

『エスター、フォローをお願いね』

『了解』

ヌージャデル・ガーの攻撃を避けつつ MARIA 機とエスター機は、バトロイドに変形して向かってくるヌージャデル・ガー2機にミサイルを撃つ。

迫り来るミサイルを片っ端から撃ち落としながら突っ込むヌージャデルガー2機のうち、1機を MARIA 機とエスター機はガンポッドで撃墜し、残り1機をエスター機はガンポッドの銃剣を展開して格闘戦に持ち込む。

ヌージャデル・ガーのパンチを防弾シールドで防ぎながらエステルは様子を見る。  
「今だー！」

再度殴りかかる為には拳を振り上げるヌージャデル・ガーの隙を突いたエステルは、フットペダルを思い切り踏んで背部バーニアの出力を上げて、そのままヌージャデル・ガーに体当たりをする形で押し返す。

そして、押し返されて体勢を崩したヌージャデル・ガーをエステル機は、ガンポッドの銃剣でヌージャデル・ガーの腹部に突き刺す。

銃剣を刺されて悶え苦しむヌージャデル・ガーをエステル機は蹴り飛ばし、そのままガンポッドで蜂の巣にして撃墜する。

「……やった」

無事に敵機を撃墜したエステルは、緊張して強ばった表情を緩ませる。

『ほお……：エスターのヤツ、腕を上げたな』

出撃当初に比べて日に日に実力を上げていくエスターの戦いぶりを見て、ドルチェフは感心する。

同じくエスターの戦いぶりを見ていたタクヤは、エステルに対しての関心と共に妬みの感情が入り混じっていた。

『くそ、俺も負けてたまるか！』

タクヤ自身も当初は素人並みの戦闘技術だったが、エスターと共に特訓したお陰で少しづつではあるが戦闘技術は上がりつつあった。

ドルチェフとタクヤの目の前に2機のリガードと1機のヌージャデル・ガーが迫る。

『来るぞ。タクヤ、油断するんじゃないやねえぞ！』

『了解！』

ドルチェフ機とタクヤ機は迫り来る3機の戦闘ポッドに対してガンポッドで応戦する。

3機の内のリガードを1機を撃墜するが、残りの2機のうちリガードがタクヤ機をヌージャデル・ガーがドルチェフ機に仕掛ける。

「遅い」

ドルチェフ機はヌージャデル・ガーの攻撃を交わしつつ接近し、バトロイドに変形して顔面にパンチを喰らわせて殴り飛ばす。

そして、追い討ちを掛けるかの如くガンポッドで蜂の巣にする。

敵側の戦闘技術が低かったのか、ドルチェフにとっては敵機の撃墜は容易い事だった。

『タクヤ、そっちはどうだ？』

ヌージャデル・ガーを撃墜したドルチェフがタクヤに通信を入れる。

『だ、大……丈夫!』

後方に着かれたタクヤ機は距離を取る為、スロットルを上げていた。

口では平気な事を言いつつも、タクヤは必死でリガードの攻撃を避けている。

「くっそおおお!」

タクヤの乱暴な操縦にVF-11のエンジンが悲鳴を挙げ、徐々にタクヤ機とリガードとの差が縮まる。

ゼントラーディ軍の中では性能の低い機体とはいえ、宇宙空間では凄まじい機動力を見せる。

「どうする……どうする、俺!」

迫り来る恐怖にタクヤは頭の中がパニックになりかける。

「!? そうだ、このテがあった」

タクヤは頭の中がパニックになりつつもエスターとの特訓を思い出す。

「見てろよ」

タクヤは、機体をガウオーク・ファイターに変形させて逆加速を掛ける。

突然の逆加速にリガードは、減速する事なくタクヤ機を追い越す形になる。

「よっしゃ、今だ!」

リガードが追い越した瞬間を突いてタクヤはガンポッドの照準をリガードに合わせ



る。

「これでも食らいやがれ！」

そして、そのままトリガーを引いてガンポッドを撃ち込みりガードを撃墜する。

「いよつしやあ、やりい！」

タクヤは思わずガッツポーズをする。

『お前も少しは、やるようになったな』

タクヤの戦いぶりを見ていたドルチェフから通信が入る。

『少しは俺の実力を認めてくれますか？』

感心するような口調をするドルチェフに対してタクヤは、笑顔で応える。

『自惚れるな！ 俺から見たらお前は、まだまだヒヨっこだ』

『ちえー……』

自惚れた態度をドルチェフに注意されたタクヤは、不満そうな表情をする。

『バルチャー5よりバルチャー1。ブロウニングにまわりついてた敵は、全て片付けた』

ブロウニングの護衛に着いていたバルチャー5ことアーサーからドルチェフに敵殲滅完了報告の通信が入る。

『バルチャー2、こちらも全機片づけたわ』

エスターと共に敵機を全滅させたのか、マリアもドルチェフに敵殲滅完了報告の通信を入れる。

『こちらホークス3。ブロウニングの損傷は軽微。特に任務に支障を来す事はありません』

『分かった。そのまま警戒態勢を続けてくれ』

『ホークス3、了解』

ラナからブロウニングの状況報告を受けたドルチェフは、ブロウニングに警戒態勢を続けるように指示をする。

『みんなご苦労だったな。各機、護衛に戻れ』

敵を全機撃墜したブラックバルチャー隊は、再びフォーメーションを組み直して各艦の護衛に廻る。

『それにしても無事に片付いて良かったわ』

『そうですね』

マリアとエスターは特に大きな被害も無く戦闘が終了した事を分かち合う。

『えー、俺はもつと敵さんに来て欲しいなあ』

平穩無事を喜ぶ二人とは対照的にタクヤは、護衛任務の退屈からか戦闘意欲が湧いていた。

『タクヤ、軍隊に入っているから戦いたい気持ち湧いてくるのは分からないでもない。だがな、俺達は殺し屋ではない事を忘れるな』

タクヤの戦闘に駆られる欲求をドルチェフは咎める。

欲求が高まりすぎると人間は周りが見えなくなり、それにより失敗をする事がある。

戦闘の場合は特に功名心にはやり戦闘意欲が高まり過ぎる程、焦って撃墜される者も少なくはなかった。

『はいはい、以後気をつけまーす』

ドルチェフの注意を受けてタクヤは応答する。

しかし、その応答も適当だった。

その後、多少の戦闘はあれど特に航海に支障は無く、ハルカとブロウニングは目的地まで航路を進めていく。

『間もなくポイントイプシロンです……?!? 隊長、前方に熱源反応多数確認』

「来たな……」

ラナの通信にドルチェフは身構える。

航路の前方に2隻の小型艇とVF-5000を主力とした多数のバルキリーが待ちかまえていた。

『護衛、ご苦労でしたな。ブラックバルチャー隊の皆さん』

突如タイラーから通信が入る。

『ところで前方に見える艦艇とバルキリー。あれは何だ?』

ドルチェフは目の前に見える物に指を指してタイラーに問い掛ける。

『ああ、あれですか? うるさいハエ達を消すために我々が用意しました』

『うるさいハエ?』

『あなた達の事です』

タイラーは、モニター越しにドルチェフを指差して不敵な笑みを浮かべる。

最初の頃の優男で礼儀正しいイメージとは裏腹に今のタイラーには、その面影は全く感じられなかった。

『何だと?』

『我々は、護送している超空間共振水晶体と共に反統合政府軍に就きます。その為、あなた方には消えて貰います』

『護衛任務が済んだら消す。要は口封じと言う事か』

『ええ』

『そうか……口封じか……フツ……ハーツハツハツハツ!』

タイラーの話を聞き、突然ドルチェフは笑い出す。

『な、何がおかしい!』

ドルチェフの突然の態度にタイラーは狼狽える。

『タクヤ、どうやら、お前の言っていた事は正しかったようだな』

『ね、俺の言った通りでしょ』

ドルチェフの通信に割り込んだタクヤはVサインをする。

『な!?!』

ドルチェフとタクヤのやり取りを見たタイラーの表情が引きつる。

『ゴメーン、さつきトイレ借りた時にアンタの部下の話を偶然聞いちゃったのよねえ』

♪

タクヤは、ニコニコしながらタイラーに舌を出して謝る。

もちろん、その謝罪は心からの謝罪ではない事は明白だ。

『く……グググ』

タクヤのふざけた態度にタイラーは齒軋りをする。

『それから、消されるのは俺達だけじゃない。お前達も消されるぞ』

『な、なんだと!?!』

ドルチェフの言葉にタイラーは驚愕する。

『恐らく超空間共振水晶体を手に入れたら、お前達も消すつもりなんだろう』

『そ、そんな訳が無いだろう！ わ、私は事前にアイツらと打ち合わせをしているんだ』

！』

タイラーは、反統合政府軍を信じてドルチェフの仮説を受け入れようとはしなかった。

タイラーの言葉とは裏腹に反統合政府軍はハルカを含めてブラックバルチャー隊に攻撃を開始する。

「艦長、反統合政府軍がこちらに向けて攻撃をしています！」

「な、何故だ……」

反統合政府軍からの攻撃を受けたタイラーは、裏切られたショックで頭が真っ白になり、気が動転する。

『この状況を見ても、まだ分からないのか！』

ドルチェフは、反統合政府軍からの攻撃に対してタイラーに現実を叩きつける。

『バルチャーより各機へ。フォーメーション9、目標は敵の小型艇を攻撃だ！』

『了解』

ドルチェフの命令を受け、ブラックバルチャー隊は散開して反統合政府軍の小型艇を外側から回り込む形で飛ぶ。

『アタアアアアアアック！』

ドルチェフの掛け声と共に全機一斉にミサイルを撃ち込み、数機のVF-5000を

巻き込んで反統合政府軍の小型艇を撃破する。

『バルチャーより各機へ。各個フォーメーションを組んで反統合政府軍の敵機を殲滅しろ』

『了解』

ドルチェフの命令を受けたブラックバルチャー隊は、フォーメーションを組んで反統合政府軍の機体と対峙する。

『バルチャーよりホークス3へ。ネルに出撃を要請しろ』

ネルに出撃要請を依頼する為、ドルチェフはブラウニングに通信を入れる。

『了解、出撃要請を掛けます』

ドルチェフからの指示を受けたラナは、ネルの部屋へ回線を繋ぐ。

『ネル、隊長から出撃要請が入りましたので出撃してください』

「よっしゃー、やっとアタシの出番かあ♪ 今まで待たされた分、おもいつきり暴れてやるー！」

自室で退屈そうに過ごしていたネルは、ラナから出撃要請の通信を聞いて喜び勇んで格納庫へと向かう。

そして、格納庫に待機している機体へと乗り込んでラナへ回線を繋ぐ。

『ラナ、準備OKだからカタパルトを開けて』

『りょうか……ネル、その機体は……』

ラナは、出撃するネルの機体を見て思わず言葉を詰まらせる。

『いいからいいから。隊長さんには後でアタシから言っとくからさ』

言葉を詰まらせるラナをネルは強引に説得する。

『……了解』

ネルの強引な説得に押し負けたのか、ラナは操縦席のスイッチを押してブロウニングの下部カタパルトを展開させる。

展開したカタパルトから現れた機体はフルアーマードVF-111を施されたVF-111だった。

「さあて、いくわよー！」

ネルの掛け声と共にフルアーマードVF-111は、勢いよくカタパルトから出撃する。

「ねえねえ、あの機体って……」

カタパルトから出撃したフルアーマードVF-111を見たエミリアは、思わず指を指す。

「あーあ……あのネルって子、後で隊長に怒られるわね」

アイナは呆れた表情をしながら出撃したフルアーマードVF-111を見送る。



アーモード装備は、元々はVF-11バルキリーの陸戦における装甲強化を目的として開発されたオプション装備である。

バトロイド形態に固定されてしまう弱点はあるものの、それを補うかの様にミサイル装弾数が多く、主に特殊任務や艦橋での対空迎撃等に用いられる。

VF-11用はVF-11用よりも耐弾性に優れ、大型ガンポッドや連装ビーム砲等の装備も充実している。

ブラツクバルチャーと反統合政府軍の混戦状態が続く中へとネル機は、単身で突っ込んでいく。

「何よ、この機体！ クアドランよりも反応が重いじゃない」

バルキリーの操縦に未だに慣れていないのとフルアーモード装備の為、ネル機はフラフラと戦場の中を飛んでいた。

「ちよつと、こつちじゃないわよ！」

シミュレーション時間も少なく、ようやくとバルキリーを何とか飛ばせる状態のネルにフルアーモード装備のVF-11は反応が重すぎた。

その為、ネルは必死に操縦桿を握り締めて操縦をする。

ネルが悪戦苦闘しながら操縦する中、リーダーが4機のVF-5000を捉える。

4機のVF-5000は、ネル機を視界に捕らえると同時に攻撃を仕掛ける。

「くっ、こんな時に！」

ネル機は、攻撃をなんとかかわしつつ大型ガンポッドで応戦するが、機体の反応が鈍い為、ガンポッドの銃弾は次々と避けられる。

「もう、避けるんじゃないわよ！」

なかなか攻撃が当たらないイライラ感からネルは、歯軋りしながらガンポッドを撃ち続ける。

ネル機の攻撃を回避しながら4機のVF-5000は、追い討ちでミサイルで攻撃する。

「やだ、避けられない」

ネル機は避けようとするが、機体速度が重い為、ミサイルがネル機に次々と命中する。

「キヤアアアアアアアア！」

爆発の影響でコクピット内が激しく揺れる。

やがて、ミサイルの爆煙が晴れるが、その中からネル機が姿を現す。

「あ、あれれれ？ やられてない？」

あれだけのミサイルを食らいながらも生きている事にネルは辺りを見回す。

フルアーマード装備のお陰でネル機は、殆ど損傷していなかった。

「この機体、凄いい！ さあ、さっきのお礼をたっぷりと味あわせてやるわ！」

ネル機の生存を確認した4機のVF-5000のうちの2機は、バトロイドに変形してネル機に格闘戦を挑む。

「コレでも食らええええ！」

向かってくる2機のVF-5000に対してネルは、機体の反応の重さでガンポッドの銃弾が当たらないと思ひ、大型ガンポッドを思い切り振り回して格闘戦を挑む。

ガンポッドの砲身が大型で長身の為、向かってくる2機のVF-5000は、突然の事にガンポッドの砲身を回避する事が出来ずに纏めて殴り飛ばされて火花を散らして爆発する。

「フン、見たか」

先程までタコ殴り状態で攻撃を食らっていた鬱憤を晴らしたのか、ネルの表情は清々しかった。

残った2機のVF-5000は、距離と取りつつガンポッドとミサイルで応戦する。

「ガンポッドじゃ当たりそうにもないし、えーと、他に武器は……もういいや、適当になんか押しちやえ」

なんとか攻撃を回避しつつネルは、トリガー付近のボタンを押すとフルアーマードのミサイルハッチが開き、次々とミサイルが発射される。

大量に発射されたミサイルは、機動を描き、目の前のVF-5000や遠方の反統合

軍の機体に次々と命中して撃墜していく。

「ヒューー！ 耐久性はあるし、クアドラン並の装備を持つなんて、この機体ますます気に入ったわ」

フルアーマードVF-11の耐久性と装備にネルは、虜になっていた。

『もしかして、その機体に乗っているのは、ネルさんですか？』

フルアーマードVF-11の存在に気付いたエスターがネルに通信を入れる。

『ええ、そうよ。どう？ アタシの実力は』

ネルは得意げな表情をエスターに見せる。

『あの……その機体って、隊長の許可を貰っているんですか？』

エスター自身もフルアーマード装備の機体は、ドルチエフの許可が下りないと搭乗が出来ない事は理解していたので、あえてネルに問い掛ける。

『あ、当たり前じゃない！ た、隊長がアタシに援護を求めてきたんだから……』

エスターの問い掛けにネルは、しどろもどろに応える。

『コラ、姉ちゃん！ なに自分だけフルアーマード装備してんだよ。俺だって、まだ乗った事ないのによお！』

二人の会話に突然タクヤが割り込んでネルに食って掛かる。

本来は、自分がフルアーマード装備で出撃したい気持ちでいっぱいだっただけにネル

に先を越された事でその怒りは大きかった。

『なによ、ボウヤには関係無いんだし別にいいじゃない!』

『こつちはよくねえよ!』

まるで他人事の様なネルの言葉にタクヤは、中指を突き立てる。

『もう、ケンカは止めてよ!』

タクヤとネルの口喧嘩にエスターは止めに入る。

『三人とも何をやってる!』

戦場で立ち止まっている三人を見掛けたドルチェフは、三人の通信に割り込む。

『戦場で立ち止まっていたら敵の格好の的になるぞ!』

3機がいた場所は、ちょうどネルが敵を全滅させていた為、敵が現れる気配は無かった。  
た。

しかし、戦場である為、いつ敵が現れるかは分からないので油断は出来ない状況である。

『すみません、隊長』

この場を何とか収める為、エスターはドルチェフに謝り倒す。

『ふざけてる暇があったら他の部隊の援護に向かえ!』

『了解』

他の部隊の支援に回るように指示を出した後、ドルチェフからの通信は切れる。

『とりあえず、二手に別れようよ。ネルさんは、そのフルアーマード装備だからブロウニングの護衛。僕とタクヤは、残存機の迎撃。いい?』

3機で一緒に行動してもネルのフルアーマード装備では敵の格好の的になり、足でまといになる為、あえてブロウニングの護衛に回るようにエスターは、配慮した指示をする。

『わかったわかった』

『わかったわ』

エスターの指示で3機は、二手に別れる。

『ネル、聞こえるか?』

タクヤ達と別れた頃を見計らい、ドルチェフがネルに通信を入れる。

『何?』

『お前が乗っている、その機体は何だ?』

『う……』

自分が搭乗している機体がフルアーマード装備である事をドルチェフに問い掛けられて、ネルは言葉を詰まらせる。

『いいか、フルアーマード装備は予想以上にコストが高いんだ。それだけは肝に銘じて

おけ、いいな』

『わ、わかったわよ』

『わかった……わよ?』

ネルの言葉遣いにドルチェフの眼差しが殺気立つ。

殺気立った眼差しを見たネルは、思わず身震いする。

『りよ、了解しました! い、以後、きき、気をつけます』

ネルからの反省の言葉を聞いて、ドルチェフからの通信は切れる。

「あー、恐かったあ……あの眼差しで睨まれると恐怖感が身体に伝わってくるわ」

ドルチェフに睨まれた時の恐怖感が脳裏に焼きついているのか、ネルの身体は、未だに微かだが震えていた。

「さてと……とりあえず、メガネボウヤの言う通りにブラウニングの護衛に行くか」

ネル機は、ブラウニングの護衛の為に帰還する。

ネル機がブラウニングに辿り着いた時、辺りは、ちょうどパンサー隊が8機のVF-5000と激戦を繰り広げていた。

『こちらバルチャー7。メーデー、メーデー、敵に後ろを取られた』

バルチャー7ことフォルト機が2機のVF-5000から追撃を受けて救難の通信を出していた。

『待つてろ、今助けるから』

フォルトの救難通信を聞いたネルは、フォルト機の後ろに着いている2機のVF-5000に照準を合わせてトリガーを引いて大型ガンポッドを撃つ。

ネル機の攻撃に気付くのが遅れた2機のVF-5000は、回避できずに次々と火花を上げて爆発する。

『助かったぜ、ネル』

『へへん♪』

フォルトの言葉にネルは、ヘルメット越しに得意気に鼻を擦る。

やがて、残り8機のVF-5000もパンサー隊によつて全機撃墜された。

既に反統合政府軍の殆どは、ブラックバルチャー隊により壊滅させられていた。

反撃をする兵力が無くなった反統合政府軍は、投降をする意思をブラックバルチャー隊に伝える。

『隊長、反統合政府軍が投降を求めています』

『投降を受け入れる様に伝えておけ』

『了解』

反統合政府軍の投降を受け入れたブラックバルチャー隊は、銀河パトロール隊へ連絡を入れる。



タイラーは、その様子をただ呆然と見ていた。

「か、艦長。ドルチェフから通信です」

デイスプレイにドルチェフが映る。

『そつちは大丈夫か?』

『……あ、ああ……大丈夫だ』

『これで分かっただろう。アイツ等が超空間共振水晶体が目当てだった事を』

ドルチェフの言葉にタイラーは、ようやくと自分が反統合政府軍に利用された事を受け入れてガツクリとうなだれる。

『貴艦を反逆罪として、このままこの艦を沈めても構わないが、こちらの配慮で貴艦の乗組員の身柄を銀河パトロール隊に引き渡す事でよろしいか?』

ドルチェフがタイラーの裏切りに対して、このまま反逆罪としてハルカを沈める事も可能だった。

しかし、タイラー自身が反統合政府軍に利用されていた部分を考慮して身柄を銀河パトロールに引き渡す事をタイラーに持ちかける。

『……我々は投降する』

タイラーは、自分が利用されていた事に悔しさのあまり涙を流しながら投降を選ぶ。

『それでいい。良い心掛けだ』

タイラーの意思を確認したドルチェフは、投降を受け入れる。

しばらくして銀河パトロール隊が到着し、タイラー他、ハルカの乗員は全員銀河パトロール隊に連行されて行く。

その様子をブラックバルチャー隊は、ただ黙って見送る。

「貴様、今の統合政府がどんな汚い事をしているのか知っているのか！」

連行されるタイラーは、ドルチェフに向かって訴える。

「統合軍に居続けたら、お前達もいつか切り捨てられるぞ！」

やがて、タイラーの訴え続ける声も次第に遠のいていく。

「……」

タイラーの訴えを聞きつつ、ドルチェフはタイラーの姿が見えなくなるまで視線を送っていた。

ハルカに護送されていた超空間共振水晶体はブラックバルチャー隊が引き継ぎ、ポイントイプシロンで待機中の部隊に手渡されて任務は無事に完了する。

『みんな、ご苦労だったな。帰ったらゆっくり休んでくれ』

『了解』

ドルチェフは、パイロット達に劳いの通信を入れる。

しかし、その声には何処と無く疲労感があった。

『タクヤ』

『なんスか?』

『今回は、お前のお陰だ……一応、礼は言う』

照れ隠しにドルチェフは、タクヤに劳いの通信を入れる。

今回の作戦はタクヤが真相を伝えていなければ、ブラックバルチャー隊は、何も知らないまま超空間共振水晶体を運ばされた後に反統合政府軍の攻撃によりタイラーと共に全滅。

もしくは、例え反統合政府軍に打ち勝ったとしてもタイラーの策略により超空間共振水晶体略奪の共謀罪に問われていた可能性だつてあつたのだ。

例え偶然とは言えど、今回のタクヤの功績は大きかつた。

『そうね。タクヤのお陰で、こちらも敵の行動が予測出来たからね』

ドルチェフに続いてマリアもタクヤに劳いの通信を入れる。

『へっへっくん、さすが隊長にマリア大尉! 俺の事をよく分かつてらっしやる。もう、これからもジャンジャン俺を頼っちゃってくださいよ♪』

普段二人から誉められる事が全く無い為、タクヤは調子に乗つて余裕のVサインをす  
る。

(あーあ、またタクヤの悪い癖が始まつた)

その様子にエスターは、苦笑いしていた。

『はいはい、コレだから単純ボウヤは……』

調子に乗るタクヤを見ていたネルが茶化した通信を入れる。

『んだと！ 勝手にフルアーマード使つといて、よく言うよ』

タクヤは、ネルに向けて舌を出して挑発する。

未だにタクヤは、自分より先にネルがフルアーマード装備を使用した事を根に持っていた。  
いた。

『何よ、まだそんな事を根に持っていたの？ そんなんだから、いつまで経つてもボウヤなのよ』

同じくネルは、右中指を突き立ててタクヤを挑発する。

『うっせーよ！ つてか、ボウヤボウヤつて気安く呼んでんじゃねーよ！ 俺の名前はタクヤだつーの！』

タクヤも同じ様に右中指を突き立ててネルを挑発する。

未だにネルにボウヤ呼ばわりされる事を内心快くは思っていないかった。

お互いに挑発し合う二人の様子を見ていたエスターは、思わず深い溜息を吐き、ドルチエフの方は、こめかみに青筋を立てていた。

『……前言撤回だ。タクヤ、ネル！ お前ら二人は部隊の恥曝しだ大バカ野郎おおお

！  
』

ドルチェフの怒号がタクヤ機とネル機のコクピットに響き、声の大きさに二人は思わず耳を塞ぐ。

そして、しばらくの間はドルチェフの説教が続き、ドルチェフ、タクヤ、ネルを除くパイロット達は説教が長引くと思ひ、次々とブロウニングへと帰還していた。

基地へ帰還後、ドルチェフは自室へと戻り、一人で考え事をしていた。

「貴様、今の統合政府がどんな汚い事をしているのか知っているのか！」

「統合軍に居続けたら、お前達もいつか切り捨てられるぞ！」

タイラーの訴えかけとも取れる言葉にドルチェフは、憤りを感じていた。

「隊長、よろしいですか？」

ドアの向こうからラナの声が聞こえる。

「ああ、入れ」

「失礼します」

ドアを開け、ラナが部屋に入る。

「そこに掛けて待つていろ」

「はい」

ラナは近くの椅子に腰掛ける。

ドルチェフは、部屋に置いてある棚からコーヒーカップを取り出し、コーヒーメーカーからコーヒーをコーヒーカップに注いでラナに渡す。

「ありがとうございます」

ドルチェフに礼を言つて、ラナはコーヒーカップを受け取り口を付ける。

「……味、落ちていませんね」

ラナは、久しぶりにドルチェフの煎れたコーヒーの味に少しだけ微笑む。

「この部隊に飛ばされてからも、コーヒーの調合だけは欠かさないからな」

ドルチェフが珍しく笑顔を見せる。

普段の厳つい表情からは、想像が出来ないような笑みであった。

「さて……」

コーヒーを一口飲んだ後、先程の笑顔から一転してドルチェフの表情が険しくなる。

「話を聞こうじゃないか」

「はい。隊長に色々とお話をした後に渡したい物があります」

「渡したい物？」

「それは話の後で……」

「わかった」

「まずは、今回の私の転属に関しては、最初にお話した通りです」

「……ガルスだったな」

「はい、ガルス中佐です。任務中に彼が作戦指示を無視していたので注意を促したらブラックバルチャー隊に転属になりました」

黙々と転属理由を語るラナの話聞きつつもガルスの相変わらずの自分勝手さにとルチエフは、思わず溜息を吐く。

「それにしても、この部隊に転属になってから、しばらく名前を聞かないうちにアイツは、いつの間にか中佐になったのか……その様子からしてアイツの横暴ぶりは、今でも変わらないみたいだな」

「はい。ガルス中佐は、現在マクロス8に配属しています」

「マクロス8船団？ ただの移民船団にアイツが何をしに……」

「マクロス8船団は、惑星エデンの支援を受けている為、他の移民船団よりも技術力や開

発力が高い船団です」

ドルチェフの言葉を遮り、ラナは語り出す。

「風の噂ですが、マクロス8船団は統合軍参謀本部を通して、船団独自で次世代機を開発中らしいです」

「次世代機の開発？ 移民船団独自でか？」

「はい。興味があつたので、なんとかマクロス8船団の銀河ネットワークにアクセスして、微量ですがデータをハッキングしました」

ラナは、ポケットからメモリーディスクを取り出してドルチェフに渡す。

「これが隊長に渡したい物です」

「そうか、わざわざすまないな」

ドルチェフは、受け取ったメモリーディスクのデータを端末で再生する。

次世代機の開発は、2048年現在でも統合軍参謀本部経由で各開発メーカーが行い、それに基づいてライセンスが紐付けされて量産体制が整う。

しかし、マクロス8船団は開発メーカーに依頼せずに船団独自で開発を行う事にドルチェフは疑問を感じていた。

「……これは……」

ディスプレイには、開発中らしき可変戦闘機のデータが表示される。



「私の憶測ですが、恐らくガルス中佐は、この機体を使って統合軍を手中に収めようとしています」

「確かにアイツなら、やりかねないな」

ドルチェフは、コーヒーを全部飲み干して再びディスプレイに目を向ける。

「この機体性能なら次世代A VFが束になっても勝てるかどうか……」

ディスプレイに表情されるデータを見つつ、ドルチェフは固唾を飲む。

開発機の性能自体は、次世代主力機であるVF-19や特殊任務機であるVF-22を凌駕していた。

この性能にガルスのパイロット技術が加われば、まさに鬼に金棒である。

「このMotion Direct Systemと言うのは分かるか？」

Motion Direct Systemと言う聞いた事が無い単語を見つけたドルチェフは、ディスプレイに指を指す。

「すみません、そこまでの情報は入手できませんでした」

ラナは、うつむき加減に応える。

「気にするな。それよりラナ、この件に関しては他言無用だ。いいな」

「はい」

（アイツがマクロス8船団の開発機で統合軍を手中に収めたら、統合軍は、ますます腐り

きってしまう。その前に何とかせねば)

ラナから貰ったデータを見たドルチェフは、心の中で改めてガルス野望を打ち砕く決意する。

「隊長、私の方でも色々調べてみます」

「すまないな、色々」と

「私をここまで育ててくれた隊長やマリアへの恩返しですから……」

少し照れた表情をしながらラナは、コーヒーカーップに口を付ける。

## 第6話バルチャースクープ

『6月20日

今日から俺は、惑星ローグにある統合軍の掃き溜めと呼ばれるブラックバルチャー隊の取材に行く事になった。

統合軍の掃き溜めって呼ばれてるくらいだから、へんなパイロットとか怖い人とかが多いんだろうなあ……』

青年が机上のパソコンで日記を綴ってる。

しかし、日記を綴り終わると青年は、大きな溜め息を吐く。

「ヒロキ、そろそろ行くぞー！」

「わかった、今行く」

男に呼ばれてヒロキは、パソコンの電源を落として準備をする。

神崎ヒロキ。

銀河系最大の発行部数を持つGNN（Galaxy News Network）の記者である。

今日も相棒のレニスと共に特ダネのスクープに向かう。

「ヒロキ、システムオールグリーンだ」

「よし、発進する」

ヒロキは発進用カタパルトからGNNバルキリーを発進させる。

GNNバルキリーは、民間用に払い下げをした統合軍の訓練機VT-11を改造・改修した機体である。

改良された小型プロペラントタンクを機体上部に設置し、更にその上部と機体底面に往復用フォールドブースターを取り付けると言う大胆な増設をしている。

GNN各支社には発進用カタパルトデッキが多数設置され、大気圏外担当記者達は、そこから大気圏ブースター装備のGNNバルキリーで大気圏外へ発進する。

「フォールドブースター作動。目標、惑星ローグ」

大気圏を抜けたGNNバルキリーは、フォールドブースターを作動させて惑星ローグへとフォールドを開始する。

しばらくしてGNNバルキリーは、惑星ローグへとフォールドアウトする。

「すげえ……ここが惑星ローグか」

ヒロキは、惑星ローグをマジマジと見つめる。

今まで取材に向かった惑星の中でローグは、近寄りがたいと言う一風変わった雰囲気漂わせていた。

「話で聞いた事はあるが、何でも昔、移民予定惑星だったが移民基準値に達しなかったから放棄されたらしいぞ」

ヒロキに話しながらレニスもローグを見渡しつつ、持参したカメラでローグの全景を撮影する。

「それにしても、こんな辺境惑星に飛ばされた軍隊の事を取材しなきゃいけないなんてGNNは余程ネタに困っているんかねえ？」

ヒロキはシャッターを切るレニスを見つつ、思わず今回の仕事についてボヤク。

「ボヤくなよ、ヒロキ。こうやって仕事回ってきただけでも有難いと思え」

「はいはい。じゃあ、大気圏に突入するぞレニス」

「了解だ」

フォールドブースターを切り離したGNNバルキリーは、そのまま大気圏に突入する。

「うわ、何だコレ？」

大気圏を抜けて目の前に広がる惑星ローグの環境にヒロキ達は驚きの表情をする。

「……なあ。ここ、本当に人が住んでるのか？」

「とてもじゃないが、人が住んでいるとは思えんな……」

ひび割れた大地。

人が住んでいる住居らしき物は無く、ただ無造作に生い茂るだけの森林地帯。

そして不気味な雰囲気、漂う薄紫色の空。

あまりの環境の酷さに二人は言葉も失いつつも辺りを見回す。

長く続く生い茂る森林地帯を抜けて、しばらくすると建物と滑走路が見えてくる。

「あれが統合軍の掃き溜めと呼ばれるブラックバルチャー隊の基地か？」

「多分、そうだろう。他に建物らしき物は見当たらないようだしな」

辺りを見回してもブラックバルチャー隊の基地以外に人が住んでいる様な建物は見当たらなかった。

今まで不気味な光景が続いていただけにマトモな建物を見た二人に妙な安心感を感じていた。

「よし。レニス、着陸するぞ」

「わかった」

GNバルキリーはランディングギアを展開して速度を徐々に落としながら滑走路に向かって着陸を開始する。

ヒロキ達がコクピットから降りると、待っていたかのようにドルチェフが出迎える。

「よく来た。自分がブラックバルチャー隊の責任者のドルチェフ・ブライアンだ」

ドルチェフは、厳つい表情のまま少しづつきらぼうな挨拶をする。

「初めまして、俺……いや、自分はGNNのレポーター、神崎ヒロキです。こちらはカメラマンのレニス・ローンです」

ドルチェフの嚴つい表情に少しビクビクしながらもヒロキは、ドルチェフに挨拶と相棒のレニスを紹介する。

「レニス・ローンです。よろしくお願いします」

ビクビクしているヒロキとは対照的にボサボサ髪に髭面の男、レニスは、少しだけ笑顔を見せつつドルチェフに軽く会釈する。

「こちらこそ、よろしく頼む。部屋を案内するから着いてきてくれ」

挨拶を終えて二人はドルチェフの後を着いて行く。

(うわあ……惑星自体も凄かったけど、基地の中も何か色々と凄いなあ……)

ドルチェフの後を着いて行くヒロキは、薄暗い基地内をキョロキョロと見渡す。

「どうした？」

基地内をキョロキョロと見渡すヒロキに気付いたドルチェフは、声を掛ける。

「い、いや……何だか凄いな所だなあと思ひまして」

「まあ、初めて来るヤツの殆どはそう思うだろうな。ここだ」

手馴れた様に施設内を説明するドルチェフは、二人を自分の部屋へと案内する。

部屋に到着したドルチェフは、ポケットからカードキーを取り出して部屋のドアを開

ける。

「入ってくれ」

ドルチェフの案内で二人は、部屋に入る。

「ああ、そうだ。遅れて申し訳ない。隊長さん、これがウチからの取材の委任状です」

レニスほポケットから委任状の入った封筒を取り出してドルチェフに渡す。

封筒を受け取ったドルチェフは、ペーパーナイフを使って封筒の端を切り、中から委任状を取り出して隅々まで目を通す。

「……確かに」

内容を確認したドルチェフは、封筒と委任状をそのまま机に置く。

「では、2日間ですが、色々と基地内や関係者の取材や撮影をさせて頂きます」

「わかった。とりあえず撮影に関してだが、基本的にどこを撮影して貰っても構わん。

ただ、ウチの部隊には女性もいるから盗撮や盗聴は止めてくれ」

「わ、わかってますよ」

盗撮と盗聴の言葉にヒロキは動揺する。

以前ヒロキは、統合軍の幹部と女性士官がホテルで密会している所をスクープして高視聴率を叩き出したが、後に統合軍からクレームを受けて泣く泣く始末書を書かされた挙句、辺境惑星のレポーターや取材記者へと左遷されていた。





「すまないが、この部屋を使ってくれ」

「わかりました」

ヒロキとレニスは何部屋の中へと入り、荷物を置く。

「とりあえず、何かあったら部屋にあるインターホンで呼んでくれ。手の空いた者が来てくれるだろう」

それだけ言つて、ドルチェフは部屋を出て行く。

ドルチェフが部屋を出て行くのを見計らいヒロキは、大きな溜め息を吐く。

「やっぱり統合軍の掃き溜めと呼ばれているだけあつて、凄い所だよなあ……基地の中は不気味だし、部屋はカビ臭いし、隊長さんは怖いしで良い所なんて何も無いじゃないか」

ブラックバルチャー隊への不平不満をぼやきながらヒロキは、荷物を降ろす。

「まあ、そう言うな。とりあえず、準備が出来たら早速取材に行くぞ」

「ああ」

二人は、取材の身支度をして部屋を出る。

「さく……まずは何処へ取材に行こうかなあ？」

早速ヒロキは、躍起になって小型ビデオカメラを片手に基地内をキョロキョロと見回す。

「そう焦るな、ヒロキ。とりあえず、色々と基地内を回ってみよう。何か面白い物が見つかるかも知れん」

「お、おう」

このままだとヒロキが先走って問題を起こすに違いないと悟ったレニスは、自分の案を提案して適当に基地内を散策する。

適当に散策している内に二人は、食堂にやって来た。

辺りを見回すとエミリアとアイナがテーブルで寛いでいた。

「ん〜♪ やっぱり、1日1回は甘い物を食べないと気分が乗らないわねえ♪」

エミリアは、ストロベリーサンデーを食べて、ご機嫌な様子だった。

「そんなに食べてると、また太っちゃうわよ」

そんなエミリアをアイナは、ジャスミンティーを口に運びながらからかう。

「ぶー、そう言いますけど、コレでも前月に比べて4kgは痩せてますよ〜だ」

からかうアイナにエミリアは、口を尖らせて言い返す。

「ヒロキ」

「ああ。まずは、あの娘達から取材しよう」

早速ターゲットを見つけた二人は、エミリアとアイナに近付き声を掛ける。

「すみません、ちょっといいですか?」

「は、いっ？」

「え……と、どちら様ですか？」

基地内では見掛けない人物に声を掛けられて二人は、不安げな表情をする。

「私、GNNの者ですが、取材させていただいてもよろしいでしょうか？」

ヒロキは、ポケットから名刺を取り出してエミリアとアイナに渡す。

「GNNって、あのGNN？」

アイナは、名刺を見ながらヒロキ達に尋ねる。

「ええ。今日は、ここの部隊の取材に……」

「ちよ、ちよっと待ってて」

ヒロキの言葉を断ち、エミリアとアイナは、トートバッグから化粧品を取り出してメイクを始める。

突然二人がメイクをし始めた為、その様子にはヒロキとレニスは、お互いに顔を見合わせつつもメイクが終わるのを待つ。

「はい、お待たせしました」

メイクを終えたエミリアとアイナは、満面の笑みを浮かべる。

エミリアは、長めのロングヘアをホットカーラーを使い、少しでも緩いウェーブにし、リップは薄いピンクを引き、可愛らしい感じに仕上げている。

対するアイナは、少し濃い目のアイシャドウを引き、リップには艶の出るグロスを引いて大人の魅力を引き立たせる感じに仕上げている。

（おお！ ピンクにロングヘアーの娘は可愛いし、栗色でボブカットのお姉さんは大人の色気があるし、生きててよかったああ！）

ヒロキは心の中でガッツポーズをしつつ、メイクを終えたエミリアとアイナに見惚れていた。

今までも取材で女性に接する機会はあったが、主にスキャンダル記事などがメインの為、魅力的な女性に出会う確率は低かったので、ヒロキのテンションは、いやがうえにも高まる。

「ヒロキ……おい、ヒロキ！」

二人に見惚れて、だらしのない表情をしているヒロキを見兼ねたレニスが声を掛ける。

「へ？」

「へ？ じゃない！ ボサつとするな。それと、鼻の下が伸びっぱなしだぞ」

「あ……ああ、スマン」

だらしのない表情をレニスに一喝されたヒロキは、気分を入れ替える。

その様子にエミリアとアイナはクスクスと笑い、ヒロキは照れ隠しに頭を掻く素振りをする。

「では、色々と質問させていただきますけど、答えにくい所はスルーして貰っても構いませんので気楽に答えてください」

「はいはい」

「はい」

ヒロキはインタビューをレニスはカメラ撮影を担当する。

「すみませんが、まずは一枚写真を撮らせてよろしいですか？」

「はい、どうぞ」

エミリアとアイナが並んだ姿を被写体にレニスはシャッターを切る。

「ありがとうございます」

写真を撮り終えたレニスは、二人に礼を言う。

「では、最初に名前と役職をお願いします」

「エミリア・ガールフィールド、オペレーターをやってます♪」

「アイナ・エルライン、同じくオペレーターをしています」

エミリアはウインクをしながら、アイナは落ち着いた様子でインタビューに答える。

「ここに配属されて何年ですか？」

「私は、まだ2年目ですね」

エミリアが答える。

「私は、今年で4年目ね」

続けてアイナが答える。

「ふむふむ……なるほど。ちなみにオフの日は何をされてますか？」

「……」

ヒロキの質問にエミリアとアイナは急に黙り込み、お互いに顔を見合わせて黙り込む。

「あ、あれれ？ どうしたんですか？」

急に黙り込む二人の様子にヒロキは、困惑する。

「……よく考えたら、ここに来てから楽しい事って殆どしてないなあ……」

先程まで明るかったエミリアの表情が急に暗くなる。

「そうよね……ココに飛ばされてから、本当に無いわよね」

エミリアが続いてアイナの表情も暗くなる。

「唯一の楽しみが1日1回、甘い物食べるくらいしかないし……うう……」

エミリアの目から涙が零れ落ちる。

「ちよ、ちよつと、泣かないでくださいよ」

突然涙を零すエミリアにヒロキは、動揺する。

「だって、ここに飛ばされてから何も楽しい事がないんですよ！ 空は変な空だし、地面はひび割れているし、周りにはシヨツピングセンターとか無いし、基地内は薄暗いし、私くらいの子ならシヨツピングしたり友達や彼氏と遊んだりするのに……う、うう……うわあああああん！」

ブラックバルチャー隊に配属されてからの鬱憤が溜まっていたのか、今までの不満をヒロキにぶつけるだけぶつけた後、とうとうエミリアは泣き出してしまふ。

「大丈夫……大丈夫よ、エミリア。ほら、泣かないで」

「うわーん、アイナアアアアア！」

アイナの慰めの言葉にエミリアは思わず抱きつき、アイナは優しくエミリアの頭を撫でる。

「ヒロキー！」

「あ、ああ……すみません、すみません」

レニスにせかされてヒロキは、泣きじやくるエミリアを宥める。

「あなた達って、最低ね！」

エミリアを慰めながらアイナはヒロキ達を睨み付ける。

「すみません、すみません、すみませーん！」

結局、二人がエミリアやアイナを宥めるのに1時間以上の時間が掛かった。



エミリアとアイナを何とか宥めた後、二人は食堂を後にする。しかし、その表情は疲れきっていた。

「……な、なあ、レニス」

グツタリした表情でヒロキは、レニスに話し掛ける。

「ん、何だ？」

「俺、別にヘンな事って聞いてないよな？」

ヒロキは、インタビューした内容を一つ一つ思い出しながらレニスに問い掛ける。

特に相手を傷つけたり不快にさせる様な質問をした覚えがない事をヒロキは、頭の中で整理して確信する。

「んー……まあ、こういう事もあるさ」

うなだれるヒロキにレニスは、励ましの言葉を掛ける。

「はあ……今回の仕事を降りてえ……」

「まあ、そう言うな。気を取り直して次の人を取材しよう」

早くも弱音を吐くヒロキにレニスは、元気づけるかの様にヒロキの肩を軽く叩く。

「お、おう」

気を取り直して二人は、再び基地内を散策する。

しばらく歩くと二人の目の前に格納庫が見えてくる。

「丁度いい、ここのメカニックを取材しよう」

「わかった」

二人が格納庫内を覗くと相変わらずメカニックマン達は、忙しく動いていた。  
「ひい、ふう、みい……見たところメカニックマンは五人か」

レニスは、格納庫内で作業するメカニックマンの数を数える。

「それにしても軍隊だけあって格納庫は広いし、バルキリーもそれなりに多いな」  
ヒロキは、格納庫内を色々と見渡す。

レニスも格納庫内に配備されているバルキリーを色々と見渡していた。

「エド、2番機の電子系統は？」

「もう少し掛かります」

「ロルフ、アーマードパーツの補修作業は？」

「もうすぐ終わります」

「ジョン、スーパーパットの保守作業は？」

「10パットまで完了です」

「メイア、作業用デストロイド2番機の保守作業は？」

「ゴメン、まだ掛かりそう」

自らも作業をしつつ、ミランは各メンバーの作業状況の確認を行っていた。

「何だか色々忙しそうだけど、こっちも仕事だからインタビューをしないとな」  
「まあ、確かにな」

「あの、ちよつと良いですか？」

ヒロキは、作業をしているミランに声を掛ける。

「はい、なんでしよう？」

「私、GNNの者でして、ここの部隊の取材をさせていただきますのですが……」

「ああ、隊長さんから話は聞いてますよ。でも、うーん……すみません、ちよつと手が放せないんですよえ……」

ヒロキからの取材依頼にミランは、困惑の表情をする。

取材自体は受けても構わないが、その事で自分の作業が疎かになり、それが元で機体に不具合が生じる事が何よりも嫌だった。

「チーフ、アーマードパーツの補修完了しました」

作業を終えたロルフがミランに声を掛ける。

「わかった、続けて弾薬補充も頼む」

「了解」

メカニックマン全員が作業に集中をしている為、とても取材を受ける状況ではない事をヒロキは感じ取っていた。

「……行こうぜ、レニス」

「あ、ああ」

「すみません、お邪魔しました」

「こちらこそ、すみません」

ミランの声を背にして、二人はトボトボと格納庫を後にする。

「はああ……」

何も取材が出来ず、ヒロキは大きな溜息を吐く。

「溜息を吐くなよ。まだ始まったばかりじゃないか」

落ち込むヒロキをレニスは励ます。

「……そうだな」

レニスの励ましにヒロキは、自分の頬を叩いて気合いを入れ直す。

再び基地内散策していると、ちょうど反対方向からラナが歩いてくる。

「ヒロキ」

「ああ」

ヒロキは、チャンスとばかりにラナに声を掛ける。

「すみません、お時間よろしいでしょうか？」

「何ですか？」

ヒロキの質問にラナは、冷たい視線を向ける。

(うわあ……凄いやりづらいのに声を掛けちゃったなあ)

ラナに冷たい視線を向けられたヒロキは、内心そう思いつつも表情に出していた。

「あ、あの、私達GNNの者です。……この部隊の取材を……」

「イヤ」

ヒロキが取材依頼をする以前にラナにあっさり断られる。

「そこを何とか……」

先程から全く取材ネタが拾えていないヒロキは、両手を合わせて必死にラナに頼み込む。

「……」

「あのお……」

「……」

ヒロキの必死の頼み込みに対してラナは、冷たい視線をヒロキ達に向けたまま完全無視だった。

「……すみません、もういいです」

必死に頼み込んでも冷たい視線を向けられるヒロキも、ついに心が折れてしまうのだった。

「そう」

二人を無視して歩くラナを背にして再び二人は、トボトボと施設内を歩き出す。特にヒロキの精神的ダメージは、かなり大きかったようだ。

「ううう……やつぱり、この仕事を降りたいよお……」

いつもなら多少の困難はあれど徐々に順調だったヒロキも、さすがに3回も取材がでない状況になると頭を抱えて再びうなだれる。

「まあ、そう言うな。次を頑張ろう」

うなだれるヒロキを励ます為、レニスとはヒロキの肩を叩こうとする。

「アンタ、さつきからそればっかじゃないか！」

レニスの励ましの言葉にヒロキは、食って掛かる。

「しかたないだろう。じゃあ、他に何を言えればいいんだ？」

レニスの言葉にヒロキは、ぐうの音も出なかった。

人間、落ち込んでいる時に他人事の様子に励まされるとイラつく時がある。

だからと言って、励まされないと落ち込んでいる気分が更に落ち込む。

人間と言うのは、わがままな生き物である。

「……トボホ。ミシユタル、俺はどうしたらいいんだ」

ヒロキは、胸ポケットから写真を取り出して写真に写る女性に呟く。

写真には、青いストレートヘアの可愛らしい笑顔の女性が写っている。

「兄ちゃん、何やってんの？」

写真に独り言を呟くヒロキの後ろからタクヤが声を掛ける。

「うわあ！」

突然の事にヒロキは驚き、その弾みでミシユタルの写真を落とす。

「何だコレ？ おお、なにになになに。この美人のお姉ちゃん！ あ、もしかして……兄ちゃんのコレっすか？」

写真を持ったタクヤは、小指を立てる仕草をしてヒロキを茶化す。

「か、返せ！」

ヒロキは、タクヤから写真を奪い返そうとする。

「へっへくん、やっだね〜♪ ほれほれ〜♪ 取れるもんなら取ってみ〜♪」

タクヤは、写真をヒラヒラさせてヒロキをからかう。

写真を奪い返そうと必死になるヒロキは、タクヤに翻弄されて写真が取り返せなかった。

「タクヤ、返してあげなよ」

状況を見かねたエスターは、写真をタクヤから奪い取りヒロキに返す。

「はい」

「あ、ありがとう」

エスターから写真を受け取ったヒロキは、胸ポケットに大事にしまう。「そう言えば、どちら様ですか?」

基地内で全く見掛けないヒロキを不思議に思い、エスターが声を掛ける。

「ああ、すみません。私達、GNNの者でして……」

「GNN!?!」

GNNの言葉にタクヤは、目を輝かせる。

「GNNと言うことは、取材に来たんだよね?」

タクヤは目を輝かせながらヒロキに詰め寄る。

「あ、ああ」

「じゃあ、写真も撮るんだよね?」

「その為に相棒がいるからね」

ヒロキは右親指をレニスに向け、右親指を向けられたレニスは、カメラをタクヤに見せる。

「よーし、分かった。兄ちゃん、俺を取材してくれ!」

タクヤは、髪の毛をかきあげてバツチリとポーズを決める。

「……ええ?」



「だから、俺を取材してくれよ」

タクヤ自ら取材を依頼されたヒロキは、心を打たれたかのように突然タクヤの手を握り締める。

「あ、ありがとう……」

やっと取材が出来る人物が見つかったのか、ヒロキは嬉しさのあまり涙目になっていた。

「な、なに……この人？」

「さ、さあ？」

涙目でタクヤの手を握るヒロキにタクヤもエスターも困惑顔だった。

「あの、ここでは何ですから僕達の部屋でも良いですか？」

「あ、ああ。頼むよ」

ヒロキは、タクヤとエスターの部屋に招かれて取材を受ける事にした。

「じゃあ、早速だけど名前と役職をお願いします」

「俺、タクヤ・バースラッド。ブラックバルチャー隊のパイロットやってます」

タクヤは、インタビューに答えつつヒロキにVサインをする。

「僕は、エスター・ワードナ。タクヤと同じくパイロットです」

「この部隊に配属されて何年になるのかな？」

「実は僕達、今年の4月に士官学校から配属されたんです」

ヒロキの質問にエスターが応える。

「へえ、じゃあ新米パイロットなんだね」

「まあ、そのうち俺がこの部隊のエースパイロットになる予定なんで、よろしく！」  
タクヤは、得意げな表情をヒロキに向ける。

「はは……ところでオフの日は、何をしているのかな？」

得意げな表情をするタクヤをスルーしてヒロキは、別の質問を投げ掛ける。

「休み？ ……そういや俺達って、マトモな休み貰ってないよな？」

「言われてみるとそうだね」

二人は、ブラックバルチャー隊に配属してから休暇を貰っていない事に気づき、お互いに顔を見合わせる。

「そうか。じゃあ話を変えて、ここの部隊に配属されて良かった事と悪かった事は？」

「良かった事ねえ……」

「うーん……」

ヒロキの質問に二人は考え込む。

ブラックバルチャー隊に配属されて以来、殆ど訓練か任務しかしていない為、特に思い当たる様な節はなかった。

「……ゴメン、じゃあ悪かった事は？」

「おっさんがうるさい」

ヒロキの質問に開口一番にタクヤが答える。

「おっさん？」

「隊長の事です」

おっさんと言う言葉に誰の事か全く分からずにポカーンとした表情をするヒロキに、さりげなくエスターがフォローを入れる。

「ああ」

エスターのフォローにヒロキは、思わず納得する。

「それから遊ぶ場所が無いし、機体の整備は自分でしないとダメだし、それから……」  
この後ヒロキは、タクヤの愚痴を約30分延々と聞かされるハメになる。

「も、もう無いよね？」

延々と愚痴を聞かされて既にヒロキの表情は、疲れきっていた。

そんなヒロキに姿にレニスは、苦笑いを浮かべていた。

「まだあるよ。それから……」

愚痴を言い足りないのかタクヤは、まだ愚痴を言いそうだった。

その様子にヒロキの表情が引き攣る。

「タクヤ、もうそれくらいにしなよ」

エステーが場の空気を読んで止める。

エステーのフォローにヒロキとレニスは、思わずホツと胸をなで下ろす。

「まあ、とりあえずはこんな感じかな？」

メモを取り終えたヒロキは、レニスにメモを見せる。

「そうだな。よし、最後に記念写真を撮らせてくれ」

レニスは、カメラをタクヤとエステーに向けて写真を撮る。

撮影時、タクヤはVサインをしてノリノリな表情、エステーは少し恥ずかしそうな表情を浮かべていた。

「いやあ……ありがとう。君達が取材に答えてくれなかったら、下手をすると今日一日何も記事が書けないかと思ったよ」

ヒロキは、インタビューを快く引き受けてくれたタクヤとエステーに改めて礼を言う。

「誰だよ、取材を断るなんて勿体無い」

「えーと、確か……」

ヒロキは、今までのいきさつを話す。

「……色々と大変でしたね」

ヒロキの話を聞いてエスターは、思わず同情する。

それは、クセの強いメンバーが揃っている部隊にいるからこそ理解できていた。

「わかつてくれよ、この気持ち」

「ああ、わかる。兄ちゃんの気持ち、すっげーわかる！」

「わかつてくれるかい？」

「もちろんさ！」

やけに息の合うタクヤとヒロキ。

そんな二人を見てエスターとレニスは、お互いに顔を見合わせて苦笑いをする。

タクヤ達と別れて二人は、再び基地内を散策する。

腕時計を見ると18時30分を指していた。

昼過ぎに到着し、取材の為に基地内を散策していたら、いつの間にか夕方になっていた。

「さて……時間も時間だし、あと一人か隊長さんにでも話が聞ければ良い方かな？」

ヒロキは、メモを確認しながらレニスに聞く。

「そうだな。なんだかんだ言いつつも、一応は聞けているな」

二人が歩いていると、ちょうどマリアが通りかかる。

「あら、あなた達は？」

「私達、GNNの者でして……」

ヒロキは、ポケットから名刺を取り出してマリアに渡す。

「ああ……隊長から話は聞いているわ」

ヒロキから名刺を受け取りマリアは納得する。

「では、取材の方をお願いしたいのですが……」

「わかったわ。ここでは何だから、よかつたら部屋に来る？」

「え!? いいんですか？」

マリアからのお誘いにヒロキのテンションが少しだけ上がる。

「ええ」

二人は、マリアの部屋に招かれる。

タクヤ達の部屋と違い、部屋の中は小綺麗に片付いており、時折フレグランスの香りが鼻を撩る。

(さっきのクレアって子とは違った大人の女性の魅力を感じるなあ……)

マリアの部屋に入るなりヒロキは、だらしなくらいに鼻の下を伸ばしていた。

「ヒロキ、ちゃんとしろ!」

そんなヒロキをレニスは、小声で言いながら右肘で横から突つつく。

「私達の部隊の取材で、よろしいんですか？」

コーヒーを煎れつつマリアが訊ねる。

「あ、もう全然大丈夫です」

少し緊張した面持ちでヒロキは答える。

「気分を害されたら申し訳ないですが、今回の記事は統合軍が明かさないう裏の顔みたいな物ですよ」

レニスが続けて答える。

「裏の顔……ですか」

レニスの言葉にマリアの動きが止まる。

「まあ、ブラックバルチャーと言えば統合軍では、掃き溜めで有名みたいですからね」

「おい、レニス！ 失礼だろ！」

皮肉混じりに話すレニスにヒロキが食ってかかる。

「大丈夫ですよ。そう呼ばれても、仕方ありませんからね」

元々統合軍内部でもブラックバルチャー隊は、部隊としては評価されず、殆ど汚れ仕事ばかり押し付けられている為、マリア自身も周りからの評判は分かっていた。

「あ、でも、掃き溜めと言う割には、隊員の方も野蛮な人とか全然いなくて安心してますよ」

場の雰囲気と和ます為にヒロキは、さりげなくフォローする。

「ありがとうございます」

ヒロキのフオローの言葉にマリアは、少しだけ微笑む。

微笑むマリアの表情を魅力的に感じたヒロキは、思わず顔を赤らめる。

「どうぞで」

マリアは、テーブルにコーヒーカップを置く。

淹れたてのコーヒーの香りがヒロキの鼻をくすぐる。

「ありがとうございます。では、お話をお伺いしてもよろしいでしょうか？」

「ええ」

「まずは、お名前と役職をお願いします」

「マリア・ランカスター、パイロット兼ブラックバルチャー隊の副隊長です」

「女性で副隊長ですか」

女性がパイロットで活躍する事は、第一次星間大戦時では珍しかった。

現在は女性がパイロットで活躍する事も特に珍しくなくなったが、隊長クラスで活

躍する事は希である。

「おかしいですか？」

「い、いえ。自分の女性の友達も統合軍でパイロットをしていますが……」

「そうなんですか」



「は、はい。しかも今度、小隊長になるみたいなんですよ」

「その方、パイロット技術が凄いでしょね」

「いやいや。でも、僕は副隊長も充分にカッコいいと思ってます。だって、パイロットで腕が立つからと言ってなれる訳でもないですし」

ヒロキは、どきまぎしながらもフォローする。

「フフ、そうですね。ありがとうございます」

「い、いえいえ」

ヒロキのフォローに MARIA は少しだけ微笑み、ヒロキの顔も真っ赤になる。

MARIA の微笑む顔が見たいのか、ヒロキは積極的にフォローを入れていた。

「この部隊に配属されてから、どれくらい経ちますか？」

「そうね……設立時から隊長と一緒にだったから、もう5年ぐらいかしら？ 今思うと

色々とおったわね」

MARIA は、ブラックバルチャー隊への配属から5年の歳月が流れた事に色々と思いを募らせる。

自分が部隊の中で過ごしてきた日々が懐かしく思える。

結成当時は、ドルチェフと自分を含めて六人しかいなかった部隊が、今では四十名近く増えている事に統合軍の内情の悪さやガルスの横暴が続いている事を表しているの

だと実感する。

「なるほど。この部隊に配属されて良かった事や悪かった事は？」

「そうね……隊長と過ごした日々が良かった事でもあり、悪かった事でもあるかしら（何だろ？ 今の意味的発言は……）」

マリアの言葉にヒロキは、ふと疑問を感じていた。

「色々ありがとうございます」

取材を終えたヒロキは、お礼を言いつつメモを整理する。

「最後に写真を撮らせてもらえないですかね？」

レニスは、マリアにカメラを見せる。

「ええ、構いませんよ」

「では、いきます」

少しはにかんだ笑顔を見せるマリアを被写体にレニスは、シャッターを切る。

写真撮影を終えた二人は、マリアの部屋を後にする。

レニスが時計を見ると針は20時を指そうとしている。

「今日はこれくらいにして、飯でも食べよう」

「ああ、それにしても今日は精神的に疲れる事ばかりだったなあ……」

「ハハ、そうだな」

二人は、一緒に背伸びをしながら食堂へと向かう。

「疲れてお腹が空いているのか、やけにご飯が美味く感じるなあ」

ヒロキは、トレイに並んだおかずを次々と口に運び、ご飯をかきこむ。

美味しそうに食事をしているヒロキをよそにレニスは、食事を取りつつも端末でメールをチェックしていた。

(なるほど……)

メールを確認したレニスは口元を緩ませる。

食事を終えた二人は部屋に戻り、それぞれの記事の骨組み作成をする。

しかし、マトモに取材できたのはタクヤ、エスター、マリアの三人だけなのでロクな内容物にならなかつた。

「ダメだあああ！ やっぱり記事にならねええええ！」

記事作成に行き詰まったのか、ヒロキはヤケを起こす。

そんなヒロキを横目にレニスは、撮影した写真の整理とネットワークニュースの閲覧をしている。

「ヤケにならないで気分転換に少し休んだらどうだ？」

一人でヤケを起こすヒロキにレニスは冷静に諭す。

「けどさあ……」

レニスの言葉にヒロキは、口を尖らせる。

「行き詰まったこういう時こそ、一晚寝てみると意外に頭がスッキリするぞ」

「……わかったよ。じゃあ、レニスには悪いけどシャワーを浴びて先に寝かせてもらおうわ」

「ああ」

レニスの助言を素直に受け入れたヒロキは、鞆から着替えを取り出してシャワールームへと向かう。

「ゆっくりしてこいよ」

「ああ」

ヒロキがシャワーを浴びている間もレニスは、端末でネットワークニュースを閲覧していた。

「あー、サツパリした！ さて寝よう寝よう」

シャワーを浴びて気分転換したヒロキの表情からは、先程のイライラ感は無くなっており、その様子を見てレニスは少しだけ笑っていた。

「じゃあ、レニス。先に寝るわ。おやすみ」

ヒロキはベッドに横になると、よほど疲れていたのか、すぐに眠りについた。

「さて……」

ヒロキが眠りに入ったのを確認したレニスは、端末でメールの確認し始める。メールには、ある言葉が表示される。

ドルチェフ・ブライアン……VF-14S 機体No:001

「なるほど……やはり間違いなかったか」

メールの文章を確認したレニスの口元がニヤつく。

辺りが静まりかえった真夜中。

時々、聞こえてくる虫の鳴き声が心地よく感じてくる。

ブラックバルチャー基地内も静まり返っていた。

偵察任務で出撃しているパイロットを除いた非番のパイロット達や基地内職員は皆、

各々の部屋で過ごしている。

そんな静まり返った基地内で一人の人影が足音を立てずに歩いていた。

人影は時々、歩みを止めては辺りを見回す。

そして、人がいないのを確認すると再び足音を立てずに歩き始める。

人影は、非常灯の明かりで照らされる案内板を頼りに格納庫へと歩みを勧める。

ミラン達は、既に作業を終えているので照明が消されており、格納庫内は暗く不気味

なほど静まりかえっている。

人影は、格納庫の中を確認すると懐中電灯を点けて格納庫の中へと歩み寄る。

「ポケットから懐中電灯を照らして1機ずつバルキリーを確認しながら歩く中、あるバルキリーの前で歩みを止める。

人影は、ポケットから小型端末を取り出してメールの内容を確認する。

そして機体に懐中電灯を照らして機体の確認を行う。

「VF-14S……機体番号は001。この機体に間違いないな」

人影は、咄くと小型端末をポケットにしまい、別のポケットから小型爆弾を取り出す。

「ドルチェフ・ブライアン……まずは、お前から家族の仇を討たせてもらう」

人影は、ドルチェフへの恨み言を咄きながら、ゆっくりとドルチェフの機体へと歩み寄る。

そして、人影がドルチェフの機体に小型爆弾を取り付けようとした瞬間、突如格納庫内の照明が点く。

「!?!」

突然の事に人影は驚いて辺りを見回すと、入り口にドルチェフが拳銃を突きつけて立っていた。

「こんな夜更けに格納庫にやってくるとは、ただの散歩ではないようだな……ここで何をしている?」

拳銃を突きつけたままドルチェフは、人影に問いただす。

「……」

拳銃を突きつけられたまま人影は微動だにしなかった。

「そんな物騒な物を持つているとは……レニス、お前さんは、ただの報道記者ではないかな？」

至極真つ当な報道記者は、小型爆弾と言う物騒な物は所持していない。

それ以前に小型爆弾を所有していると言う事は、私は危ない事をしますと自ら白状しているような物である。

「くっ……」

レニスは、恨めしい眼差しでドルチェフを睨みつける。

「そんな目で睨まれた所で、俺は一步も引かないし、拳銃も下ろさないぞ」

ドルチェフは、レニスから眼差しを受けても一步も退こうとはしなかった。

「安心しろ、この事は周りには黙っておいてやる。さあ、その物騒な物をこちらによこせ」

「く……嫌だと言つたら？」

「……その時は、俺も容赦はしない」

ドルチェフは、拳銃を突きつけたまま、ゆっくりとレニスに近づく。

レニスは、隙をついてジャケットのポケットから拳銃を取り出そうとする。

しかし、それよりも早く気付いたドルチェフは、拳銃をレニスの足元に撃つ。

「今のは威嚇だ。次に抵抗をした場合は、遠慮なく撃つ。だから、バカな事は考えない事だ」

ドルチェフとレニスとの距離は約3mくらい離れているが、正確に足元へ向けて銃弾を当てており、レニスはドルチェフの言葉が脅しではない事に気付いたのか、額から冷や汗を流して固唾を飲む。

こちらの行動を見抜かれて更に念を押された事で、レニスは恐怖感からか一步も動けなかった。

(クソ……どうする)

ゆっくりと近付いてくるドルチェフに対して、レニスは次にどのような行動をするべきかを頭の中で試行錯誤しながら考える。

ドルチェフがレニスに近付き小型爆弾と拳銃を奪い取ろうとした、その時、

「うおおおおお！」

一瞬の隙を突いてレニスは、ドルチェフに殴りかかる。

「くっ！」

レニスのパンチを受け流し、そのままレニスの足を引っ掛けて転倒させる。

そして、ドルチェフは倒れているうちにレニスの右腕を掴んで後ろへと捻る。



所詮は、素人がプロに喧嘩を仕掛けるような物であり、ドルチェフにとってレニスを大人しくさせるのは容易い事だった。

「ぐおあああああ！」

右腕を後ろへ捻られてレニスは悲痛の叫びを上げる。

「いい加減に観念しろ！」

「わ、わかった！ お、大人しくする！ 大人しくするから離してくれ！」

「本当だな？」

ドルチェフは本心を確認する為、掴んだレニスの右腕を更に捻る。

「ほ、本当だ！ ほ、本当に大人しくする！」

レニスの必死な叫びを聞いたドルチェフは、レニスの右腕を解放する。

ドルチェフに右腕を解放されたレニスは、息が上がったまま掴まれた右腕を庇うように掴む。

「まったく、無茶しやがって」

「ク……クソ、クソオオオオ！」

ドルチェフに工作を妨害された悔しさからなのか、レニスは怒り狂ったように叫び出す。

「レニス……お前さんは、いったい何を企んでいる？」

ドルチェエフの問い掛けにレニスは何を語ろうとするのか？

## 第7話 デンジャラススクープ

ドルチェフに取り押さえられたレニスは、そのままドルチェフの部屋へと連行される。

真夜中の為、辺りは静まっております、部屋へ向かう途中は二人の足音だけが響き渡る。

各々の部屋は格納庫から離れている為、誰一人として格納庫で起こった出来事には気付いていなかったのが二人にとっては幸いである。

部屋へ着くなりドルチェフは、レニスを近くの椅子に座らせる。

レニスを椅子に座らせた後、ドルチェフは棚からコーヒーカーップを取り出し、コーヒーマーカーのコーヒーを入れてレニスに差し出す。

「これでも飲んで落ち着け」

「……」

レニスは無言で渡されたコーヒーカーップを受け取る。

「安心しろ、毒なんて入っちゃいない」

ドルチェフは、不審がりコーヒーに口を付けないレニスに毒が入っていない事を証明させる為に自ら入れたコーヒーを口に運ぶ。

その様子を見ていたレニスもコーヒーカップを口に運ぶが、その視線はドルチェフへ向けられていた。

まるで恨みがましいような目付きがドルチェフは気になっていた。

「話を聞こうか。お前さんが何故、俺を殺そうとしたのかを」

「お前は……お前達は、俺の家族の仇だ」

「仇……か」

レニスの仇という言葉にドルチェフは、ポツリと呟く。

「確かに統合軍は、今までの戦いで色々な敵を撃ち落としてきたからな。仇として恨まれても当然か……」

戦争と言うのは非情である。

対立する互いの兵士にも家族や恋人がおり、兵士達はそれを守る為に戦う。

時には、戦闘で市民達に危害を与える事もある。

戦場では、敵に情けを掛ければ自分が死んでしまう。

例えば、それが敵側の一般市民でもだ。

だからこそ、敵の事情などを理解している余裕なんて無いのが現状だ。

コーヒーを飲み終えたドルチェフは、コーヒーカップを机の上に置く。

「どうやら俺達は、お前さんの家族を殺したんだな」

「……7年前のジェニオスシティの事件を知っているな」

「!? ジェニオスシティだと?」

ジェニオスシティと言う言葉にドルチェフは、思わず声を荒げて驚く。

「俺の家族は、あの街に住んでいた。事件当日、俺は、やつと大きな仕事を終えて久しぶりに家族の元へと帰る所だった。だが、俺の目の前に見えたのは……赤い炎だった」

レニスは、当時の状況を思い浮かべつつ、ポツリポツリと話す。

その目には、悲壮感すら漂っていた。

「……」

悲しみに暮れるレニスの話にドルチェフは、言葉を詰まらせてしまうのだった。

「統合軍が反応弾を撃ち込んだという話を聞いた俺は、GNNのデータを調べたさ。それにしてもGNNも面白い記録を持っているもんだ。統合政府が隠蔽した記録が次々と出てくる」

「その時に7年前の事件も……」

「そうさ。当時の首謀者がアンタと今日取材を受けたマリアって女。そして、ガルスとギブソンの4人だと言う事もな。今回の仕事は、まさに俺にとって復讐出来るチャンスだったのさ」

レニスは、不敵な笑みを浮かべる。

今回の取材は、スキヤンダルにより仕事を自粛させられているヒロキと違い、レニスにとつては、まさに復讐を果たす為に今回の仕事を買って出ている。

「二つだけ言わせてもらおうが、あの時、反応弾発射の命令を下したのは俺じゃない、ガルズだ。俺達三人は、反応弾発射を止めたんだ」

GNNに残っているデータも統合軍により改ざんされている事を見抜いたドルチェフは、事の真相をレニスに告げる。

「だが、結果的に反応弾は発射されてジェニオスシティは壊滅した。違うか？ それにそんな事は、ジェニオスシティの市民には全く関係ないよな？」

しかし、レニスにとつては、今更真相を知った所で亡くなった家族が生き返る訳ではない。

理由はどうあれ、所詮は結果が全てである。

レニスの正論にドルチェフは、何も言えなかった。

「ようは、お前さんは家族の仇を取れたら、それで満足なんだな？」

「その通りさ。あの事件の関係者を誰でも良いから殺す事ができれば俺も満足さ」

「わかった」

ドルチェフは、懐から拳銃を取り出してマガジンから弾を抜き取り、弾を1発だけマガジンに戻した後、レニスに渡す。

「!？」

唐突にドルチェフから拳銃を渡されてレニスは驚く。

「俺は、後ろを向いているから一発で仕留めてくれ。セーフティも解除しているし、ソイツは消音銃だから銃声は、誰にも気付かれないから安心しろ」

レニスに拳銃を渡した後、ドルチェフはレニスに背中を向ける。

渡された拳銃をレニスは、まじまじと見つめる。

初めて触る拳銃は意外と軽く、よく映像やグラフィア等のメディアで見かける物と遜色なかった。

拳銃を手にしたレニスは、固唾を飲みつつ銃口をドルチェフに向ける。

「……」

「……」

しばし、長い沈黙が続く。

しかし、レニスは一向に銃の引き金を引こうとはしなかった。

「どうした、早く撃たないか」

一向に引き金を引かないレニスにドルチェフは、背を向けたまま命令する。

「わ、わかつてるさ」

ドルチェフに急かされてレニスは、固唾を飲みつつ深呼吸をする。

「どうした？ 震えているのか？」

先程からレニスは、銃口をドルチェフに向けたまま固まっていた。

時々、手が震えているのか銃口が微かに震えている音が聞こえてくる。

「う、うるさい！」

ドルチェフの挑発するような言葉にレニスは激高する。

「……ハア……ハア」

撃つのを躊躇っているのか、レニスの呼吸が早くなる。

いくら憎い相手とは言え、いきなり凶器を渡されて殺せと言われても心の中の良心が残っていたら躊躇をしよう。

レニスには、まだその良心が残っていたのだ。

レニスの呼吸が早くなっているのに気付いたドルチェフは、レニスの方を向いて拳銃を取り上げる。

「な、何をする！」

「やっぱり、お前さんのような素人に人殺しなんて無理だ」

「む、無理なものか！」

レニスは、ドルチェフから無理矢理拳銃を奪い取ろうとするが、緊張感から解放された事で精神的な疲労が一気に来たのか、そのまま前のめりになって倒れそうになる。



「言わんこつちやない」

ドルチェフは、前のめりに倒れそうになるレニスを支える。

「さ、触るな！」

レニスは、倒れそうになる自身の身体を支えるドルチェフから無理やり離れる。

ピピー、ピピー

突然部屋の通信機が鳴り出した為、ドルチェフは通信に対応する。

『隊長、統合軍本部から通信が入っていますが、どうしますか？』

通信主はアイナからだった。

「統合軍本部から？ わかった、転送を少しだけ待つてくれ」

『了解』

ドルチェフは通信を保留状態にする。

「イヤミなら後でたつぷりと聞く。すまないが、部屋に戻つてくれ」

「……」

ドルチェフに促されてレニスは身体をフラつかせながらも部屋のドアへ向かう。

「今回の事は、俺達二人だけの秘密だけにしてくれ」

「……わかつているさ」

ドルチェフの部屋を後にしてレニスは、ドアに凭れかける。

(今の俺にはアイツらすら殺せないのか……クソ！)

自責の念に駆られつつレニスとは自室へ戻る途中、何度もドルチェフの部屋を振り返った。

部屋に戻ったレニスは、椅子に座ってうなだれていた。

しばらくすると部屋の外から騒がしい音が聞こえたので、レニスはドアを開けて外の様子を見る。

外では、パイロットスーツに身を包んだパイロット達が格納庫へと向かっていた。

その様子を見たレニスは、すぐに出撃だと気づき、寝ているヒロキを起こす。

……きろ

「うーん……」

……ロキ……きろ

「何だよ……眠いんだから、もう少し寝かせてくれよ」

「ヒロキ、いい加減に起きろ！」

なかなか起きないヒロキをレニスは、身体を揺さぶって起こす。

「……うーん。なんだよ、レニス」

レニスに身体を揺さぶり起こされたヒロキは、目を擦りつつ身体を起こす。

「起きたな。ヒロキ、すぐに支度をしてくれ」

寝ぼけ眼のヒロキをよそにレニスは、身支度をしていた。

「何かあったのか？」

「どうやら、ブラックバルチャー隊が出撃するらしいぞ」

「なに、本当か！」

出撃の言葉に寝ぼけ眼のヒロキは、目が覚めて一気にテンションが上がる。

「ああ、部屋の外が騒がしくて様子を見てみたら、パイロット達が格納庫へ向かっているようだ。あれは間違いなく出撃するだろうな」

「よし、これで特ダネ写真とビデオが取れば、視聴者がぶったまげる記事が書けるぞ  
！」

基地内でのインタビューだけでは記事が全く書けずに悪戦苦闘していたヒロキにとって、戦場のレポート取材は願ってもない大チャンスだった。

ヒロキはベッドから飛び起きて、急いで支度をしてレニスと共に格納庫へと向かう。

二人が格納庫に到着すると、格納庫内では出撃準備でメカニックやパイロット達で  
ごった返しだった。

「チーフ、VF-11へのスーパーパック装備と弾倉装填、全機完了しました」

「わかった。そのまま出力系統と電子系統のチェックを頼む」

「了解」

相変わらずミランは、作業をしながら各メカニックマンに指示を出している。

「おお、これはネタになりそうだから撮っておこう」

ヒロキは、ビデオカメラを取り出して格納庫内の様子を撮影する。

レニスは辺りを見回してドルチェフを探すが、辺りにいる気配は無かった。

「ヒロキ、少し待っててくれ」

ビデオ撮影をするヒロキをその場に待たせてレニスは、近くにいるミランの方へ歩いていく。

「作業中すみません、隊長さんは何処にいるか知りませんか？」

レニスは、ミランにドルチェフの居場所を尋ねる。

「隊長ですか？ さっきいたんだけどなあ……」

数分前にドルチェフに機体作業関係の話をしていた為、まだ遠くへは行っていないと思いい、ミランは辺りを見回す。

「あ、あそこにいました」

ミランが指を指した先でドルチェフは、ブラウンニング付近でマリアと話し込んでいた。

「隊長、隊長！」

ミランは、大声でドルチェフを呼ぶ。

ミランの声に気付いたのか、マリアとの会話を中断してドルチェフがやってくる。「どうした？」

「よお、隊長さん。出撃なんだって？ 良かったら、俺達も一緒に連れてつてくれないか？」

ドルチェフが来るのを待ち構えていた様にレニスは、話し掛ける。

しかし、その表情は不敵な笑みが混ざっていた。

「それは構わん……だが、俺達の部隊は見ての通り人手が足りないから、お前達を守つてやれる保証は無いぞ」

「ええ、それは構いません。危険な事は極力避けます」

レニスの覚悟を聞いたドルチェフは少し考える。

(恐らくレニスは戦場の取材という名目で俺が死ぬ瞬間を見たいのだろう)

部屋で銃を撃つ事もままならなかったが、戦場であれば戦闘によりドルチェフが殺されれば自身の手が汚れる事も無いだろうし、レニス本人も納得するだろう。

ただし、情けを掛けて自分から死に行くような事はしないようにとドルチェフは自分に言い聞かせる。

「……わかった、着いて来い」

「ありがとうございます」

ドルチェエフの許可を貰ったレニスは、ドルチェエフに頭を下げてヒロキの元へと向かう。

「ヒロキ、隊長に同行の許可をもらったぞ」

「さっすがレニス！ よし、機体の準備をしようぜ」

二人はGNNバルキリーに機材を積み込み準備を行う。

「よし、バルキリーも積み込んでもらえるか頼んでくるよ」

ヒロキは、ミランにブラウニングにGNNバルキリーを搭載してもらう様に頼み込む。

ミランの許可を得たヒロキは、ブラックバルチャー隊のバルキリーと一緒にGNNバルキリーもブラウニングの格納庫へ搭載してもらう。

そして、バルキリーとGNNバルキリーを搭載したブラウニングは、カタパルトから宇宙へ向けて発進する。

『間もなくポイントミューに到達。パイロットは出撃準備。繰り返す……』

しばらくして、目標地点に到達したのか、アイナの艦内放送が流れてパイロット達は格納庫へと向かう。

「レニス、俺達も」

「ああ」

艦内放送を聞いた二人も準備をして格納庫へと向かう。

『バルチャー1から各機へ。出撃後は3機でフォーメーションを組んで迎撃態勢を取れ』

『了解』

ドルチェフは待機中のパイロットに作戦を指示する。

『今回ネルは、タクヤとエスターに付け』

『ええええ！ ボウヤ達と組むの？』

ドルチェフの指示にネルは、不満を漏らす。

『隊長、俺も姉ちゃんとは組みたくねえよ』

タクヤも不満なのか、嫌そうな表情をしたまま通信を入れる。

『タクヤもネルさんも仲良くしようよ……』

お互いに不満をぶつけるタクヤとネルを見たエスターが二人を宥める。

『タクヤ、ネル。不満なら作戦終了後に腕立て伏せとスクワット100回とグラウンド50周のセットだ。それでも良いなら勝手にしろ』

『う……』

『げ……』

ドルチェフの言葉に先程まで不満げだったタクヤとネルは言葉を詰まらせて、まるで

牙の抜けたライオンの如く大人しくなる。

『……バルチャー11。了解』

『バルチャー13。同じく、了解』

ドルチェフの言葉が効いたのかタクヤとネルが、しぶしぶ了承したおかげでエスターは、ホッと胸を撫で下ろす。

『無駄話をしてしまったが、GNNの方々は極力戦場から離れて取材を頼む』

ドルチェフは、ヒロキ達に危険行為を行わないように通信を入れる。

戦闘中は自分の事で手一杯の為、頻繁に周りを気遣う事が出来ない。

その為、ヒロキ達が取材の為に危険な行動を起こさない様に予め釘を刺しておく。

『わかりました。戦闘の邪魔はしません』

ヒロキは、モニター越しに敬礼をする。

「よし、出撃！」

プロウニングの下部カタパルトが展開し、バルキリー隊が次々と出撃する。

その後GNNバルキリーも続く。

「ヒロキ、戦場の取材経験は？」

「今回が初めてだ」

「わかった。じゃあ、俺の指示通りに飛んでくれ」



「了解。さあ、頑張っていくぞ！」

今までスキヤンダルネタばかりの記事を扱っていた為、ヒロキは初の戦場撮影に気合を入れる。

(直に殺せなくても、無様な死に様くらいは俺に見せてくれよ)

良心が咎めた為、自らの手でドルチェフを殺せなかったレニスは、せめて戦死する瞬間をカメラに収めようと不敵な笑みを浮かべてカメラを構える。

既に戦場は混戦状態になっており、あちこちで爆光が輝いていた。

タクヤ達は、向かってくる敵機をレーダーで確認して迎撃態勢を取る。

「もらったー！」

敵機を確認すると同時にネル機は、ガンポッドをヌージャデル・ガー目掛けて連射するが避けられてしまう。

『姉ちゃん、なにやってるんだよ！』

攻撃を外すネルにタクヤは、荒げた声で通信を入れる。

『うるさいな、ボウヤは黙って見てろ！』

ネル機は、加速してヌージャデル・ガーとの距離を徐々に縮める。

それに気付いたヌージャデル・ガーは格闘戦に持ち込もうとするが、ネルは先に機体をバトロイドに変形させて突撃する。

ヌージャデル・ガーは殴り掛かろうとするが、ネル機は脚部バーニアを逆噴射しつつかわす。

「これでも喰らええええええ！」

そして、隙を突いて展開させたガンポッドの銃剣を思い切り振りかぶり、ヌージャデル・ガーの首を跳ね飛ばす。

首を跳ね飛ばされたヌージャデル・ガーは、ピクリとも動かなかった。

『ふっふっくん♪ どうよ！』

敵機を撃墜したネルは、タクヤに自慢げに通信を入れる。

『それくらい、俺だって出来るよーだ！』

自慢げなネルの言葉を聞かされて面白くないのかタクヤは、ネルを挑発をする。

『なによ、ケンカ売ってるの？』

タクヤの挑発にネルは、喧嘩腰になる。

いつものやり取りにエスターは、深い溜め息を吐く。

『二人共、喧嘩していいいで次に行こうよ。それに喧嘩していると、また隊長に怒られるよ』

喧嘩する二人の様子を見て、エスターは宥めるように通信を入れる。

『……わかったよ』

『はいはい』

エステターの通信にタクヤとネルは仕方なく従い、3機は次の敵機を目指して飛んでいく。

「うわあ……凄いなあ……」

ヒロキは映像以外での初めての戦場を見て、ただ呆然としていた。

「ヒロキ、ポーっとしてしていると撃墜されるぞ。悪いけど、もう少しだけ近付いてくれ」

「お、おう。わかった」

レニスの指示でヒロキは、GNバルキリーを戦場に近づける。

しかし、近づいた瞬間に突如ヌージャデル・ガーが目の前に迫る。

「う、うわあああああ！」

突然の事にヒロキは、機体をガウオーク・ファイターに変形させて逆加速をしながら急いで距離を離す。

GNバルキリーには護身用の武器は一切搭載されていない為、何かあった場合は逃げる事しか出来ない。

その瞬間、遠方からの攻撃でヌージャデル・ガーは蜂の巣にされて爆発し、GNバルキリーはその爆風に吹き飛ばされる。

「うわあああああ！」

「ヒロキ、早く……早く操縦桿を引け！」

「くっ、うおおおお！」

ヒロキは操縦桿を思い切り引き、機体の全バーニアを吹かして何とか姿勢を制御する。

「はあ……はあ……だ、大丈夫か？ レニス」

ヒロキは息を切らせつつ、後部座席のレニスに呼び掛ける。

「あ、ああ……なんとかな」

レニスは、首を左右に振りつつカメラを構え直す。

『大丈夫ですか？』

GNバルキリーに襲いかかるヌージャデル・ガーを撃墜したエステルは、爆風で吹き飛ばされたヒロキ達が気に掛かり通信を入れる。

『あ、ああ。こっちは何とか大丈夫だ』

レニスがエステルの通信に応える。

『良かった』

レニス達の無事を確認したエステルは、安堵の表情を見せる。

『あんまり近づくとヤバイよ兄ちゃん』

タクヤが二人の通信に割り込んでくる。

『ああ、気を付けるよ』

『ボウヤの方がもつとヤバいから注意しなよ』

続けてネルも通信に割り込む。

『んだと！』

自分が馬鹿にされたと勘づいたタクヤは、ネルに喧嘩を吹っ掛ける。

『もう、二人共いい加減にしてよ！』

三人のやりとりをモニター越しに見ながらヒロキとレニスは苦笑いをする。

『三人共、そんな所で喧嘩していると怒られるよ』

三人のやりとりを見ながらヒロキは、さりげなく通信を入れる。

『ああ、そうだった。また隊長に怒られる』

『行くぞ、ボウヤ達』

『二人とも待つてよお』

今の現状をドルチェフに見つかったら後が怖いと感じたタクヤとネルは、急いで戦場へと向かい、その後をエスターが追い掛ける。

「ふう……やれやれ」

3機がいなくなり、ヒロキは安堵の溜め息を吐く。

このまま三人のやりとりを見ていたら、せつかくのチャンスが台無しになってしまう

からだ。

「レニス、機体を動かすけど大丈夫か？」

「俺なら大丈夫だ……!?!」

レニスの視線にドルチェフのVF-14が映る。

「ヒロキ、あの機体を追うぞ！」

レニスは、ヒロキにドルチェフ機を指差して追うように声を掛ける。

「あのVF-14だな」

「ああ」

「よし、行くぞ！」

GNバルキリーは、ブースターの出力を上げてドルチェフ機を追う。

『ホークスーから各機へ、前方より大型の熱源がフォールドしてきます。気を付けて』

アイナからの通信が入り、戦場にゼントラーディ艦がフォールドする。

『敵艦は、ゼントラーディ軍の標準艦スヴァール・サランです。データを転送します』

アイナからゼントラーディ艦のデータを受け取ったブラックバルチャー隊は、データを参照する。

標準艦とは言え、巨人族の戦艦故にその大きさはブロウニングの10倍以上である。

『バルチャーより各機へ。これより敵艦迎撃に向かう』

『了解』

ドルチェフの命令でブラックバルチャー隊は、スヴァール・サラン迎撃に向かう。

「これが、ゼントラーディ艦」

突然姿を現したゼントラーディ艦にヒロキは、思わず固唾を飲む。

「見るのは初めてか？」

「あ、ああ……」

初めて見るゼントラーディ艦の大きさにヒロキは、声が出なかった。

「ヒロキ、いつまでも見とれてないで追うぞ」

「お、おう」

GNバルキリーは、スヴァール・サラン迎撃に向かうドルチェフ機の後を追う。

ドルチェフ機は、スヴァール・サランからの砲撃を巧みにかわして砲台にミサイルを

撃ち込み次々と撃破する。

「さすが隊長だ」

ヒロキは、ドルチェフ機の巧みな動きに見とれていた。

(クソ、流星に簡単には死なないか)

カメラを回しながらレニスは、なかなか死なないドルチェフに苛立ちを覚えていた。

ミサイル攻撃で外壁に穴が開いたのを確認したドルチェフは、敵艦内に突入する。

ブロウニングの10倍以上の大きさを持つゼントラーディ艦を沈めるには、外部からの攻撃よりも内部からの攻撃で誘爆による撃沈が一番確実な戦法である。

『バルチャーより各機へ。これより艦内に突入して中枢部分を叩く』

『了解』

「ヒロキ、俺達も続くぞ」

「ああ」

ドルチェフ機に続いて、GNNバルキリーも敵艦内へ突入を開始する。

ガウオークで艦内を進んでいく途中、ドルチェフは背後のGNNバルキリーの存在に気付く。

『お前達も着いて来たのか』

ドルチェフは、後ろから着いてくるヒロキ達に通信を入れる。

『へへ、記事の為ですよ』

ドルチェフの通信にヒロキは、にこやかに応える。

『さつきも言ったが、お前達を守っている暇は無いからな』

『それは分かっています。でも、俺は、この取材に命を掛けているんです！』

『……どうなっても知らんぞ』

ドルチェフ達と同じく、ヒロキも取材の為に命を掛けていた。



ドルチェフ機はヒロキ達を無視して更に奥へと進み、GNNバルキリーもその後にく。  
く。

しばらく進むと、ヌージャデル・ガー3機が待ち構えていたかのように攻撃を仕掛けてくる。

『来たか、お前達は下がれ』

ドルチェフはヒロキ達に退避するように通信を入れる。

ドルチェフの通信を聴き、GNNバルキリーが下がったのを確認したドルチェフ機はヌージャデル・ガーを迎え撃つ。

「それにしても、今日はツイてるなあ」

ヒロキは、間近でドルチェフの戦いぶりを見て興奮する。

「ああ……」

(さあ、早く死ぬ。早く無様な死に様を俺に見せろ！)

レニスとは、ドルチェフの無様な死に様を期待してカメラ越しにドルチェフの戦いぶりを映す。

例えエースパイロットでも3対1では勝てないだろうとレニスは、内心思っていた。

ドルチェフ機は、ガウオークの機動性を活かして3機のヌージャデル・ガーを翻弄する。

素早く動くドルチェフ機にヌージャデル・ガーは、攻撃をするも次々と攻撃をかわされていく。

翻弄されるヌージャデル・ガーのうちの1機を、ドルチェフ機は隙を突いてガンポッドで撃破し、そのまま残り2機に突撃していく。

2機のうちの1機を格闘戦に持ち込み、殴りかかる1機の腕を掴み上げて、そのままもう1機に投げ飛ばす。

投げ飛ばされたヌージャデル・ガーは、そのままもう1機にぶつかり、折り重なるように倒れる。

折り重なり動けなくなった2機をドルチェフ機は、纏めてガンポッドで蜂の巣にする。

『出てきていいぞ』

戦闘が終わり、ドルチェフはヒロキ達に通信を入れる。

戦闘終了の通信を聞いてGNバルキリーは、物陰から出てくる。

『流石ですね。俺、こんな間近で戦闘が見れる事ができて感動しました！』

ドルチェフの迫力ある戦いぶりにヒロキは興奮気味に通信を入れる。

『戦闘は、お遊びじゃないんだ。それが分からないなら、いますぐにでも帰れ！』

まるでショーを見ているかのように語るヒロキをドルチェフは感情的になり一喝す

る。

ヒロキやレニスにとっては、戦闘シーンの映像は一番視聴者が食いつきやすいネタでもある。

しかし、戦っているパイロット達は生き残る為に必死なのだ。

ドルチェフ本人にとっては、人の生死を懸けた戦いを視聴率稼ぎに扱われるのが一番不快だった。

『す、すみません』

ドルチェフに一喝されたヒロキは、身体が縮こまる。

ヒロキを無視してドルチェフは、リーダーを頼りにして中枢部へと進み、ヒロキもそのまま着いて行く。

『あの……さつきは、俺も軽率でした。本当にすみませんでした！』

ヒロキは、自分が軽率な発言をしていた事を謝る。

ドルチェフに一喝されてヒロキは、今まで自分が掴んだスクープも裏では傷ついている人がいたのかも知れない事を気付かされた。

しかし、ドルチェフはヒロキの謝罪を無視したまま中枢部へと向かう。

そして、ついにドルチェフ達は敵艦中枢部分に迫り着く。

『ここを攻撃するから、お前達は脱出できるように下がっている』

『わ、わかりました』

『俺達は、お前達マスコミのネタになる為に戦っているんじゃない。それは覚えておけ』  
『は、はい』

ドルチェフの通信を聴いて、GNNバルキリーは物陰に隠れる。

ドルチェフ機が中枢部を攻撃しようとした時、突如4機のヌージャデル・ガートと3機のリガードが仕掛ける。

「くっ、待ち伏せか!」

ドルチェフ機は、後退しながら敵機を迎え撃つ。

3機のリガードを後退しながらガンポッドで撃破しつつ、4機のヌージャデル・ガートを迎え撃とうとするが、二手に分かれたヌージャデルガートの攻撃にドルチェフは苦戦を強いられる。

「隊長さんを助けないと」

「ヒロキ、落ち着け」

操縦桿を握ってドルチェフを助けようとするヒロキをレニスは、止める。

「レニス!」

「俺達が出て何になるんだ」

「でも……」

武装を施していないGNNバルキリーが出て行った所で、返ってドルチェフに迷惑を掛けてしまう事にヒロキ自身も苛立ちを覚えていた。

(このまま死に様が見られるんだ。このチャンスを見逃すか)

レニスにとつては、ドルチェフの死に様が見られるチャンスだった。

だからこそ、ヒロキが助けようとする事を止めていた。

「……レニス、すまん！」

レニスの制止を振り切ってヒロキは、スロットルを全開に開けてドルチェフの元へ向かう。

「ヒロキ!?!」

突然のヒロキの行動にレニスは、思わず体勢を崩す。

『隊長さん!』

『な!?!』

突然現れたGNNバルキリーにドルチェフは驚く。

突如現れたGNNバルキリーに気付いたヌージャデルガー4機のうち2機は、GNNバルキリーに襲い掛かる。

「ほら、こつちだこつちだ」

GNNバルキリーは、自由に動き回り巧みにヌージャデル・ガーの攻撃をかわしてい

く。

「今だ！」

ドルチェフは、一瞬の隙を突いて2機のヌージャデル・ガーを撃墜し、GNNバルキリーに仕掛けていているヌージャデル・ガーも瞬く間に撃墜する。

『大丈夫ですか、隊長さん』

ヒロキは、ドルチェフを心配して通信を入れる。

『この馬鹿野郎！ 死にたいのか！』

ドルチェフの怒号がヒロキに響く。

『勝手な事をしたのは謝ります。でも、隊長さんが……』

『他人の心配をするヒマがあるなら自分の事を心配しろ！』

ヒロキの言葉を無視してドルチェフは、ヒロキを怒鳴り散らす。

戦闘のプロでもない素人がしゃばって余計に危険に晒される事も多々あり、ドルチェフ自身もその状況をいくつか見ていたからだ。

これもヒロキの為を思つての事である。

『す、すみません……』

ドルチェフの怒号にヒロキは俯く。

『こんな事で時間を無駄にしている場合じゃない。中枢部を攻撃するから離れている』

『は、はい』

GNバルキリーが後退したのを確認したドルチェフ機は、ガンポッドとミサイルで中枢部分を破壊する。

中枢部の破壊を確認すると同時にドルチェフ機は、撤退を始める。

『急げ、爆発に巻き込まれるぞ！』

ドルチェフ機の撤退を確認したGNバルキリーも後に続く。

艦内は、中枢部分の崩壊により各セクションで誘爆が始まっていた。

爆発に巻き込まれない様にドルチェフは、レーダーを確認しつつ出口を目指して進み、ヒロキ達も遅れない様に後に続く。

『大丈夫か？』

必死に脱出をする中、ドルチェフがヒロキに通信を入れる。

『なんとか大丈夫です。大事な特ダネ残したまま、こんな所で死んでたまるか！』

誘爆する艦内を尻目にヒロキは、必死の形相でドルチェフの通信に応える。

そんなヒロキを見てドルチェフは、少しでも口元に笑みを浮かべていた。

2機は出口を目指して、ひたすら進む。

『もう少しで出口だ』

目の前に出口が見えるのを確認した2機は、ファイターに変形してスヴァール・サラ

ンから脱出する。

2機が脱出して間もなく、スヴァール・サランは大爆発を起こす。

ヒロキは、しばらく大爆発を起こしているスヴァール・サランを見つめていた。

「やったな、レニス」

「あ、ああ……」

（クソ……やはり無理だったか）

特ダネをモノにして喜ぶヒロキと対照にレニスは、最後までドルチェフの死に様を見る事ができず、ガツクリとうなだれる。

「？」

GNNバルキリーのレーダーが、新たな熱源をキャッチした事にヒロキは気付く。

ヒロキがレーダーの熱源反応に気付いた、その瞬間、GNNバルキリーに強い衝撃が走る。

「うわわわ」

「う、うぐう、ぐおおおお！」

強い衝撃の反動で機体が揺れると同時にレニスの悲痛な叫び声がコクピットに響く。

「レニス！」

レニスの叫び声にヒロキが振り向くと後部キャノピーは半壊し、レニスの右腕は赤く



染まっていた。

『どうした!?!』

GNバルクリーの異変に気付いたドルチェフから通信が入る。

『レニスが……レニスが撃たれた!』

ヒロキは、震えた声でドルチェフの通信に応える。

『何だと!? 何処からだ?』

ドルチェフが辺りを見回すと、爆発するスヴァール・サランの中から2機のヌージャ

デル・ガーが姿を現す。

「くっ、こんな時に!」

ドルチェフは、2機のヌージャデル・ガーに突撃して瞬く間に撃破する。

「レニス、レニス! しっかりしろ!」

ヒロキは、シートにもたれ掛かるように倒れ込んでいるレニスに必死に呼び掛ける。

「う……うううう……」

しかし、ヒロキの呼び掛けに対してレニスの意識は朦朧としていた。

(クソ……俺は、アイツに何もできずに死んでいくのか)

間接的とは言え、家族の仇でもあるドルチェフに対して一矢報いる事もできずに死を

迎える事にレニスは、ただただ悔しい思いしかなかった。

『レニスの様子は、どうなんだ?』

レニスの様子が気になっているのか、ドルチェフから通信が入る。

『隊長さん、このままじゃマズいよ……』

ヒロキは、少し涙目になりながら応える。

『わかった、バルチャーより各機へ。ブロウニングへ速やかに帰還しろ。』

『了解』

ドルチェフの命令でブラックバルチャー隊は、次々とブロウニングへと帰還する。

『ヒロキ、ブロウニングへ戻れるか?』

『は、はい……エンジンに異常はないみたいです』

『よし、急いで帰還しろ』

『はい!』

ドルチェフ機とGNNバルキリーも続けてブロウニングに帰還する。

『ホークスー、聞いての通りだ。バルキリー隊収容後、すぐに基地へ帰還だ』

『了解』

バルキリー隊を全機収容を確認後、ブロウニングは基地へと急いで帰還を開始する。

GNNバルキリーを格納庫に収容後、レニスはコクピットから降され、パイロット達によって担架に担がれる。

レニスは右腕を撃ち抜かれており、出血も酷かったので、少しでも出血を止める為、右肩付近をガーゼできつめ縛り、そのまま部屋へと運ばれる。

「レニス！ レニス、しつかりしろ！」

担架で部屋へと運ばれるレニスにヒロキがしきりに呼び掛ける。

しかし、ヒロキの呼び掛けに反してレニスの状況は、一向に良くなる気配はなかった。「すまないが、もうしばらく我慢してくれ」

ドルチェフは、レニス呟く様に励ます。

「う……………う……………」

朦朧とする意識の中、レニスは薄く目を開く。

そして、そのままレニスは、顔をドルチェフの方に向ける。

「ハ……………ぎまめ……………みろ……………と……………思っ……………ているん……………だろ？」

弱弱しい声でレニスは、ドルチェフに呟く。

その表情は、怪我による苦痛とドルチェフに対して何も出来なかった事の悔しさが混じっていた。

「もう喋るな。出血が酷くなる」

レニスの弱々しい声を聞いたドルチェフの表情が一層厳しくなる。

「クソ……………お前の……………死に様を見れ……………ないまま……………俺……………は……………死ぬのか……………」

悔しさと激痛の為、レニスの表情は歪みつつも、その恨めしそうな視線はドルチェフに向けられていた。

「俺は、お前を死なせない。俺の死に様を見せるまではな……」

ヒロキに聞こえない様にドルチェフはレニスに、こそつと呟く。

まだ生きていれば、自分が死ぬ瞬間をいつでも見せる事ができる。

ドルチェフが今レニスに対してできる、彼なりの最大限の罪滅しなのだろう。

もちろん、これはドルチェフなりの考えであり、それをどう受け止めるのかはレニス次第である。

「チツ……カツコ……つけやがつて……言つてくれるぜ」

ドルチェフの言葉を聞き、苦痛に歪んでいたレニスの表情が少しだけ緩む。

恐らくレニス自身もドルチェフの言葉の真意を少しだけ読み取れたのであろう。

「とにかく、今は無理をするな」

ドルチェフは無理をさせないようにレニスを落ち着かせる。

基地へと帰還したレニスは、基地内の簡易医療施設で応急処置を施したおかげで、なんとか一命を取り留める事ができた。

しかし、本格的な治療をする為、惑星ローグに近いステーションの医療施設へと搬送される事となる。

しばらくして、ステーションから派遣されてきた搬送用の輸送船がやって来る。

輸送船が着陸すると、しばらくしてから医師と看護師、そして、二人の搬送員が降りてきてレニスの元へと向かう。

医師と看護師がレニスの容態を確認後、二人の搬送員に指示を促す。

二人の搬送員は、レニスを乗せた担架を担いで、医師や看護師と共にゆつくりと輸送船へと戻る。

「レニス……」

担架で運ばれていくレニスを見ていたヒロキは、不安そうな表情をする。

「大丈夫だ。アイツは死にはしない」

不安そうな表情を浮かべるヒロキをドルチェフは励ます。

ドルチェフとレニスは、互いに意思疎通をして信頼していた。

レニスが元気になった時に改めて罪滅ぼしをしたいと心の中で思っていた。

「隊長さん……」

ドルチェフの励ましにヒロキは、不安げな表情から少しだけ笑顔を見せる。

「それよりも、バルキリーは大丈夫なのか？」

「修理に時間が掛かるとメカニックの人が言っていました」

戦場で撃ち抜かれたGNNバルキリーは、幸いにもレニスのシート付近が損傷しただ

けであった為、大掛かりな修理をする程までもなかった。

「そうか。まあ、ここで治るまでゆっくりしていけ」

ドルチェフは、ヒロキの肩をポンと叩いて羽根を伸ばすように勧める。

『5月29日

ブラックバルチャー隊の取材が終わった。

最初の頃は、暗い雰囲気で怖い人ばかりだと思っていた印象と違い、実際の雰囲気は結構良かった。

隊員の取材や戦場の撮影も出来て、何とかいい記事が書けそうな気がする。

ただ、相棒のレニスが心配だ。

幸いにも怪我の治療が早かったから大丈夫らしいけど、それでも俺としては心配だ。俺にとっては、掛け替えのない相棒だからな。

それから、バルキリーの修理に時間が掛かりそうだ。

その関係で、もう少しだけブラックバルチャー隊にいなきやいけない。

せっかくだから、これを機にもう少しだけブラックバルチャー隊の事を調べてみようと思う』

取材へ行く前は不安な気持ちを綴っていたヒロキも、ブラックバルチャー隊との交流や戦場での取材を通じて、内容自体も少しだけ前向きな内容を綴っていた。

「よし、レニスの分まで頑張るぞ」

日記を書き終えたヒロキは、記事の作成を始める。

## 第8話レディ・リーダー

数日後、GNNバルキリーの修理が終わり、ヒロキは職場へ戻る事になった。

偵察任務に出ているパイロットを除くメンバー全員がヒロキを見送る。

「フォールドブースターまで用意していただいて、色々ありがとうございました」

ヒロキは、ミランに頭を下げて礼を言う。

「フォールドブースターは俺達で改良した特注だから、結構長距離までフォールドできるよ」

ミランは、特注のフォールドブースターに自信があるのか笑顔で話す。

本来、バルキリー用のフォールドブースターは、1回の使用で20光年分の距離を航行できるタイプが主流である。

ミラン達はGNNバルキリーを修理する合間に搭載されていたフォールドブースターを改良し、1回の使用で約1.5倍の距離を航行可能である。

「それは助かります」

「縁があつたら、また来てくれ」

ドルチェフがヒロキに話し掛ける。



「はい、色々ありがとうございます。あと、レニスの件ですけど……」

怪我を負い、病棟ステーションへと搬送されたレニスをヒロキは気遣う。

「わかってる。怪我が治ったら、俺達が責任を持って送る」

少し無愛想ながらもドルチェフの声からは、優しさが感じられていた。

「よろしくお願いします」

ヒロキは、レニスの事をドルチェフに託して頭を下げる。

「ヒロキさん、今回の記事って、いつぐらいにできるの？」

今回の取材の記事に興味があるタクヤがヒロキに質問する。

自身が初めて取材を受け、しかも記事になるのだから尚更タクヤが気になるのは、当

然である。

「そうだなあ……これから戻って編集とかするから、多分、記事が掲載されるのは3日後

くらいかなあ……」

「記事、楽しみにしてますよ」

タクヤと一緒に取材を受けたので、エスター自身も記事の内容が楽しみであり、笑顔

でヒロキに話し掛ける。

「では、失礼します。皆さん、お元気で！」

ヒロキは、一礼してGNNバルキリーに乗り込む。

やがて、GNNバルキリーは、ブースターを吹かせて滑走路から発進して行く。

「行っちゃった」

「……うん」

タクヤとエスター、そして、ブラックバルチャー隊の面々は、GNNバルキリーが見えなくなるまで空を見上げていた。

「さあ、ボサツとしてないで全員基地へ戻れ」

GNNバルキリーの姿が見えなくなったのを確認したドルチェフは、メンバーに基地へ戻る様に急かす。

ドルチェフに急かされてメンバーは、次々と基地へと戻っていく。

「マリア」

基地へ戻ろうとするマリアをドルチェフは、呼び止める。

「何かしら?」

「お前に話がある」

「?」

「実は……」

マリア以外のメンバーがいなくなったのを見計らい、ドルチェフはマリアにレニスとの事を話す。

レニスが7年前のジェニオスシティ事件の件で恨みを持っていてる事。そして、今回の取材でドルチェフを殺そうとしていた事。

ドルチェフの話聞き、ヒロキと共にレニスの取材を受けていたマリアは驚きの表情を隠せなかった。

「そんな……」

「ツライ所だが、彼は今でも俺達を憎んでいる。先日の出撃の時も俺の死に様をカメラに残そうとしていたくらいだ」

「……」

ドルチェフの話にマリアは、言葉を詰まらせる。

「俺は、これから彼の見舞いがてら調べたい事があるから出掛けてくる」

「わかったわ」

「許して貰おうとは思ってない。だが、せめてもの罪滅ぼしに俺自身でできそうな事は、やってやりたいと思ってる」

「ドルチェフ……」

本来は、自分達の上司であるガルスが独断で犯した事である。

それなのに自分から上司の代わりに責任を取りに行こうとするドルチェフにマリアは、不安な表情を浮かべる。

「すまないが、しばらく留守にするから俺のいない間は、隊の事はお前に任せたい」  
「……わかったわ。どうせ、止めても行きそうなものね」

マリアの言葉にドルチェフは少しだけ笑い、基地へと戻っていく。

その後、ドルチェフは、メンバー全員をブリーフィングルームに集めて緊急ブリーフィングを行う。

「この間の戦闘でステーションに搬送されたレニスの件で、しばらくの間、留守にしなればならなくなった。みんなには申し訳ないが、俺がいない間はマリアに隊長を務めてもらう」

ドルチェフが基地を留守にすると言う事で、メンバー達はざわつく。

殆どが隊長不在による任務遂行時の不安であるが、タクヤ本人は目の上のたんこぶ的存在が、しばらくいなくなる事に内心喜んでいた。

「そんなに不安そうな顔をするな。マリアは、俺と同等くらいにしっかりしている」  
今までドルチェフと長年付き添い、共に戦ってきただけにその実力は、折り紙付きだった。

メンバーの不安を少しでも和らげる為にドルチェフは自信を持ってマリアを推す。

「みんな、マリアの命令は、ちゃんと聞くんだぞ。以上だ」

ブリーフィングが終わり、メンバーはブリーフィングルームを後にする。

「マリア、後は頼むぞ」

「了解、気をつけて」

二人だけになったブリーフィングルームでドルチェフとマリアは、お互いに敬礼をして別れの挨拶を済ませる。

マリアは、心の中でドルチェフの無事を祈る。

その一時間後、支度を終えたドルチェフは、惑星ローグを旅立つて行った。

他のメンバーが各自の業務をこなす中、マリアは一人でドルチェフを見送る。

ドルチェフのバルキリーが見えなくなっても、しばらくの間、空を眺め続けていた。

「さて……今日から私がドルチェフの代わりに頑張らなきゃ」

ドルチェフを見送ったマリアは、自分自身に言い聞かせて気合いを入れる。

自身が気弱になってしまおうと、パイロット達が不安がって士気も下がり、他のメン

バー達にも示しが付かない。

いくら強がっていても、その様子は自ずと気付かれてしまう。

例え隊長代理とは言えど、その責任は重大なのだ。

ピピ―

マリアが自分の部屋で事務処理をしていると、部屋のチャイムが鳴る。

「はい」

「ミランですが、よろしいですか?」

インターホンからミランの声が聞こえる。

「ええ、どうぞ」

ドアが開き、ミランが部屋へと入ってくる。

「すみません、本当は隊長に見せなきゃいけないんですけど、マリアさんに見せて良いかどうか……」

ミランは、申し訳なさそうにマリアに話す。

「今は私が隊長だから、私が見ます。何かしら?」

「実は、来月の経費関係の予算表なんですけど……」

「予算表?」

ミランから初めて聞く言葉にマリアは、困惑な表情をする。

「ええ、弾薬から食料、雑貨等の必要経費の予算を毎月隊長さんに渡して、隊長さんが予算編成してから統合軍本部に提出しているんですよ」

「そもそも、それは統合軍本部が全てやっていたんじゃない?」

「ウチの部隊は、その……統合軍の掃き溜めって言われてるもので、予算編成は自分達でやらなきゃいけないですよ」

「そうなの!?!」

「……ええ」

ミランの言葉にマリアは目を見開いて驚く。

本来、経費精算や必要経費の予算等は全て統合軍本部が行っていた。

また、パイロット達も必要な雑貨や経費は担当部署に伝えていた為、その内部事情等は一切知らない者も多い。

当然、マリアも必要な物は担当部署任せにしていた為、知るはずもなかった。

「とりあえず、見せてくれるかしら」

「はい」

マリアは、ミランから予算編成表を受け取る。

予算編成表は、運営に必要な経費の細かい内訳が色々と書かれている。

ミランの場合は、メカニック部門になる為、武器の弾薬やバルキリーの修理やメンテナンスに必要な部品が主になる。

「……ふう、見てるだけで頭が痛くなるわね」

予算編成表を一通り見て、マリアの表情が険しくなる。

「でも隊長は、それを細かく見て編成してたんですよ」

「……そうなんだ。凄いわね」

ミランの言葉にマリアは、改めてドルチェフの業務の大変さに感心する。

「とりあえず、最終編成は隊長になりますので……マリアさん、お願いします」

「わ、わかったわ」

「では、失礼します」

ミランは、最後まで申し訳なさそうな表情をしたまま部屋を後にする。

ミランが部屋を出た後、それぞれの担当者が予算編成表をマリアに提出をしにやって来る。

担当者はミラン同様に申し訳なさそうな表情をしていた。

それぞれの予算表を受け取る度にマリアの表情は、どんどん疲れきっていく。

「備品に食料、医療に雑貨……枚数は少ないとは言え、よく見ると細かく書いてあるわね。ドルチェフは、毎月こんな細かい事をしていたのね」

マリアは、提出された予算編成表を一通りチェックする。

「さて、まずは備品からやろうかしら」

マリアは、備品関係の予算編成に取り掛かる。

「えーと、弾薬に予算を回しすぎると今度は備品関係の予算が足りなくなるから、均等に分けて……でも均等に分けると、今度は弾薬が足りなくなるわね。うーん……」

マリアは、試行錯誤しながら予算編成をする。

時には予算編成表を見直し、時には電卓を叩いて計算をする。



マリアの眉間には、いつも以上に皺が寄っていた。

「はあ……何とかできたわ」

あれから約5時間を掛けてマリアは、全ての予算編成表を完成させる。

その開放感からか、マリアは、そのまま机に突っ伏す。

その表情は、少し寝れていた。

「ドルチェフが年齢の割に老けて見える理由が何となくわかった気がするわ、フフ」

予算表を目を皿のように見回して、電卓を叩きながら一生懸命仕分けをするドルチェフを思い浮かべながら、マリアは少し笑う。

椅子に凭れて伸びをした後、気分転換にローズテイーを煎れて一息入れる。

「あら、もうこんな時間……何だか、もの凄くお腹が空いてきたから何か食べなきゃ」

ふと時計を見ると20時を過ぎていたので、マリアは食堂へと向かう。

食堂でヘルシーセットを注文して辺りを見回すと、ネルが大盛に盛った定食セットを口いっぱい頬張っていた。

「ハイハイ、ここかしらっ」

「ビーンーふおビーンーふお」

口いっぱい食べ物を頬張りながらネルは、マリアの問い掛けに応える。

食べ物を頬張る彼女の表情は、幸せいっぱいだった。

「ネル、女性がそんなにがつつくのは、みっともないわよ」

「マリアはネルの食事中の行儀の悪さを指摘する。

まるで、がさつな男性が食事をしている雰囲気醸し出すネルからは、とても女性らしさを感じられなかった。

「そんなの別にいいじゃん。それにしても、この飯って本当にウマイな。テロリストにいた頃は、こんなマトモな飯にありつけなかったからなあ」

「食事をしながらネルは、テロリスト時代の事を思い出す。

いつ敵に狙われるか分からないのと、上層部から与えられる補給物資も満足に貰えなかった為、質素な食事ばかりだったネルにとって、自分でお腹いっぱい食べられる事は幸せだった。

ネルは、プレートに盛られた大きめのハンバーグをフォークで刺して一口でたいらげる。

「ネル、さつきも言ったでしょ!」

「マリアは、再びネルの行動を咎める。

「なあ、マリア」

「ネル、ここでは私があなたの上司なんだから、言葉遣いに気を付けなさい」

「ネルの礼儀知らずな言葉遣いにマリアは、注意を促す。

「はいはい。じゃあ、マリア大尉」

「何かしら？」

「大尉は、メルトランディなのにマイクロン臭いよね」

「……そ、そうかしら？」

ネルのマイクロン臭いと言う言葉にマリアは、少し動揺する。

元々、ゼントラーディ人とメルトランディ人の混血児として生まれたマリアは、巨人族特有の戦闘種族としての誇りは、少なからず持っていた。

しかし、マイクロン所謂地球人と共に生活をしていくうちに気が付くと自分も地球の文化に感化されていた。

「礼儀にやたらうるさいのは、マイクロンの証拠だよ。あんまりうるさいとメルトランディとは言え、老けるよ」

「う」

巨人族は年齢を重ねてもそれほど見た目が老ける事は感じられない。しかし、第三者から初めて老けると言われてマリアの表情は固まる。

「はあああ、おいしかったあ〜♪ んじゃ、お先」

食事を終えたネルは、満足げな表情で食堂を後にする。

「老けてないわ……私は、老けてないわ」

一人、食堂に残ったマリアは、自分に言い聞かせるように呟いていた。

ピピー

翌日の早朝、マリアの部屋のチャイムが鳴る。

「んー……」

ピピー ピピー

次第にチャイムの音がけたたましく鳴り響く。

「マリア大尉、マリア大尉！ いませんか？」

エスターが部屋の外でチャイムを押しながら叫んでいる。

しかし、その声からは焦りが感じられる。

「もう……どうしたの？」

チャイムの音に無理矢理起こされたマリアは、不機嫌な表情のままドアインターホンでエスターに応答する。

「あ、マリア大尉。喧嘩です！」

「喧嘩？」

「はい。最初はマルス先輩とネルさんが喧嘩していたんですけど、止めに入ったタクヤまで喧嘩して、それで……」

しどろもどろの声でエスターは、状況を説明する。

「わかったわ、支度をするから少し待つてて」

エスターとの会話を終えたマリアは、急いで身支度をする。

喧嘩は日常茶飯事、どこかで起きています。

統合軍の掃き溜めと呼ばれるブラックバルチャー隊も例外ではない。

しかし、今はブラックバルチャー隊の長であるドルチェフが不在の為、その仲裁はマリアがしなければならぬ。

「ドルチェフが不在の時に喧嘩だなんて……もうー」

喧嘩の仲裁という一番面倒な事を押し付けられて、マリアは不満を漏らしながらも身支度を終えて部屋のドアを開ける。

「喧嘩は、どこなの?」

「格納庫です」

エスターが道案内をしてマリアは後を着いて行く。

一方、格納庫ではタクヤとマルスがネルを相手に取っ組み合いの喧嘩をしていた。

しかし、メルトランディとは言え、女性であるネルに対してタクヤとマルスは若干押し気味だった。

「ほらほら、どうしたの? 女ひとりに手こずっている様じゃ、アンタ達まだまだね」

ネルは余裕の表情を見せながら二人を挑発する仕草をする。

「ク……黙って聞いてりや、調子に乗りやがって。こんの野郎！」

タクヤは、右拳を思い切り振りかぶってネルに殴りかかる。

「ほらほらボウヤ、威勢はいいけど足元がお留守よ」

ネルは殴りかかるタクヤをかわして、それと同時に足払いをして転ばす。

「うわ、うわわわわ！」

転倒した勢いでタクヤは、そのまま壁にぶつかる。

「テメエ、メルトランデイのクセに生意気なんだよ！」

頭にターバンを巻いた男、マルスが続けて殴りかかる。

ネルはマルスのパンチをかわそうとする。

「甘く見んじやねえぞ！ オラアアア！」

殴りかかるフリをしつつマルスは、フェイントを掛けてネルの腹に蹴りを食らわせる。

「クっ……うう……」

マルスに腹を蹴られたネルは、そのまま膝を付く。

「ホラホラ、立てよ！」

マルスは跪くネルの胸倉を掴んで起こして、そのまま殴り飛ばす。

「やったぜ、マルスさん」

「おう！」

タクヤとマルスは、ネルに一矢報いた事の喜びを分かち合い、お互いにハイタッチする。

「ほお……どうやら、アタシを本気にさせたい気だねえ……」

ネルは、ゆつくりと起き上がり、指をバキバキと鳴らしながら二人を睨みつける。

その形相は、まさに鬼そのものだった。

「へ、へん。まだ、やるつてのokay?」

睨みつけるネルに対してタクヤは挑発をするが、その声はビビっているのか微妙に声が震えており、足元も震えていた。

「ハっ、やっと本気になりやがったか」

ビビるタクヤとは対照的にマルスは本気になったネルに対して、不敵な笑みを浮かべている。

「さあ、来いよ」

ネルに挑発されていたマルスが今度はネルを挑発する。

「こんのやるおおお！」

怒りに任せてネルが二人に殴り掛かろうとした、その時、

「三人とも止めなさい！」

三人の間にマリアが間に入って止めに入る。

殴りかかろうとしたネルは、思わず調子を崩して転びそうになる。

「喧嘩の原因は何?」

「コイツがアタシに『メルトランディは邪魔だ』とか因縁付けたんだ!」

ネルは怒鳴り散らしながらマルスに指を指す。

「マルス、本当なの?」

「ああ、本当だ! 俺は、ゼントラーディもメルトランディも大嫌いだからな。だから大尉、俺はアンタの事も嫌いだ!」

マルスの巨人族に対する嫌悪感にマリアは憤りを感じる。

自身も女性ばかりの巨人族であるメルトランディである為、マルスの嫌悪感に対しては尚更である。

「でも、ここにはゼントラーディやメルトランディも一緒に生活しているのよ」

嫌悪感を露わにするマルスに対して、マリアは何とか宥めようとする。

「は? それがどうした。俺は隊長がいるから、とりあえず仲良くしてやってるだけだよ! 勘違いすんじゃないよ」

そんなマリアの言葉も今のマルスは聞く耳を持たなかった。

「……アタシは、アンタの今の言葉にすっげームカついたわ! お前なんか今すぐ殺し



「やるー！」

「ネル、止めなさい！」

「ネルさん、止めてください！」

マルスに殴り掛かろうとするネルをマリアとエスターは必死で抑える。

「離せ、バカヤロー！」

「悪いけど、俺は次の出撃は遠慮しとくぜ。じゃあな」

それだけ言い放って、マルスは格納庫を後にする。

「……あんの野郎、絶対にぶっ殺す！」

ネルは壁を思い切り殴り、怒りを露わにする。

第一次星間大戦後、地球人は巨人族と共に共存の道を切り開いたかの様に見えた。

しかし、元々戦闘種族である巨人族は、今でも銀河の何処かで紛争を起こし、それに対しての地球人からの差別も何処かで起きている。

ネル自身もレッドバタフライでのテロ活動時に差別を受けていた。

特に統合軍からの理不尽な差別は顕著で、その事がネルのテロ活動に執念を燃やす切っ掛けにもなっていた。

「……」

「俺はゼントラーディもメルトランディも大嫌いだからな。だから大尉、本当は俺はア  
ンタの事も嫌いだ！」

「俺は隊長がいるから、とりあえず仲良くしてやってるだけだよ！」

マリアは、マルスの言葉が脳裏に焼き付いていた。

信頼していた仲間が、あそこまで嫌悪感を示し、且つドルチェフがいたから仲間とし  
て認めていた事。

マリアにとって、今までにないくらいに精神的なダメージはなかった。

（私は、メルトランディだからマルスに嫌われていた……ううん、そんな事ないわ）

マリアは、心の中で自分自身に言い聞かせて理性を保つ。

「……大尉」

マルスの言葉にショックを受けていたマリアを見兼ねて、エスターは心配そうに覗き  
込む。

「大丈夫よ、エスター。うん」

心配するエスターにマリアは、笑顔で応える。

「……それなら良いですけど」

笑顔で応えるマリアだが、不安げな表情が和らいでいる様子がない事にエスターは気付いていた。

「それはそうと、マルスとネルの喧嘩の原因はわかったとして、タクヤとネルの喧嘩の原因は何？」

マリアはタクヤに理由を尋ねる。

マルス自身は巨人族に対しての嫌悪感である事は理解できたが、タクヤ自身が何故マルスと共に喧嘩していたのかが理解できなかった。

「だって、姉ちゃんが俺の事をいつまでもボウヤ扱いするんだぜ！ 腹立つたらありやしねえ」

タクヤはネルに言われた事を思い出したのか、怒りながら地団駄を踏む。

「そんな細かい事で怒ってるから、いつまで経ってもボウヤなのよ」

地団駄を踏むタクヤをネルは鼻で笑う。

「んだとー」

タクヤはネルに殴りかかろうとするが、再び足を引つ掛けられて転がされて顔面から

地面に激突する。

「……」

「……」

タクヤとネルのやり取りにマリアとエスターは、ただ呆れるだけだった。

ブラックバルチャー基地の離れた場所で、マルスは一人でタバコを吹かしていた。

ふと、タバコの煙の行方を眺めて気分転換をするつもりだったが、先程の喧嘩の事が頭を過り、尚更イライラ感が募ってくる。

「あゝあ、つたく面白くねえなあー！」

マルスは、イラつきながら近くにあつた石を思い切り蹴り飛ばす。

「こんな所にいたのね」

そこへ、ちようど様子を見にマリアがやって来る。

「んだよ！ 何しに来たんだよ！」

マリアの姿を見るなり、マルスは怒鳴り散らす。

「あなたの話を聞きたかったのよ」

「俺の話？」

「そう。どうして、あなたがゼントラーディやメルトランディを嫌うのかをね」

「……んなの聞いてどうするんだよ？」

「同じ隊の仲間として少しでもあなたの事を理解しようと思うのは、理由にならないかしら？」

マリア自身はマルスの話を聞いて、少しでも気持ちを理解しようと務める。

今の状況を長引かせてしまつては、マルスだけではなく、部隊全体としての士気にも影響が出てしまうからだ。

「じゃあ、言つてやるよ」

マルスは、加えていたタバコを地面に落として思い切り踏みにする。

「俺の両親は昔、ゼントラーディやメルトランディに殺されたんだ。だから、俺は両親を殺したゼントラーディとメルトランディが憎い。理由は、それだけだ」

「……」

感情を吐き出すマルスの言葉にマリアは、何も言い返せなかった。

もし自分がマルスと同じ立場であれば、殺した相手に対して同じ様に目の敵にしていたらどう。

胸の奥に重い物がのしかかる様な感覚をマリアは感じていた。

「あれだけ多くの人間を殺しておいて、今更仲間だなんて偽善ぶるのもいい加減にしろよー」

そのままマルスはマリアに詰め寄る。

マルスの形相は、殺意を持っていた。

自分がマルスよりも立場が上とは言え、話す言葉を選びを間違えたら、彼は何の躊躇いもなく殺そうとするだろう。

そう思いつつ、マリアは思わず固唾を飲む。

「わ、私は偽善ぶってないわ。それに……」

頭の中では冷静さを保とうとするが、言葉は震えていた。

ピ。ピ。

重苦しい雰囲気漂う中、マリアの通信機が鳴る。

「はい」

詰め寄るマルスから離れて、マリアは通信に応答する。

『マリア大尉、統合軍本部から支援要請です。至急、お戻りください』

通信主は、アイナからだった。

「わかったわ、すぐに行くわ」

アイナとの通信を終えて、マリアは通信器の電源を切る。

「私は、あなたの事を仲間だと思っているわ。だから、憎まれ口でも構わないから話したくなったら、いつでも話して」

マルスを宥めてマリアは、基地へと急いで戻る。

後ろめたさを感じるのか、マリアは基地へと戻る最中もチラチラとマルスの方へ視線を向けていた。

「ちっ……何が仲間だよ」

マルスはポケットからタバコを取り出して、口にくわえて火を点ける。

そして、視線を上に向けてマルスは、空をぼんやりと眺める。

「人間とゼントラーデイが仲良くするなんて無理なんだよ」

タバコの煙の行方を眺めながら、マルスはポツリと呟く。

統合軍本部からの支援要請を受けたマリアは、緊急徴収を掛けてパイロットをブリーフィングルームへと集めてブリーフィングを行う。

しかし、そこにマルスの姿は無かった。

「アイナ、ブリーフィングを始めて」

「マリア大尉、マルス少尉がまだ……」

マルスの姿が見えないままブリーフィングを始めようとするマリアにアイナは疑問を持つ。

「構わないわ。始めて」

「は、はい。09:14、ブリーフィングを始めます」

アイナの言葉にマリアは資料を読み上げる。

「先程、統合軍本部からポイントアルファにおいてテロリスト殲滅に先行した部隊が苦戦していると連絡が入りました。これより、我が隊はポイントアルファへ向かい先行部隊の支援に向かいます。各員出撃準備」

マルスの姿が見えない事に疑問を持つパイロットもいたが、それでも任務を優先しなければならぬ為、パイロット達は格納庫へと向かう。

バルキリーをブロウニングへと搬送するが、任務に参加しないマルスのバルキリーだけ搬送される事なく、その場に残される。

「マルスさん、本当に来ないんだ」

タクヤは、置き去りにされるマルスのバルキリーを寂しそうな表情で見つめる。

バルキリーを艦載したブロウニングは、ポイントアルファへ向けて発進する。

その様子をマルスはタバコを吸いながら、ただぼんやりと眺めていた。

ポイントアルファは惑星ローグからそれほど離れた距離ではない為、大気圏を抜けた直後、爆光が目の前に広がっていく。

パイロット達は、すぐに出撃できるように機体に搭乗して待機していた。

『バルチャー2から各機へ。発進後は各機個別に迎撃態勢を取れ』

『了解』

『全機出撃！』



マリアの号令と共にブラウニングの下部カタパルトが展開し、バルキリーが次々と発進していく。

発進後、マリアは先行部隊に通信を入れる。

『こちら統合軍第142航空部隊797特別攻撃隊ブラックバルチャー隊、これより支援します』

『了解。貴部隊の支援、感謝する』

『バルチャー2より各機へ。これより迎撃態勢に移れ』

『了解』

マリアの指示でブラックバルチャー隊は、各個散開してテロリスト迎撃に向かう。

「……」

気が付くとマルスは、自分の機体のコクピットシートにもたれていた。

そして、先程と同じように格納庫の天井を眺めていた。

「あれ？ マルスさんの機体が残ってる」

格納庫に荷物を置きに来たメイアは、格納庫内にポツンと残っているマルスの機体に

気付く。

よく見ると、コクピットから足を放り出している人の姿が見える。

「もしかして、マルスさんですか？」

「……ああ」

メイアの呼び掛けにマルスは、気怠そうな声で返事をする。

「マルスさん、出撃していなかったんですか？」

メイアは、コクピットに掛けられたハシゴを登り、コクピット内でシートにもたれ掛かるマルスに声を掛ける。

「んー……まあな」

メイアの問い掛けにマルスは、相変わらず気怠そうに答える。

「お兄ちゃんから聞いたけど、ネルさん達と喧嘩したんですって？」

「んー……まあな」

「ダメですよ、喧嘩しちゃ。みんなと仲良くしなくちゃ」

メイアの話も今のマルスは、殆ど聞き流している感じだった。

「なあ、メイアちゃん」

「何ですか？」

「メイアちゃんは、ゼントラーデイとかメルトランデイの事は、どう思う？」

「え？ どうって言われても……」

マルスの問い掛けにメイアは、考え込む。

「ゼントラーデイとかメルトランデイは、元々は俺達人間の敵だったんだぜ」

「うーん……確かにマルスさんの言う通りに元を辿ればそうですけど、でもミンメイさんの歌のおかげで、みんな仲良くなっただけですよ」

「ミンメイの歌……か……」

マルスは、ぼんやりと格納庫の天井を見上げる。

「マルスさんは、ミンメイの歌は聴いた事ありますか？」

「いや、全然。ミンメイとか興味は無かったからな」

マルス自身は元々はロックやR & B系の曲を好んで聴く為、リン・ミンメイ等のアイドルソング自体は、全く興味を示さなかった。

「とても良い歌なんですよ。私、気分が落ち込んでいる時には、ミンメイの歌を聴いてるんです」

メイアは、ミンメイの歌を口ずさむ。

——今 あなたの声が聞こえる ここにおいでと 寂しさに負けそうな私に……

格納庫にメイアの柔らかい歌声が響く。

ポイントアルファは、ブラックバルチャー隊が支援に加わったが、相変わらず混戦状態が続いていた。

「VF-17まで出してくるなんて……どうやらテロリストも本気みたいね」

マリア機の前にVF-17が仕掛けてくる。

マリアが搭乗している機体VF-14と同じ製造メーカーであり、後継機でもある。ステルス機能を有し、アーマードバルキリー並みの装甲を持つ機体がテロリストが所有していること自体、テロリストの力の入れ具合も大きいとマリアは感じていた。

「もう一人ぼっちじゃない　あなたがいるから……」

「……メイアちゃん」

「はい」

「メイアちゃんは、ゼントラーディとメルトランディは、人間と共存できると思うか？」

「私は……できると思います。この基地でも多くのゼントラーデイの人やメルトランデイの人が、今まで一緒にやってこれましたから。それに兄以外に身寄りの無い私にとっては、家族みたいなものです」

先程のマルスの問い掛けに対してメイアは、はっきりと答える。

その表情は、自信に満ちていた。

「そうか……」

「マルスさんは、共存できると思いますか？」

「……俺は、共存できないと思う」

「……そうですか」

自身が出した答えとは逆の事を答えるマルスにメイアは、シユンとした表情をする。

「……でもな」

「？」

「メイアちゃんの歌ったミンメイの歌を聴いたら、何となくだけど共存できそうな気がした」

今までゼントラーデイやメルトランデイに対して憎しみを抱き、ましてやミンメイの歌自体に興味がなかった為、彼らと共存する事自体が馬鹿げていると思っていた。

しかし、メイアの歌った歌詞と優しい歌声を聴いたマルスの奥底で少なからず、憎し

みを止めて共存しても悪くはないと言う感情が芽生えてきていた。

そして何より、自分よりも年下の少女が自信を持つて共存できると信じているの自分自身は、くだらない事でイライラしていた事を恥じていた。

「マルスさん……」

マルスの共存を思う言葉にメイアの表情が明るくなる。

「俺、今から出るわ」

「はい、頑張ってください」

マルスはコクピットから起き上がり身支度をし、その間にメイアは急いでマルス機の手輪止めを外す。

機体のエンジンに火を入れて滑走路へと機体を動かし、メイアのハンドサインと共にマルスは大空へと飛び立っていく。

「くっ！」

マリア機は、VF-17から発射されたミサイルをチャフをバラ撒きつつ回避する。

しかし、未だにマリア機の後ろをVF-17は着いてくる。

「何とか反撃のチャンス……」

VF-17のガンポッドをかわしつつ反撃のチャンスを伺うが、VF-17の高い機動性に翻弄されるだけだった。

「これなら!」

マリアは、機体をガウオーク・ファイターに変形させて逆加速でVF-17をやり過ぎそうとするが、VF-17も同じ様にガウオーク・ファイターに変形させて相対速度を合わせようとする。

「動きを読まれるなんて……」

更に別方向からVF-3000が援護にやって来る。

「挟まれた!」

VF-3000から発射されたミサイルをかわすも、後続のVF-17のガンポッドがマリア機に数発命中する。

「キヤアアアアアアア!」

攻撃を受けて、マリア機は失速する。

「?! 出力が上がらない」

VF-14の質実剛健な作り故に撃墜は免れたものの、コンソールパネルにエンジンの出力が落ちている状況が表示される。

マリアは必死になってスロットルを開けるが、エンジンは悲鳴を上げて出力が上がる様子はなかった。

出力が上がらないマリア機を見て、VF-3000とVF-17が追い討ちを掛ける

様に追撃をする。

「あ、ああ……いやああああ!」

徐々に迫り来る恐怖感からマリアが悲鳴をあげた瞬間、VF-3000は突如、爆発を起こし、続けてVF-17も撃ち抜かれて爆発する。

「な、何が起きたの?」

マリアは、突然の出来事に辺りを見回す。

『大丈夫か? 隊長さん』

マルスからの通信を受けて、ふと辺りを見回すと、後方からマルスのVF-11が駆けつけていた。

『マルス……ありがとう』

マルスからの通信を聞き、恐怖感に怯えていたマリアの表情が和らぐ。

『おいおい、エンジンがボロボロじゃないか。早く帰還しないとやられるぞ』

マリア機はエンジン付近に攻撃をモロに喰らい、所々で小さな火花を散らしていた。

『わ、わかったわ』

「俺だけじゃマズいな」

自分一人だけでは護衛が難しいと判断したマルスは、通信回線を開ける。

『バルチャー6から各機へ。バルチャー2が負傷した、誰かバルチャー2が帰還するま



で援護に回ってくれ』

『了解』

マルスの通信を受けて、ちようど近くを飛んでいたタクヤ機とエスター機が駆けつける。

『マルスさん』

『あれ？ あんなにマリア大尉を嫌ってたのに、一体どうしたんスか？』

タクヤは、ブリーフィングに全く参加していなかったマルスが戦場にいる事に驚く。

『まあ、ちよつと色々とあつてな……それよりも隊長が帰還するまで悪いけど援護してくれ』

『了解』

3機はマリア機を援護しながらブロウニングへと向かう。

次々と追撃する機体をマルス機を筆頭にタクヤ機とエスター機がフォーメーションを組みながら撃墜していく。

『マルス、あなた……どうして？』

『怪我をしているんだから喋るな。バルチャー6からホークス』

マルスはブロウニングに通信を入れる。

『こちらホークス』

マルスの通信をアイナが受ける。

『バルチャー2が負傷したし、機体もヤバイ状況だ。間もなくそちらに到着するからカタパルトを開けてくれ』

『了解』

マルスの通信を受けて、ブロウニングは受け入れ準備を始める。

その間にも4機を追撃する手は止む事はなく、三人は必死になって MARIA を護衛しながらブロウニングへと進む。

ブロウニングが肉眼で確認できる距離まで近付くと同時に、ブロウニングは下部カタパルトが展開させて、4機はブロウニングへと帰還する。

『隊長さんは、しばらく休んでな』

『……わかったわ』

『なーに、後は俺達で何とかするさ。タクヤ、エスター、行くぞ』

『了解』

傷ついた MARIA 機を格納庫に残し、3機は再び先行部隊の支援に向かう。

『バルチャー6よりホークス。現在の戦況を教えてください』

『現在、先行部隊と敵部隊との状況は、相変わらず先行部隊が押されている状況です』

『こちら側が不利って奴か……へへ、面白くなってきやがったぜ』

戦況を聞いたマルスは、口元を緩ませながら舌なめずりをする。

『タクヤ、エスター、俺について来い』

『了解』

3機は爆光輝く戦場へと機体を躍らせる。

ブラックバルチャー隊の援護ならびにマルス機の追加支援のおかげで、最初は押され気味だった先行部隊も徐々に盛り返し、VF-19を先頭にした攻撃隊本体が到着した頃には、テロリストの殆どが壊滅状態だった。

『後は我々に任せてください。支援感謝します』

『了解、ホークスーより各機へ。任務完了、全機ブラウニングへ帰還してください』

攻撃隊長との通信を終えて、アイナは帰還命令を出す。

「お疲れ様、マルス」

ブラウニングに帰還したマルスをマリアが出迎える。

しかし、その表情は何処と無く辛そうだった。

「おいおい、大丈夫かよ。そんな身体で！」

フラつく身体で出迎えるマリアの体調を気遣い、マルスは思わず駆け寄る。

「私なら大丈夫よ。ねえ、マルス」

「な、何だよ」

「どうして、急に来たの？」

あれだけゼントラーディを憎み、自分の話も聞かず、そしてブリーフィングにも参加しなかったマルス。

しかし、部隊がピンチになった時に急に駆けつけた事にマリアは、不思議で仕方なかった。

そんなマリアの問い掛けにマルスは、思わず後ろを向く。

「……ちよつとばかり、気が変わった。ただ、それだけさ」

マリアの問い掛けにマルスは、ぶっきらぼうに答える。

しかし、その表情は、どことなく笑っていた。

「……そう、ありがとう」

そんなマルスの言葉にマリアは、少し照れた表情でお礼を言う。

当初、お互いにギスギスしていた雰囲気は、今では感じられなくなっていた。

(マリア大尉とマルスさん、打ち解けられたんだ。よかった)

たまたま、二人の様子を見ていたエスターは、内心ホツとし、そしていつしか笑顔をを見せていた。

軍隊は仲良しこよしをする場所ではないが、それでもギスギスした感じでは士気にも影響が出る事もあるのも事実である。

翌日、メイアは格納庫を通り過ぎるマルスを見つけて話し掛ける。

「マルスさん、おはようございます」

「ああ」

「あれから、マリアさん達と仲直りできましたか？」

「ん？ んー……まあ、多分」

相変わらず、ぶっきらぼうにマルスは応える。

正直な事を言えば、マリアとは多少は和解はできたが、ネルとは未だに蟠りが残っていた。

「今はダメでも、いつかきつと仲直りできますよ。あ、そうだ」

メイアは、バッグから可愛らしい巾着袋を取り出してマルスに渡す。

「これは？」

受け取った巾着袋は、少し大きめでビデオディスクのパッケージが5枚くらい入る程だった。

袋の中身を見ると、ビデオディスクが3枚ほど入っている。

「ミンメイのミュージックディスクです。よかったら聴いてください」

「……わかった。せっかくだから聴かせてもらおうよ」

マルスは、少し照れた笑顔をメイアに見せる。

ミンメイに興味がなかったマルスだったが、昨日のメイアの歌を聴き、いつしかミンメイの曲に興味を持ち始めていた。

「はい。良かったら感想を聞かせてください」

メイアもマルスに笑顔で返す。

「ああ、わかった」

巾着袋を手にもマルスは格納庫を後にする。

「マリア大尉、大丈夫ですか？」

エスターが心配そうにマリアの様子を伺う。

「ええ、大丈夫よ。軽い打ち身だけだから」

マリアは、不安げな表情をするエスターに笑顔で応える。

昨日の出撃で怪我を負ったものの、大きな怪我はなく軽い打ち身で済んでいた。

「まあ、メルトランディだけにアタシ達巨人族は、マイクローンよりは身体が丈夫だからな」

ネルは、自身を含めた強靱な身体づくりを説明して得意気な顔をする。

元々、巨人族は強靱な身体が特徴の為、マリアも地球人であれば大怪我になっていたであろう怪我も、メルトランディ故に軽い打ち身で済んでいたのだ。

「よお、隊長さん」

ちょうど通路の反対側からマルスがやってきて、マリアに声を掛ける。

「おはよう、マルス」

「おはようございませす」

「お前、また喧嘩売りに来たのか？」

マルスを見るなり、ネルは喧嘩腰になり、指をバキバキと鳴らす。

マルスとは和解している訳でもなく、それでなくとも昨日の事をまだ根に持っている様子だった。

「おいおい、待てよ。今日は喧嘩を売りに来た訳じゃねえよ」

マルスは、手をネルの正面に突き出して止める仕草をする。

「それよりも隊長。怪我は大丈夫か？」

「ええ、大丈夫よ。昨日は、ありがとう」

心配するマルスに少し照れながらマリアは応える。

昨日、あれだけ自分に対して暴言を吐いていたのに、怪我をした自分を色々と心配してくれるマルスにマリアは、心の底から嬉しく感じていた。

「よせやい。まあ、俺がいないと隊長は、やってられないもんな」

マリアからのお礼にマルスは、視線を合わせずに照れ隠しに顔をかく。

「その言葉、いつかそっくりお返しするわ」

マリアとマルスは、お互いに少しだけ、はにかんだ笑顔を見せる。

「なあ、エスター。あの二人、いつ仲直りしたんだ？」

マリアとマルスの様子にネルは、エスターに問い掛ける。

昨日まではマリアに暴言を吐いていたマルスが、いつの間にか仲良くなっている様子にネルは、理解ができない状態だった。

「そこは、その……色々とあったんですよ。でも、仲直りできて良かったです」

エスターは、二人のやり取りを見て思わず笑顔になる。

「すぐケンカしたり、すぐ仲良くなったり……マイクローンと言うのは、よくわからん生き物だ」

そんな二人を見ながらネルは、不思議そうな顔をしていた。



## 第9話レディーズ・ファイト

惑星ローグから少し離れた場所にある、宇宙ステーションリゲル。

ブラックバルチャーの任務を取材中に怪我をしたレニスは、ここの医療施設へと搬送されて手術を受けて入院している。

コンコン

レニスの入院しているドアがノックされる。

「どうぞ」

「邪魔をする」

ドアが開いて人が入るが、その人物を見た瞬間、レニスの顔つきが変わる。

見舞いに来た人物は、ブラックバルチャー隊長ドルチェフだった。

「何の用だ？ 俺を笑いにでも来たか？」

ドルチェフを見るなり、レニスは怒りを露わにする。

「そう言うな、見舞いだ」

ドルチェフは鞆から手土産を差し出す。

「いらんー」

「……そうか」

手土産をあつさり拒否され、ドルチェフは手土産を鞆にしまう。

「用が無いなら出て行け！」

レニス右手を強く振って、帰れと言う素振りをする。

「用件はある。お前と7年前の件で話がしたい」

「昔の古傷に塩を塗るつもりか？」

「俺もしたくはないが、どうしても話を聞いて欲しい」

ドルチェフは真剣な眼差しでレニスを見る。

「……」

レニスは、ドルチェフを睨みつける。

ドルチェフは、更に真剣な眼差しでレニスを見る。

しばしの沈黙が続く。

「……まあいい。聞いてやろうじゃないか」

レニスはドルチェフの気迫に負けたのか、睨みつけるのを止める。

「助かる」

「それで、話は？」

「信じてはくれないだろうが、あの事件の首謀者はガルス・バルディアだ」

「お前は、まだ言い訳をするのか」

事件の首謀者をガルスだと力説するドルチェフの言葉にレニスは、呆れて思わず溜め息を吐く。

「俺達三人は、ガルスの反応弾発射に最後まで抵抗したんだ。ギブソン・バーシエス、お前さんの言う首謀者の一人であり、俺達の仲間だ。アイツは、ジェニオスシティへの反応弾発射に最後まで反対したばかりにガルスに殺された」

呆れ顔のレニスをよそにドルチェフは、自分が知っている限りの事件のあらましを黙々と話し続ける。

「?」待て、俺の調べたデータには事件の責任を感じて自殺したと……」

ドルチェフの言葉にレニスは疑問を持つ。

GNNのデータベース上では、ギブソンはジェニオスシティへの反応弾投下により、多くの市民を巻き添えにした事に罪悪感を感じて自殺したと記載されていたのだ。

「自殺だとい!?」統合軍は、事実まで捏造するか」

レニスの言葉にドルチェフは、怒りを露わにして奥歯を噛み締める。

「なあ……」

ドルチェフが統合軍に対して激しい怒りを表す中、レニスが重い口を開く。

「ん?」

「そこまでされて、何故お前さんは統合軍にいるんだ？」

「……俺も、お前と同じ目的かも知れん」

レニスの問い掛けにドルチェフの表情が険しくなる。

「俺達の部隊は、統合軍配属とは言え、世間じや掃き溜めと呼ばれる部隊だ。そんな掃き溜め部隊にいるメンバーの殆どは、ガルスによつて左遷させられたのさ」

ドルチェフは、窓から宇宙を見つめながら黙々と話す。

ガルスにより辺境惑星に追いやられ、それでもドルチェフは必死になつて部隊を築き上げてきたが、その苦労は並大抵ではなかった。

「ちなみに、ジェニオスシティの生存者が俺の隊にいる」

「それは知らなかったな。誰なんだ？」

ドルチェフの言葉にレニスは興味津々に聞く。

「ラナ・ルピナス。あの事件の唯一の生存者だ。報道記者のお前さんも知っているだろう」

「ああ、名前は知っている。確か一時期、唯一の生存者だと世間で色々と言われていたからな。しばらくして、名前を聞かなくなつたと思つたら、お前さんの隊にいるとはねえ

……運命つてのは、不思議なものだな」

レニスは、はにかんだ様に話す。

「反応弾発射から、しばらく経った後に俺とマリアでジェニオステイに調査へ向かった時に偶然、見つけたのさ。俺達のせいで身内を亡くしたラナへのせめてもの罪滅ぼしの為に、俺とマリアで世話をしていた」

少し眉をひそめて、当時を思い出しながらドルチェフは話す。

その表情は、普段見るような厳しい表情とは違い、何処と無く悲しげな雰囲気だった。「お前さんは、彼女にあの事件の事を……」

「ああ、ちゃんと話したし、ちゃんと謝った。それでも俺は、彼女の為に必死になったさ。最初は、心を閉ざしていた彼女も俺やマリアの前で少しずつ笑顔を見せてくれた時は、凄く嬉しかったさ」

ドルチェフの表情が少しだけ笑う。

「やがて彼女は、少しでも俺達に恩返しをしようと思ったのか統合軍に入隊した」

「軍の入隊に反対はしなかったのか？」

「最初は反対したさ。でも、ラナは見掛けに寄らずに芯が強かったから、仕方なくオペレーターとして許可はしたよ。そんな彼女も、ガルスの上命で俺達の部隊に転属させられたがな」

ラナを語る時のドルチェフは、まるで自分の娘の事を話すような感じだった。

「……」

そんなドルチェフをレニスは、黙って見ていた。

レニスにも一人娘がいた。

受材の激務で、色々な惑星へと向かっている為、休暇もロクに取れず、ほとんど家に帰る事ができないレニスにとって、妻から送られてくる娘の成長のビデオレターが唯一の心の支えだった。

しかし、7年前の事件により、その大切な妻と娘は、もう戻ってくる事はない。

ラナの事を嬉しそうに話すドルチェフを見ると、まるで自分の様に思えてならなかった。

レニス自身も仲間に娘の成長を嬉しそうに話していた為、なおさらそう感じていた。

しかし、もう戻ってこない家族の事を思うと、寂しさと怒りが募る。

当初は、ドルチェフ自身に対して怒りを募らせていたが、ドルチェフの真剣な眼差しやラナに対しての想いを聞いているうちに、怒りの矛先は統合軍へと向けてるべきだと思えてきていた。

「どうした、黙り込んで？」

「いやな……お前さん、厳しい顔の割には、そんな事まで考えていたから、人は見掛けによらないなと思ってな。もしかして、彼女もお前さんと居たから、多少は似てきたのかもな」

レニスとは、ドルチェフを少し茶化したように話す。

「フ……確かにそうかもな」

レニスの言葉にドルチェフは、少しだけ口元を緩ませる。

「さて……」

ドルチェフは、鞆を持ち上げて帰り支度をする。

「行くのか？」

「ああ。部下に部隊を任せっきりなのも悪いからな」

「そうか」

「近いうちに、また詫びに来る」

「まあ、また勝手に来てくれ」

ドルチェフの言葉にレニスは、ぶっきらぼうに答える。

しかし、その表情から怒りの表情は消えていた。

ドルチェフは病棟を後にして、ステーションの格納庫へと向かう。

（統合軍は、7年前の事件の詳細する捏造していた。恐らくは、ガルスの指示だろう）

コクピットの中でドルチェフは、物思いに耽る。

（ガルスは確実に統合軍を手中に収めようとしている。ラナの見せてくれた試作機を使つて……）

ラナがハッキングしたデータに映っていた試作機が気になっていた。

マクロス8船団でテスト中の試作機。

そして、そのテストパイロットを担当するガルス。

その機体が完成したとなればガルスは、その機体を使って手始めにマクロス8船団を支配下に置き、そこから徐々に統合軍の実権を握っていくのだろう。

そんな恐怖感が頭の中を過る。

ドルチェフは頭を軽く横に振り、気持ちを切り替えてステーションを後にして、ブラックバルチャー基地へと向かう。

その日の朝、ブラックバルチャー基地内は不穏な空気が漂っていた。

その原因は、マリアとネルが朝から機嫌が悪く、二人が顔を合わせるとお互いに喧嘩腰になっていたからだ。

朝の食堂でも二人は、喧嘩腰状態だった。

その為、他のパイロットやオペレーター達は、ヒヤヒヤしながら二人を見ている。

「ネル、あなたは女性なんだからもう少しおしとやかにしなさい!」

「はいはい。あんまり五月蠅いとシワが増えますよ、マリア大尉!」

相変わらず、行儀の悪い食事の取り方をするネルにマリアは注意を促すが、ネルは聞き流してマリアをからかう。



「なんですって！」

「ほらほら、あんまりカリカリすると余計にシワが増えるよ〜♪」

ネルは舌を出してマリアを挑発する。

「ネル！」

マリアは、挑発するネルの頬を張る。

「いったいわねえ！ なにすんのよ！」

叩かれた頬を押さえてネルは、席を立ち上がる。

「口は災いの元。覚えておきなさい」

「んだと！」

ネルは、怒りに任せてマリアの胸倉を掴む。

「マリア大尉、落ち着いてください！」

「ネルも落ち着けよ！」

その様子を見たメンバーが慌てて止めに入る。

「おーい、みんな！ 見てくれよ、GNNの記事に俺が載ってるぜ！」

そんな状況の中、GNNニュースの記事を見せびらかしながら、タクヤが嬉しそうに食堂にやってくる。

「ほれほれ〜、羨ましいだろう♪」

タクヤの嬉しそうにはしゃぐ様子に食堂内が一瞬静まり、周りの視線がタクヤへと集まる。

「……え？ なになに？ この空気」

タクヤは、状況を理解できずに辺りを見回す。

そして、その重苦しい雰囲気は僅かながらタクヤは読み取る。

「タクヤ、少しは空気を読みなさい」

マリアは、鋭い目つきでタクヤを睨み付ける。

「そうだぞ、ポウヤ。なんなら、そのままアタシが殺してやろうか？」

ネルは、指をバキバキ鳴らしながら、鬼のような形相でタクヤを睨む。

その二人の様子に周りからも「空気を読め」と言う視線がタクヤに向けられる。

「う、うわ。こ、怖え……」

マリアとネルの殺気立った目つきにタクヤの身体は思わず震え上がる。

「タクヤ……タクヤー！」

タクヤの後ろの席から、エスターが小声で手招きをしてタクヤを呼ぶ。

エスターに気付いたタクヤは、二人から逃げるようにエスターの方へと向かう。

タクヤはエスターの向かいの席へと座り、思わず溜め息を漏らす。

「フー……なんだよ、あの二人。アンナにピリピリしやがって」

「僕もわからないよ。朝からあんな感じだよ」

エステルはウインナーを口へ運びながら話す。

「なあ、エステル」

「何？」

「理由を聞いてきてよ」

「えええ……イヤだよ。どうして面倒な事を僕にやらせるのさ」

タクヤは、何かにつけて面倒な事をエステルに押し付けてくる。

その為、毎回毎回エステルが割を食わされており、エステル自身もその事については気付いていた。

「それに、今あの二人に関わると酷い目に遭うから絶対に嫌だよ」

今、いがみ合っている状況下で二人に喧嘩の理由を聞くのは、まさに武器を持たずに戦場に行くようなものである。

理由を聞いた時点でマリアに罵声を浴びせられ、ネルにはボコボコにされるのは明白だ。

そんな事を連想するだけでも身の毛もよだつ思いがエステルの脳裏を過る。

そんな事を思いつつもエステルは、マリアとネルの様子をこつそりと覗く。

マリアとネルは、お互いにいがみ合ったまま食事を口へと運んでいる。

その様子を他のメンバーも恐る恐る見ている感じだった。

「どうよ?」

「うーん……あの様子だと、話し掛けたら酷い目にあうかも……」

エステルは、二人の様子を見て溜め息を吐く。

「あ! もしかして二人共、アノ日とか?」

「タクヤ!」

タクヤの言葉にエステルが思わず反応して咎める。

女性那不機嫌になる理由は多々あれど、男性からその言葉を出すのは失礼に値するとエステルは思ったのだろう。

「冗談だよ冗談。でも、あの様子じゃ、しばらく続くと思うぜ」

「えー、あんまり続いて欲しくないなあ……」

タクヤの言葉にエステルは苦笑いをする。

しばらく二人に近付くのは止そうと、そうエステルは心の中で思うのだった。

「あ、そうだ。GN N ニュースに俺達の事、書いてあるぜ」

話題を切り替えてタクヤは、GN N ニュースの記事をエステルに見せる。

「あ、本当だ。ヒロキさん、レニスさんの件で落ち込んでいたけど、頑張っていたんだね」

エステルは、まるで自分の様に嬉しそうに記事を読む。

記事の内容も統合軍の掃き溜めと呼ばれているイメージを払拭するかの様に少し鼻  
眞目に書かれており、そこにはタクヤとエステーの写真も掲載されていた。

「……………」

ある程度の記事を読んだ後、エステーの記事を読む目が止まる。

「どした？」

エステーの様子に気付いたタクヤが思わず覗き込む。

「あ、ううん。なんでもないよ」

覗きこむタクヤにエステーは、笑顔で応える。

「ならいいけどさ。さてと、腹減ったからメシでも食おうっと」

タクヤは、そのまま配給所に食事を取りに向かう。

タクヤが席を離れるのを確認したエステーは、再び記事を開いて読み始める。

『統合軍幹部に闇献金疑惑!! 移民船団独自の新型可変戦闘機開発に関して開発資金  
を提供か?』

小さい文字ではあるが、記事の見出しが記載されている。

(……………もしかして、この事って父さんも関わっているのかな?)

記事の見出しにエステーの表情が険しくなる。

記事には、統合軍所属の新マクロス級大型移民船団マクロス8船団において、新型可

変戦闘機の開発が始まったと言う内容だった。

今までは、統合軍経由で新星インダストリー社ならびにゼネラルギャラクシー社で開発されるケースであったが、今回は船団独自の開発の為、この開発資金に関して統合軍幹部が開発資金の援助をしているのではないかと言う事だ。

エスターは一人、黙々と記事の内容を固唾を飲みながら読んでいた。

その日の午後、統合軍参謀本部からブラックバルチャー基地へ任務要請の連絡が入る。

任務要請の連絡を受けてパイロット達は、ブリーフィングルームへと集められてブリーフィングが行われる。

「12:49、ブリーフィングを始め……」

「ブリーフィングを始める前に……」

ラナの言葉を遮りマリアは、辺りを見回す。

そして、その視線はネルへと向けられる。

「ネル」

「何だよ？」

「人の話を聞く時は、姿勢を正しなさい」

先程からネルは足を机の上に乗せて椅子にもたれ掛かっていた。

他の者から見てもネルの姿勢は、どう考えても人の話を聞く態度ではない事は明らかだった。

「そんなの別にいいだ……」

ネルが言い切る前にネルを見るマリアの目は殺気に満ちていた。

その殺気立った視線にネルは、身の毛がよだつ恐ろしさを感じた。

「わ、わかったわよ」

殺気を感じ取ったネルは、慌てて姿勢を正して椅子に座り直す。

（うわあ……あのガサツな姉ちゃんですら言う事を聞かせるなんて、やっぱりマリアって、すっげーんだなあ）

二人のやり取りを見て、初対面で頬を叩かれたタクヤは、改めてマリアの怖さを思い知らされるのだった。

「さて……先程、統合軍参謀本部よりポイントガンマの小惑星群に所属不明の建造物の調査依頼が来しました」

気を取り直してマリアは、任務内容を説明する。

「映像、映します」

ラナはディスプレイにポイントガンマの映像を映す。

ディスプレイには、ポイントガンマとブラックバルチャー基地のある惑星ローグとの

距離と統合軍から送られてきたポイントガンマ付近の映像が映し出される。

「前は反統合政府軍が武器の搬送をしていたけど、今回はステーションの建造……ポイントガンマは隠れ蓑にはちょうどいい場所ね。これより1時間後にポイントガンマへと調査に向かいます」

前回は反統合政府軍が武器の搬送作業に使用しており、ブラックバルチャー隊の活躍により一蹴されていた。

しかし、あくどい事をする人間程、人目のつきにくい場所で活動をする習性がある為、この場所を使い勝手が良い様である。

「なお、統合軍参謀本部からは、場合によつては建造物の破壊も辞さないとの命令です」  
ラナは任務に対しての補足説明をする。

「それならさあ、最初っからステーションをぶっ壊しちゃえばよくね?」

タクヤがラナの補足説明に対してツツコミを入れる。

「タクヤ、我々の任務はステーションの調査が最優先よ。勝手な真似したら遠慮なく撃たせて貰うから、それくらいの覚悟はしておきなさい」

タクヤのツツコミにリアは、冷静に応える。

しかし、その冷静な対応の割には言葉に毒もあり、とても冗談を言っている様な雰囲気には見えなかった。



(うわあ……何気に怖い事を平気で言ってるよ。コレ、俺が下手な事をしたら絶対に殺すつもりだ)

タクヤはマリアの言葉に対して恐怖感を覚え、いつしか額から冷や汗が流れていた。「念の為、ツールとカイルの機体には偵察装備を施します」

「了解」

「各自出撃準備」

マリアの号令でパイロット達は、ブリーフィングルームを後にして出撃準備をする。

「さうて、出撃まで時間あるし暇だなあ」

ブリーフィングを終えてタクヤは、大きなあくびをしながら思い切り伸びをする。

「タクヤ、そんな事を言うとは、またマリア大尉に怒られるよ」

のんきそうに出撃準備をするタクヤをエスターが咎める。

「大丈夫だって……どした？」

咎めるエスターの表情が青ざめている事に気付いたタクヤは、そのまま後ろを振り返る。

その振り返った視線の先には、殺気立った目つきで睨むマリアの姿があった。

「さ、さうて、準備準備」

タクヤは、急ぎ足で逃げる様に格納庫へと向かう。

「待ってよ、タクヤー！」

エスターも急いでタクヤの後を追い掛ける。

「…………ふう。もう、タクヤには困った者ね」

タクヤの任務に対しての軽い考えに MARIA は、頭を悩ませる。

毎回任務遂行時も自分で勝手に行動をする事が度々あり、その都度ドルチェフ達がフォローに回る事が多い。

何度注意しても直す様子が無い為、本来は営倉入りの処遇をしたいのだが、元々ブラックバルチャー自体パイロット不足の為、どうしても人数合わせの為にタクヤが必要となってしまう。

「ドルチェフ、普段はあまり顔には出さなかったけど、こうやって同じ立場になってみると本当にタクヤに対しての気苦労が分かる気がするわ」

ドルチェフもこの件に関しては毎回ボヤいていた為、MARIA は改めてドルチェフがタクヤの態度に関して悩んでいる事を実感する。

ブリーフィング後の格納庫では、各パイロットは自分達の機体のチェックや整備を行い、ミラン達メカニックマンは宇宙用装備の換装作業や弾倉装填チェックに大忙しだ。

格納庫に逃げてきたタクヤとエスターも真面目に自分達の機体調整を行っていた。

パイロット達が機体点検で忙しい中、ネルは食堂でのんきに食事をしていた。

「やっぱりハンバーグには、デミグラスソースをたっぷりかけてないとな♪」

ネルは、デミグラスソースをたっぷりかけたハンバーグにフォークを刺して一口で平らげる。

「あー、おいしい〜♪」

ネルは、ハンバーグの美味しさに気分上々だった。

「ネル」

後ろから自分を呼ぶ声が聞こえたので振り返ると、そこにはマリアが鬼のような形相で立っていた。

「出撃準備中に食事なんて、いいご身分ね」

「別にいいでしょ！ 腹が減っては戦は出来ぬって言うじゃない」

マリアの言葉にネルは食ってかかる。

「あのね、ネル。みんなは出撃準備で機体チェックや整備で忙しい状況なの。わかるわね？」

「そんなの、わかってるわよ！」

マリアの小言にうんざりしたしたネルは、ぶっきらぼうに答えて食器を片付ける。

「フンだ！」

マリアにあかんべーをして、ネルは食堂を立ち去る。

「ふう……」

そんなネルの態度にマリアは、重い溜め息を吐く。タクヤでも色々とし気が重い状態なのに更にネルが加わり、マリアにとっては悩みの種が増えて余計に頭が痛くなる。

1時間後、バルキリーを艦載したプロウニングはポイントガンマに向けて発進する。パイロット待機室でタクヤとエスターは、時間まで談話をしていた。

「ねえ、タクヤ」

「ん？」

仮眠用ベッドで横になっていたタクヤにエスターは話し掛ける。

「僕達の最初の任務もポイントガンマだったよね」

「ああ、そういやそうだったな」

「あの時は、本当に緊張したよ」

当時を思い出したのか、エスターの表情が少しだけ曇る。

初めての任務への参加。

初めての实战に恐怖感で心臓がドキドキした事。

そして、任務を終えて無事に生き残る事が出来た時の安堵感。

当時は初めての任務で不安な事や恐怖感でいっぱいだったが、今思い返すと初任務か

ら2ヶ月が経とうとしているが、その不安や恐怖感も懐かしく感じてくる。

「そうだよなあ……なあ、話変わるけどさ」

「何？」

「マリア大尉とあの姉ちゃんのケンカって、いつまで続くか昼飯を賭けないか？」

「え？ うーん……まあ、お昼ご飯くらいならいいかな」

「じゃあ、俺は1週間」

「僕は、そうだなあ……うーん……」

タクヤの返答に対して、エスターは少し考え込む。

「じゃあ、僕は1日〜2日かな」

「みじかつ！」

エスターの答えにタクヤは、思わずツツコミを入れる。

「え、そうかな？」

「絶対短いって。あの二人の様子じゃ絶対に長引くと思うぜ。さくてと、昼飯は何を奢ってもらうかなあ〜♪」

タクヤは、既に賭けに勝った気分の上機嫌だった。

そんな上機嫌のタクヤを見て、エスターは思わず苦笑いをする。

「まもなく、ポイントガンマです」

リーダーにブロウニングとポイントガンマの距離が映し出される。

「ラナ、発進準備」

ラナの報告にマリアは、発進準備を促す。

「了解」

『パイロットに通達、まもなくポイントガンマに到達。各パイロットは出撃準備。繰り返し……』

「さあて、出撃出撃」

艦内放送を聞いたタクヤはベッドから飛び上がり、部屋から飛び出す。

「タクヤ、ヘルメット忘れてる！」

ヘルメットを持たずに部屋を飛び出すタクヤにエスターは、声を掛けてヘルメットをタクヤに投げ渡す。

「サンキュー！」

ヘルメットを受け取ったタクヤは、一目散に格納庫へと向かう。

「……もう」

エスターもタクヤに続いてヘルメットを脇に抱えたまま部屋を出て格納庫へと向かう。

つ。  
ラナの艦内放送を聞いたパイロット達は格納庫へと向かい、機体に搭乗して出撃を待

『バルチャー2より各機へ。出撃後は前回同様に小惑星群を抜けてステーションまで進路を向けて、ステーション付近で待機。向こうからの攻撃があるまでは、こちらからの攻撃は一切禁止する』

『了解』

『トールとカイルは、ステーション付近に到達後ジャミングをお願い』

『了解』

マリアはブラックバルチャー隊へ作戦開始後の指示をパイロット達へと促す。

『それから……タクヤとネル』

『ん？』

『何よ』

『間違つても、いきなりステーションに攻撃を仕掛けないでよ』

『んだそれ！』

『ふざけんな、ゴルア！』

マリアの馬鹿にした様な通信にタクヤとネルは、怒りの感情に任せて罵声を入れる。

『エスター、二人をキチンと監視しておいてね』

『りよ、了解』

(何だか僕って、こんな役割ばかりだなあ……)

マリアの通信にエスターは不安混じりの溜め息を吐く。

毎回毎回タクヤのフォローに回されている事にエスター本人も気付いており、その事に関して多少なれど不満は感じている。

しかし、タクヤ自身をフォロー出来るのは自分しかないと言い聞かせているのだ。た。

「出撃！」

ブラウニングの下部カタパルトが展開し、マリアの号令と共にバルキリー隊が次々と出撃する。

『バルキリー隊、射出完了を確認。これより本艦は戦線を離脱後、ステルスモードに移行します』

ラナの通信が入り、ブラウニングは戦線から離脱する。

『間もなく小惑星群に接近します』

『了解。これより小惑星群に突入する』

しばらくして、ブラックバルチャー隊は小惑星群に突入を開始する。

流星に学習したのか、タクヤは前回の出撃時の反省を活かして落ち着いて小惑星群を



回避していく。

『今度は大丈夫だね』

次々と小惑星群を通り抜けるタクヤを見たエスターが通信を入れる。

『当たり前だつて、この俺が同じ事を繰り返すかつての』

小惑星群を切り抜けながらタクヤは、余裕の表情を見せる。

タクヤ達が小惑星群を切り抜ける一方、ネルは初めての小惑星群突入に苦戦していた。

「ちよつと、みんな待つてよ！」

暗闇から突如現れる小惑星群にネルは機体を毎回毎回ガウオーク・ファイター形態に変形させながら切り抜ける。

『ネル、遅れずに付いて来なさい』

小惑星群に戸惑い部隊からはぐれそうになるネルに MARIA が通信を入れる。

『そんな事言つたつて、バルキリーで小惑星群で操縦するの初めてなのよ！』

『ネル、言い訳をしている暇があつたら、ちゃんと着いて来なさい』

ネルの言い分も聞かないまま MARIA からの通信は切れる。

「何よアレ、感じわつるうううう！ 超ムカツク！」

MARIA の通信にネルは、怒りをぶちまけながらも必死に操縦しながら小惑星群を抜け

ていく。

やがて小惑星群を抜けると、目の前にステーションらしき建造物が見えてくる。

ステーション付近には大型艦クラスと標準艦クラスを併せても10隻以上が停泊していた。

ブラックバルチャー隊は機体をガウオークに変形させて付近で待機し、その間にマリア機は艦隊に通信を入れる。

『こちら統合軍所属ブラックバルチャー隊マリア・ランカスター。貴艦の所属をお聞かせ願いたい』

しかし、マリアが通信を入れた途端に艦隊はブラックバルチャー隊に向けて攻撃を開始し、それと同時に艦載機が次々と出撃する。

『バルチャー2より各機へ。各機散開して迎撃態勢を取れ。なお、艦載機の迎撃を優先し艦隊への攻撃は砲台へのみ許可する』

『了解』

マリアの通信を受けたブラックバルチャー隊は、散開して迎撃態勢を取る。

戦場は次々と爆光が輝いていく。

今の所、戦況はブラックバルチャー側が優勢だった。

マリアはミサイルの照準を攻撃を仕掛けてくる4機のVF-5000に合わせる。

そしてトリガーを引こうとした、その瞬間、4機のVF-5000は遠方からの攻撃により次々と撃墜されていく。

「え!？」

突然の事にマリアが辺りを見回すと、そこにはネルのVF-11の姿があった。

『ネル!』

『大尉がのんびりしてるから、アタシが代わりに片付けてあげたのよ♪』

マリアを挑発するような言葉を残し、ネル機は別の敵を探しに飛んで行く。

「何よ、ネルったらー!」

敵機を探しに飛んでいくネル機をマリアは恨めしそうに視線で追っていく。

ネルが敵機を探していると、レーダーに敵機の姿が映し出される。

「来た来た」

ネル機の前方より、3機のVF-5000が迫る。

「カモンカモンカモン……」

ネルは敵機にミサイルの照準を次々と合わせていく。

「よし、もらった!」

ネルがミサイルのトリガーを引こうとした、その瞬間、3機のVF-5000が次々と爆発する。

「え!？」

ネルが辺りを見回すとマリアのVF-14が見えた。

『何すんのよ!』

『あら、さっきの御礼をしに来てあげたのよ』

マリアは、ネルからの抗議を鼻で笑う。

『んだと!』

『さっきネルが私に言った言葉を、そっくりそのままお返しただけよ』

再びマリアは鼻で笑う。

『ぐ……ぐああああああ! ……こんのおおおお!!』

マリアに鼻で笑われた事で今まで小言などを言われて溜まっていた鬱憤が爆発したのか、ネルは感情に任せてマリア機にミサイルの照準を合わせると同時に次々とミサイルを発射する。

「な!？」

突然の事にマリアは驚くが、機体を後退させながらガンポッドの照準をミサイルに合わせて次々と迎撃していく。

『何をするの!』

『うるさいうるさいうるさい! ……人を馬鹿にして……もう我慢できない、これでも食

らええええええええ！』

ネル機は、そのままマリア機に目掛けてガンポッドを連射する。

『やめなさい、ネル！』

攻撃をかわしながらマリアはネルに必死に呼び掛ける。

しかし、怒りの感情が高まっている為、マリアの必死の呼び掛けもネルは全く届く事はなく、攻撃の激しさは増していく。

ついにマリア対ネルの壮絶なドッグファイトが展開されるのだった。

『な、なあ……あれ、大尉とネルじゃないか？』

『ホントだ……何やってんだ？ あの二人』

ブラックバルチャー隊のパイロット達は、マリアとネルのドッグファイトを見て呆然としていた。

『アンタは、いつもいつつも口うるさいのよ！』

ネル機は、マイクロミサイルをマリア機に次々と撃ちまくる。

『ネルがいつもだらしなからでしよ！』

きりもみ回転をしながらマリア機は、小惑星郡を盾にして次々とミサイルをかわしていく。

『そう言うネルこそ、少しは女性らしくしなさい！』

ミサイルをかわしたマリア機は、バトロイドに変形して小惑星郡に身を隠しつつホーミングミサイルを発射する。

『うるさいわね!』

ネル機はバトロイドに変形して回転しながらミサイルを撃ち落とし、再びファイターに変形して小惑星郡に突入する。

『そんなに怒ってばかりだと、シワが増えるわよ! 4×8∥32つて感じで32本くらいね!』

ネル機は、その言葉通りに32発のマイクロミサイルをマリア機に次々と撃ち込む。『余計なお世話よ!』

マリア機はチャフをバラ撒きつつ、バレルロールで次々とミサイルを回避して小惑星郡を抜ける。

『くっそー! 何で当たらないのよ!』

なかなか攻撃が当たらずネルは歯軋りをする。

『あなたとは実力が違うわよ』

その様子を見たマリアは、ネルを鼻で笑う。

『フンだ! どうせ、その機体を使わないと勝てないくせに』

ネルは舌を出してマリアを挑発する。

実際にマリアはVF-14、ネルはVF-11に搭乗しており、その性能差は歴然であった。

元々ゼントラーデイの機体しか操縦した事がなく、ブラックバルチャー入隊後にバルキリーを操縦し、それでもVF-11でVF-14に食らいついているネルの実力は大了したものである。

『!? ネル……どうやら、私を本気にさせたわね』

ネルの何気ない一言に、ついにマリアはキレた。

マリアはガンポッドと機銃、そして全ミサイルの照準をネル機に合わせる。

「な……何かヤバそうな雰囲気？」

コクピットにロックオンレーダーが表示され、ネルはマリア機の雰囲気を感じて回避行動に移る。

『それでも食らいなさい!』

ありつたけの攻撃がネル機に襲い掛かる。

『ちよ、ちよつと待ってよ!』

ネル機は、小惑星群に突入して小惑星を盾にして攻撃をかわす。

しかし、追い討ちを掛けるかの如くマリア機がネル機を追い掛ける。

『た、タンマタンマタンマ!』

ネルは、逃げながらマリアに必死で命乞いする。

『ネル……私を怒らせた事を後悔させてあげるわ』

マリアがネル機に照準を合わせてトリガーを引こうとした、その時、

『お前達、何をやっているんだ!』

突如ドルチェフの怒鳴り声が二人に入る。

『ドルチェフ!?!』

『隊長さん!?!』

突然の怒鳴り声に二人が辺りを見回すと、暗闇の影からドルチェフのVF-14の姿を現す。

『お前達、戦場から離れて何をしている!』

『そ、それは……』

ドルチェフの問い掛けにマリアは、しどろもどろする。

『え、えーつとお……そ、それよりも隊長さんがどうしてココにいるのよ?』

自分達がドンパチしている事を知らないはずのドルチェフが突然やって来た事にネルは、疑問を感じていた。

『見舞いを終えて調べ物をしに行こうと思つたら、たまたまプロウニングの姿を見て加勢に来たんだ。そうしたら、お前達二人が突然戦場を離れたとカイル達と言うから様子



を見に来たら、このザマだ。それより、すぐに戦場に戻れ！ 話は後で聞く』  
『了解』

ドルチェフ機に続いてマリア機とネル機も戦場へと戻っていく。

戦況はマリアとネルが抜けた影響で、ブラックバルチャー側が不利な状況に立たされていた。

その穴埋めの為にパイロット達は、必死になって応戦する。

「うわー！」

敵の攻撃を受けてカイル機のガンポッドが右腕ごと吹き飛ばされる。

『大丈夫か、カイル！』

カイルの状況を見たマルスが心配して通信を入れる。

『ぼ、僕の方は、なんとか大丈夫だけど……』

カイルは、自分の体調よりも先に直ぐ様機体の状況やコンソールパネルを確認する。

『く……駄目だ、さっきの攻撃のショックで電子系統までいかれて来てる』

カイルは、パネルスイッチを色々弄るが、ディスプレイの一部は砂嵐状態で表示されていた。

『カイル、無理するな。援護するから下がれ』

『りよ、了解』

マルスの通信を受けてカイル機は、戦場から徐々に後退をし始める。

『バルチャー6より各機へ。バルチャー4が損傷を受けている。後退するまで誰か援護に回ってくれ!』

『了解』

マルスの通信を受けて、マルスとカイルの近くを飛行していた機体が援護に向かう。

『カイル、通信と索敵は俺が代わりにやっておく』

トールがカイルに通信を入れて索敵を行う。

『すまない、トール』

『まったく、こんな時にマリア大尉とネルは何をやってるんだよ!』

援護に来たフォルトが思わず愚痴をこぼす。

『みんな、大丈夫か!』

ブラックバルチャー隊パイロット全員にドルチェフの通信が入る。

ドルチェフの機体先頭にマリア機とネル機が戦場に姿を現す。

その姿にパイロット達の表情が明るくなる。

『隊長』

『よし、隊長が加勢に来たんだ。形勢を逆転させるぞ!』

『おう!』

ドルチェフの加勢により、ブラックバルチャー隊の士気が高まる。

『マリア、ネル。このままフォーメーション6で仕掛ける』

『了解』

『ええええ！ アレ、ニガテなのになあ……』

フォーメーション6の言葉にネルは、愚痴をこぼす。

ネル自身、未だにフォーメーション6のシミュレーション成功確率が低いのだ。

『グダグダ抜かすな、行くぞ！』

ドルチェフ機を先頭にマリア機とネル機が続く。

艦隊周りの機体に照準を合わせて3機は、一斉にミサイルを掃射して、そのままミサイルを追いかける形で突撃する。

3機は、ミサイルの迎撃態勢をする機体とその周辺の機体に向けて、次々とガンポツドを浴びせて撃墜して行く。

『マリア、コンマ0.13遅れている。ネルはコンマ0.15だ』

『了解』

『了解！』

(そんなこと言ったって、こっちはVF-11なんだから合わせるの難しいに決まっているじゃない！)

ネルは心の中でドルチェフに文句を言う。

実際にドルチェフとマリアの機体はVF-14であり、ネルはVF-11である為、エンジン推力や出力は断然違う。

しかし、どんな機体でもパイロット次第では上位機体を上回る実力を発揮できるのも事実である。

『バルチャーより各機へ。俺達がフォーメーション6を完了後に照明弾を上げる。その後に全機フォーメーション9だ』

『了解』

『いぐざー！』

3機は、そのまま艦隊へと向かう。

そして、砲台に照準を合わせて次々と撃破して行く。

砲台への攻撃を終えた後、3機は艦隊から離脱して、ドルチェフ機は照明弾を放つ。

照明弾を確認したブラックバルチャー隊は、フォーメーション9を編成して、艦隊の外側から回り込んで一気に艦隊へ向けてミサイルを掃射する。

ミサイルは艦隊や艦隊周辺の機体に次々と命中し、爆発を起こしていく。

やがて攻撃する気力が尽きたのか、艦隊から降伏宣言の閃光弾が放たれた。

後に銀河パトロール隊の調べでステーションは、テロリスト達の拠点として建造され

ていた事が判明した。

その件を踏まえてドルチェフは、パトロール強化の案をパトロール隊へと提言する。無論、この案がすんなりと通る訳がない事は、ドルチェフ自身も理解はしていたが、何もしないよりはマシだと心の中で思っていた。

任務を終えて、ブラックバルチャー隊は基地へと帰還する。

基地へ帰還後、マリアとネルはドルチェフの部屋へと出頭を命じられる。

出頭を命じられたマリアとネルは、お互いに気まずい表情をしつつも揃ってドルチェフの部屋へと入る。

「何故、出頭を命じられたか……わかってるな」

「はい」

「……」

ドルチェフからの問い掛けにマリアもおネルもお互い黙り込む。

「他の者から聞いたが、戦闘中に勝手に戦場を離れて、しかも味方同士でドンパチ……何を考えているんだ？」

「はい……」

マリアは、顔を下に向けたまま返事をする。

ネルは殺気立った表情のドルチェフの表情が怖いのか、ずっと黙ったまま下を向いて

いた。

「他にも俺がいない間にマリアもネルもケンカをしていたみたいだな……その理由は何だ？」

「そ、それは……」

ドルチェフに喧嘩の理由を問い質されてマリアは、言葉を詰まらせる。

「それは……マリアが悪いんだ！」

マリアが言葉を詰まらせる中、突然ネルが口を開く。

「!? どういう事だ？」

ネルの突然の告白にドルチェフは驚く。

「だって、マリアがアタシが最後に食べようと思っていた残りのデザートを食べたんだよー！」

「……はあ？」

ネルの説明にドルチェフは、口をあぐりと開ける。

「そもそも、あれはネルの物じゃなかったでしょ！」

ネルの説明にマリアが反論する。

「いいや、あれはアタシがツバつけておいたのよ！」

「カウンターに置きっぱなしだったじゃない」

「それでもアレは、アタシの物だったんだ！」

「勝手に決めないの！」

「ぐ、ぐぐぐぐぐぐ……」

二人のやり取りにドルチェフの手がプルプルと震える。

そして、

「バカか！ お前達はあああああああああああ！」

ドルチェフの怒号がブラックバルチャー基地全体に轟く。

その瞬間、基地に駐在していた全員の動作が一瞬だけ止まる。

「まったく何事かと思ったら、そんなくだらん理由でケンカをするな！」

「はい……」

「すみません」

「それとだな……」

それからしばらく、ドルチェフのお説教時間が約3時間ほど続く。

ドルチェフの部屋を出た二人の表情は、疲労感たっぷりの顔だった。

「つ………疲れた」

「そうね。コレに懲りたら、もうケンカなんてよしましょう」

「そうだね」

「フフ……」

ネルの顔を見てマリアは微笑み、ネルも笑い返す。

今思い返すと、なんて馬鹿な理由で喧嘩をしていたのだろうか？

今の二人は、そんな感じで思い返していた。

次の日、あのピリピリ感を醸し出していた二人は、どこへ行ったのかと思わせるくらいに、いつもの仲の良い二人に戻っていた。

二人のやり取りを見ていた他のメンバーも、ホッと胸を撫で下ろしていた。

「……」

そんな二人を見ていたタクヤは、一人でバツが悪そうな表情をしていた。

「おはよう、タクヤ」

「エ、エスター……」

エスターに話し掛けられてタクヤは固まる。

「約束、忘れてないよね？」

「え？ なんだっけ？」

「賭けの事だよ」

エスターの言葉にタクヤは、引き攣った表情をする。

「あ、ああ……あれね」



エステーに MARIA とネルの仲直り日数の事で昼食を賭けた事を思い出されて、タクヤの額から脂汗が流れる。

「賭けをした次の日には仲直りしてるっばいから、この賭けは僕の勝ちだよ」

エステーは、いたずらっぽく勝ち誇った笑みを浮かべる。

「あ、ああ……なあ、エス……」

「ダメ」

「ちよ、まだ何も言っていないだろ！」

「タクヤの事だから、どうせ適当な事を言っただけで誤魔化すつもりだったんでしょ？」

「うう」

どうやら凶星だったらしく、タクヤの表情が、ますます引きつる。

「僕、今日はDセットとデザートにチョコパフェモンスタースターが食べたいなあ〜♪」

エステーは、タクヤに聞こえるように呟く。

「はいはい、わかりましたよ！」

エステーの呟きを聞いたタクヤは、もう逃げられないと思い、やけくそに答える。

「じゃあ、そうと決まったら食堂に行こう」

「え？ まだ昼前じゃん」

「そうだけど、前倒してもいいでしょ」

エステーは、タクヤの背中を強く押す感じで食堂へと向かう。

背中を強く押されてタクヤは前のめりになりそうになりつつも、強制的に食堂へと歩かされる。

「コラ、エステー。背中を押すんじゃないやねえよ！」

「ダメダメ。僕が押さないとタクヤは、また逃げるもんね」

エステーはニコニコしながら嬉しそうにタクヤの背中を押している。

（クソ、あの二人何ですぐに仲直りするんだよ！）

エステーに背中を押されるタクヤは、恨めしそうにマリアとネルを見ていた。

## 第10話 スナイプ・スナイパー

その日、フォルトは朝からワクワクしながら哨戒任務に就いていた。

『どうしたフォルト？ 朝からニタニタして』

その様子に気づいたアーサーが通信を入れる。

『今日は注文した荷物が届くのさ』

フォルトは、更に嬉しそうな笑みをアーサーに見せる。

フォルト達が哨戒任務に就いている最中、1隻の大型輸送船が惑星ローグ付近にフォールドアウトする。

「おお、あれか？」

大型輸送船を視界に捉えたフォルトは、大型輸送船の行く末を目で追う。

フォルトの予想通り大型輸送船は、そのまま惑星ローグ内に大気圏突入を開始する。

『なあ、アーサー、ポール。今日の哨戒任務はこれくらいにしないか？』

大型輸送船が気になるフォルトは、二人に通信を入れる。

『勝手に終わっちゃって良いのかなあ？』

フォルトの通信にポールは、まだ哨戒任務を始めて10分しか経っていない状態で任

務を終える事に不安を見せる。

『大丈夫大丈夫。僚機の機体に異常が起きたから帰還するって事にしておくから』

ポールの不安をよそにフォルトは楽天的に応える。

『フォルト、後で俺とポールを巻き込むなよ』

『わかったわかった』

アーサーの苦言を右から左に流してフォルトはブラックバルチャー基地へ通信を入れる。

『バルチャー7からブラックバルチャー基地』

『はい、こちらブリッジ』

フォルトの通信にアイナが応答する。

『悪い、僚機の機体に異常が見つかったから、これより任務を終えて帰投する』

『? 誰か調子でも悪いの? モニタリングには機体の異常は特に見当たらないけど?』

アイナは、モニターに表示される機体情報を見ながら返答をする。

アイナの返答を聞いてフォルトは、表情を引きつらせる。

『あ、ああ……ちよつとポールの機体の調子だな』

アイナと通信をしつつフォルトは、必死にポールにアイコンタクトを送る。

『あ、ああ……ま、まあ……何だかセンサー系とかその他諸々がおかしいんだ』  
フォルトのアイコンタクトにポールは、しどろもどろしながら応える。

『了解。じゃあ、隊長には私から伝えておくわね』

『お、おう、よろしく』

通信を終えたフォルトは嘘がバレなかった事に安堵の表情を見せる。

『ふう……危うくバレるかと思っただぜ』

『フォルト、本当に大丈夫なのか？』

三人のやりとりを見ていたアーサーは、怪訝そうな表情をしていた。

『は、ハハハ……』

アーサーの表情にフォルトは、ただ苦笑いをするのみだった。

フォルト達が帰還すると、既に大型輸送船は基地に到着しており、作業用デストロイド達が荷物の運搬作業を始めていた。

基地に帰還すると同時にフォルトは、一目散に大型輸送船に向かい、運び込まれる荷物をキョロキョロと探し始める。

「フォルトさん、注文していた品物ならこっちですよ」

「おう、そっちな」

荷物を探すフォルトを見掛けたミランは、荷物の場所を案内する。

大型輸送船から運ばれてきた物資の中に一際目立つ大きな資材があった。  
「中身を開けてくれ」

ミランの指示で作業用デストロイドは、その大きな資材の梱包物を解く。  
解かれた梱包物の中からは、大型の銃が顔を覗かせた。

「うお……やつぱり、でっけえなあ」

フォルトは大型の銃を見て、改めて梱包物の大きさに圧倒されていた。

「俺も実物を見るのは初めてですが、本当に凄い物を注文しましたね」

ミランもフォルト同様に圧倒されていた。

「やあ、フォルト」

運搬作業の様子を見て来ていたカイルがフォルトに声を掛ける。

「よお」

「へえ、コレがフォルトの言ってた……」

カイルは、まじまじと巨大な銃を見る。

「大きいなあ……」

フォルトやミランと同様にカイルも銃の大きさに圧倒されていた。

「だろ？ 結構な値段だったんだけど、曰くつきと言う事で俺の給料3ヶ月分くらいの  
値段に値切って貰ったんだぜ」

腕組みをしながらフォルトは、カイルに自慢げに話しながら銃の方に視線を向ける。  
「曰くつきゃー」

「ああ、今回の銃は実弾式とビーム式と切り替えられるタイプなんだけど、ビーム出力時の調整が色々と難しいらしくて、失敗したらジェネレーターが暴走して、ドカーンらしいのさ」

「へえ……それはまた」

脳天気話すフォルトにカイルは、他人事ながら心配になっていた。

「ああ、早くコイツを試し撃ちしたいなあ〜♪」

新たな銃を手に入れたフォルトは、早く試し撃ちをしたい気持ちが高ぶり、銃を撃つ仕草をする。

「これからすぐにコイツを撃つのかい？」

「いや、曰くつきだから、ちよつとばかし機体の改造が必要なのさ。だからミラン達に協力して貰って色々調整しなきゃいけないんだよ」

「そうなんだ」

「フォルトさん、そろそろ改修作業を始めますか？」

運搬作業を終えて様子を見に来たミランがフォルトに声を掛ける。

「ああ、そろそろやるかな。じゃあな、カイル」

「ああ、またな」

カイルと別れて、フォルトはミランと合流して格納庫へと向かう。

「どうだ、ミラン」

ミランは、銃の仕様書を隅々まで読み始める。

時折VF-11の仕様書も読みつつ、交互に銃の仕様書も読んでいく。

しかし、その表情は段々と険しくなっている。

「うーん……このタイプですと、VF-11では出力がかなり不足してますね」

険しい表情で仕様書を読みながらミランは答える。

「え、マジで!？」

「ええ。そもそもフォルトさん、この銃を仕入れる前に諸元を読まれましたか？」

「い、いや……その、なんていうか。曰くつきだけど安かったから、その勢いで仕入れちゃって」

非番の日に新しい銃を新調しようとネットワーク関係で調べていたら、たまたま安い銃を見つけたフォルトは、何も考えずに値段の安さの勢いに任せて購入した様である。

「はあ……」

フォルトの思いつきの行動にミランは、思わず深い溜息を吐く。

「何とかならないかな？」



フォルトは、ミランの肩を揉みながら掛け合う。

「うーん……じゃあ、かなりの時間を費やしますが、VF-11のジェネレーター交換と電子系統の改修ならびに頭部のセンサー系も改良しましょう」

「すまないな」

「その代わり、暇な時でもいいんで、みんなに美味しい物を腹いっぱい食べさせてあげてください」

ミランは、フォルトの謝罪に笑顔で応える。

「わかった。それは約束する」

「みんな、集まってくれ」

ミランは、作業中のメカニックマンを全員集めて作業工程を説明し始める。

こうして、フォルト機の大掛かりな改修作業が始まった。

VF-11のジェネレーターを大型タイプへ交換し、かつ頭部センサーの改良ならびにコクピット部の改修作業等、かなりの大掛かりだった。

「フォルト」

作業開始から2時間が経過した頃、大きめの紙袋を持ってカイルが格納庫にやって来る。

「カイル」

「差し入れ持って来たよ」

カイルは、持っている紙袋をフォルトに見せる。

「ああ、サンキューな。じゃあ、一息入れるか」

「そうですね。みんな、休憩に入ろう」

一旦作業を止めて、フォルト達は休憩に入る。

「調子はどうだい？」

「んー……まあ、順調って感じかな？　なあ、ミラン」

フォルトは、ハンバーガーを頬張りながら話す。

「そうですね。でも、まだ電子系統の調整が残っているんですよ」

ミランは、ホットドッグをかじりながら仕様書に目を通す。

「そうかあ……それよりも、メイアちゃんまで大変だろう」

ジュースを飲みながらカイルは、メイアの方を見る。

メカニックマンで最少少かつ女性であるメイアは、他のメカニックマンと共に大掛か

りな作業を手伝っている為、カイルは内心心配していた。

「お兄ちゃん達が頑張ってるのに、自分だけ休めないですよ」

メイアは、ポテトを摘んで口へと運びながら話す。

「お兄ちゃん思いだねえ……でも、メイアちゃんは女の子なんだから無理はよくないよ。」

メイアちゃんの分は俺達でやるからな。なあ？」

ナゲツトを頬張るモヒカン頭のエドの言葉に、おかつぱ頭のロルフとタラコ唇のジョンは笑顔で頷く。

エド達三人は、元々ミラン達と共にメカニックマンとして仕事をしていたが、たまたまガルスの機体調整の関係でガルスから理不尽な因縁をつけられて、そのまま責任者であるミランと共にブラックバルチャー隊へと左遷させられた。

「ありがとうございます」

エドの心遣いにメイアは、三人に頭を下げる。

「なあ、フォルト。僕にも何か手伝えないかな？」

仕様書と設計図を見ながらカイルがフォルトに訊ねる。

「そうだなあ……じゃあ、ジェネレーター出力関係のシミュレーションと調整を頼むよ」

「それくらいなら、まかせてくれよ」

休憩を終えた七人は、作業を再開する。

ミラン達メカニックマンがパーツ交換や機体調整等を行い、フォルトは機体の動作確認や出力のチェック、カイルは交換したパーツによるジェネレーターの出力や調整を行う。

フォルト機の改修作業は夜通し掛かり、作業が終わった頃には朝を迎えていた。

改修作業を無事に終えた七人は、達成感を得た表情をしている。

「みんな、ありがとうな」

フォルトは、カイル達に頭を下げて礼を言う。

彼らがいなかったら、注文した銃は一度も使われる事なく、スクラップになっていただろう。

「何言ってるのさ、僕達は親友だろ」

そう言つてカイルは、右手をフォルトの右肩に置く。

「フォルトさん、俺達は同じ仲間なんだから気にしなくて良いよ」

ミラン達は笑顔で返す。

ミラン自身も今回の大幅な改修作業は、久しぶりに満足のいく事ができて自身のスキルアップに繋がったと思つていた。

「ありがとう……本当にありがとう」

ミランの言葉にフォルトは、少しだけ涙ぐむ。

「フォルト……」

カイルが心配そうに声を掛ける。

「バ、バッカ野郎！ ちよ、ちよっと朝日がまぶしいだけだよ!!」

フォルトは、涙を拭うのを見られない様に振り返る。

(ここ、朝日が出ないんだけどなあ……)

フォルトの言葉にカイル達は、心の中でツツコミを入れていた。

ブラックバルチャー基地が在住する惑星ローグは、万年紫色の雲に覆われている為、日が照る事は殆どないからだ。

「お前達、まだやっていたのか」

早朝一番にドルチェフが格納庫にやって来る。

「おはようございます、隊長。ええ、さつき終わつたばかりなんですよ」

ミランがドルチェフに状況説明するが、徹夜作業の為、その臉は重くなりつつあった。

「そうか、ご苦労だったな。もうお前達は寝ろ。特にメイア」

「は、はい」

普段、あまり名前を呼ばれる事がないメイアは、突然のドルチェフからの名指しに驚いた表情をする。

「お前は女だ。それに睡眠不足と疲れは、肌の天敵だ」

ドルチェフのメイアを気遣う言葉に皆の目が驚きのあまり点になる。

「た、隊長……」

「隊長がそんな事を言うなんて、もしかして明日は雨が……」

「いやいや、天変地異の前触れかも知れないぞ」

フォルト達は、お互いに顔を見合わせてドルチェフを見る。

普段の様子から、ドルチェフが女性に気遣う素振りを見せない為、尚更だった。

「バカ野郎！ 俺だつて女の扱いくらいわかつている！」

フォルト達の悪ふざけにドルチェフは、照れ隠しに怒鳴る。

「いいな、メイア。これは隊長命令だ」

「はい、わかりました」

ドルチェフの言葉にメイアは、敬礼をして笑顔で返す。

自室へと戻ったフォルト達は疲れ果て、その日は、そのまま眠り込んだ。

そして、翌日。

フォルトにとって、待ちに待った全体的な機体の動作確認とスナイパーライフルの

テストが行われる。

朝早くからフォルトは、格納庫でバトロイド形態の機体に取り込み機体チェックを

行っていた。

ミラン達も動作テストに付き合ひ、スナイパーライフルの調整を行っている。

「フォルトさん、機体の調子はどうですか？」

ミランはスナイパーライフルの調整を行いつつ、フォルトに声を掛ける。

「システム系統、動作系統、電子系統共に今の所は異常無し。ライフルの方はどうだ？」  
「こちらも今の所は大丈夫です」

「わかった。ライフルを取るから離れてくれ」

フォルトの声に従ってミラン達は、スナイパーライフルから離れる。

フォルト機はハンガーに架けてあるスナイパーライフルを掴み、格納庫から外へと進む。

ある程度、進んだ所で機体とスナイパーライフルの接続コードを繋ぎ、フォルト機は地面にうつ伏せになりスナイパーライフルを構える。

スナイパーライフルのコードを機体に繋ぐ事でコクピットのモニター画面にスナイパーライフルの状況が数値とグラフで表示される。

「よし、今の所は出力系統に問題は無いな」

フォルトはモニター画面でスナイパーライフルの状況を確認する。

『始めてくれ』

ミランの通信機にフォルトからの通信が入る。

「ジョン、標的留意」

ミランの指示でジョンはリモコンのボタンを押す。

ボタンが押されると同時に格納庫から200mほど離れた場所の地面が展開して標

的が顔を出す。

フォルト機はスナイパーライフルの固定装置を引き出してスナイパーライフルを固定する。

フォルトは、シート背面からターゲット用スコープを取り付けて標的に照準を合わせる。

照準と標的が合わさったのを確認したフォルトは、ライフルのトリガーを引く。

トリガーを引くと同時にスナイパーライフルが発射されて標的に穴が開く。

『どうだ?』

フォルト機の通信を受けてメイアが双眼鏡で標的を確認する。

「凄い……ちゃんと真ん中に当たってます」

双眼鏡で標的を確認したメイアは、子供のようにはしゃぐ。

『どんなもんよ!』

フォルト機は、メイアに向かってVサインをする。

『ミラン、標的の距離を遠くしてくれ』

「了解。ジョン、頼む」

ミランの指示でジョンはリモコンのボタンを押す。

姿を現した標的は最初の場所から更に500m程離れた場所に姿を見せる。



さすがに肉眼で確認ができないのでミラン達は、メイアの双眼鏡を互いに回して状況を確認する。

フォルトは、再び標的に照準を合わせる。

(コンマ4ズレてるな……)

フォルトは照準を自動制御から手動に切り替えて修正をする。

自動制御とは言え、あくまでも自動制御はサポートであり、細かい微調整となると手作業が必要となる。

手動で修正を行い、標的が合わさったのを確認したフォルトは、トリガーを引いて標的に穴を開ける。

『確認してくれ』

フォルトの通信を聴いたメイアは、双眼鏡で標的を確認する。

「凄い……あれだけ離れているのに真ん中に命中しています」

穴の開いた標的を見たメイアは、驚きを隠せない様子だった。

そこには綺麗に真ん中に穴が空いた標的が映っている。

『どうよ！ 俺の実力』

フォルト機は、得意げにガッツポーズを取る。

「やっってるな、お前達」

フォルト達の様子を見にドルチェフがやって来る。

「隊長、フォルトさん凄いですよ！ あんなに離れた的の真ん中に命中させてるんです！」

メイアは、まるで子供が母親に話を聞いて欲しいかのような様子で興奮気味に話す。

「フォルトは、元々射撃に関して確かな腕を持っているからな」

メイアから双眼鏡を借りて標的の状況を見たドルチェフは、フォルト機の方を見上げる。

フォルトは、過去に統合軍主催の射撃大会で連続で3回優勝した経歴を持つ。

その経歴や射撃の精密度の高さから精密射撃が必要な任務の時には、統合軍参謀本部から直に要請がくる程であった。

そんな彼の能力を活かす為、機体も精密射撃に特化した仕様にカスタマイズされており、幾度の任務で功績を残している。

同僚のカイルとは統合軍入隊時に知り合い、後に行動を共にする程の仲になる。

カイルのサポートは、フォルトにとってはなくてはならない存在であり、カイルがフォルトを信じるようにフォルトも彼を信じて背中を任せている。

そんなある日、ガルスと共に二人は任務を遂行する事になるが、ガルスの無謀とも思える任務強行に二人は猛反対をする。

その事がガルスの逆鱗に触れてしまい、後に二人はブラックバルチャー隊へと左遷となり今に至る。

そんな二人をドルチェフは温かく迎え入れ、任務遂行時には、二人の能力を信頼している。

「フォルト」

『あ、隊長』

「フォルト、調子はどうだ？」

『コイツは、結構良い感じですよ。本当に買ってよかったですよ』

フォルト機は、自慢気にスナイパーライフルをドルチェフに見せて、その声もご機嫌な様子だ。

「そうか。フォルト、お前に任務を頼みたい。後で部屋に来てくれ」

『わかりました』

フォルトとの会話を終えて、ドルチェフは部屋へと戻っていく。

その後、フォルトは標的の距離を伸ばしてスナイパーライフルのテストを続ける。

次々と距離を伸ばして現れる標的にフォルトは、正確に的の中心にスナイパーライフルを命中させていく。

その様子にミラン達は、一喜一憂を見せる。

テストを終えたフォルトは、機体を降りてミラン達と話し込む。

「フォルトさん、凄いですね」

ミランは、フォルトのスコアを確認して驚きの表情をする。

現れたターゲットの着弾率は100%であり、98%は的の中心に当てていた。

「いや、正直コイツの性能も凄いなと思うぜ。照準の調整も前の物よりもしやすかったしな」

フォルトは、右親指をスナイパーライフルに向ける。

「さっすが、曰く付きだけの事はあるな」

フォルトは、スナイパーライフルに向けて満足げな笑みを浮かべる。

「じゃあ、俺、隊長のトコ行ってくるから、悪いけど後を頼んで良いか?」

「ええ、いつてらっしゃい」

機体整備をミラン達に任せてフォルトは、ドルチェフの部屋へと向かう。

「隊長、入ります」

フォルトは、ドアをノックして確認を入れる。

「入れ」

「失礼します」

ドアを開けてフォルトは、ドルチェフの部屋に入る。

最後に部屋に入ったのは、いつだったのかを思い出すかのようにドルチェフの部屋は、相変わらず質素だった。

「お前をここに呼ぶのも久しぶりだな」

「そう言えば、そうですね。それで隊長、任務と言うのは？」

「ああ……さつき統合軍本部から惑星ルーラン駐在の統合軍基地が反統合政府軍に襲撃されて、大型輸送船が1隻奪取されたと言う連絡が入った」

「相変わらず統合軍も警備がザルですね」

任務内容を聞いたフォルトは、統合軍の平和ボケしている様子を皮肉る。

「だったら俺だけじゃなくて、みんなで……」

「まあ、待てフォルト」

粹がるフォルトをドルチェフは抑える。

「確かに俺達で行けば大型輸送船の1隻や2隻なんて簡単に墮とせる。だが、ヤツらが奪取した輸送船には、とんでもない物資が積んであったらしい」

「何ですか？ それは」

フォルトに訊ねられ、ドルチェフの表情が険しくなる。

「……反応弾だ」

「反応弾!？」

反応弾の言葉に思わずフォルトの表情が強張る。

「しかも、威力や範囲も今までの反応弾とはケタ違いらしい。もし俺達が、この船を墮とそうものなら……」

「墮とした瞬間に俺達は、反応弾の爆発に巻き込まれてお陀仏ってヤツですか？」

ふざけながら話すフォルトの言葉にドルチェフは頷く。

「そうだ。恐らく統合軍本部は、俺達をそこに向かわせて輸送船を撃破させて、そのまま俺達も一緒に始末したいんだろう」

険しい表情のままドルチェフは話す。

「なんだよそれ、ふざけんな！ それが統合軍本部のやり方ってヤツなんですか？」

ドルチェフの話の聞いたフォルトは、思わず怒りを露わにする。

「俺達は、統合軍の掃き溜めだからな。統合軍からしたら反応弾は反統合政府軍に盗られずに済むし、ついでに厄介払いできるしで一石二鳥なんだろう」

ガルスによって左遷された者達の部隊、ブラックバルチャー隊。

その部隊は、知らず知らずの内に統合軍の掃き溜めと呼ばれる様になり、いつしか左遷先になっていた。

ある意味、統合軍にとっては、またとないチャンスだったのだろう。

「……」んな事までされて、隊長は悔しくないんですか？」

フォルトは黙って統合軍に従うドルチェフに苛立ちを覚える。

今まで色々な不祥事を揉み消してきた統合軍を見てきたフォルトにとっては尚更だった。

「俺がこのまま黙っている訳がない事くらい、わかるだろう？」

いきり立つフォルトを見たドルチェフは、少し口元を緩ませる。

「じゃあ……」

「だが、今は我慢して機会を待つんだ。いいな？」

「了解」

ドルチェフの言葉にフォルトは納得したのか、さつきまでいきり立っていた表情が静まる。

ドルチェフは、いつしか統合軍に対して何か行動を起こそうとしている。

フォルトは、その時が来る事を密かに期待していた。

「話が逸れたな。とりあえず任務の事だが、お前が手に入れたライフルによる長距離攻撃が一番有効だと思うが……どうだ？ フォルト。せつかく手に入れたライフルの威力を試すんだ。悪くない任務だろ？」

ドルチェフは、スナイパーライフル使用を提案してフォルトを横目でチラつと見る。

「……悪くないですね、隊長。その任務、引き受けましょう」

フォルトは、得意気に右親指をドルチェフに突き立てる。

自身にとつては、任務もこなせて手に入れたばかりのスナイパーライフルも実戦で使用できる為、何も利害はなくWin-Winである。

ドルチェフ自身も統合軍本部からの任務依頼を聞いた時、既にフォルトに任せる気満々であつた。

「統合軍本部の情報によると明日の9時にはポイントイプシロンを通過するらしいから、そこで迎撃する。あそこは、ステーションも殆ど無いから撃破しても影響は無いだろうからな」

ドルチェフの端末ディスプレイに新統合軍本部から送られてきた輸送船の航路と座標が表示される。

「航路や座標を見る限り、そのようですね」

フォルトはディスプレイを覗き込み納得する。

「どうだ？ フォルト。お前さんの腕の方の自信は？」

「任せてください。俺の射撃の腕は、隊長もご存知でしょう？」

「そうだな」

ドルチェフとフォルトは、互いに口元を緩ませる。

「よし、決まりだな。明日の7時には出撃だ。念の為、カイルも索敵とジャミング担当と



して連れて行く」

「わかりました」

「カイルには、後で俺の方から伝える。フォルトは、明日に備えて今日は早く休んでおけ」

「了解」

フォルトは、ドルチェフに敬礼をして部屋を後にする。

「フォルト」

自室に戻ろうとするフォルトにカイルが声を掛ける。

「よお、カイル」

「さつき隊長から話は聞いたよ。僕も明日は、できる限りサポートするよ」

「おう、頼りにしてるぜ」

フォルトはカイルの右肩をバシバシと叩いて自分の部屋へと戻る。

「いたた……まったく、フォルトは相変わらずだなあ」

カイルは、叩かれた右肩を押さえてフォルトを見送る。

「カイルさん」

タクヤと一緒に歩いていたエスターがカイルに声を掛ける。

「やあ、エスターにタクヤ」

「隊長から聞きましたよ。明日の出撃、頑張ってください」

「ああ、頑張るよ」

エスターの言葉にカイルは、笑顔で返す。

「ちえー、いいなあ……俺もフォルトさんみたいなカッコいい武器が欲しいなあ」

フォルトの新しいスナイパーライフルの事でタクヤは、自身の機体も標準装備以外の武器が欲しいのか、少しふてくされた表情をする。

「タクヤも給料をちゃんと貯めれば、いつか買えるよ」

「カイルさん、フォルトさんのあの武器っていくらくらいすんの？」

「うーん……彼が言うには、確か給料3ヶ月くらいするって言ってたかな？ だから、タ

クヤやエスターの給料だったら、そうだなあ……多分10年か15年くらい掛かるんじゃないかな？」

「げげ！ じゅ、10年や15年って、そんなにすんの!？」

カイルからスナイパーライフルのおおよその換算金額を聞かされたタクヤは、自身の給料を10年で換算して出た金額に思わず目を白黒させて驚く。

「しかも非合法で手に入れたって言ってたから、値段も結構してたみたいだし」

「はああああ……やっぱ俺、カスタムするの止めとくわ」

カイルから値段の話聞いたタクヤは、ガックリと肩を落とす。

ただでさえ、毎月支払われている給料で新しい装備関係を購入しようにも半年以上貯めないと購入できない上に更にその上を行く金額を目の当たりしてしまい、絶望感しか無かった。

「タクヤ、元気出しなよ。武器はダメでも簡単なカスタマイズなら出来るかも知れないし」

肩を落とすタクヤをエスターが励ます。

「エスターの言う通り、タクヤ達の給料なら3ヶ月くらい貯めればアビオニクスの簡単な改良くらいなら出来るさ」

「マジっスか!? よーし、頑張つて金を貯めてアビオニクスをカスタマイズすつぞー!」

カイルの言葉にタクヤは、急に元気になって浮かれ始める。

「元気になったみたいだね」

「ありがとうございます、カイルさん」

エスターは、カイルに頭を下げて礼を言う。

「いやいや。それにしても、君達を見てると他人事には思えないな」

「お互い、相方に苦勞する所ですか?」

「そうかもね」

エスターとカイルは、お互いに顔を見合わせて含み笑いをする。

翌日、ドルチェフ、フォルト、カイルの三人はポイントイプシロンへ向けて出撃する。『バルチャーから各機へ。これよりポイントイプシロンへ向けて出撃する。各機、遅れるな』

『了解！』

今回は少数行動の為、あえてブrowningは使用せずに単機でポイントイプシロンへと向かう事となった。

滑走路のシグナルサインが青になっている事を確認した3機は、順番に出撃して進路をポイントイプシロンへと向ける。

ポイントイプシロンへの出撃は、前回の機密書類の護衛任務以来である。

惑星ローグからは、それほど遠くは無いがポイントガンマが近い事もあり、時折小惑星群が流れてくる。

向かってくる小惑星群を3機は、次々とやり過ごしていく。

『隊長、こうやって少数行動するのも久しぶりですね』

久しぶりの特殊任務にフォルトがドルチェフに通信を入れる。

『そうだな。お前とカイルがココに転属になって最初の任務依頼だな』

『そうですよね』

二人の会話にカイルも加わる。

『あの時は、フォルトが暴走したお陰で俺やカイルまで敵に追いかけて……』  
『あの時は死ぬかと思いましたがよ』

ドルチェフとカイルは会話をしながら当時を懐かしむ。

まだフォルトとカイルがブラックバルチャー隊に配属して1週間が過ぎた頃、統合軍本部より敵の大型機動兵器の輸送船撃墜任務の依頼が来た時だった。

その頃、まだ配属して間もない二人は、ドルチェフと共に敵基地から遠く離れた場所で輸送船が来るのを待っていたが、なかなかこない輸送船にフォルトのイライラが限界に達し、ようやくと来た輸送船に対してドルチェフの発砲許可を待たずに攻撃をした為、敵に気付かれてしまい、3機は命からがら逃げ延びる事ができた。

その事で任務は失敗したが、元々重要任務ではなかった為、三人は減俸処分と始末書を書くだけの処遇で済んだ。

『隊長もカイルも笑わないでくださいよ。あの時は、俺も若かったんですから』

二人の懐かしい会話にフォルトが少しムキになる。

『まあ今では、お前以上に凄いヤツがいるからな』

『タクヤですね』

『ああ。アイツは、お前以上にバカをするからな』

ドルチェフは、タクヤを思い出して少しだけ笑う。

他愛も無い会話をするうちに、やがて3機は目的地であるポイントイプシロンへと辿り着き、早速カイルは索敵を開始する。

『今の所は、熱源反応はありませんね。念の為、探査ポッドも射出しておきます』

カイル機は、探査ポッドを射出して周囲を警戒する。

『隊長、あそこで待機しましょう』

フォルト機が指を差す方向に多くの小惑星群が漂っていた。

『あそこなら身を潜めるにもってこいだな』

3機は、小惑星群に身を潜めて輸送艦が来るのを待つ事にする。

『フォルト、無茶な事をするなよ』

『するかよ！』

カイルの忠告にフォルトは、ムキになって応える。

しばらくして、モニターの表示時刻が丁度9時を表示する。

『11時の方向……熱源反応、来ます！』

熱源反応を感知したカイル機から通信が入る。

『探査ポッドからの映像を出します』

カイル機が射出した探査ポッドの映像が3機のコクピットモニターに映し出される。

映し出された映像には、大型輸送船の姿が見える。

『データ照合……間違いありません、奪取された輸送船です』

データ照合を行い、その輸送船が奪取された輸送船である事をカイルが伝える。

『カイル、この距離での反応弾の有効範囲を計算してくれ』

『了解』

フォルトから反応弾の有効範囲算出を依頼されたカイルは、コンピュータにデータを打ち込み、算出された反応弾の有効範囲のデータ結果をフォルトとドルチェフに送る。

(この距離だと、巻き込まれる可能性が高いな……)

フォルトは、カイルから送られてきたデータ結果を見て、困惑な表情を浮かべる。

『奪取された反応弾は従来よりも強力と言う事で範囲も広めに算出しました』

『フォルト、そのライフルの有効距離は？』

『多く見積もって7,000〜8,000mぐらいですね。今の場所で撃ち込んで輸送船を破壊したら、間違い無く敵と一緒にお陀仏です』

『こうなったら、射程ギリギリの場所から狙撃して、輸送船の反応炉に命中と同時に一気に離脱するしか方法は無いか……フォルト、やれるか？』

ドルチェフの問い掛けにフォルトは、しばし沈黙する。

『……ここまで来たら、やるしかありませんよ。隊長、カイル、覚悟しておいてくださいよ』

フォルトは、ドルチェフに余裕の笑みを浮かべる。

しかし、ドルチェフに見せたのは、苦し紛れの笑顔だった。

『分かった。俺達の命は、お前に預けた』

ミランによって装填された対艦戦用の銃弾。

その威力は戦艦クラスの厚い装甲すら撃ち抜く程の威力である。

しかし、1発の銃弾のコストがバルキリー機分相当の為、在庫はあまり無く、今回は任務の為に2発だけ装填されている。

いくら2発の弾が装填されているとはいえ、スナイパーライフルが輸送船の反応炉に命中させても1発で仕留められなかった場合、敵に発見される可能性が高く、また爆発したとしても少しでも逃げるタイミングが遅れた場合は、爆発に巻き込まれてしまう。

全てはフォルトの射撃技能に懸かっていた。

フォルトは、自分が責任重大な立場に置かれている事を感じて固唾を飲む。

『よし、気付かれないうちに射程距離ギリギリまで離れるぞ』

3機はスナイパーライフルの最大射程距離まで離れる。

3機は射程距離ギリギリの小惑星群に身を潜め、フォルト機はスナイパーライフルを構えて大型輸送船に照準を合わせる。

『フォルト、輸送船の航行速度とスナイパーライフルの射程距離から着弾時間を算出したデータを送るよ』



カイルのデータを基にフォルトは、スナイパーライフル発射のタイミングを計算してコンピュータに入力する。

ある程度は自動制御に任せて、残りの微調整は手動で行う。

「よし、これで発射タイミング時に照準も赤くなるし、後はタイミングを待つだけだ」

フォルトは、ターゲットスコープを覗きつつ息を飲む。

輸送船が照準内に近づく度にフォルトの息遣いが荒くなる。

やがて輸送船が照準内に入り、ターゲットスコープが赤く光る。

「もらったー」

フォルトはトリガーを引き、スナイパーライフルを発射する。

発射されたスナイパーライフルの弾道は、僅かな時間だがコクピットモニターに表示される。

発射された弾道は、大型輸送船目掛けて突き進む。

モニターに映し出される弾道の様子を3人は固唾を飲んで見守る。

(「そのまま行けー」)

フォルトは、手を合わせて願を掛ける。

弾道は輸送船に近付き、もう少しで輸送船の反応炉に到達をする。

作戦は成功する様に見えたが、事態は急変する。

「なにいい！」

途中、浮遊してきた小惑星に弾道が命中し、軌道が狂って輸送船をかすめて行く。異常に気付いた輸送船は艦載機を射出し、弾道の方へと偵察に向かわせる。

『フォルト、敵が気付いた。急げ！』

事態の急変にドルチェフの焦りのある罵声がフォルトの耳に響く。

『りよ、了解』

フォルトは、再びコンピュータに発射データを入力しようとする。

しかし、焦りからかキーボードを打つ手が震えていた。

「クソ、こんな時に！」

焦りで震える手をフォルトは、抑えようとするが尚更震えは止まらなかった。

『フォルト、しっかりしろ！』

『敵の迎撃は、隊長と僕でやるから落ち着いて』

ドルチェフとカイルの激を受けて、フォルトは少し深呼吸をする。

（落ち着け……落ち着くんだ）

自分自身に言い聞かせる様に心の中で呟き、再びコンピュータに発射データを打ち込み、ターゲットスコープを覗く。

艦載機は徐々にだが、ドルチェフ達の方へと向かっている。

(コイツを外したら……もう後は無い)

焦る気持ちを抑える為、再度フォルトは深呼吸をし、ターゲットスコープに映し出されるデータをチェックする。

「頼む、当たってくれ！」

そして、ターゲットスコープが赤くなるのを確認して、フォルトは再びトリガーが引かれてスナイパーライフルの弾道は、再び輸送船目掛けて発射される。

フォルト機のスナイパーライフルの弾道に気付いた艦載機は、弾道元の小惑星郡へと向かう。

『まずい、来るぞ！』

『敵は、こつちで何とかするから、フォルトは弾道を見てて』

『あ、ああ』

迫り来る敵機にドルチェフ機とカイル機は、ガンポッドを構えて応戦態勢に入る。

弾道は輸送艦目掛けて進み、フォルトはモニター越しに弾道の行方を見守る。

その弾道の行方を見守りつつも、フォルトは徐々に近付いてくる敵も気になっていた。

艦載機である3機のVF-11がドルチェフ達の存在に気付き、攻撃を仕掛ける。

「くそー！」

敵の攻撃に居ても立っても居られなくなり、フォルト機はスナイパーライフルの砲身を短くしてガンポッド形態に切り替えて迎撃態勢に入る。

『フォルト、お前は弾道の行方を見ていろ!』

ドルチェフ機は、少しでも時間稼ぎをする為に小惑星群から自ら飛び出して囷になる。

飛び出して来たドルチェフ機に気付いた3機のVF-11は、ドルチェフ機の追撃を始める。

やがて弾道は、輸送船のエンジン部分に命中する。

弾道は輸送船の装甲を突き破り、そのまま反応炉まで到達し爆発を起こす。

『隊長、輸送船から爆発を確認!』

『よし、離脱開始!』

フォルトの通信を聞き、ドルチェフは撤退命令を出す。

3機はファイター形態に変形して、爆発に巻き込まれないように脱出し始める。

3機のVF-11が後ろから追撃をしてくるが構っている余裕は無く、ただ必死で逃げるのに精一杯だった。

「くっそー、しつこいなあ!」

迫り来るミサイルにチャフをバラ撒きつつ回避し、必死で逃げる。

『フォルト、カイル、後ろには構うな。とにかく今は、爆発に巻き込まれないのを第一優先だ』

『でも、このままじゃ逃げ切る前に俺達がやられちゃいますよ』

敵の攻撃に何もできずに逃げるもどかしさにフォルトは、イラついていた。

やがて爆光は、3機がいた小惑星群を飲み込んでいき、そのまま追撃してきたVF-11をも次々と飲み込んでいく。

『た、隊長、このままじゃ俺達も飲み込まれるんじゃない……』

後ろを振り返り、徐々に迫る来る爆光にフォルトは、不安感と焦りを見せていた。

『隊長、離脱ポイントまで、あと少しです』

『よし、何とか乗り越えるぞ！ 頑張れ二人共』

カイルの通信を受けたドルチェフは、フォルトとカイルを励ます。

『せっかく新しい武器を買ったのに、こんな所で死んでたまるかよ！』

フォルトは、スロットルを限界まで開ける。

フォルト機とカイル機のエンジンが悲鳴をあげるが、それでもフォルトとカイルは必死にエンジンの出力を上げる。

必死になって逃げたおかげで3機は、何とか離脱ポイントまで辿り着き、爆光が少しずつ遠ざかって行くのを三人は確認する。

『熱源、離れていきます』

爆光が遠ざかるのを確認したカイルが通信を入れる。

『隊長』

カイルの通信にフォルトの表情が和らぐ。

『ああ……俺達は、まだ神には見放されてなかったようだな』

遠ざかる爆光を見て、三人は胸を撫で下ろす。

『フォルト、よくやったな』

ドルチェフがフォルトに劳いの通信を入れる。

『隊長とカイルのおかげですよ』

『僕や隊長はサポートしただけだよ。今回はフォルトが一番の手柄さ』

『カイル……』

カイルの言葉にフォルトは、少しだけ目を潤ませる。

『それにしても、本当にヤバかったなあ……』

フォルトは状況を思い出して苦笑いする。

『どうだ？ フォルト。この任務は』

『いやいや、もうカンベンしてくださいよ隊長』

意地悪く言うドルチェフにフォルトは、思わず苦笑いする。

フォルトの苦笑いにカイルも釣られて笑っていた。

『よし、これより帰投する』

『了解！』

任務を終えた3機は、惑星ローグへ進路を向けて飛び始める。

## 第11話 デビル・リゾート

惑星オルファン。

A・D・2020年代に統合軍の中規模移民船団が発見。

惑星の周りには、何もなく海王星レベルの距離でも惑星すら一つもない状況であった。

その惑星の調査により惑星内の大気は地球とほぼ同じ常夏の気候であり、海や森林も存在しており、居住するには充分な程の環境であった。

中規模移民船団は、惑星の周りに何もなく、ひっそりと佇む様子から孤児と言う意味を称してオルファンと名づけて居住を開始する。

その情報が統合軍より共有されると共に観光開発事業がこぞつて惑星に進出し始めて、ホテルやリゾート地等の開発をし始める。

数年後、オルファンはリゾート惑星として有名となり、行楽シーズンともなるとカッブルや家族連れ等の多くの観光客が訪れて賑わうようになった。

そんなリゾート惑星にタクヤとエスターは、任務で訪れていた。

「うー、あちー、あちいよお……」



惑星内に到着したタクヤは、コクピットの中でうだつている。

「うおおおおお！ あつちいいいいいい！」

あまりの暑さにタクヤは、思わずコクピットで叫びだす。

『タクヤ、そんなに叫んだって涼しくならないよ』

コクピットで叫びまくるタクヤの様子が気になったのか、エスターが通信を入れる。

『んなこと言つたつて、暑いもんは暑いんだよ！』

あまりの暑さにタクヤは、イライラしながらエスターに怒鳴り散らす。

コクピット内の環境制御システムを弄り、コクピット内の気温を下げようとするが、限界まで下げようとすると機体の内部機器にも影響が起きる為、リミッターが起動して下げられなくなる。

その様子にタクヤは、尚更イライラ感を募らせる。

『そんなに怒鳴ると、余計に暑くなるよ』

暑苦しさに叫ぶタクヤにエスターは、冷静にツツコミを入れる。

『そう言うエスターは、暑くねえのかよ？』

暑苦しいコクピット内で冷静にいられるエスターに対して、タクヤは疑問に思っていた。

『そりゃあ、暑いけど……そもそも、タクヤが隊長の誘いに乗らなきや、こんな事にはな

「らなかったのに……」

『あ、あれは、おっさんが悪いんだ！ おっさんが俺を巧妙な罠に乗せて……』

エステターの愚痴にタクヤは、しどろもどろになる。

『その罠に乗ったの、タクヤでしょ』

『う……』

エステターの冷静なツツコミに押されて、タクヤは何も言えなかった。

先程まで暑いと叫んでいたタクヤは、エステターのツツコミにより、体内温度が涼しく感じていた。

それは、3日前の出来事だった。

・  
・  
・

タクヤとエステターは、ドルチェフに呼ばれて部屋に出頭していた。

「タクヤ・バーズブラッド、エステター・ワードナ、入ります」

「入れ」

「失礼します」

エステターはドアを開けて部屋に入り、続けてタクヤも部屋に入る。

相変わらず、ドルチェフに呼ばれた事で不安な面持ちをするエスターと何も考えずに能天気口笛を吹くタクヤの変わらない様子にドルチェフは、「相変わらずだな」と言いたくなる表情をしていた。

「お前達を呼んだのには理由があるんだが……どうだ、お前達……突然だがリゾートへ行きたくないか？」

「リゾート!？」

殆ど任務で宇宙にしか出ていないタクヤにとって、他の惑星へ遊びに行けるのが、よほど嬉しいのか、リゾートの言葉に思わずタクヤの目が輝く。

タクヤの頭の中では、海で水着を着た女性が遊んでいる姿が焼き付いていた。

「そうだ。お前達二人だけの特別だ。別に断っても構わ……」

「行く! 絶対に行く! マジで行く! 頼む、行かせてくれ!」

ドルチェフの言葉を遮り、タクヤは目を輝かせてドルチェフに詰め寄る。

そんなタクヤの興奮した目付きにドルチェフは、思わず後ろに引いていた。

「タクヤ、本当に行くの?」

ドルチェフに詰め寄るタクヤをよそにエスターは、不安そうに聞く。

何も考えずにすぐに勝手に決めるタクヤにエスターは、正直不安を感じていた。

「そんなの行くに決まってるだろ！ おっさ……あ、いや、隊長。そのリゾートに水着のお姉ちゃんは、いますよね？」

タクヤは、そのギラギラと激った目を大きく見開いてドルチェフに質問する。

ドルチェフ自身も今頃になってタクヤを呼んだ事を心の中で後悔していた。

「……安心しろ、ちゃんといる」

「よっしゃ、決めた！ 俺……いやいや、自分は行きます。いや、行かせてください！」

ドルチェフの返答を聞いて、水着のお姉ちゃんがいる事を確信したタクヤは、やる気満々で志願する。

(リゾートに行ったら、水着のお姉ちゃんとひと夏のアバンチュールも悪くないよなあ  
くっ)

鼻の下を伸ばしながら浮かれるタクヤの様子に今更ながらドルチェフとエスターも大きな溜め息を吐く。

(今のタクヤに何を言っても無駄だ)

きっと二人は、同じ事を思ったに違いない。

「エスター、お前は どうする？ 別に行くのを辞退してもいいんだぞ」

「僕は……」

ドルチェフの問い掛けにエスターは、少し考える。

「タクヤが行くなら、僕も行きませう」

タクヤが浮かれ過ぎて変な行動を起こさないかを監視する為、エスターは、その思いで志願をする。

「わかった。二人共、出発は三日後だ。後で資料を渡すから部屋に戻れ」

ドルチエフに言われて、二人は部屋を後にする。

『後で渡されたのが特殊任務の資料。くっそー、腹立つなあ!』

タクヤは、後部シートから資料を取り出す。

そして、任務の資料を渡された時の事を思い出したのか、資料をビリビリに破り捨て、そのままコクピットモニターを思い切り叩き、怒りをぶちまける。

『済んだ事を今更グダグダ言わないでよ。そうそう、隊長が言つてたよ。今回の任務が成功すれば報奨金が出るかも知れないって』

『え?! マジ? おーし、俄然ヤル気が出てきたぜ!』

報奨金の言葉にタクヤの怒りは吹っ飛び、気合いを入れ直す。

『タクヤ、そろそろ降下しよう。今回の任務は、この惑星の統合軍にも極秘にしているみ

たいだから、バレないようにね』

『りよーかい、りよーかい』

エステルはリーダーを確認して、統合軍基地の所在を確認する。

リーダーには基地らしき反応が表示されなかった為、2機は近場の森林へと降下を開始する。

機体をガウォークに変形させて森林に降り立った二人は、コクピットキャノピーを開けて周りを確認する。

「タクヤ、とりあえず見つからない様に機体を隠そうよ」

「えー、めんどくせえなあ」

「文句を言わないの」

「はいはい」

エステルは、機体が見つからない様になるべく木々の多い場所へと機体を移動させる。

ブツブツ文句を言いながらタクヤも機体を木陰に隠すように移動をさせる。

「二応、一般人に紛れて調査しなきゃいけないから着替えないとね」

機体を隠したエステルは、シートの後部から荷物を取り出してパイロットスーツから私服に着替え、サバイバルキットと通信用端末、望遠グラス、そして護身用の拳銃を持

ち出す。

(正直、あまり銃は使いたくないけど……)

士官学校で拳銃の扱い方を習ったとは言え、自ら拳銃の引き金を引いて、直で生身の人間を殺める事をしたくない。

その性格の甘さと、いざと言う時に引ける自信がないと認識しているエスターは、不安な面持ちで拳銃をバッグに入れる。

「タクヤ、準備でき……な、何、その格好!？」

エスターは、タクヤの服装を見て呆れた表情をする。

タクヤは、アロハシャツを着込み、グラサンを掛けて更には浮き輪と釣り竿まで持っていた。

「何って、せつかくのリゾート惑星なんだぜ? 遊ばなきゃ損でしょ」

エスターの問い掛けにタクヤは、お気楽気分で応える。

「で、でも、僕達の任務は……」

「エスター、俺達は日々、生きるか死ぬかの橋を渡ってるんだぜ? だから、たまには羽を伸ばしだつてバチは当たらないって」

タクヤの言う通りに普段の任務でも生きるか死ぬかの瀬戸際なのは確かである。

しかし、それとこれとは話はまた違うのも確かである。

任務の重大さを考えずに気楽に話すタクヤにエステルは、半分呆れると共に少しだけ、その能天気さが羨ましかった。

「なあ、エステル」

「何？」

「ところでさ……俺達の任務って何だっけ？」

「……え？ 資料見ていないの？」

「いや、全然読んでいなかったし、さつき読もうと思ったら怒りに任せてビリビリに破いちやっただしさ」

任務の事をすっかり忘れて完全に遊びモードに入っているタクヤにエステルは、頭痛を感じていた。

「タクヤ、僕達の任務は、この惑星にお忍びで反統合軍の隠れ家が無いかの調査をしに来たんだよ」

遊びモードのタクヤに呆れつつも、それでもエステルは真面目に任務の内容を説明する。

正直、能天気もここまで来ると怒りを通り越して呆れてきていた。

「あ、ああ……そうかそうか、思い出した。思い出したよ、エステル」

「本当にわかった？」



「うん、わかったわかった」

エステアの説明を理解したのか、それとも聞き流しているのか、タクヤは、エステアの問い掛けに気楽に答えながら歩き出す。

そんなタクヤを見たエステアは、深い溜め息を吐く。

しばらく歩くと、やがて市街地が見えてくる。

「お、街が見えてきたぜ」

「行ってみよう」

二人は、市街地を見て回る事にした。

「リゾート惑星だけあって、やっぱり賑やかだよなあ〜♪」

「そうだね」

久しぶりの賑やかさに二人は、物珍しそうに露天や建物を見て回る。

空も雲一つない天気恵まれており、日差しは少し強いが、心地よい風も吹いている。

「そこのお前さん達」

街中を歩いていると、初老の男性が二人に声を掛ける。

白髪まじりで初老の男性は、ニコニコしながら二人に近づいてくる。

よく見ると初老の男性は、背中に木箱を背負っていた。

「な、何だよ、爺さん」

ニコニコと近づくと初老の男性にタクヤは、ビクつきながら話し掛ける。

「お前さん達、この御守りを買わんか？」

初老の男性は、背中に背負っている木箱を降ろして、木箱の中からペンダントを取り出す。

「何コレ？」

「わあ、綺麗なペンダントですね」

初老の男性の持つペンダントは、鳥の形を模しており、中央に赤い宝石が添えられていた。

「そうじゃろう。コレは我が家系に代々から伝わるペンダントで、ワシはコレのおかげで鳥の人の脅威から逃れる事ができたんじや」

エスターのお世辞に初老の男性は、上機嫌にペンダントの説明をする。

「鳥の人？ 何だそりや？ エスター、知ってるか？」

「ううん、全然。鳥の人って言う言葉自体、初めて聞いた」

「何!? お前さん達も鳥の人を知らんのか？」

二人の鳥の人の言葉を聞いた反応に対して、初老の男性は目を丸くする。

そして、ガックリと膝を崩してうな垂れる。

「だから何だよ、鳥の人ってのは！」

勝手に話し掛けて来て、そして勝手にうな垂れる初老の男性の態度にタクヤは苛立つていた。

「おじさん、僕も鳥の人と言うのは全く分からないので、教えてくださいませんか？」  
「鳥の人と言うのは……これじゃ」

初老の男性はポケットから一枚の写真を取り出して二人に見せる。

写真には、鳥の形をした大型生物が写っていた。

鳥の形をした大型生物の周りには、空中浮遊している戦艦が写っており、戦艦の全長を遥かに超える程の大きさである事が認識できる。

「全然知らねー」

「すみません、僕も分かりません」

写真を見た二人は、お互いに顔を見合わせる。

「なんじゃと！ 鳥の人は、ワシらの島の守り神じゃぞ！ この写真は、2009年に軍がワシらの島でドンパチやつてる最中に鳥の人が現れた時に偶然、撮ったものじゃ」

写真を片手に初老の男性は、二人をよそに当時の事を熱弁し始める。

「エスター、知ってるか？」

「2009年に鳥の人が出たなんて、学校の授業でも習わなかったよ」

タクヤの問い掛けにエスターは、思わず苦笑いする。

「その時、風の導き手でもあるサラが、鳥の人と融合をし……」

二人が話している最中も初老の男性は、相変わらず熱弁をしている最中だった。

「なあ、もう行こうぜ。なんか、この爺さんと関わると時間が勿体無いしさ」

初老の男性の熱弁に飽きたタクヤは、そつとエスターに耳打ちする。

「そうだね」

二人は、初老の男性が熱弁してる隙を見て、その場を立ち去った。

少し駆け足で初老の男性のいる場所から離れたが、後ろを振り返っても追い掛けてこない事から二人は、ホツとした表情を見せる。

「なんなんだ、あの爺さん」

「変な人だったよね」

二人は苦笑いしつつも、再び街の中を歩き始める。

その後、二人は市街地をあちこち回ったが、特に不審な人物や建物らしき物は見当たらなかった。

「これだけ回っても何も出て来ないなんて、おかしいなあ……あのおっさん、ウソついてんじゃないね？」

タクヤは、額の汗を拭いながら愚痴をこぼす。

照りつける日差し暑さにタクヤもバテ気味だった。

「隊長が嘘なんて言うハズないよ。隊長から貰った資料には、近日中に反統合軍の動きがあるって書いてあつたし」

エステルは、鞆から資料を取り出して内容を再確認する。

「あー、もう、やめやめ！　なあエステル、気晴らしに海行こうぜ」

「え!？」

海へ行こうと提言するタクヤにエステルは、思わず目が点になる。

「もしかしたら市街地じゃなくて海沿いとかにあるかも知れないぜ？

案外、怪しい物は人目に付きそうもない場所にあるって言うしさ」

「……なるほど。タクヤ、冴えてるね」

タクヤの言葉にエステルは、思わず納得する。

「まあ、任せなよ。そうと決まれば海へレッツゴー!」

二人は、調査の為に海岸へと向かう事にした。

(なーんて言つて、本当は水着のお姉ちゃんが見たいだけだったりして♪)

タクヤが内心そう思っていた事をエステルは、知る由もなかった。

二人はタクシーを拾い、海水浴場へと向かう。

市街地からタクシーで10分弱の場所に海水浴場が見える。

「うっひょー♪　水着の姉ちゃんがいっぱいいる〜♪」

海水浴場に辿り着き、タクヤは目をキラキラと輝かせながら辺りを見回す。

辺りは、カップルや親子連れが海水浴を楽しんでいた。

「タクヤ、海水浴場に着いたはいいいけど、何処を探すの？」

「へ？ 何の事？」

「え？」

タクヤの提案で海水浴場へ来ている事を当の本人は完全に忘れており、今のタクヤの頭の中は、水着の女性の事でいっぱいだった。

「ここに来たら、何か手掛かりが見つかるって……」

「あ、ああ……そ、そうだっけ？」

「そうだよー！」

完全に忘れているタクヤにエスターは、思わず感情的になる。

「お、落ち着けよ。とりあえず、俺は、お姉ちゃんと遊んで……じゃなくて、あつちの方を見てくるから、後はよろしく！」

「え？ ちよ……」

エスターが引き止める前にタクヤは、人ごみの中へ消えていった。

「もう、タクヤー！」

呼べど叫べど、タクヤから返事は返って来なかった。

「はあ……仕方ない、僕だけでも調査しよう」

エスターは、ガツクリと肩を落として調査へと向かう。

「とりあえず、隠れ家みたいなのがあるとしたら……海水浴場から離れた場所辺りかな？」

エスターは、自分の勘を信じて海水浴場から離れた場所へ向かう。

「ふう……」

エスターは鞆からペットボトルを取り出し、キャップを開けて水分を補給する。

常夏気温の為、10分近く歩くだけでも喉が渇き、体力が減る感覚がする。

海水浴場からかなりの距離を歩くと、大きな洞窟らしき場所が見える。

ふと、気が付くと空は陽が落ち掛けていた。

「綺麗だなあ」

美しく輝く夕陽に、エスターは思わず見とれていた。

「いけないいけない。調査しなきゃ」

エスターは、鞆からライトを取り出して洞窟内を照らして見渡す。

「結構長そうな洞窟だけど、人がいる気配は無さそうだ」

エスターは息を飲み、洞窟の中を進もうとした、その時、

「何してるんだ、お前？」

「うわあああああああー！」

突然後ろから声を掛けられたエスターは、大きな悲鳴をあげる。

「びっくりしたなあ、いきなり大きな声を出すなよ！」

エスターが振り返ると、そこには一人の男が立っていた。

「だ、だだだだだ、誰ですか、あ、あああ、あなたは？」

突然の事にエスターは、まだ動揺していた。

「なあ、お前少し落ち着けよ」

エスターの動揺に男は、呆れた表情をしていた。

男は、浅黒い肌に上半身裸の格好で、ドレッドヘアが特徴だった。

エスターは、気分を落ち着ける為、少しでも深呼吸をする。

「ご、ごめんなさい。も、もうだ、大丈夫です」

深呼吸をして気分を落ち着けたエスターは、男に頭を下げる。

「そりゃよかった。それはそうと、こんな所で何をしてたんだ？」

「え？ それは、その……え、えーと、ど、洞窟が、その珍しかったもので、その、つい

……」

男の問い掛けにエスターは、どきどき紛れの苦しい言い訳をする。

さすがに市民に任務で洞窟を調べているとは言えなかった。



苦し紛れの言い訳をしていたので、不審がられて疑われた時の事を思うと、妙に背中が汗ばんでいるのを感じる。

「そうか。まあ、確かに海に来てても洞窟に興味がなきや滅多に見ないからなあ」

エスターの苦し紛れの言い訳を疑うどころか、男はすんなりと受け入れていた。

（あれ？ 何だか分からないけど、言い訳をすんなり信じてくれたみたいだ）

どさくさの言い訳を受け入れられ、エスターは内心ホツとする。

気が付くと、身体中が冷や汗をかいていた事に気付く。

「あなたも洞窟を見に来たんですか？」

「バカ言うなよ。俺は、ここに住人だし、この洞窟は俺の縄張りだ」

「そうでしたか。すみません、洞窟に勝手に入ろうとして」

洞窟が男の所有物だと分かり、エスターは洞窟に勝手に入ってしまった事を男に謝罪

する。

「あ、ああ。俺の方こそスマンな。それはそうと、そろそろ陽も暮れてきたし帰った方が

いいぜ」

いつの間にか日が沈み、空は暗くなりかけていた。

あれだけ多くいた海水浴場に来ていた人達も、いつの間にかいなくなり、聞こえてく

るのは静かな漣の音だけだった。

「そうですね。とりあえず、友達と一緒になので連絡しないと……」

エスターは、鞆から携帯電話を取り出してタクヤに電話をする。

『お客様の掛けになった電話は、電波の届かない場所にいるか、電源が入っていません』

電話越しから聞こえてくるのは、聞き慣れたタクヤの声ではなく音声アナウンスだった。

「もう、タクヤつては何をしてるんだろう……」

エスターは、再びタクヤに電話を掛ける。

『お客様の……』

何回タクヤの携帯電話に電話を掛けても聞こえてくるのは、録音された音声アナウンスだけだった。

焦りを感じたのかエスターは、胸が締め付けられる様な気分になっていた。

「はあ……」

全く繋がらない電話にエスターは、ただガツクリと肩を落とす。

「電話、繋がらないのか？」

「え？ ええ、まあ……」

男の問い掛けにエスターは、ただ苦笑するしかなかった。

(どうしよう、タクヤと連絡が取れないとマズイし、このままだと隊長に怒られちゃうよ……)

全てはタクヤが悪いはずなのに後から色々と、とぼちちりを受ける事を思うとエスターの心に不安とイライラ感が募り始める。

「もしかしたらホテルに戻ったんじゃないか?」

「実は、まだホテルの予約とかしていないんですよ」

「そうか。なんなら、今夜は俺の家に泊まるか?」

エスターの不安そうな状況を見かねた男が言葉を掛ける。

「え?」

「泊まる場所もここからじゃ遠いし、どうよ?」

「で、でも、ご迷惑では……」

急な男の誘いにエスターは戸惑いと不安が隠せなかった。

「まあ、気にするなよ。オレんち、ここから歩いて5分だし」

(……このまま待つよりは、少しは大丈夫かな?)

「では、お言葉に甘えさせてもらいます」

このままホテルを探しながらタクヤを待つよりはマシだと思ったエスターは、泊めてくれる男の優しさに深々と頭を下げる。

「よし、決まりだ。俺は、ケヴィンだ。よろしくな」

「僕は、エスターです。よろしくお願ひします」

エスターは、ケヴィンの後に着いていき、ケヴィンの家へと向かう。

「悪いな、少し歩かせて」

「いえ、大丈夫です」

「お前、ひ弱そうに見えて結構丈夫だな」

「ありがとうございます」

エスターの体格は、タクヤと比べると、確かにひ弱な体つきである。

しかし、そこは士官学校出身だけあって、体力だけは一人前な為、少し位の長距離を歩くくらいは平気だった。

海岸から山岳の方に向かってしばらく歩くと、やがてバンガロー風の家が見えてくる。

「ただいま、今帰ったぞ〜」

「おかえりなさい」

家路に辿り着いた二人を一人の女性が出迎える。

女性は、長いストリートヘアーに少しだけ浅黒い肌と大人びた表情が特徴的だった。

「あら……そちらは、お客様？」

女性は、ケヴィンの後ろを着いてくるエステーの存在に気付く。

「ああ、なんか友達とはぐれたらしくて今日だけ家に泊める事にした。エステー、俺の嫁さんのテイナだ」

「初めまして、エステーです」

ケヴィンにテイナを紹介されてエステーは、テイナに頭を下げる。

「ゆっくりしてゆっくりしてくださいね」

テイナは笑顔で返す。

優しいテイナの笑顔にエステーは、思わず顔を赤くする。

・  
・  
・

「あー、食った食った」

食事を終えたケヴィンは、満腹になったお腹をさする。

「ごちそうさまでした。とても美味しかったです」

軍に配属されてから、なかなかゆっくりと食事を取れなかったエステーは、久しぶりに食事をゆっくり味わえたのか、満足な笑みを浮かべる。

「ありがとう」

エスターに笑顔を返し、ティナは食器を片付ける。

「手伝います」

食器を片付けるティナに気付いたエスターは、食事のお礼も兼ねて後片付けを手伝おうとする。

「お客様にそんな事をさせたら悪いわ」

後片付けをするエスターをティナは諭す。

「でも、わざわざ泊めて貰って、食事まで頂いて何もしないのも……」

「気にしないで。それよりも、お風呂が沸いているから、お風呂に入って」

そう言っつて、ティナはリビングの棚からバスタオルとボディタオルを取りだしてエスターに渡す。

「は、はあ……では、お言葉に甘えさせて貰います」

ティナからタオルを受け取ったエスターは、バッグから着替えを持って脱衣場へと向かう。

「ふう……湯船に浸かるのは、何ヶ月ぶりだろう」

ブラックバルチャーに配属してからは、ほとんどシャワー生活で湯船に浸かる事は殆ど無かった為、久しぶりの湯船に浸かり、エスターは湯船の温かさを実感して寛いでいた。

「エスター、入るぞ！」

突然扉が開き、真つ裸に右肩にタオルを掛けたケヴィンが風呂場に入ってくる。

「わ、な、何て格好で入るんですか！」

エスターは、ケヴィンの姿に思わず両手を顔に当てて隠す。

「おいおい、男同士なんだから別に気にする事か？」

エスターの行動にケヴィンは突っ込みを入れる。

「で、でも……」

「まあまあ、たまには男同士の裸の付き合いも悪くないだろう」

ケヴィンは、腰掛けに座って身体を洗い始める。

「それにしても、リゾート惑星って呼ばれるだけあって、色々賑やかですね」

短い時間ではあったが、都心部や海水浴場を見て周り、エスターは改めてオルファン

が人々で賑わう姿に思わず楽しそうな表情を浮かべる。

「……本当に、そう思えるか？」

そんなエスターの楽しそうな表情とは裏腹にケヴィンの表情からは、明るい表情は消

えていた。

そして、その声はいつもの明るい声ではなかった。

「違うんですか？」

「表向きはリゾート惑星を唱っているけど、本来、この惑星は緑や自然が豊かだったんだ。ところが観光局や統合軍と結託して、次々と土地開発をしたお陰で今じゃ自然が残っているのは、この辺りくらいさ」

恨みを募らせるかの如く、ケヴィンは黙々と話す。

「おっと、辛気臭い話になっちまったな。すまない」

ケヴィンは、身体に付いた泡をお湯で洗い流す。

「い、いえ……」

「それにしても、お前……女みたいに細いな」

ケヴィンは、エスターの身体をマジマジと見る。

「そ、そんなにジロジロと見ないでくださいー」

顔を赤らめてエスターは、湯船に深く浸かる。

「男は、身体を鍛えてナンボだ。そんなヒョロヒョロな身体じゃ軍隊も雇ってくれないぜ」

自身の考えを述べながらケヴィンは、湯船に浸かる。

「は、はあ……」

（もう軍隊に入っているんだけどなあ……）

ケヴィンの言葉にエスターは、苦笑いしながら心の中でツツコミを入れていた。



その後、エスターは、ケヴィンの話を色々と聞いた。

ケヴィンは漁師として生計を立てている為、漁での話が中心ではあるがエスターは興味津々で聞いていた。

エスターが先に風呂から上がった頃には、既に空は暗くなり、心地良いさざ波の音が聞こえてくる。

テラスから空を眺めると、満天の星空がエスターの目に映る。

「綺麗……星って、こんなに綺麗だったんだ」

淀みなく輝く星の輝きにエスターは、思わず見入っていた。

ブラックバルチャー基地から見上げる空は、紫がかった雲しか見えない為、なおさら自然な夜空が新鮮に見えた。

「そうだ、タクヤに電話しなきゃ」

タクヤの事を思い出したエスターは、携帯電話をポケットから取り出してタクヤに電話を掛ける。

プルルルル……

「電話が鳴ってる」

最初に電話を掛けた時には音声アナウンスのみだけだっただけに、エスターは電話が繋がる事を期待する。

『もしもし?』

電話口からタクヤの声が聞こえる。

「タクヤ。良かった、繋がって……」

電話が繋がった事でエスターは、嬉しさのあまり少し涙ぐむ。

『ああ、エスターか。お前、何処にいたんだよ? 夕方くらいに探したのに全然いねーし

さあ』

電話口のタクヤは、少し声の不機嫌だった。

「タクヤが勝手に何処かに行っちゃうからだよ。それより、タクヤは何処にいるの?」

『ああ、俺? キヤバクラ』

「……え? キヤバ……クラ?」

タクヤのキヤバクラと言う言葉にエスターは、思わず目が点になる。

『いやな、エスターとはぐれた後、話し掛けられた兄ちゃんと仲良くなっちゃってさく

んで、今、その兄ちゃんの店にいるんよ』

「タクヤ、任務は……」

『そんなのエスターが、やってくれる んだろ?』

能天気な答えるタクヤにエスターは、軽い目眩を起こす。

『タクヤくん、電話なんてしないでえ、もつとお話しようよ〜♪』

電話口から若い女性の声が聞こえる。

『はいは〜い♪ そんな訳で、あとよろしく!』

若い女性に呼ばれてタクヤは、上機嫌のまま電話を切る。

「え!? タクヤ、タクヤ!」

通話の切れた電話にエスターは、必死に呼び掛ける。

「もう、何で電話を切るかなあ……」

再度エスターはタクヤに電話を掛けるが、電話の電源を切っているのか、電話口からは音声アナウンスしか聞こえなかった。

「はあ……」

相変わらずのタクヤの身勝手さにエスターは、思わず頭を抱えてうなだれる。

「……大丈夫ですか?」

テラスにやってきたティナがエスターに優しく声を掛ける。

「だ、大丈夫です」

心配そうな表情をするティナにエスターは、無理やり作り笑いをする。

「そう、それなら良かった」

エスターの様子を見てティナは微笑む。

心地良い風が吹き、ティナの長い髪が靡く。

「そう言えば、ケヴィンさんは？」

先程から姿も見せず、元気な声も聞こえないケヴィンにエスターは気付く。

「ケヴィンなら、先に寝たわ」

「そうですか。それにしても、ここは星も綺麗ですし、自然も豊かで良い所ですね」

「……昔は、そうだったわ。でも、今は違う」

ティナもケヴィン同様に冷淡に応える。

そして、優しい表情が一転して、寂しそうな表情へと変わる。

「さつき、ケヴィンさんとお風呂で一緒になった時に、この惑星の事を話したら同じ事を言っていました」

「……そう」

ティナはエスターを見る。

「この惑星は観光名所と謳っているけど、それを隠れ蓑にして本当は、統合軍の研究施設の建築が主だったの」

海辺を眺めながらティナは、黙々とエスターに話す。

ティナの言葉に統合軍に配属のエスターは、胸が詰まる思いでいっぱいだった。

「ごめんなさい、見ず知らずの人にこんな話をして……」

ティナはふと我に返り、エスターに謝る。

「い、いえ。気にしないでください。僕、そろそろ寝ます」

「空き部屋に布団を敷いてありますので、使ってください」

「ありがとうございます。おやすみなさい」

ティナにお礼を言って、エスターは寝室へと向かう。

・  
・  
・

「表向きはリゾート惑星を唱っているけど、本来、この惑星は緑や自然が豊かだったんだ」

「観光名所と謳っているけど、本当は統合軍の研究施設の建築が主だったの」

・  
・  
・

布団に入っても、ケヴィンとティナの言葉が脳裏に焼き付き、エスターは寝付けなかった。

（統合軍のやっている事は、何なんだろう……隊長も上司の横暴で街を反応弾で壊滅させたって言っていたし）

エスターは、自分が今まで行ってきた事に少なからず疑問を感じていた。

統合軍参謀本部で日々忙しい業務に追われつつも、息子に対して気遣う父の優しさがエスターには嬉しく、いつしか父と共に仕事をしたいと思いついた。統合軍に入隊を決意した。

しかし、現実問題として統合軍の行動は度々ニュースに取り上げられている。

時には行き過ぎた戦闘行為により、無関係の民間人が犠牲になる事もある。

「少し、風に当たって気分転換しよう」

エスターは、夜風に当たりにテラスへ向かう。

心地良く聞こえるさざ波と満天に輝く星空を見て、エスターはモヤモヤした気分を落ち着かせていた。

「タクヤ、今頃何をしているんだろう？ 結局、反統合軍の動きも特に無いし……」

星空を見ながらエスターは、今後の事を考える。

「とりあえず明日、タクヤと合流してから、色々と調べてみよう」

现阶段では何も不審な所も無く、平穩無事な状況である。

結局、何か行動を起こそうにもタクヤと合流をしない事には、何も進展しないと言う考えに至った。

考えを纏めたエスターは、寝室に戻る。

「？」

寢室へ戻ろうとした時、ケヴィンが浜辺の方へと歩いている姿が見えた。

「ケヴィン………さん？」

ふと様子を見ると、時々辺りを見回しながら浜辺へと向かっている。

「何だろう？　気になるな」

ケヴィンの様子が気になるエスターは、テラスを乗り越えて、こつそりとケヴィンの後を着いていく。

立ち並ぶ民家を抜けたケヴィンは、浜辺へと向かう。

エスターも気付かれない様に物陰に隠れながらケヴィンの後を着いていく。

しばらく着いていくと、ケヴィンと出会った洞窟が見えてくる。

誰もいない洞窟には明かりが灯り、多くの人々が行き来していた。

多くの人々は軍服らしき物を纏い、銃を構えており、何処からどう見ても普通の民間人には見えない雰囲気だ。

その穏やかではない雰囲気のエスターは、思わず固唾を飲む。

洞窟へと向かうケヴィンは、見張りらしき人と話をした後、そのまま洞窟の中へと入っていく。

エスターは、物陰から気付かれない様に洞窟の様子を伺う。

「あの洞窟に何かあるんだろう？　それにケヴィンさんは、いったい……」

明るく気さくな雰囲気を持つケヴィンが何故、こんな夜遅くに洞窟へ来ているのか。そして、その洞窟内で何が起ころうとしているのか。

色々な事が頭の中をグルグルと回る感覚になりつつも、エスターは一時も洞窟から視線を外さなかった。

しばらくすると、4隻の大型輸送船が洞窟付近の浜辺に近付く。

よく見ると4隻の輸送船の後ろには、シートに包まれた大きな荷物がけん引されていた。

輸送船の接近に気付いたのか洞窟から人々が集まりだし、輸送船が停泊するとけん引された荷物が浜辺へと運ばれる。

そして、けん引された荷物のシートが解かれて、その中から大型の機動兵器が姿を見せて搬入作業が行われる。

「あの機動兵器……見た事が無い機体だ。機動兵器であの人達は、何をするんだろう?」  
エスターは、洞窟での状況をカメラに収めようとズボンのポケットに手を忍ばせる。

(しまった……ケヴィンさんを追ってきたから、撮影用カメラを持ってなかった)

ケヴィンの様子が気になり、そのまま追い掛けてきたエスターは、カメラを持つてくるのを忘れた事を後悔する。

エスターが後悔の念に駆られている間にも搬入作業は続き、周りの人々は慌ただしく



動いている。

（カメラがあつたら良かったなあ……あまり長くいるとマズそうだから、そろそろ帰ろう）

気付かれる事を恐れたエステルは、そつと場所を離れてケヴィンの家へと戻る。

（ケヴィンさん、あの洞窟でいったい何をしていたんだろう？）

こつそりと寝室に戻り、エステルは洞窟での出来事を思い出す。

まるで誰かに気付かれなにかを気にするかの様に辺りをキョロキョロと見渡しながら洞窟に向かう姿は、エステルの知っているケヴィンではなかった。

そして、洞窟で見た大型の機動兵器が気になり、カメラを持ってこなかった事を悔いる。

（あの洞窟でいったい何が？ とにかく明日は、あの洞窟を徹底的に調査しよう）

心の課で洞窟の調査をする事を決意して、エステルは眠りにつく。

・  
・  
・

「ん……」

目を覚ましたエステルは、ベッドから起き上がり時計を確認する。

時計の針は6時30分を指しており、外では鳥の鳴き声が聞こえてくる。

ふと、美味しそうな匂いが鼻をくすぐり、自然とお腹が鳴り出す。

「ティナさん、もう起きているんだ」

エステルは、着替えてリビングへ向かう。

「おはようございます」

エステルがリビングに入ると、ティナは台所で食事の用意をしていた。

「おはようございます。もうすぐ食事の用意ができるので、よかつたら座って待っていてください」

「は、はい」

エステルは、ティナに言われるままに椅子に座る。

「あの、ケヴィンさんは？」

先程から全く姿を見せないケヴィンを疑問に思い、エステルはティナに訊ねる。

「朝早くから、漁に出ているわ。あの人、いつも朝早いから。多分、夕方までは戻らないかも……」

「そうですか」

（だとしたら、昨日のアレは何だったんだろう？）

昨日のケヴィンの行動を考えると、納得ができなかった。

もしかしたらケヴィンがティナに嘘をついている可能性も否定できない。

しかし、それを確認できる証拠が無い為、モヤモヤした気分になる。

(やっぱり、あの時にカメラを持ってきていたら……)

あの時、カメラがあれば絶対的な証拠になるハズだっただけに、エスターは後悔の念に駆られて頭を抱える。

「大丈夫ですか？ エスターさん」

エスターの様子が気になったのか、ティナが声を掛ける。

「だ、大丈夫です」

「そう。はい、お待たせしました」

ティナは運んで来た食事をテーブルに置く。

「ありがとうございます」

食事を受け取り、エスターは食事を口へ運ぶ。

「おかわりもありますから、遠慮しないでください」

「はい、ありがとうございます」

エスターは食事を口に運びつつ、ケヴィンの事が気になっていた。

エスターが考え事をしていて、その時、突如大きな揺れが起きる。

「な、なんだ？」

突然の事にエスターとティナは、動揺する。

エスターは、とっさにティナに覆い被さってティナを守る。

ティナも恐怖感からかエスターにしがみついていた。

しばらくして揺れは収まるが、外から大きな音が聞こえる。

「!? ティナさん、ここを動かないで」

「は、はい」

ティナをその場に残してエスターがテラスに出ると、浜辺には大型の機動兵器が姿を表していた。

その機動兵器は、昨日の夜に洞窟に運ばれてきた物だった。

「あれは……昨日の」

エスターは、急いで家の中に入って荷物を持ち出してティナの元へと向かう。

「ティナさん、ここは危険だから逃げて」

「何か、あつたんですか?」

ティナは、突然の状況を理解できていなかった。

「巨大なロボットが浜辺にいます。だから、全力で逃げて!」

「エスターさんは?」

「僕は、行かないやいけない場所があるからいきます。いいですか、とにかく全力で逃げ」

てください」

それだけ言つて、エスターは飛び出していく。

大型機動兵器は、小さな孤島を目掛けて飛んでいく。

その後を数十機のVF-5000やVF-3000等の旧式機で編成された戦闘機部隊が続く。

「何処へ行く気なんだろう？ こうしちゃいられない」

大通りに出た後、エスターはタクシーを拾つてバルキリーを隠した場所へと向かう。

戻る途中に通り返つた街では、突然現れた大型機動兵器がニュースで報じられていた。

その報を受けて、人々はパニックになつていた。

（あの洞窟が反統合軍の隠れ家だったんだ。早く行かないと、このままでは大変な事になるかも知れない）

焦りを感じて必死に駆け足でバルキリーの隠し場所へと辿り着いたエスターは、不安と焦りを胸にバルキリーに乗り込む。

「とりあえず、隊長に連絡を入れないと」

エスターはブラックバルチャー基地へと通信回線を開ける。

『こちら、ブラックバルチャー基地』

エステターの通信にアイナが応答する。

『エステターです。隊長に繋いでください』

『ごめんなさい、エステター。隊長は今、哨戒任務に出ている最中なの』

『でしたら、オルファンで反統合軍の機体が出現したと隊長に伝えてください』

『了解、隊長に伝えておくわ』

『お願いします』

通信を終えたエステターは、エンジンに火を入れる。

「タクヤもニュースで気付いてくれていると良いんだけど……」

タクヤの事を心配しながらもエステターは、バルキリーを発進させる。

## 第12話アフター・イン・ザ・ダーク

孤島では既に戦闘が始まっていた。

この孤島には、統合軍の軍事施設や研究施設が多数建造されており、様々な研究が行われている。

特に自然に囲まれている環境の為、生物や生態に関する研究が盛んであり、統合軍からは一目置かれていた。

しかし、その施設も今では敵からの攻撃で大打撃を受けている。

VF-11を主力にした部隊が大型機動兵器や後続部隊を迎え撃ち、地上からはデストロイド部隊が主力部隊を援護する。

しかし、その部隊も大型機動兵器の攻撃により次々と撃墜されていく。

エスター機が孤島に到着した頃には、既に施設の半分以上が大型機動兵器の攻撃で壊滅状態だった。

「酷い……」

エスターは、悲惨な状況を見て思わず呟く。

そんな干渉に浸る余裕もなく、目の前にVF-5000の編隊が襲い掛かる。

「少しでも被害を食い止めなきゃ」

V F—5000のミサイルを次々とかわし、エスター機はガンポッドで機体を撃墜していく。

V F—5000の部隊と戦闘しているエスター機に気付いた大型機動兵器は、肩のビームランチャーで攻撃を仕掛ける。

「くっ！」

間一髪でビームランチャーをかわしたエスター機は、ガンポッドで大型機動兵器を攻撃するがビクともしなかった。

更に追い討ちを掛けるかの如く、大型機動兵器は腕からのミサイルランチャーで攻撃するが、エスター機はガンポッドで撃墜しつつミサイルで攻撃する。

しかし、ミサイルは肩のビームランチャーで次々と撃墜される。

「何処かに弱点は……」

エスターは、機体をファイターに変形させて攻撃を回避しながら大型機動兵器の周りを飛びながら弱点を探す。

しかし、大型機動兵器の攻撃を避けるのが精一杯で弱点を探す余裕が無かった。

『そのパイロット、なかなかやるじゃないか！』

突如大型機動兵器から声が発せられる。



しかし、その声は聞き覚えのある声だった。

「この声、もしかして……」

エステルは、機体をガウオークに変形させて通信を入れる。

『もしかして、ケヴィンさんですか？』

『!? まさか……エステルか？』

ケヴィンは、エステルの通信に言葉が詰まる思いだった。

戦っていた相手が、昨日親切心で助けた相手であれば尚更だった。

『お前……統合軍だったのか？』

『……はい』

エステルもケヴィンと同じく言葉を詰まらせる。

『そうか、そうだったのか。クッククック、あーっははははははは！』

唐突にケヴィンは、大声で笑い出す。

『なんか急に歯応えのあるヤツが出てきたなあと思つたら、エステルだったのかあ』

『ケヴィンさん、もうこれ以上攻撃をするのは止めてください。お願いします』

エステルは、モニター越しにケヴィンに頭を下げる。

『攻撃を止める……か……悪いけど、ソイツは無理な相談だ』

先程まで笑っていたケヴィンの眼差しが急に鋭くなる。

『どうしてですか?』

『お前にも話したが、俺は統合軍が憎い。それにお前が撃ち落とした機体には、俺の仲間達が乗っていたんだ』

『そんな……』

『だから俺は、統合軍よりも仲間の敵討ちもしなきゃいけないんだよ!』

ケヴィン機は、ビームランチャーの砲身をエスター機に向けて攻撃を開始する。

『止めてください、ケヴィンさん!』

エスター機は、逆加速で攻撃を振り切りながらファイターに変形する。

『攻撃しろよ、エスター!』

ケヴィン機は、ビームランチャーとミサイルを同時に発射する。

エスター機は、チャフをバラ撒きながら不規則な軌道を描きながらミサイルとビームランチャーを回避する。

『そんな事、僕には出来ませんよ!』

ケヴィン機の攻撃を回避しながらエスターは叫ぶ。

そこには困っていた自分に親切にしてくれた人への情があったからだ。

しかし、隙を突かれてエスター機は、ケヴィン機の大型マニピュレーターに捕らえられてしまう。

「しまった」

エスター機は、エンジンを限界まで上げるが、ガツチリと捕らえている為、全く動けない状態だった。

『エスター、そろそろ観念しろ』

ケヴィンから通信が入る。

しかし、その表情は、どことなく悲しげだった。

まだケヴィンにもエスターと同じく情があるのだろう。

『せっかく、お前と知り合えたのに、こんな結果になるなんて残念だ』

『ケヴィンさん……僕だって、こんな結果になんて嫌ですよ。だから、もう止めましょうよー！』

エスターは、最後の望みを掛けて再度ケヴィンの説得を試みる。

『……悪いな。これも仲間の為だと思って、諦めてくれ』

マニピュレーターに少しずつ力が入り、エスター機は徐々に押し潰されていく。

「くっ……」

エスターは、少しずつ潰れていくコクピットの中でケヴィンを説得できなかつた悔しさと悲しさと胸がいっぱいだった。

その時、ケヴィン機とエスター機のレーダーにミサイルが感知される。

「何だ？」

見上げると上空からミサイルが降り注いでくる。

ケヴィン機は、ビームランチャーで迫りくるミサイルを次々と撃ち落として辺りを見回す。

「力が加わってない？ い、今だ」

ケヴィンが怯んでマニピュレーターが緩んだ一瞬の隙を突いて、エスターはエンジンを限界まで上げてマニピュレーターから脱出する。

『エスター、大丈夫か？』

ドルチエフから通信が入り、上空を見上げるとブラックバルチャー隊のバルキリーが次々とやってくる。

『隊長』

『よく頑張ったな。アイナから話は聞いた、後は俺達任せろ。全機、攻……』

『ま、待つてください！』

攻撃命令を出そうとするドルチエフをエスターは、機体をガウオークに変形させて止める。

『エスター。何故、止める！』

突然の事にブラックバルチャー隊も機体をガウオークに変形させて停止する。

『あの機体には、僕の知り合いが乗っているんです。お願いです、攻撃しないでください』

エステルは、ケヴィンへの攻撃を止めさせる為、ドルチエフに必死に頭を下げる。

『ここは戦場だ！ 甘ったれた感情を持つと今度は、お前が死ぬんだぞ！』

エステルの願いを退け、ドルチエフは怒鳴る。

『隊長、お願いします！ 僕は、あの人を助けたいんです！』

『何度も言わせるな、そんなに死にたいのか！』

『……それでも構いません』

エステルは、涙を流しながら覚悟を決めていた。

『エステル……』

エステルの覚悟を決めた態度にドルチエフは躊躇する。

『僕は……死んでも構いません。隊長、お願いします』

エステルは、真剣な眼差しでドルチエフに訴えかける。

その姿にドルチエフは、何処となく昔の自分の面影を投影していた。

例えば任務だとしても時には、どうしても任務に背いてまでやらなければならない事が

あった。

今のエステルであれば、それはケヴィンを説得して戦いを止めさせる事だった。

『……わかった。そんなに言うなら、やってみろ。その代わりに、死ぬならお前一人で死ね。周りを巻き込むな』

『!? ありがとうございます』

厳しい言葉ながらも、その言葉の裏側に隠された温かさを感じたエステルは、頭を下げてドルチェフに礼を言う。

『ところで、タクヤは何処にいる?』

先程からタクヤの姿が全く見えない事を疑問に思い、ドルチェフが問い掛ける。

『……わかりません。昨日から、はぐれてしまつて。連絡をしても全く繋がらなくて』

『そうか……』

エステルの言葉にドルチェフは溜め息を吐く。

タクヤが任務をサボっている事と真面目に任務をやってくれろと信じていた自分に對して、ドルチェフは沸々と怒りが湧いてきていた。

『俺達はタクヤを探しに行く。後の事は、お前に任せる』

『ありがとうございます』

『やるからには、悔いを残すなよ』

『はい』

『全機、タクヤのバカを探しに行くぞ!』

ケヴィンの事をエスターに任せて、ブラックバルチャー隊はタクヤの搜索をしに市街地の方へと飛んでいく。

『エスター、話は着いたか？』

ケヴィンが見計らうようにエスターに通信を入れる。

エスターとドルチエフが会話をしている間にケヴィンは攻撃をしようと思えば、いつでも攻撃が出来る態勢だった。

しかし、敢えてそれを行わなかったのは、ケヴィンなりの優しさだったのかも知れない。

『……ケヴィンさん』

エスター機は、ケヴィン機の近くまで飛び、バトロイドに変形して近づく。

『お願いです、ケヴィンさん……もう、戦うのは止めましょう』

エスターは、ケヴィンに通信で呼び掛ける。

『一人でここに来るって事は……エスター、覚悟はできたか？』

『僕は、死んでもケヴィンさんを説得します』

エスター機は、覚悟を決めてケヴィン機の前に立ちふさがる。

それと同時にケヴィン機は、エスター機の足元にビームランチャーを撃ち込み、エスター機の足元に穴を開ける。

『どうやら、言葉に嘘は無いみたいだな』

ビーム攻撃に臆して逃げると思っていたが、エスターは逃げようとはしなかった。

エスターが死ぬ気で自分を説得しようと試みる思いにケヴィンは、殺すのが惜しいと言いたいのが頭の中を過る。

ケヴィン機は、ビームランチャーをエスター機に目掛けて撃つが、エスター機は、とっさに防弾シールドでビームランチャーを防ぐ。

ビームランチャーのエネルギー圧にエスター機は、防御しつつも徐々に圧されていく。

『そのまま耐えられるか?』

ケヴィンは、ビームの出力を上げる。

ビームの出力が上がリ、防弾シールドが徐々に溶け始める。

「くっ……」

ビームの出力に圧されてエスター機は、片膝を付く。

『ケヴィンさん、お願いだから止めてください。ティナさんが悲しみますよ!』

エスターは、必死になってケヴィンを説得する。

『ティナの名前を出すんじゃない!』

やがて防弾シールドが溶けてエスター機の左腕を貫通してエスター機は、そのまま吹



き飛ばされる。

『確かに統合軍の行いで被害を受けた人もいます。だからこそ、僕は、その事実を受け止めて、少しでも解り合いたいです』

エステルは、機体をガウォークに変形させてケヴィン機に突撃する。

『そんな綺麗事で争いなんて終わらないんだよ！』

ケヴィン機は、向かってくるエステル機にビームランチャーとミサイルで攻撃する。

エステル機は海面付近を大きく旋回して、水しぶきを揚げてビームを拡散しつつ、ガンポッドでミサイルを撃ち落とす。

「くっそー！」

ビームを拡散されて、なかなかビームが当たらない事にケヴィンは苛立ち、その雰囲気は、エステルも僅かながら感じ取っていた。

そして、エステル機は水しぶきを揚げながらケヴィン機に近づき、ガンポッドの銃剣を右肩のビームランチャーに突き刺す。

銃剣を突き刺されたケヴィン機の右肩は爆発を起こし、その衝撃でコクピットは大きく揺れる。

「うおおああー！」

銃剣を突き刺されたケヴィン機の右肩は、火花を散らして動かない状態だった。

(後は左腕を動かさないようにしないと)

右肩が動かないケヴィン機の様子を見たエスターは、勝機を見出そうと必死で頭の中で考える。

(!? あそこなら)

空を見上げたエスターは考えを思いついたのか、機体をファイターに変形させて上空へと上昇する。

「クソ、逃げんじゃねえよ!」

空へと飛び立つエスター機に目掛けて、ケヴィン機はビームランチャーを連射する。背後からのケヴィン機の攻撃を何とか避けつつ、エスター機は太陽目掛けてグングンと上昇していく。

そして、ある程度上昇した所で機体を急速反転させてエスター機は、太陽を背後にケヴィン機に目掛けて加速する。

「クッ、くそ、太陽が眩しくて見えねえ!」

ケヴィンは、手で日差しの光を隠して攻撃する。

太陽を背に向けたお陰でケヴィン機の攻撃は、エスター機には殆ど当たらなかった。

「うわあああああ!」

エスターは、叫びながら機体をケヴィン機に突撃させる。

そして機体をバトロイドに変形させて、ガンポッドの銃剣を展開させてケヴィン機の左肩に突き刺した。

「はあ……はあ……はあ……」

エスターは上がる息を抑え、ケヴィン機の動かない左腕を見て勝利を確信する。

『ケヴィンさん、もう……止めてください。お願いします』

エスターは、少しだけ涙目になりながらもケヴィンを説得する。

『はあ……くっそー、やっぱり素人ではプロには勝てないか……』

ケヴィンは、レバーをガチャガチャと動かして腕が動くかを確認するが、両腕共に動かない事を確認した後、シートに凭れる。

しかし、その表情は悔しさと言うよりも吹っ切れた感じで少しだけ笑っていた。

「はあ……はあ……はあ……も、もう、は、走れねえ」

静まり返った人通りの少ない路地裏の片隅でタクヤは、息を切らしてうずくまっていた。

顔は殴られたのか少し腫れぼったくなり、服も所々が破れている。

「くっそー、あの店のお陰で酷い目にあっただぜ」

タクヤは、路地裏からこっそりと顔を出す。

辺りはグラサンを掛けた黒ずくめの男達がウロウロとしていた。

「はー……通信機と携帯電話が無いから連絡も取れないし、もう最悪だぜ」

タクヤは、思わず大きな溜め息を吐く。

グー、キュルルル……

溜息と同時にお腹の虫も鳴り出した。

朝から何も口にしていない為、尚更腹の虫も大きな声で鳴いている。

「あー、腹減つたなあ……誰とも連絡取れないし、俺もうダメなのかな……」

タクヤの脳裏に絶望感が過り、思わず涙目になる。

「あー、誰か助けに来てくれえええええ！」

「いたぞー！」

絶望感からタクヤが思わず大声で叫んだ為、黒ずくめの男達に居場所が見つかってしまい、タクヤは路地裏を飛び出して逃げ出す。

「ちくしよおおお、俺のバカヤローー！」

タクヤは大声を出した自分を自責して、叫びながら都心部の方へと必死で逃げる。

人混みを分けながら必死に逃げるタクヤの後ろを黒ずくめの男達が必死に追い掛ける。

「誰か、助けてくれえええええ！」

「ん？」

ドルチェフの指示でタクヤの搜索をしていたレオンは、聞きなれた声のする方を向く。

「あれは……もしかしてタクヤか?」

レオンが声のする方向へ向かうと、タクヤは必死の形相で黒ずくめの男達から逃げていた。

「アイツ、何やってるんだ?」

タクヤを見つけたレオンは、通信機を取り出してドルチェフに連絡を入れる。

『バルチャー3よりバルチャー1。タクヤを見つけました。ポイントはB—2地区からB—3地区へ移動予定。黒ずくめの男達に追い掛けられています』

『バルチャー1、了解。そのまま、タクヤを追え』

『了解』

ドルチェフとの通信を終えたレオンは、タクヤを追い掛け始める。

「……つたく。アイツは、一体何をやらかしているんだ?」

レオンの通信を受けたドルチェフの声は、溜め息混じりだった。

それと同時に馬鹿な部下を搜索し、そして振り回される自分に対してイライラ感が募り始める。

『バルチャー1から各パイロットへ。バルチャー3がタクヤを見つけた。全員、ポイン

トB―3へと向かえ』

『了解』

搜索を続けるパイロット達へ指示を出した後、ドルチェフもポイントB―3へと向かう。

「げ、やべえ……」

逃げた先は行き止まりになっており、遂にタクヤは追い詰められてしまう。

「追い詰めたぞ、クソガキ！ さあ、料金を払って貰うぞ」

追い付いた黒ずくめの男達は、タクヤにジリジリと近付いてくる。

「う……ああ、あ……」

もう逃げ場がないタクヤは、恐怖のあまり言葉が出ず、次第に足がガクガクと震え始めて、その場にへたり込む。

「そこまでだ」

黒ずくめの男達の後ろから声が聞こえる。

「あ、ああ……」

タクヤは声の主を見て地獄で仏にあったような気持ちになり、先程までの恐怖感からの表情から一転、次第に明るくなる。

「大の大人が一人の少年を寄ってたかって囲むのは、大人気ないと思わないか？」

ドルチェフに続いて他のブラックバルチャー隊も次々とやってくる。

「な、何だ？ テメエらは？」

黒ずくめの男達は、ドルチェフ達に食つてかかる。

「俺達は統合軍だ。その少年は、俺達の部下だから返して貰おうか」

「統合軍？ なら話は早い。コイツ、俺達の店で飲み食いした挙げ句、金を払わないんだから代わりに払え」

長身の黒ずくめの男がドルチェフに事の成り行きを説明する。

その説明を聞いたドルチェフは、次第に頭痛を感じ始める。

「……そうか、それはすまなかつた。それで、幾らだ？」

男から事の説明を聞いたドルチェフは、素直に男の要求を受け入れる。

「え？ ちよ、隊長、何を払おうとしてるんだよ！ コイツら、ぼつたくりバーの連中だぜ！」

タクヤは、黒ずくめの男達の要求を受け入れるドルチェフを見て怒鳴り散らす。

「馬鹿野郎！ 元はと言えば、そう言う店を見抜けなかつたお前が悪いんだろうが！」

タクヤのあまりにも軽率な行動に怒りを感じたドルチェフは、逆にタクヤを説教する。

「とりあえず、部下が失礼した。振込先と金額を教えてくれ」

「わかった」

長身の男は、紙切れに振込先と金額を書いてドルチェフに渡す。

「明日中には、振り込んでおこう。もし、振り込まれていなかったらココに連絡をくれ」

ドルチェフは、連絡先を書いたメモを男に渡す。

「おほ、さすが統合軍。話がわかるじゃねえか」

メモを受け取った長身の男は、思わず上機嫌になる。

「物分かりのいい上司がいて良かったな。また遊びに来いよ」

へたり込むタクヤの肩を嬉しそうに叩きながら長身の男は、他の黒ずくめの男達と帰っていく。

その様子を見ていたタクヤは、間抜けな面を晒していた。

「さて、タクヤ……」

ドルチェフは、タクヤを殺気立った目で睨み付ける。

他のブラックバルチャー隊もタクヤを呆れた表情で見っていた。

「あ、え、えーと……」

タクヤは、ドルチェフの殺気立った目を前にしどろもどろになる。

「お前とエスターの任務は、何だ？」

ドルチェフは、ドスの効いた声でタクヤに問い掛ける。



「え、えーと……その……」

ドスの効いたドルチェフの声にタクヤは、たじろぎながら冷や汗を流す。

「忘れたか？」

「は……はい」

今のタクヤの頭の中は、真っ白になっており、返答するのがやっとだった。

「そうか。お前達の任務は惑星オルファンにある反統合軍の隠れ家を探す事だ。

思い出したか？」

「は……はい」

「任務遂行なのに何故お前は、ぼったくりバーの男達に追い掛けられる？」

再びドルチェフは、ドスの効いた声でタクヤに問い掛ける。

「え、えーと……そ、その……」

再びタクヤの足はガクガクと震えだし、すでに涙目状態だった。

「まあ、いい。お前の説教は、後でたっぷりとしてやるから楽しみにしておけ。今は、エスターを助けに行くぞ」

ブラックバルチャー隊は、急いでエスターの援護に向かう。

『はー、俺の負けだ。潔く負けを認めるわ』

ケヴィンは、両手を挙げて降伏の仕草をする。

『……すみません、何だか色々』

降伏する仕草を見せるケヴィンに対してエステルは、罪悪感を感じたのか申し訳無さそうに頭を下げる。

『まあ、仕方ないさ。お前は、ただ仕事を全うしただけなんだしな。それに済んだ事をいつまでも引きずるなんて、俺らしくないしな』

潔く負けを認めて開き直ったケヴィンは、シートにもたれ掛かかのように寝転がる。

その表情は、先程の闘争心を見せる表情とは違い、いつもの陽気で活発な表情だった。

『ケヴィンさん』

ケヴィンの表情につられてエステルも笑顔を見せる。

『お疲れ様。でも、残念ですね』

突如、何者かが二人の通信に割り込んでくる。

『誰だ！』

割り込んできた通信を聞き、ケヴィンは辺りを見回す。

エステルも辺りを見回しながら警戒する。

『せっかく、我々の試作機であるシルフィードを貸し出したのに、たった1機にやられるなんて本当に情けないですね』

通信主である男は、物腰が柔らかく口調、且つ丁寧な言葉遣いでケヴィンを挑発する。

『うるせえ！ 能書きはいいから、とつとと姿を見せろ！』

声だけで姿を見せない男にケヴィンは、苛立ちを見せる。

『残念ながら、姿を見せる訳にはいきません。もうすぐ、この辺り一帯は消えて無くなるんですからね』

『消えるって、どういう事だ？』

『あなたは、我々の提示した任務を失敗したのですよ。その代償を受けるのは、当然ですよね？ だから、この島一帯を消す事にしました』

『待てよ、任務に失敗した代償を受けるなら俺だけで充分じゃないのか？』

『所謂、連帯責任と言う物でしょうかね？』

『なんだと！』

『シルフィードで統合軍の研究施設を完全に破壊できれば良かったのですが、残念ながら、あなたは完全破壊はおろか、シルフィードを使い物にならないようにしてしまいましたからね。あなた一人で失敗の代償は償えませんか。だから、この島にも責任を取ってもらいます』

男は、相変わらず物腰の柔らかい口調と丁寧な言葉遣いで黙々と話す。

『ふざけるな！ 勝手な事を言うんじゃないやねえよ！』

『まずは小手調べです。お二方、上をご覧なさい』

男の言葉に二人が見上げると、4機の大型爆撃機VAB―2とVF―5000とVF―11の混成大部隊が徐々に降下を開始していた。

『な、なんて数……』

エスターは、大部隊の数に固唾を飲む。

その数はエスターとケヴィンだけでは、太刀打ちできないくらいだった。

『まずは、ほんの挨拶代わりです』

男の通信が終わると、1機のVAB―2が付近の孤島に向けて1発の反応弾を発射する。

『さて、あの先にはティナが……』

『え!?!』

反応弾の発射先を見たケヴィンは、驚愕する。

ケヴィンの言葉にエスターも同じように驚く。

発射された反応弾は、徐々に孤島へと向かう。

「やらせるかよー!」

ケヴィンは、ジョイスティックのトリガーを弾いて反応弾を撃ち落とそうとするが、先程のエスターとの戦闘で使い物にならない状態にされた為、ビームが発射される事はなかった。

「こんな時に、クツソオオオオオ！」

何も出来ない事にケヴィンは、怒りに任せてコンソールパネルを思い切り叩く。やがて、発射された反応弾は、そのまま孤島に命中して辺りを焼き尽くす。

一瞬の事に島民達は、あつという間に消し炭になる。

勿論、その中にはティナも含まれていた。

「……ティナ、ティナアアアアアアアア！」

燃え盛る孤島の姿にケヴィンの悲痛な叫びがこだまする。

「……そんな」

初めて見る反応弾の圧倒的な威力にエスターは、放心状態になる。

『私からの挨拶、喜んで頂けましたか？』

あざ笑うかのような男の通信にケヴィンは、身体を震わせる

『エスター、大丈夫か？』

ドルチェフから通信が入る。

『……隊長』

ドルチェフの通信にエスターは反応するが、その表情は呆けており、声も涙声だった。『あの爆発は、まさか反応弾か？』

ドルチェフの言葉にエスターは、黙って頷く。

『くっ……反統合軍のヤツらめ』

反応弾の恐ろしさを経験しているだけにドルチェフは、激しく怒りを露わにする。

『おやおや、他にも来客がいましたか。ちようどいい、丁重に持て成しましょう』

男の通信と共に混成部隊がブラックバルチャー隊に襲い掛かる。

『バルチャーから各機へ。各自、散開して迎撃態勢を取れ。カイルとトールは、通信主の索敵ならびにVAB―2の攻撃進路の解析だ』

『了解』

ドルチェフの通信を受け、ブラックバルチャー隊は散開して迎撃態勢に移る。

大多数の混成部隊に屈する事なく、ブラックバルチャー隊は次々と混成部隊の機体を撃ち落としていく。

『隊長。俺、エスターの様子を見てくる』

『わかった。気を付けて行け』

ドルチェフに通信を入れて、タクヤ機はエスターの元へと向かう。

途中、混成部隊がタクヤ機に攻撃を仕掛けようとするが、仲間達の援護により、事なきを得て無事にエスターの元へと向かう。

『エスター。お前、大丈夫か?』

ケヴィン機ごとシルフィードに肩乗りしたエスター機を見ながら、タクヤがエスター

に通信を入れる。

『タクヤ、お願いだから相手の機体は撃たないで！』

タクヤ機が存在に気付き、エスターはタクヤに通信を入れる。

それでもケンカ早いタクヤの場合、あらかじめ通信を入れても攻撃をする可能性が高いので、エスターは内心、不安に感じていた。

『わ、わかった。それにしても、前のブラッドなんともデカかったけど、コイツもダメえなあ……』

タクヤは、機体をガウォークに変形させて近づき、マジマジとシルフィードを見る。

ネルが元々所属していた反統合軍組織レッド・バタフライにも大型の機動兵器であるブラッド・ザンバインが搬入されていたが、シルフィードもブラッド・ザンバインに劣らない程の大きさだった。

『ケヴィンさん』

ケヴィンの様子が気になり、エスターはケヴィンに通信を入れる。

モニターには、顔を伏せて肩を震わせるケヴィンの姿が映し出される。

最愛の妻を反統合軍に殺されて悲しみに暮れるケヴィンの姿は、モニター越しからも伝わってきていた。

声押し殺して泣くケヴィンの姿を見て、思わずエスターは居たたまれなくなる。

反統合軍とブラックバルチャー隊の戦いは、熾烈を極めていた。

「クソ、数が多すぎる」

ドルチェフ機は、攻撃を仕掛ける混成部隊の機体を次々と撃ち落とす。

しかし、上空から次々と援軍が来る為、苦戦を強いられる一方だった。

『マリア、そつちはどうだ？』

『ダメ、数が多すぎるわ』

マリアの方も次々と来る援軍の数に徐々に押されていた。

『ホークス2から、各機へ。こちらの確認でオルファン上空には、大型艦クラス3隻、巡洋艦クラス7隻を確認しました』

エミリアからブラックバルチャー隊に通信が入る。

『かなりの大部隊だな』

『隊長、こちらにも支援要請を出しますか？』

反統合軍の艦隊を見たエミリアがドルチェフに支援要請を提案する。

『俺達がいくら支援要請を出しても、統合軍は援軍を寄こしはしないだろう。なんせ、俺達は掃きだめ部隊だからな』

『そんな……』

統合軍からしたら掃きだめ部隊故に全滅してもらった方が有難いとドルチェフは



思っていた。

『隊長。これじゃあ、いくら撃ち落としてもキリがありません』

物陰からスナイパーライフルで援護射撃をするフォルトがボヤク。

『このままでは、こちらが消耗するのも時間の問題です』

戦況を見たカイルが通信を入れる。

『隊長、大変です』

トールが慌ててドルチェフに通信を入れる。

『どうした?』

『爆撃機の進路報告を索敵したところ、進路報告先には都心部が見えます。恐らく、ヤツ

らの狙いは反応弾による都心部の攻撃だと思えます』

索敵情報を元にトールは爆撃機の情報をドルチェフに伝える。

『やはり、そうか……バルチャーより各機へ、爆撃機を止めろ。急がないと都心部が反

応弾で攻撃される!』

ドルチェフは、ブラックバルチャー隊に通信を入れる。

『ドルチェフ、こっちは敵に阻まれて行けないわ』

反統合軍の攻撃を防ぎながらマリアから通信が入る。

『バルチャー5。こちらダメです』

『バルチャー6。同じく追撃が出来ません』

マリアを筆頭に次々と爆撃機追撃不可能の通信がドルチェフに入る。

それだけ反統合軍の部隊数が多く、且つ増援も多いのだろう。

次々とする通信にドルチェフの表情が次第に険しくなっていく。

『くそ。あと近いのは……タクヤとエスターか』

正直、タクヤとエスターに爆撃機の追撃は荷が重すぎると内心思っていた。

しかし、今の現状を考えると、そうも言ってはられない。

ドルチェフは、タクヤとエスターに一縷の望みを賭けて回線を開ける。

『タクヤ、エスター、聞こえるか？ 爆撃機がそつちに向かっている。何としても止める

んだ！』

タクヤとエスターにドルチェフからの通信が入る。

その声からは焦りが感じられる。

「隊長の声からして、かなり状況的にマズいんだろうな」

普段、あまり焦るような様子を見せないドルチェフが、声のトーンからここまで追詰められているのを感じたエスターは、危機感を持ち始める。

「あ、アイツか」

タクヤは、肉眼で4機のVAB―2と混成部隊で編成された爆撃部隊を確認する。

『タクヤ、急がないと』

『おう!』

タクヤとエスターは、機体を浮上させる。

「あ、あれ。出力が上がらない」

エスターは必死にスロットルを上げるが、機体のエンジン出力があまり上がらなかった。

『タクヤ、エンジンの出力が上がらない!』

エスターは、出力が上がらないエンジンに焦りながらタクヤに通信を入れる。

『ちよ、マジかよ!?!』

エスターの通信にタクヤは急に焦りだす。

『勘弁してくれよ。俺一人で爆撃機を追撃なんて出来ねえよ』

エスターの状況にタクヤは、不安と焦りで苛つきだす。

『ゴメン……タクヤ』

いざという時に何も出来ない自分に対してエスターは、嫌悪感を募らせる。

『エスター』

焦る二人にケヴィンがエスターに通信を入れる。

『ケヴィンさん……』

『あの爆撃機。俺が止めてやる』

ケヴィンは、伏せていた顔を上げる。

その表情は、怒りに燃えていた。

『俺の生まれ育った故郷を……あんなヤツに滅ぼされてたまるかよ！』

愛する妻を殺され、そして今、自分の生まれ育った故郷も破壊しようとする反統合軍のやり方にケヴィンは復讐に燃えていた。

『そんな、その機体では無理です！』

『そうだよ、止めとけよ』

タクヤとエスターは、怒りに燃えるケヴィンを説得する。

既にボロボロな機体で爆撃機を追撃する事自体が無謀だった。

『うるせえ、黙ってろ！』

ケヴィンは、説得する二人を怒鳴り散らす。

その怒鳴り声に二人は、ビビって黙り込む。

『おい』

ケヴィンは、タクヤに通信を入れる。

『……な、なんだよ』

怒り狂うケヴィンに声を掛けられ、タクヤは少しビビった状態で通信に応じる。

『エスターを連れて遠くに逃げる。それも、なるべく遠くにだ。お前達の仲間にもそう伝えろ』

それだけを伝えて、ケヴィンは機体を動かす。

『ケヴィンさん!』

エスターの叫びも虚しく、シルフィードは爆撃部隊に向かって飛ぶ。

『エスター、あの人の言うとおりにしよう』

タクヤは、ポツリと眩きの通信をエスターに入れる。

ケヴィンの言葉は、既に死を覚悟していた事をタクヤは悟っていた。

『どうして、そんな事を言うのさ! タクヤ、そんな事を言わないで助けに……』

『ワガママ言ってるじゃねえ!』

エスターの言葉を遮り、タクヤは怒鳴る。

突然の事にエスターは、言葉を詰まらせる。

『タクヤ……』

『今、行った所で俺達に何が出来るんだよ。あの人は……あの人はなあ……もう覚悟を決めたんだよ。俺達は、あの人の言う通りにしてやろうぜ』

タクヤは、目に涙を浮かべながら話す。

タクヤやエスター、そして、ブラックバルチャー隊を巻き込まない為に死を覚悟して

生まれ故郷を救おうとするケヴィンの想いを無駄にしない為だった。

『う、うう……うああああ』

エステーの目から涙が零れ落ち、そのまま泣き崩れる。

エステーにとって、何一つケヴィンに対して恩返しが出来なかった事への悔しさの想いがいっぱいだった。

『エステー、いつまでも泣いてんじゃねえよ』

『……うん』

二人は機体をファイターに変形させて、その場から離れる。

出力が上がらない機体を何とか必死に上げながらエステー機は飛ぶ。

やがて2機は、戦場へと近づく。

『エステー、援護するから早くおっさんに連絡しろ』

出力の上がないエステー機を護る為、タクヤは周りの状況を確認し始める。

『うん……バルチャー12から、バルチャー1』

エステーは、ドルチェフに通信を入れる。

しかし、その声は涙声で震えていた。

『エステーか。どうした?』

『隊長、急いでその場から離れてください』

『どういう事だ?』

『彼が……彼が、い、命懸けで、爆撃機を……破壊します。だ、だから……だから、爆発に……巻き込まれないように……に、逃げてください』

ケヴィンの事を思い出したエステルは、溢れる涙を抑えながらも涙声でまともに喋れない声を必死に出しながらドルチェフに話す。

『……わかった』

ドルチェフは、エステルの涙声から内容を理解したのか、エステルの言葉に頷く。

『バルチャーから各機へ。至急、この場から急いで脱出しろ。間もなく反応弾が爆発する』

『了解』

ドルチェフの通信を受けてブラックバルチャー隊は、混成部隊に攻撃しながら次々と脱出する。

『隊長、エステルの機体が出力が上がらないんだ』

『わかった。俺も援護に回る』

タクヤの通信を受けてドルチェフもエステルの援護に加わる。

『エステル』

エステルが退避する最中、ケヴィンから通信が入る。

『ケヴィンさん……』

『本当に短い間だったけど、色々楽しかったぜ』

『僕も……僕も、楽しかったです』

エステルは、止めどもなく溢れ出る涙を拭う。

『もう少し色々話をしたいけど、そろそろ切るわ。じゃあな、エステル……あばよ』

死を覚悟したのか、涙が零れそうになる姿をエステルに見られたくないのか、ケヴィンは俯いたまま通信回線を切る。

『ケヴィンさん！』

エステルはケヴィンへの通信回線を開けるが、ケヴィンからの応答は返って来る事は二度と無かった。

「さて……今日は、大型のエイが4枚にカジキやマグロと大量だなー」

ケヴィンは、目の前に見える爆撃部隊を魚に例えて、スロットルレバーを一気に上げる。

シルフィードに気付いた混成部隊は攻撃を仕掛けるが、それに怯む事もなくシルフィードはVAB—2目掛けて突っ込んでいく。

次々と攻撃を食らいボロボロとなるシルフィード。

それでもなお、怯む事無く目標であるVAB—2へと向かう。



「ティナ、今日は大漁だったぜ……もうすぐ、お前の元へ行くからな」

そして、1機のVAB―2に取り付くと、ハードポイントに懸架されている反応弾を殴り壊す。

シルフィードにより破壊された反応弾は、大爆発を起こし、シルフィードを含めた爆撃部隊は爆発の中へと消えてゆく。

そして、巨大な爆光と大きな振動が全体に響き渡る。

その衝撃や爆風は、ブラックバルチャー隊やそれを追いかける混成部隊にもやって来る。

『来るぞ、全機回避行動に移れ!』

『了解』

間もなく反応弾の衝撃が来る事に気付いたドルチェフは、反応弾の衝撃に備えるようにパイロット達へ通信を入れる。

混成部隊は、爆風により次々と巻き添えをくらって撃墜され、ブラックバルチャー隊の機体も爆風の煽りを受けて吹き飛ばされる。

「うおおああああ!」

パイロット達は、必死に操縦桿を引きながらバーニアを吹かせるが、爆風の勢いで機体が制御できずに機体をそのまま地面や海水に叩き付けられた状態で不時着を余儀な

くされる。

「おやおや、最後は反応弾と心中ですか」

大きな爆光が輝くオルファンを見て男は眩く。

「こちらの戦力もかなり被害が発生しておりますが、いかがいたしますか？」  
オペレーターが男に戦況を報告して指示を仰ぐ。

「この惑星にもう用はありません。残存機収容後、撤退します」

オルファン内に残存する機体は、男からの指示で次々と惑星内から撤退を始める。

残存機を艦艇に収容後、艦隊はフォールドして撤退する。

『バルチャー1より各機へ。全員……無事か？』

『バルチャー2、こっちは大丈夫よ』

『バルチャー9、こっちも大丈夫です』

ドルチェフの安否確認に次々と応答が入る。

『タクヤ、エスター。お前たちも無事か？』

タクヤとエスターから応答が来ない為、ドルチェフは二人に通信を入れる。

『と、とりあえず、ぶ、無事……』

タクヤは、目を回しながら通信に応える。

『……ぼ、僕も……無事……です』

エスターは、弱弱しい声で通信に応答する。

二人の安否を確認したドルチェフは、ホツとした表情を見せる。

『ホークス3から各機へ。敵部隊は艦載機を収容後に撤退しました』

ラナから敵部隊撤退の通信が入る。

『バルチャーより各機へ。ご苦労だった。これより帰還する』

ドルチェフの命令でブラックバルチャー隊は、ブロウニングへと帰還する。

「それにしても、今回は本当に危なかったな」

ドルチェフは、ヘルメットのバイザーを開けて流れる汗を拭う。

ケヴィンの命懸けの特攻により、反応弾による都心部攻撃は防がれた。

しかし、エスターにとって、その代償はあまりにも大きかった。

「ケヴィンさん……」

ブロウニングに機体を収容後もエスターは、機体から降りず、コクピットの中で声を押し殺して泣いていた。

## 第13話フラッシュ・イン・ザ・ダーク

惑星オルファンでの戦いから1日が過ぎた。

エステルは、ベッドの中で布団を頭から被り塞ぎ込み、目は虚ろで心ここに非ずの状態だった。

「なあエステル、飯に行こうぜ」

普段はエステルに起こされてばかりのタクヤが珍しく早起きをして、エステルを食事に誘う。

しかし、エステルからは何も返事は無かった。

「確かに色々あったけどさ……元気だしなって」

少しでも元気づけようとタクヤはエステルに励ましの言葉を掛けるが、それでもエステルは、布団から顔を出そうとはしなかった。

「エステル、エステルってばー」

タクヤは、布団を被るエステルの身体を揺さぶるが、それでもエステルは起きようとはしなかった。

「おいしいー！」

起きないエスターに業を煮やしたタクヤは、エスターの布団を無理矢理剥がす。布団を剥がすと、そこには身体を丸めて横たわるエスターがいた。

「なあ、エスター。元氣出しなよ……なあ！」

タクヤは、塞ぎ込むエスターを励ます。

しかし、当のエスターは、タクヤの言葉に全く反応する氣配はなかった。

「……ダメだこりゃ」

エスターの様子を見たタクヤは、大きく溜め息を吐き、そのまま部屋を後にする。

「はあ……つたく、どうしたらエスターが元氣になるかなあ」

タクヤは、ブツブツと独り言を呟きながら食堂へと歩く。

「おはよう、タクヤ」

食堂へ向かうタクヤを見掛けてマリアが声を掛ける。

「おはようございませす」

マリアに声を掛けられてタクヤは挨拶をするが、いつもの様な元氣は無かった。

「エスター、そんなに酷いの？」

いつもエスターと連んでいるタクヤが一人だった事とタクヤ自身にいつもの元氣が無かった為、マリアはエスターの様子を伺う。

「ゼーんぜんダメ。こっちが声を掛けても全く反応すらしんない」

タクヤは、半ば諦めた表情を見せながらエステーの様子を MARIA に説明する。

「そう……」

「しゃあない、後で飯でも差し入れてやっかな」

「あら、優しいのね。明日は、雨が降るんじゃないかしら？」

タクヤの意外な優しさに MARIA は、少しだけ感心する。

いつもはエステーを振り回している感じなので、尚更そう感じるのだった。

「俺だって、ちゃんとエステーの事は思いやってるんだぜ」

エステーの事を思いやっているアピールをするかの様にタクヤは、得意気な表情をす  
る。

（いつもエステーに迷惑を掛けてる所しか見てないけど……）

そんなタクヤを MARIA は、苦笑いしながら見ていた。

MARIA と別れて食堂にやってきたタクヤは、トレイに色々な食べ物を掴んで置いてい  
く。

（とりあえず、エステーの分は後で用意しておくかな）

食べ物を取り終えたタクヤは、空いたテーブルを見つけて椅子に座る。

ふとテレビに視線を向けると、昨日のオルファンでの戦闘がニュースで流れていた。

惑星オルファンでの戦闘は、統合軍の施設がほぼ全滅し、一部の島が反統合政府軍の

反応弾により消滅した以外に大きな被害は無かった。

「あの人のおかげで、あの惑星は助かったんだよな……」

タクヤは、ケヴィンの事を思い出す。

ケヴィンの命懸けの特攻により、反応弾を搭載した爆撃機を撃墜する事に成功したのだ。

その事を知っているのは、ブラックバルチャー隊のパイロット達だけである。

「どうしたタクヤ、浮かない顔して」

スキンヘッド頭に巻いたターバンが特徴のマルスがタクヤの向かいに座る。

「マルスさん」

「あの、ニユース……」

マルスもニユースの視線を向けて、苦虫を？み潰したような表情をする。

「ところでエステアのヤツ、大丈夫か？」

塞ぎ込んでいるエステアを心配しながら、マルスはホットドッグを頬張る。

心配するマルスの言葉にタクヤは首を横に振る。

「……そっか」

「ねえマルスさん。俺、どうしたら良いと思う？」

自分なりに励ましてはみたものの、未だに明るい表情を見せないエステアにタクヤは

思わず胸中を吐露する。

「そうだなあ……俺も戦争で親や友達を亡くしてるから、それに近い気持ちは解らないでもないなあ」

タクヤの質問にマルスは、腕組みしながら考える。

マルス自身、故郷をゼントラーデイの強襲により親や友人を亡くしている。

親しい人が亡くなると、人間と言うのは無気力になるものである。

「マルスさんは、どうやって立ち直ったんですか？」

マルスの心境を聞き、タクヤは再度質問する。

「俺か？ そうだなあ……俺の場合は、時間が解決してくれたな」

「……時間かあ」

「下手に励ますのもダメだしな」

「ほっとけば良いんですか？」

「本来はな。ただ、ここは軍隊だ。そんな理由が通るとでも思うか？」

「ああ、確かに。おっさん、絶対に許してくれないしなあ……」

マルスの言葉にタクヤも腕組みしながら考える。

今のエステーの状況をドルチェフに伝えたとしても、彼は絶対に許してくれるどころか、逆に説教されるだろう。



そして、そのとぼつちりは間違いなく自分に降りかかって来るだろう。

「とりあえず、医者にも見せたら少しは答えが見つかるんじゃないか？」

そう言いながらマルスは、ホットドッグを食べ終える。

「そうすつかな。マルスさん、ありがとうございます」

答えが見つかり安心したのか、タクヤは食事をバカバカと食べ始める。

エスターの事で色々悩んでいた影響で食が進まなかったが、悩みが解決すると同時にお腹の虫も鳴り、食欲が出てきていた。

そして、「何で、こんな事で悩んでいたんだろう」と思えてくるようになる。

「ふー、食った食った」

食事を終えたタクヤは、食堂を後にして医務室へ足を運ぶ。

食堂から少し歩いた場所に医務室がある。

「……そう言えば、医務室の中に入るの初めてだなあ」

ふと、医務室の前にやってきてタクヤは眩く。

軽い怪我や病気をしても殆どエスターが医務室から応急用の薬等を持って来てくれる為、タクヤ自身は医務室に一度も行ってた事が無いのだ。

「失礼します」

ドアをノックしてタクヤは医務室に入る。

医務室に入ると、白衣を着た男性と看護士がコーヒーを飲みながら雑談をしていた。「どうした？ どこか調子でも悪いのか？」

医務室に入ってきたタクヤを見るなり医師は声を掛ける。

「えーと、俺じゃなくて、友達がちよつと……」

「友達が、どうかしたのかい？」

「その何て言うのか、えーと、昨日の戦闘で人が死んで、そのショックで塞ぎ込んでいると言うか、何て言うか……」

タクヤは、身振り手振りでエステーの状況を医師に説明する。

「あの……イマイチ何を言っているのか、よく解らないのだが……」

タクヤのしどろもどろな説明に医師は、内容を全く理解が出来ていなかった。

「だああああ！ もう、とにかく来てくれ！」

説明が面倒くさくなったタクヤが医師の手を掴んでエステーの元へ連れて行こうとした、その時、

『全パイロットに告ぐ。これよりブリーフィングを開始するので、早急に徴収せよ。』

繰り返す……』

アイナの施設内放送が基地内に流れる。

「何だよ、こんな時に……あー、クソ！」

アイナの放送を聞いたタクヤは、思わず頭を抱え込む。

医師に診てもらえば、エスターの症状が分かると思つた矢先の出来事だけに余計にイライラ感が増す。

「呼ばれているみたいだし、とりあえず、行つた方が良いんじゃないか？」

「はあ……そうするか」

医師に急かされてタクヤは、掴んでいた手を放して急いでブリーフィングルームへと向かう。

ブリーフィングルームに到着したタクヤは、キョロキョロと辺りを見回すが、そこにエスターの姿は無かった。

「……やっぱり、来てないか」

エスターがいないのを確認したタクヤは、深い溜め息を吐きつつも後ろの席に座る。しばらくして、ドルチェフとアイナがブリーフィングルームに入ってくる。

教壇に立つたドルチェフは、辺りを見回してエスターがいない事に気付く。

「タクヤ、エスターはどうした？」

「え？ いや、その……昨日の件で、ちょっとばかり塞ぎ込んでまして」

ドルチェフの問い掛けにタクヤは、ドルチェフに目を合わせないように理由を話す。

「……タクヤ、もう一度、言え」

ドルチェフはドスが効いた様に声を低くし、更に殺気立った視線をタクヤへと向ける。

「え、ええと……その、き、昨日の事で、ふ、塞ぎ、込んでて……」

ドルチェフの殺気立った視線とドスの効いた低い声にタクヤは、ビクビクしながら問い掛けに応える。

「……そうか。アイナ、俺の代わりに作戦の説明を頼む」

「え？ は、はあ……」

「作戦説明はアイナから聞け、いいな！」

アイナに作戦説明を任せてたドルチェフは、ブリーフィングルームを後にする。

（こりや、ヤバいかな……）

ドルチェフがブリーフィングルームを出た後、タクヤは急に不安な面持ちになる。

おそらくエスターは、ドルチェフに思い切り怒られたりしているのではないかと、頭の中でますます不安になる。

不安な気持ちで居ても立っても居られなくなったタクヤが、こつそりとブリーフィングルームを抜け出そうとした、その時、

「タクヤ、待ちなさい！」

マリアに呼び止められ、タクヤは固まる。

「急にブリーフィングルームを抜けて何処へ行く気かしら？」

「え、えーと……ちよつとトイレに」

マリアの問い掛けにタクヤの表情は引きつる。

「くっ！」

タクヤは、隙を見てブリーフィングルームを抜け出す。

「タクヤ、待ちなさい！」

マリアの呼び掛けを無視してタクヤは、急いでドルチェフの後を追い掛ける。

「もう、タクヤったら！ アイナ、そのまま説明を続けて」

そう言つてマリアもタクヤの後を追い掛けるようにブリーフィングルームを出ていく。

タクヤが急いで自室に戻る頃、ちよつどドルチェフが部屋に入ろうとしていた。

「隊長、待つてくれ！」

部屋に入ろうとするドルチェフにタクヤは大声で呼び掛ける。

「何だタクヤ、ブリーフィングに戻らんか！」

ブリーフィングを抜け出してきたタクヤをドルチェフは怒鳴り散らす。

「隊長。頼むからエスターの事は、そつとしておいてくれよ」

「うるさい！」

タクヤの言葉を見殺して、ドルチェフは部屋に入る。

「タクヤ！」

後を追いつけてきたマリアがタクヤに追いつく。

「エステターの事は隊長に任せて、あなたはブリーフィングに戻りなさい！」

マリアは、タクヤの後ろ襟首を掴んで連れ戻そうとする。

「クソ、離せよ！ 離せつつつてんだろ！」

タクヤは、マリアの手を強引に振り解いて部屋の中に入る。

「エステター！」

タクヤが部屋に入ると、エステターはドルチェフに布団を剥がされ、そしてシャツの首元を掴まれていた。

「ちよ、止めてやれよ！」

タクヤは、エステターのシャツの首元を掴んでいるドルチェフの手を強引に離そうとする。

しかし、それに構わずドルチェフは、無言でタクヤを強引に振り払う。

「エステター、いつまで塞ぎ込んでいるつもりだ？ ここは軍隊だ。感情や情けで毎回毎回塞ぎ込んでるんじゃないぞ！」

ドルチェフは、エステターのシャツの首元を掴んで強引に身体を揺さぶる。

「……僕の、僕のせい……なんだ。僕が……僕が、ちゃんと任務を……遂行していれば……ケヴィンさんやティナさんは……死ななかつたんだ」

エスターは、目から涙をこぼしながらポツリと自責の念を呟く。

「く……この大馬鹿野郎！」

その様子を見かねたドルチェフは、エスターを思い切り殴り飛ばす。

その反動でエスターは、身体を壁に強く打ち付ける。

それでもエスターは、殆ど微動だにしなかつた。

「エスター……」

殴られたエスターを心配して、タクヤが傍に駆け寄る。

「エスター。おい、しっかりしろよ！」

タクヤは、動かないエスターに必死に呼び掛ける。

しかし、エスターはタクヤの呼び掛けには全く応じる事は無く、その瞳の奥は光を見せていながかつた。

「なあ、隊長。頼む、お願いだから止めてくれよ！ エスターは、一生懸命やれる事はやつたんだから許してあげてくれよ！ マリア大尉も隊長に何か言つてやつてくれよ」

タクヤはエスターを庇うように前に立ち、そしてドルチェフとマリアに土下座をして必死に頼み込む。

普段、いい加減な行動ばかりをしているタクヤしか目にしないドルチェフとマリアには、今のタクヤの姿は滑稽に見えていた。

「じゃあ、タクヤ。お前さんがそう言うのなら、俺は何回も人の死に様を見たんだから休んでも良いんだな？」

「え？」

今までの戦いでドルチェフは、同僚のパイロットや信頼していた仲間達の死に様を目の前で多く見てきていた。

その問い掛けに対して、タクヤは言葉を詰まらせていた。

「そ、それは……その」

「どけえ！」

ドルチェフは狼狽えるタクヤを蹴り飛ばして、再びエスターの首元を掴む。

「いいか、エスター。戦争は遊びじゃないんだ！ ちよつとした感情で死ぬ事だつてあるんだぞ！」

「……それなら、僕は……死んだ方が良かったです」

「貴様ああああ！」

エスターの自虐的な屁理屈にドルチェフは激高し、エスターに往復ビンタをする。

「止めろ、止めろつつつてんだろ！」



タクヤは、思わずドルチェフに飛びかかり、そのまま右腕に噛みつく。

「タクヤ、止めんか！」

「止めなさい、タクヤ！」

しがみつくとタクヤをドルチェフは必死に振り払い、マリアも加勢してタクヤを掴んでドルチェフから引き離そうとする。

「は、離すもんかああああ！」

タクヤ自身もドルチェフに必死の形相でしがみついて離れようとはしなかった。

「そんなに殴ったら可哀想だろ！ エスターはな……エスターは、女なんだぞ！」

「!？」

「え!？」

これ以上ドルチェフに殴られるエスターを見たくなかったのか、思わずタクヤは叫ぶ。

タクヤの言葉にドルチェフもマリアも一瞬、動きが止まる。

「タクヤ、嘘をつくならもつとマシな嘘をつかんか！ そんな言葉、誰が信じる！」

タクヤの言葉にドルチェフは思わず怒鳴り散らし、その勢いに任せてタクヤを投げ飛ばす。

「ぐええ！」

ドルチェフに思い切り投げ飛ばされたタクヤは、壁に叩き付けられてカエルの潰れた様な声を上げる。

そして、壁に叩き付けられて伸びているタクヤの胸倉を思い切り掴む。

「タクヤ、エスターが女だなんて見え透いたような嘘をつきやがって……謝るならまだ間に合うぞ」

こんな状況下で嘘をつくタクヤに対して、ドルチェフのイライラ感は更に増していた。

「……本当です」

エスターは、俯き加減な顔を上げて呟く。

「え?」

エスターの呟きにドルチェフとマリアは、エスターの方を向く。

「……タクヤの言っている事は本当です。正しくは、元女性です」

エスターは、ドルチェフに殴られた顔をさすりながら黙々と話す。

「どういう事だ?」

エスターの言葉にドルチェフは、思わず問い掛ける。

「僕は元々、女性として産まれました。でも、1歳くらいの頃に家族と旅行に出掛けた時のフォールド中に宇宙病に掛かって、性別が逆転したと両親から聞きました」

エスターは、黙々と過去の思い出を話す。

まだ幼き頃に旅客艇で両親と共に旅行に出掛けた時、突如フォールド航行中にフォールド断層へと旅客艇が落ちかけた。

パイロットの機転によりフォールド断層へと落ちる事は無かったが、その際に数名が体調不良を訴えていた。

ただ、体調不良を訴えた人の殆どは軽い吐き気等であつた。

だが、その時にエスターは性別が徐々に変わつていたのである。

それを知つたのは、丁度オムツ交換をした母親であるエステイナである。

旅行から帰つてからしばらくして、オムツ交換の際にエスターの股間部分に男性器が生えていた。

女性であるはずのエスターに男性器が生えていた事に驚いたエステイナは、夫であるジェイルに連絡を入れて医師に診断をしてもらう。

しかし、医師から返つてきた答えは「原因不明」であつた。

医師の回答にジェイルとエステイナは何も言えず、表情も青ざめていた。

そして、まだ幼いエスターに現実を突きつけるのは残酷だと思つた二人は、この事を黙つていようと誓うのだった。

だが、エスターが13歳の時に、たまたま二人の会話を聞いて事実を知つてしまい、動

揺して泣き崩れてしまう。

事実を知ってしまったエステルに二人は、少しずつ現状を受け入れさせる為に必死にメンタル面のケアを尽くした。

いくら綺麗事を言った所で現実と言うのは変わらないからだ。

メンタルケアは長く続き、中々心を開かないエステルに二人も憔悴しきっていた。

当初は悲観的な表情しか見せなかったエステルだが、両親が自分の為に必死に尽くしている事を感じ取り、やがて現実を受け入れるようになった。

黙々と話すエステルの話を聞いたドルチェフとマリアは、ただ言葉を詰まらせる。

「タクヤは、この事を知っていたの？」

「まあね。流石に最初は俺も驚いたし、ウソなんじゃないかって思ったけど、アイツがマジな目で語っていたから信じたけどさ」

マリアの問い掛けにタクヤは、自分の胸倉を掴んでいるドルチェフの手を振りほどいて立ち上がりながら答える。

「例え、そんな事情があろうが、それとこれとは話は別だ！」

ドルチェフは、再びエステルに向けて怒りを露わにする。

「……僕は、隊長の言う通りに精神的に甘ったれています」

エステルは、怒りを露わにするドルチェフに対して顔を上げて応える。

「ああ、その通りだ」

「こんな甘ったれた根性では、僕はいつか死にます。でも、仲良くなれた人が死ぬのを目の当たりにした時、僕が代わりに死ねば良かったって思っていたのは分かってください」

真剣な眼差しでドルチエフを見ながらエステルは話す。

「……もういい、勝手にしろ」

ドルチエフはエステルの信念に呆れ果て、部屋を出て行く。

「エステル……」

呆然と立ち尽くすエステルにタクヤは声を掛ける。

「ゴメン……ゴメンね。タクヤ」

エステルは涙を流しながら、その場にへたり込む。

「エステル、お前は悪くない……悪くねえよ！」

タクヤは、へたり込んで泣きじやくるエステルの肩をそつと抱く。

「タクヤ。エステルの事は私に任せて、タクヤは出撃しなさい」

エステルを宥めるタクヤにマリアは出撃を促す。

「イヤだよ、俺もここにいるよ！」

出撃を促すマリアにタクヤは食ってかかる。

友達としてタクヤも傍にいたかった。

「タクヤ、お願いだから言う事を聞いてちょうだい」

いつものマリアならタクヤの態度に反発するが、彼女にしては珍しく物腰を低くしてお願ひしていた。

そんなマリアの姿を見たタクヤは、少しだけ胸を締め付けられる思いを感じる。

「……わかったよ。おっさんと顔を合わせるのはイヤだけど、行ってくるよ」

「ありがとう、タクヤ」

マリアの言葉をタクヤは、しぶしぶ受け入れてブリーフィングルームへと戻っていった。

「エスター、ドルチェフを悪く思わないでね。彼も戦争で親しかった人を多く亡くしてエスターよりも辛いだよ」

「……その事は、僕も分かっています」

エスターを諭すように語りかけるマリアは、ポケットからハンカチを取り出して洗面所でハンカチを水に濡らしてエスターに渡す。

「……ありがとうございます」

マリアからハンカチを受け取ったエスターは、ハンカチを殴られた箇所当ててみる。

「……マリア大尉も僕みたいな事は、あったんですか？」

ドルチェフだけでなく、他のパイロット達も恐らく同じ思いをして来たのであろう。唯一、マリアなら自分に心を開いてくれると思ひ、エスターはマリアに問い掛け、その問い掛けに対してマリアは、黙って頷く。

「ええ……あれは、私がまだ幼かった頃、とても仲が良かったお兄さんがいたの」

—私も妹も、よくそのお兄さんに遊んでもらっていたわ  
どこかの原っぱで一人の少年と二人の少女が遊んでいる。

「フィリア、早く来ないと置いてっちゃうよ」

「ふえーん、マリアおねえちゃん待ってよお」

髪の毛をお団子頭に結った少女フィリアは、ポニーテールの少女であるマリアを必死に追い掛けていた。

「マリアちゃん、フィリアちゃん、早くおいでよ」

少年は先に土手に上がり、二人の少女を大声で呼ぶ。

「うん、今行く！ さあ、行くよ。フィリア」

「うん！」

「マリアはフィリアの手を取って、少年の待つ土手を登っていく。」

「ほら、早く」

「おねえちゃん、歩くの早いよお」

「マリアにとっては何て事が無い坂でも、幼少のフィリアにとっては、登るのも一苦勞だった。」

「わあ、綺麗」

「土手を登った先は地平線が続き、ちょうど陽が沈もうとしていた。」

「きれーい」

「マリアと同じく夕陽を見たフィリアは、大きく目を見開いて夕陽を眺める。」

「地平線に沈もうとする夕陽は眩く光り、空を赤く染め上げていた。」

「邪魔をする障害物も特に無いので、夕陽を端から端まで全て見渡せていた。」

「ねえ、お兄ちゃん」

「ん?」

「ココって確か、立ち入り禁止区域じゃあ……」

「今、自分達が夕陽を見ている場所が立ち入り禁止区域である事を思い出し、マリアは少年に問い掛ける。」

「ま、まあ……ね。あはは……」



マリアの問い掛けに少年は引きつった表情で笑う。

「でも、綺麗だね」

「うん」

夕陽を眺めていたマリアは、夕陽の美しさに思わず溜め息を漏らす。

「僕ね、大きくなったらパイロットになって空を飛ぶのが夢なんだ」

そう言つて、少年は夕焼けの空を見上げる。

ちようど見上げた空には、3機のバルキリーが一直線の飛行機雲を描きながら飛んでいた。

「お兄ちゃんは遊んでいる時も、いつも空ぼっかり見ているもんね」

「そ、そうかな？」

少年は、マリアやフィリアと遊んでいる時、ふと空を見上げる癖があった。

その様子をマリアは、いつも気にしていた様である。

「じゃあ、いつか私をお兄ちゃんの飛行機に乗せてよ」

「うん、わかった。約束するよ」

マリアのお願いに少年は、優しく微笑みながら頷く。

「あ、それか私もパイロットになればいいんだ！」

自分もパイロットになれば一緒に少年と飛べる事にマリアは気付いた様である。

「あたしも空を飛びたい！」

フィリアは空に手を振りながら叫ぶ。

「フィリアは、小さいしトロいから無理よ」

そんなフィリアをマリアはからかう。

「むー、できるもん！」

マリアにからかわれてフィリアはムキになって言い返す。

「ムリムリムリムリ！」

「できるもんできるもんできるもん！」

マリアとフィリアは、お互いに意地の張り合いをする。

「大丈夫、二人ともできるよ」

意地を張り合う二人を少年は宥める。

「本当？」

「うん！ それは僕が保証するよ」

二人の問い掛けに少年は笑顔で応える。

「私、絶対にパイロットになってお兄ちゃんと一緒に空を飛ぶ！」

「私もー！」

マリアとフィリスはパイロットになって、いつか少年と共に空を飛ぶ夢を大空に向

かつて宣言する。

—彼は、私達にとって大切な友達だった。

でも、そんな幸せは長く続かなかつた。

ある日、私達の住んでいる故郷にはぐれゼントラーデイ軍が攻めてきたの。

はぐれゼントラーデイ軍の猛攻に辺り一面は、焼け野原と化していく。

はぐれゼントラーデイ軍奇襲の知らせを受けた駐在部隊は、直ちに支援へと向かうが、実戦慣れしていない故に次々と撃墜されていく。

駐在部隊の攻撃をかわし、いくつかの部隊は街の中心部へと進み、次々と破壊活動を行っていく。

はぐれゼントラーデイの奇襲に自警団が防戦態勢をするが、はぐれゼントラーデイ達の前では赤子同然であり、瞬く間に蹴散らされ、市民達は為す術もないまま逃げ惑う事

しかなかった。

逃げ遅れた市民達の中には、撃ち殺される者や破壊された建物の下敷きになる者もあり、犠牲者は次々と増えていく。

「マリア、フィリア、急いで！」

「早くしなさい！」

「う、うん。ほら、フィリア！」

「ママ、怖いよお……」

はぐれゼントラーデイ人の奇襲の知らせを聞いたマリアとフィリアの父ランドルと母でメルトランデイ人のセリナは、マリアとフィリアを連れて急いで避難する。

「マリアちゃん」

避難の途中、少年に声を掛けられる。

「お兄ちゃん」

「みんな無事なんだね」

「うん」

「よかった。さあ、早く逃げよう」

少年達の家族と合流して、マリア達はシエルターへと急ぐ。

ふとマリアが上空を見上げると、戦闘の爆光が次々と上がり、知らせを受けて支援に

向かうバルキリーの姿もいくつか見えたが、遠くの方であつという間に撃墜されていた。

「どうして……どうして、私達の街を襲うのよ」

逃げる途中、破壊されたクラスメートの家や家族を亡くして泣いているクラスメートを見掛け、マリアの心の中で理不尽な事に対してのイライラ感とはぐれゼントラーディの強襲に迫りくる恐怖感が交差していた。

「はあ……はあ……フィリア、もう……疲れて走れない……よお」

体力と疲労の限界が来たのか、フィリアの走る速度が段々と遅くなり、やがてへたり込んでしまう。

「もう、フィリアったら！ こんな所にいたら死んじゃうわよ！」

フィリアの手を繋いでいたマリアがへたり込むフィリアを怒鳴る。

「だって、フィリア疲れたもん。もう走れないよお……うええええん！」

フィリアは、泣きながらマリアに訴える。

「だってじゃないでしよ！」

「マリア、フィリア。早くしなさい！」

遠くからセリナが二人を呼ぶ声が聞こえる。

「ほら、ママが急ぎなさいって言ってるでしよ！」

マリアは泣きながら訴えるフィリアの手を無理矢理掴んで引つ張る。

「痛い、離してよお！」

マリアに手を強引に引つ張られてフィリアは、ズルズルと引きずられる。

「ママ、フィリアは私がなんとかするから先に行つてて！」

心配するセリナにマリアは声を掛ける。

「ほら、早くして！」

マリアは、ぐずるフィリアの手を引きながら歩いていく。

「痛い、痛いよお……」

フィリアは泣きながらマリアに引つ張られていく。

「マリアちゃん」

二人のやりとりを見て心配になったのか、少年がやって来る。

「お兄ちゃん」

「大丈夫？」

「私は大丈夫だけど、フィリアが……」

フィリアは、未だに泣きながらその場にへたり込んでいた。

「僕におぶさりなよ」

少年は、しゃがんでフィリアに背中を向ける。

「うん！」

フィリアは、少年の背中におぶさる。

「さあ、急ごう」

三人は急いでシエルターへと急ぐ。

戦闘は相変わらず遠方で続き、統合軍が押されている様子だった。

遠方で戦闘が行われているとは言え、爆発音は響き渡り、いつ戦火がこちらに来るか分からない為、不安に迫りくる恐怖をフィリアは感じていた。

しばらくすると、少年の息が微妙に上がっている事にフィリアは気付く。

「お兄ちゃん、代わろうか？」

フィリアは、心配そうに少年に声を掛ける。

「だ、大丈夫だよ……僕なら」

少年は強がつて見せているが、既に声が疲れ切っていた。

「もう、無理しないでよ」

「……ゴメン。じゃあ、フィリアちゃん。降ろすよ」

「えー！」

フィリアに悟られて少年は、フィリアを背中から降ろす。

「ほら、今度はお姉ちゃんにおぶさって」

「マリアは、しゃがんでフィリアに背中を向ける。

「フィリア、お兄ちゃんの背中がいい」

「フィリアは、少年の背中が余程心地よかったのか、我が儘を言う。

「ワガママを言うとぶつよ！」

我が儘を言うフィリアをマリアは睨みつける。

睨み付けるマリアに恐怖を感じたのか、フィリアはマリアの背中におぶさる。

「大丈夫？」

マリアの様子を見て、少年が声を掛ける。

「大丈夫よ。急ごう」

再び三人は、シエルターへと急ぐ。

しばらくするとシエルターが見えてくる。

「マリア、フィリア。ここに、急ぎなさい」

セリナがシエルターの外から三人に呼び掛ける。

マリアと少年は顔を見合わせて、シエルターへと急ぐ。

「マリア、危ない！」

突然、セリナが叫ぶ。

セリナの叫び声に二人が振り返ると、はぐれセントラーデイ軍の機体が猛スピードで



二人に迫ってくる。

「うわあああ！」

「キヤアアア！」

二人は、咄嗟に地面に伏せてゼントラーディ軍の機体をやり過ごす。

そして、その機体を追い掛けて来た2機のバルキリーと戦闘状態になる。

2機のうちの1機が撃墜され、撃墜されたバルキリーが、そのまま二人に向かって墜落してくる。

「あ……ああ」

突然の事にマリアは、足が竦んで動けなかった。

「マリアちゃん！」

足が竦んで動けないマリアを少年は、思い切り体当たりをして草むらへ突き飛ばす。

突き飛ばされたマリアは、ファイリアと一緒にそのまま草むらへと転げ落ちていく。

「うわあああああ！」

逃げ遅れて、そのまま墜落したバルキリーの巻き添えを食らい、少年の断末魔の悲鳴がこだまする。

そして、墜落したバルキリーは、地面に墜落した反動で更に両親達が避難しているシエルターへと突っ込み大爆発を起こす。

突然の出来事にシエルターに避難していた人々は、逃げ場が無いまま爆発の炎に焼かれ、その断末魔は爆発音によって掻き消されていた。

辺り一面は真っ赤に燃え盛り、ゼントラーデイ軍の機体を追ってきた残りのバルキリーも撃墜される。

辺りに敵機がない事を確認したゼントラーデイ軍の機体は、再び街へと向かう。

「う……うう」

少年に突き飛ばされて草むらに転げ落ちたマリアは、身体を起こして草むらを掻き分けて辺りを見回す。

「お兄ちゃん……パパ、ママ……」

マリアの瞳には燃え盛る炎が映り、そこには少年の姿も、そして、最愛の両親の姿も無かった。

「お兄ちゃん……パパ、ママアアアア！」

・  
・  
・

「両親と親しい人を一度に亡くした時の記憶は、今でも覚えているわ。そして、街を襲ったゼントラーデイ人に対しての理不尽な怒りもね」

マリアの瞳には、悲しみの感情と怒りに満ちた表情が満ち溢れていた。

「……すみません、何だか辛い事を思い出させたいで」

「ううん、気にしないで」

「……マリア大尉は大切な人を失ってから、どうやって立ち直ったんですか？」

肉親を失つても、それでも普段から健気に振舞うマリアの姿をエスターは、気になっていた。

「……多分、時間ね。そして、フィリア」

マリアは、エスターの問い掛けにポツリと応える。

両親を亡くした自分が、ここまで生きてこられたのも妹であるフィリアのお陰である事をマリアは理解しており、きっとフィリアもそう思っているだろう。

「エスター」

「……はい」

「あなたが親しい人を亡くして辛い気持ちなのは、よく分かるわ。でもね、あなた以上に辛い気持ちになっている人も大勢いる」

「……」

マリアの言葉にエスターは、黙ったまま顔を伏せる。

「その辛く悲しい気持ちは、時間とあなたの気持ち次第でしか解決できないわ。でもね、

私達は、その辛い気持ちを忘れさせる手助けはできるわ」

マリアは、エスターの手を握る。

女性らしく柔らかいが、長年のパイロットとしての経験を積んだ誇らしく逞しい感じがする感触だった。

エスターもマリアの手を握り返して顔をマリアの方へと向ける。

「それにエスターには、タクヤと言う一番頼れる友達がいるじゃない。違うかしら？」

マリアは、少しだけ優しく微笑む。

「……はい」

「彼、朝からずっとエスターの事を心配していたわよ。それは、気付いていたかしら？」

「……はい。何だかタクヤに悪い事をしちゃったなあ」

エスターは自分を心配したり、庇ってくれたタクヤの事を思い出す。

「彼の事を思うなら、少しでも元気を出さなきゃね」

「はい」

少しずつだが、エスターの表情が和らいでいく。

「もし、タクヤに言い難い事なら私でもいいいわ」

「ありがとうございます、マリア大尉」

エスターは、深々とマリアに頭を下げる。

「とりあえず、暗い話はこれでおしまいね。ドルチェフ達に戻ってきたら、ちゃんと謝つてきなさい」

「は、はい」

元気になったエスターを見て大丈夫だと思ひマリアは、そのまま部屋を後にする。

（ケヴィンさん、ティナさん……僕は、二人の分まで頑張つて生きます。だから、見守つてください）

エスターは、心の中でケヴィンとティナに二人の分まで頑張る事を誓う。

「隊長達に戻つて来たら謝らなきゃ」

エスターは、部屋を後にして格納庫へと向かう。

誰もいない格納庫でエスターは一人、出撃したドルチェフ達を待つていた。

マリアとエスター自身の機体が格納庫に佇むだけなので、格納庫がやけに広々と感じる。

既に空は暗くなりかけていた。

陽があまり当たらない惑星とは言え、夜が近づけば暗くなる事が分かる。

「ようエスター、もう大丈夫か？」

一人で佇むエスターを見掛けて、ミランが声を掛ける。

「ミランさん」

「マリア大尉から話は聞いたよ」

「そうですか。色々にご迷惑をお掛けしてすみません」

エスターは、ミランに頭を下げる。

「おっと、その言葉を本当に言わなきゃいけない相手は、俺じゃないと思うけどな」

ミランは耳を澄ませて音を聞き、何かを感じたのか格納庫の外に出て、空を見上げる。

その様子にエスターもミランに続いて格納庫の外へと出る。

そして、ミランの見上げた先には、ブrouニングが基地へと徐々に降下する姿が見えていた。

「隊長……」

「そう言う事さ」

謝る相手を理解したエスターを見て、ミランは帽子を深く被り直す。

「隊長さん、それと他のみんなにも、ちゃんと謝っておきなよ」

別れ際にエスターの右肩に手を置いて、ミランは格納庫を後にする。

基地へと戻ったブrouニングから、任務を終えたパイロット達が次々と戻ってくる。

パイロット達は、それぞれ任務に対しての事やこれからの予定の事等を話していた。

エスターは、物陰からその様子を伺いながら話し掛けるタイミングを待っていた。

(落ち着け……落ち着け)

物陰から覗いてビクビクするエステーは、自分自身に言い聞かせる様に心の中で呟く。

そして、そのままドルチェフの元へと歩いていく。

その様子がパイロット達の目に入り、全員がエステーに視線を向ける。

「た、隊長」

エステーの声は少し上擦っていた。

「……何の用だ？」

エステーの声にドルチェフは、視線をエステーへと向ける。

しかし、先程の事でドルチェフの声は、少しぶつきらぼうな感じだった。

「あ、あの……」

声の上擦っている事に気付き、一旦咳払いをしてエステーは心を落ち着かせる。

「先程は、自分の精神的な弱さで迷惑をお掛けして、申し訳ございません！」

エステーは、ドルチェフに深々と頭を下げてお詫びをする。

「他の方々にも色々と迷惑をお掛けして、申し訳ございません！」

タクヤを含む他のパイロット達にもエステーは、深々と頭を下げる。

「気にするなよ」

「俺達、仲間だろ」

「次、頑張れば良いじゃないか」

それぞれのパイロット達は、エスターに励ましの声を掛ける。

非難される事を覚悟していた為、逆にパイロット達の励ましの言葉を聞いたエスターは、少しだけ心が軽くなった気分になった。

そんな中ドルチェフだけは、そのまま歩きだしてエスターの横を通り過ぎる。

(やつぱり……駄目だったんだ)

エスターは、落胆してお辞儀をしたまま身体が固まっていた。

いくら他のパイロット達が励ましてくれたとしても、今回自分が一番迷惑を掛けてしまったのはドルチェフだ。

その本人から許しが得られない限り、心が晴れる事は無い。

「明朝0700にシミュレーションルームに集合だ。今日サボった分をしごいてやる」

ドルチェフは、後ろを向いたままエスターに話す。

「あ、ありがとうございます！」

ドルチェフの言葉にエスターの表情は明るくなる。

「よかったな、エスター！」

タクヤがエスターに駆け寄る。

「うん。それはそうと、タクヤにも色々と迷惑を掛けちゃってゴメンね」



「俺とお前の仲だろ？ 気にすんなって！」

タクヤは笑顔でエスターにVサインをする。

「お疲れ様」

部屋へ戻るドルチェフにマリアが声を掛ける。

「マリアか」

「エスター、ちゃんと謝っていたかしら？」

「ああ」

マリアの言葉にドルチェフは、相変わらずぶっきらぼうに応える。

「マリア、色々とすまなかつたな」

「いいのよ。何だかエスターを見ていたら、昔のドルチェフを思い出したわ」

マリアは、昔のドルチェフを思い出したのか、少しだけはに cand 笑顔を見せる。

情に脆く、時に任務よりも人命を優先していた、あの頃。

いつしか、そんな感情は徐々に減りつつあるのも、隊長として部隊を指揮しなければならぬ故なのかも知れない。

「……そうかもな。だが、今の俺があるのは、マリアのサポートのお陰でもあるさ」

部屋に到着したドルチェフは、部屋のドアを開ける。

「ふう……誰かさんもエスターみたいに、もうちょっと素直になってくれれば良いのに」

マリアは、自分の心理を気付いてくれないドルチェフに対してポツリと呟く。

「何か言ったか？」

「何でも無いわ……鈍感」

マリアは少しむくれた表情のまま、そのまま自分の部屋へと戻っていく。

ドルチェフは、マリアの言葉の意味も分からず、そのまま部屋へと入っていった。

## 第14話 デストラクシヨン・オブ・バルチャー

ある日の早朝。

マリアは、食堂の厨房を借りて珍しく鼻歌を歌いながら料理を作っていた。

「うん、こんな感じかしら」

味見をして納得したマリアは、プレートに料理を盛り付けて完成させる。

「ドルチェフ、喜んでくれるかしら」

マリアは出来上がった料理を見て、少しだけ照れ笑いをする。

「あら、マリア大尉。朝早くからどうしたんですか?」

一番に食堂にやってきたアイナがマリアに声を掛ける。

「え? う、うん……ちよつとね」

内緒で料理している事がアイナにバレて、マリアは少しだけ顔を赤らめる。

「あら、美味しそう。相変わらず、料理の腕は落ちていないのね」

「そ、そうかしら?」

ジェニオスシテイでラナを救出後、身寄りの無いラナを引き取ったドルチェフ。

しかし、全く料理が出来ないドルチェフはレトルト物を食べさせていた。

それだけでは栄養が偏ると思い、マリアは時間がある時には料理を作り、食べさせていた。

「早く隊長さんが気付いてくれると良いわね。フフ」

料理を見たアイナは、マリアを茶化す。

「べ、別にドルチェフの事は関係ないでしょ!」

茶化すアイナにマリアは、照れながら怒る。

「冗談よ、冗談」

(でもホント、分かりやすい人)

そんなマリアを見たアイナは笑って謝る。

「ああ、腹減ったあ!」

「一仕事すると、確かに腹が減るな」

「ちようどお昼ですし、何か食べましょう」

エスター、ネルと共に偵察任務を終えたタクヤは、空腹感を訴えながら食堂に入る。

食堂では、ブラックバルチャーの面々がマリアの料理を試食していた。

「え? なになに、みんな何食べてんの?」

興味津々にタクヤは、周りに声を掛ける。

「マリア大尉が料理を作ったんですって。だから、みんなで試食してるの」

エミリアがマリアの料理を口に運びながら応える。

「え？ あのマリア大尉が？ 嘘だろ!？」

普段のマリアを見ているタクヤは、マリアが料理をしている姿を全く想像出来なかった。

「タクヤ、マリア大尉が聞いたら怒られるよ」

マリアを小馬鹿にした様な言動をするタクヤをエスターが咎める。

「へえ、マリア大尉が」

他の者達が食べている料理を見て、ネルのお腹がグーグーと鳴り始める。

お腹が空いている為、一刻も早く食事をしたいネルがマリアを探す。

「マリア大尉」

調理場で料理を盛りつけているマリアを見つけてネルは声を掛ける。

「アタシにも料理を食べさせてくれよ」

ネルは空腹感でいっぱいなのか、マリアを急かす。

「わかったわ、ネル。ちよつと待っててね」

マリアは、作り終えた料理をプレートに順番に盛り付けていく。

「なあなあマリア大尉、俺にもくれよ！ 腹減って死にそうなんだよ」

タクヤは、カウンターから身を乗り出してマリアに注文する。

「わかったわ……あら、ごめんなさい。ちやうどネルの分で料理が全部無くなっちゃったみたい」

「うええええええ！　ちよ、マジかよ!?!」

料理が全て無くなった事にタクヤは、カウンターに身を乗り出したままガツクリとうなだれる。

「お待たせ、ネル」

マリアは、料理を盛り付けたプレートにネルを渡す。

プレートには、ハンバーグライスにオニオンスープ、それにパインサラダが乗っている。

簡単な料理ではあるが、美味しそうな匂いがネルの鼻をくすぐる。

「おお、コレは美味しそうだ!」

プレートに盛り付けられた料理を見たネルは、まるで子供の様に目を輝かせる。

「なあ、姉ちゃん。俺にも一口食べさせてくれよお……お願いします!」

盛り付けられた料理を見たタクヤは、手を合わせてネルに頼み込む。

「やーだよ。レディーファーストって言葉を理解しなよボウヤ」

タクヤのお願いを無視してネルは、ハンバーグをたいらげる。

「ボウヤじゃねえっての!」

「あー、美味しい〜♪」

タクヤの言葉には耳を貸さず、ネルはハンバーグを食べて優越感に浸る。

「何だよ、くっそー……」

優越感に浸るネルを見たタクヤは、空腹感からかイライラも増して歯軋りをする。

「もう諦めなよタクヤ」

イライラ感を募らせるタクヤをエスターが宥める。

「ん？」

タクヤは、厨房カウンター奥に置いてある料理を見つける。

「なんだよ、奥に二つもあるじゃん」

タクヤは再びカウンターから身を乗り出して、奥に置いてある料理に視線を向ける。

「ダメよ、タクヤ。それはドルチェフとラナの分なんだから」

料理に視線を向けるタクヤをマリアは注意する。

「ええー！ いいじゃん、また作ればさあ。俺とエスターもマリア大尉の料理を食べたいよ」

「タクヤ、僕は別に……」

エスターをダシに使って、タクヤは何とかしてマリアの料理を食べようとしていた。

「タクヤ、いい加減にしなさい。あまりうるさいと、殴るわよ」

マリアは、バキバキと指を鳴らしてタクヤを威嚇する。

「なんだよ……ちえ」

さすがにマリアに殴られるのが嫌なのか、タクヤはふてくされた表情をする。

惑星ローグ付近に一隻のゼントラーディ軍の標準艦スヴァール・サランがフォールドする。

艦内のモニターに映る惑星ローグを二人のゼントラーディ人と一人のメルトランデイ人が見ている。

「おい、テラード。この惑星にマイクロローンの軍施設はあるのか？」

緑色の肌を持ち、筋肉質なゼントラーディ人は、惑星ローグを見ながらテラードに問い掛ける。

「僕の調べだと、一応あるみたいだよ。ただ、それ程の規模でもないみたいだけど……」

テラードは、先程のゼントラーディ人同様に緑色の肌を持ち、長いロングヘアーに知的な雰囲気漂う感じである。

「ハッ、規模なんざ関係ねえ。久しぶりに戦いたいんだ！」

筋肉質のゼントラーディ人は、久しぶりの戦闘に身体が疼いていた。

「ネエネエ、グランツ。ハヤク、マイクロンヲコロシタイヨ！」

筋肉質のゼントラーディ人、グランツにロングヘアーの緑髪に猫目のメルトランディ



人が寄りかかる。

そして、その頬にキスをしながら抱きつく。

「ミネルバ、そう焦るな。後で、たっぷりと遊ばせてやる」

グランツは、抱きついてくるミネルバの頭を優しく撫でる。

頭を撫でられる事に快感を覚えているのか、ミネルバは、そのままグランツの唇に自分の唇を重ねる。

「いったい何の騒ぎだ？」

賑わっている食堂を通りかかったドルチェフが食堂にやってきた。

「マリア大尉が料理を作ったんで、みんなで試食してる所です」

フォルトは、料理を口に運びながらドルチェフに話す。

「そうか」

フォルトの話聞き、ドルチェフはマリアのいる厨房に向かう。

「マリア」

「ドルチェフ！」

「また作ったのか」

「う、うん……まあね。ちょっと待っててね」

マリアは、カウンター奥に置いてある用意した料理を持ってくる。

「ほお、これは旨そうだ」

プレートに置かれた料理を見て、ドルチェフは素直に感想を述べる。

「あ、ありがとう……」

ドルチェフに感想を述べられたマリアは、少しだけ顔が赤くなっていた。

「いいなあ……隊長とマリア大尉」

「本当、羨ましいわね」

エミリアとアイナは、二人のやり取りを羨ましそうに見ていた。

他の者も二人のやりとりをにやけながら見ている。

『ブラックバルチャー全隊員に告ぐ、ポイントアルファより救難信号あり。繰り返す、救

難信号あり』

突如ラナの施設内放送により、穏やかな雰囲気が一転して緊張が走る。

『どうした?』

施設内放送を聞いたドルチェフは、ラナに通信を入れて状況を確認する。

『ポイントアルファ付近より、ゼントラーディ人から救難信号が発せられています』

『わかった、すぐに行く』

状況確認をしたドルチェフは通信を切る。

「ポイントアルファでゼントラーディ人が救難信号を出している。これより救出に向か

う」

ドルチェフは、パイロット達に指示を出す。

「なんだよゼントラーデイ人を助けるのかよ」

ドルチェフの指示にタクヤは不満を漏らす。

タクヤの中では、今でもゼントラーデイ人＝悪者と言う認識があるようだ。

「タクヤ、困っている人がいたら助けろと学校の先生に習わなかったのか？　ゼント

ラーデイ人でも悪い奴もいれば、良い奴もいると言うを事を忘れるな」

タクヤの不満に対してドルチェフは叱咤する。

「アタシは、隊長さんの言う事には賛成だ。同じ巨人族として礼を言う」

ドルチェフの言葉に対してネルは礼を言う。

元々は敵対していた自分を救ってくれたのはドルチェフである為、改めてネルは、ドルチェフの考え方を少しでもマイクローン（地球人）が持つてくれる事を心の底から思った。

「とにかく急ぐぞー！」

「了解！」

ドルチェフの命令にパイロット達は急いで出撃準備に掛かる。

「すまないマリア、料理は後でいただく」

「う、うん」

好きな人に食べて貰いたいと言う思いで一生涯命作った料理を突然の緊急出動で食べて貰えない事にマリアは内心、緊急出動を疎ましく思っていた。

ものの数十分を出撃準備を無理やり終わらせたブラックバルチャー隊は、ブロウニングでポイントアルファへと発進する。

ポイントアルファ付近では、ヌージャデル・ガー3機が青色のヌージャデル・ガーを追い掛けていた。

ただ、その状況は追い掛けているというよりは、子供の追い掛けっこである。

『おい、お前らちゃんと演技しろ！』

青色のヌージャデル・ガーに搭乗するグランツは、適当な演技をする他のゼントラーデイ兵に怒鳴りつける。

『アニキ、こんな事をしてマイクロローンが来ますかね？』

グランツ機を追い掛けるゼントラーデイ兵が疑問を持ちながら通信を入れる。

こんな子供騙しの様な作戦で本当に救助に来るとは、にわかには信じ難かった。

『何でもテラードが言うにはマイクロローンは、人情とやたらに弱いから。奴らが来たら、お前らはすぐに退散しろ』

『へい！』

『だから、ちゃんと演技をしろ!』

グランツ機は、3機のヌージャデル・ガーに当たらない様に攻撃をする。

『なあ、どうする?』

『アニキがうるさいし、やるか』

『だな』

三人のゼントラーディ人は、後でグランツに怒られるのが面倒だと言う理由で満場一致し、グランツ機に向けて攻撃を開始する。

「よし。いいぞいいぞ、お前ら」

演技をし始める部下達にグランツは上機嫌になる。

しばらくして、ブラウニングが姿を見せてバルキリー隊が次々と出撃する。

『奴らが来たぞ、ずらかれ!』

『へい!』

ブラックバルチャー隊の姿を見せると同時に3機のヌージャデルガーは、一目散に退散していく。

『こちら、新統合軍所属ブラックバルチャー隊。大丈夫か?』

ドルチェフは機体をバトロイドへ変形させてグランツに通信を入れる。

『あ、ああ……助かったぜ』

グランツ機は、ドルチェフ機に徐々に近付いていく。

『!? 隊長さん、逃げろ!』

異変に気付いたネルが急いでドルチェフに通信を入れる。

『何!?!』

「ハッ、バカが!」

突如グランツ機はドルチェフ機の頭部を握りつぶし、そのまま蹴りを喰らわせて吹き飛ばす。

「ぐおおおお!」

ドルチェフは機体をガウオークに変形させて、各部のバーニアを吹かせながら体勢を立て直す。

『野郎ども、出て来い。暴れるぞ!』

グランツの通信でスヴァール・サランが小惑星群からゆっくりと姿を現す。

「くっ、畏だったのか……」

突如現れたスヴァール・サランにブラックバルチャー隊のパイロット達に戦慄が走る。

しばらくして、スヴァール・サランが次々とバトルポッドが出撃する。

『確かアイツは、グランツ・シユティーム。第8934649艦隊所属のゼントラーディ

人だ』

青いヌージャデル・ガーを見たネルは、思い出したかの様に話す。

『おいおい姉ちゃん。知ってるならもっと早く言えよ！』

タクヤは、思わずネルにツツコミを入れる。

『仕方ないだろう。アタシだって噂くらいしか聞いていないんだから！』

タクヤのツツコミにネルは食ってかかる。

『お前達、喧嘩している場合じゃないだろうが！』

ドルチェフが、いがみ合う二人に通信を入れて怒鳴りつける。

そうしている間にも、グランツ達の機体が徐々に迫りつつあった。

『バルチャーより各機へ。各機、散開して迎撃態勢を取れ！』

『了解』

ドルチェフの命令でブラックバルチャー隊は、散開して迎撃態勢を取る。

「サア、オアソビノジカンダ」

クアドラン・ローの最終量産機であるクアドラン・キルカに搭乗するミネルバは、子供のように無邪気に喜び、目を輝かせながら倒す相手を選んでいた。

「く……モニターが完全にイかれてやがる」

ドルチェフは機体をバトロイドに変形させて、コンソールスイッチを色々と操作する

が、モニターは砂嵐で何も映らない状態だった。

『ドルチェフ、大丈夫？』

ドルチェフを心配してマリア機がドルチェフ機に近付き、マリアから通信が入る。

『俺は大丈夫だが、モニターが完全にダメだ』

『わかったわ。私がブロウニングまで援護するわ』

マリアは急いでブロウニングに通信を入れる。

『バルチャー2より、ホークスー』

『こちらホークスー』

マリアの通信にアイナが応答する。

『バルチャー1が機体を損傷しているから帰還する。格納庫のハッチを開けておいて』

『了解』

マリア機に牽引されて、ドルチェフ機はブロウニングへと帰還する。

戦況はブラックバルチャー隊が圧倒的に圧されていた。

「ヒイヒイヤツハアアアアア！」

奇声を上げながらグランツは、バルチャー10ことポール機に襲いかかる。

ポール機はバトロイドに変形してガンポッドで攻撃するが、グランツ機は素早い速度で次々と攻撃をかわしていく。



「くっ！ は、速い。クソ！」

攻撃が当たらないと思ったポール機は、ファイターに変形して逃げながら頭部レーザー機銃でグランツ機を攻撃するが、あっさり回避されて追いつかれる。

「ウロチヨロウロチヨロと逃げんじやねえよ！」

グランツ機はポール機にしがみつき、そのままポール機のコクピットに殴りかかる。

「うわ、うわああああ！」

ポールの断末魔が響き、グランツ機のマニピュレータがコクピットを貫く。

「まずはー機」

グランツ機はポール機から離れて、パイロット不在の機体をマシンピストルで蜂の巣にして撃墜する。

「ポールが……」

ポール機の発信源が消え、ブラックバルチャー隊は固唾を飲む。

「クソ、よくもポールを」

フォルト機は、デブリの陰からグランツ機にスナイパーライフルの照準を合わせる。

しかし、グランツ機の速い機動力にフォルトもなかなか照準を捉えられず、焦りからイライラしていた。

「!?」

突如機体が大きく揺れ、照準が真っ暗になる。

「な、なんだ？ どうしたんだ？」

突然の出来事にフォルトは動揺して辺りを見回す。

「アハハハ、ミイツケタ」

ミネルバ機がフォルト機の上に乗っかり、スナイパーライフルの照準をマニピュレーターで隠していた。

ミネルバ機は、そのままフォルト機の頭部をもぎ取り、続けざまに機体を蹴り転がして仰向け状態にする。

「うわあああー！」

状況が分からないまま、フォルトは機体の中で転がされる。

そして、ミネルバ機はコクピット付近を殴って、中からフォルトを引きずり出す。

「あ……ああ」

ミネルバ機に掴まれたフォルトは、恐怖のあまり言葉が出なかった。

「シネ」

ミネルバ機のマニピュレーターに力が加わり、マニピュレーターの間からフォルトの血液と臓器が飛び散る。

「ウフフフ……」

飛び散り、漂うフォルトの血液と臓器は見てミネルバは舌なめずりをする。

ブロウニングに帰還したドルチェフは再度スイツチ類を弄るが、グランツ機の蹴りが余程強烈だったのか、その衝撃でモニターや計器類が正常に動作しなかった。

『隊長、バルチャー10とバルチャー7の発信源が……消えました』

何も映らないディスプレイにエミリアからのパイロットLOSTの報告が入る。

その声は悲しみに満ちており、今にも泣きそうな感じだった。

「……そうか」

エミリアの通信を聞いたドルチェフは肩を落とす、油断して何もしてやれなかった自分に対してとグランツに対しての怒りに奥歯を噛み締めながら拳を強く握る。

「ポールとフォルトが……」

マリアも仲間の死を聞き、肩を震わせる。

「この機体も完全に使い物にならないか……」

ドルチェフは、頭部を潰された機体を降りる。

バーミリオンセイバー配属時から長年使用しており、自分のクセをストレートにトレス出来ていただけに廃棄と分かれると妙にも悲しくなる。

「後は……コイツだけか」

ドルチェフの視線先には、フルアーマードVF-11の姿が映る。

「マリア、俺はコイツで時間を稼ぐ。その間に皆に逃げるように伝えてくれ」

「……嫌よ」

ドルチェフの命令をマリアは受け止めなかった。

「マリア！」

「どうして、あなたは、いつも人の気持ちを考えずに自分勝手に行くの？ 少しは人の気持ちを考えてよ！」

マリアは、自分の思いをドルチェフにぶつける。

突然の事にドルチェフは、思わず言葉を失う。

「私は……ドルチェフを失うのはイヤよ。今でも、これからも」

マリアの目から涙がこぼれ落ちる。

マリアの言葉を聞いたドルチェフは、マリアが自分に何を言いたかったのかを薄々と気付き始める。

「マリア……」

「私は……私は、あなたの事が好きよ。こんな事、女性から先に言わせないでよ！」

マリアは自分から告白した事が恥ずかしくなり、顔を赤らめ、只でさえこぼれ落ちていた涙が更に溢れてきていた。

マリアの告白にドルチェフはマリアに近付き、優しくそつと抱き締める。

「すまなかった、本当に」

「バカ、バカ……鈍感よ本当に……」

マリアは、ドルチェフに抱かれてドルチェフの胸元で嗚咽を漏らしながら泣く。

自分が好きな事を理解しないドルチェフに対して苛立つ時もあったが、理解し受け入れてくれた事が嬉しく、ドルチェフの温もりをパイロットスーツ越しに感じながらマリアは、少しだけ心が安らいでいた。

気が付くと、二人は互いの唇を重ね合わせていた。

格納庫に残されたフルアーマードVF-1に搭乗したドルチェフは、機体の起動スイツチを入れる。

フルアーマード装備は、ミサイルの装填数も従来のバルキリーと比較すると多い為、その分のコストも多大に掛かる。

その為、特殊任務以外での使用は殆ど使われる事は無い。

久しぶりの起動でも異常無く動くのは、ミラン達メカニックのお陰なのだろう。

『バルチャーよりホークス。これより出撃する。』

ドルチェフは、エミリア達に出撃の通信を入れる。

『了解。隊長、バルチャー9の発信源も途絶えました』

アイナの声は、若干涙声だった。

『……わかった』

ドルチェフは、アイナの通信に奥歯を強く噛み締める。

ブラウニングのカタパルトが展開し、ドルチェフのフルアーマードVF-11とマリアのVF-14が出撃する。

「ハッ、あんな所に隠れていやがったのか」

グランツは、ドルチェフ達の機影の先にあるブラウニングを見つける。

そして、二人の出撃と入れ替わりでグランツ機がブラウニングに迫る。

「しまった!」

ドルチェフはグランツ機に気付き、機体を反転させて追い掛けようとする。

『アイナ、エミリア、逃げろ!』

ドルチェフは、大急ぎでブラウニングに通信を入れる。

「ハ、死ねや」

ドルチェフの通信も虚しく、グランツ機はブラウニングのブリッジに向けて攻撃を開始する。

瞬間の出来事にアイナもエミリアも何も出来ずにグランツの攻撃で吹き飛ばされる。

ブリッジを破壊されたブラウニングは、やがて内部から爆発を起こして轟沈していく。

『ブラウニングが……』

『そんな……』

ドルチェフとマリアは、その様子をただ呆然と見る事しか出来なかった。

『バルチャーから各機へ、生きている者がいたらポイントB―13に集結。繰り返し、ポイントB―13に集結』

旗艦を失った状況を見兼ねたドルチェフは、残ったパイロット達に通信を入れてマリアと共に小惑星郡が漂うポイントB―13へと向かう。

敵の攻撃をくぐり抜けてポイントB―13に到着したパイロット達は、ドルチェフのフルアーマードVF―111を確認して次々集合する。

ドルチェフ機の周りにやってきたのは、マルス、レオン、カイル、ネル、タクヤ、エスター、マリアの七名だった。

『隊長、どうしたんだよ、急に』

『お前達に命令だ。今からこの空域から離脱しろ』

『隊長、何を馬鹿な事を言っているんですか!』

突然の撤退命令にマルスが食ってかかる。

『さつき、ブラウニングが墜ちた。だから、お前達だけでも逃げろ』

『ブラウニングが!?!』

ドルチェフの言葉にマリアを除くパイロット達は驚く。

『ブラックバルチャー隊は、このままでは全滅だ。お前達だけでも生き残れ』

ドルチェフは、パイロット達に撤退命令を出す。

『イヤだよ。俺だって、まだ戦えるぜ』

ドルチェフの撤退命令にタクヤは反発する。

『タクヤの言う通りだ。俺は、この部隊に入った時点で隊長に命を預けてるんだ』

レオンはタクヤの意見に賛同する。

『……まったく、お前達は。仕方がない、タクヤとエステル。お前達だけでも逃げろ』

『は？ 何でだよ』

『とにかく逃げろ！ お前達二人は足手まといになる。エステル、このバカを連れて逃げろ！』

ドルチェフは、エステルにアイコンタクトをする。

モニター越しにドルチェフの考えを悟ったエステルは頷く。

ドルチェフもエステルもタクヤが素直に言う事を聞かないのは、既に分かっていた。

『タクヤ、隊長の言うとおりにしよう』

『エステル、お前まで何を言ってるんだよ！』

『タクヤ！』



ドルチェフの命令を聞かないタクヤ機にエスター機は、ガンポッドを向けて威嚇射撃をする。

『エスター……』

タクヤはエスターの行動に言葉を失う。

『次は、本当に狙うよ』

『わ、わかったよ。ちくしょう！』

エスターの真剣な眼差しを見て悟ったのか、タクヤは渋々受け入れる。

タクヤとエスターは、機体をファイターに変形させて戦線から離脱する。

『とにかく、今は遠くへと逃げろ。いいな！』

ドルチェフは、二人に念を押しして迎撃体制を取る。

『了解』

『……』

エスターが応答する中、タクヤは未だに納得がいかないのか返事をしなかった。

『タクヤ、返事をせんか！』

返事をしないタクヤをドルチェフは一喝する。

『うるせえ、聞こえてるよ！』

ドルチェフの一喝にタクヤは、やけくそに返事をする。

『エスター、この馬鹿から絶対に目を離すな。もし引き返そうとしたら、遠慮なく撃て』  
『……了解』

ドルチェフからの命令にエスターは、ポツリと返事を返す。

『バルチャーより各機へ。二人の為にも少しでも時間を稼げ、いいな!』

ドルチェフの指示にパイロット達は迎撃態勢を取る。

『……みんな、聞こえるか』

しばらくして、タクヤが通信を入れる。

『タクヤか。ちゃんと逃げているか?』

ガンポッドでバトルポッドを迎撃しつつ、ドルチェフが応答する。

『ああ、ちゃんと逃げてるよ』

ドルチェフの通信にタクヤは、ふてぶてしく応える。

『ボウヤ、アンタ達の時間稼ぎはアタシ達に任せときな』

ネル機はマリア機、レオン機と共にフォーメーションを組み、次々とバトルポッドを撃墜する。

『みんな……今までホントにすまねえ』

タクヤは、モニター越しに頭を下げる。

色々と迷惑を掛けたにも関わらず、ここまで自分やエスターの為に命を張ってくれて

いる事にタクヤは感謝していた。

『おいおい。頭を下げるなんて、タクヤらしくねえなあ』

頭を下げるタクヤの姿を見たマルスが茶化す。

その間にもマルス機は、接近するバトルポッドの攻撃をかわしながらミサイルを撃ち込んで撃墜する。

『確かにそうだね』

マルスの言葉にカイルは、笑って応える。

『なんだよ、ひつどいなあ……せつかく俺が謝ってんのにさあ』

周りの反応にタクヤは口を尖らせる。

『日頃の行いね、フフ』

マリア機はミサイルで威嚇射撃し、怯んだ隙を狙ってバトルポッドをガンポッドで次々と撃墜する。

ブラックバルチャー隊の戦いぶりをグランツとミネルバは遠巻きに見ていた。

その戦いぶりを見て、巨人族の闘争本能が擦られたかの様にグランツの身体が疼き始める。

『ク、クククク……久しぶりに歯応えのあるヤツらだな。いくぞ、ミネルバ』

「アハハハハ！ マイクローンハ、ミナゴロシダ！」

グランツ機とミネルバ機は、ブラックバルチャー隊に襲い掛かる。

マルス機とレオン機を標的にしたグランツとミネルバは、2機に襲い掛かる。

「野郎！」

「ここからは行かせないぞ！」

2機はガンポッドとミサイルで攻撃するが、次々とよけられて間合いを詰められる。

「当たらねえんだよ！」

グランツ機はマルス機に、ミネルバ機はレオン機に狙いを定めて、そのまま格闘戦に持ち込む。

「うわああああああ！」

「ギヤアアアアアア！」

グランツ機とミネルバ機は、2機のそれぞれのコクピットを殴り潰す。

そして、機体を蹴り飛ばして蜂の巣にして撃墜する。

「アハハハハ、タノシイー！」

ミネルバは、子供の様にはしやぎながら戦闘を楽しむ。

「ミネルバ、次行くぞ！」

「ウン！」

そして、そのままカイル機とネル機に標的を定める。

「来るぞー！」

迫り来る2機にネル機とカイル機は迎撃態勢を取る。

「せめて、フォルトの仇討ちとして一発くらいは！」

「こんちくしょう！」

カイル機とネル機はフォーメーションを組み、グランツ機とミネルバ機を迎え撃つ。

「雑魚は引つ込んでろ！」

「グランツ、ヤツチャエー！」

グランツ機は攻撃をかわしつつ、背部キャノンとマシンピストルを撃ち込み、カイル機とネル機に命中させる。

「フォ、フォルト……」

「ア、アタシは……まだ」

グランツの攻撃を受けた2機は爆発する。

「ワー、キレイ」

まるで花火を見るかのようにミネルバは目を輝かせていた。

『……』

次々と撃ち落とされて消えていく仲間の発信源にタクヤは言葉が出なかつた。

『……マルスさんや姉ちゃんまで……くっそおおお！』

タクヤは、何も出来ない自分への苛立ちから泣き叫ぶ。

エスターも同じくして、声を押し殺して泣いていた。

『タクヤ、エスター、聞こえているか?』

ドルチェフから通信が入る。

『隊長……』

『……聞こえます』

二人は、泣き顔でくしゃくしゃな顔でドルチェフの通信に応える。

回線状況が悪いのか、時々ノイズが混じっている。

『最後にお前達に頼みたい事がある』

『何でしょうか?』

『これから先、色々辛い事があるだろうが二人で立ち向かえ。お前達一人一人は弱いだろうが、二人で立ち向かえば、きつと乗り切れ……』

突然回線が切れてモニターは砂嵐状態になり、ドルチェフとの通信は途中で途絶える。

『おっさん! おい返事しろよ、おっさん!』

『隊長、応答してください!』

タクヤとエスターは、必死にドルチェフに呼び掛ける。

「とうとう、回線も通じなくなっただか……」

砂嵐状態のモニターを見てドルチェフは眩く。

それは、タクヤ達が通信回線が届かない場所まで逃げた事を意味する。

(二人共、上手く逃げ切ってくれよ)

タクヤとエスターが逃げ切る事を心の中で祈りながら、ドルチェフは覚悟を決める。

『マリア……申し訳ないが、覚悟を決めてくれ』

ドルチェフの通信を聞いたマリアは、黙って頷く。

「クソ！ まさかここまでやるとはな」

ドルチェフとマリアの反撃に過半数以上を撃ち落とされ、グランツは焦りを感じていた。

『グランツ、モシカシテ、ビビツテル？』

『馬鹿野郎！ この俺がビビる訳ないだろう！ 久しぶりに骨のある相手に震えてるのさ』

ミネルバの通信にグランツは強がり言う。

「いくぜー」

グランツ機とミネルバ機が2機に仕掛ける。

マリア機はファイターで翻弄しつつ、ドルチェフ機はガンポッドと肩のビームラン

チャーで応戦する。

グランツ機とミネルバ機はギリギリで攻撃をかわしつつ、ドルチェフ機に迫る。

(さあ、もつと近付いてこい……)

ドルチェフは、ミサイル発射ボタンに親指を乗せてミサイルを発射するタイミングを待つ。

(あと少し……)

グランツ機とミネルバ機の攻撃に必死に耐えながら徐々に近付いてくるタイミングを見計らう。

「これでも食らえ！」

そして、射程圏内に入ったのを確認すると同時にドルチェフは、ミサイル発射ボタンを押す。

フルアーマードパーツの全ミサイルハッチが展開され、中から大量のミサイルが発射されて次々と2機に襲い掛かる。

「何!？」

「ナニナニ!？」

グランツ機とミネルバ機は、突然の事にミサイルを撃墜しながら回避する。

「コイツはオマケだあああああ！」



ドルチェフ機は、なおも追い撃ちをかけるかの如く、ガンポッドと肩のビームランチャーで追撃する。

ミサイルの回避で気を取られていた2機は、ガンポッドとビームランチャーを数発食らって火花を上げる。

「うわあああ、くっそー!」

「キヤアアアアア!」

被弾したグランツ機とミネルバ機は、火花を散らしながらも体勢を整える。

『グランツ、キタイガ、ヒラファイテル』

普段、あまり攻撃を食らった事が無いミネルバは、初めての被弾に慌てふためいていた。

「ちくしよー! コイツ、動け! 動けよ!」

ドルチェフ機の攻撃を食らって動力系が思うように動かず、グランツは必死に操作レバーを動かす。

「逃がすかあああああ!」

ガンポッドと肩のビームランチャーを撃ちながらドルチェフ機は特攻を駆ける。

しかし、スヴァール・サランからの艦砲射撃により、ドルチェフ機の特攻は遮られてしまう。

『グランツ、ミネルバ、撤退して。艦砲射撃でアイツ等を攻撃する』

グランツ達の状況を見ていたテラードが二人に通信を入れる。

『テラード、余計な真似をするんじゃないやねえ！俺はまだ戦える！』

『アタシダツテ、マダ、タタカエル！』

テラードからの援護射撃による撤退指示に対して、グランツとミネルバは猛反発する。

『そんな機体で無理をして何になるんだ！大人しく撤退するんだ！』

『……クソ！』

グランツとミネルバは、テラードの助言を受けて渋々後退をし始める。

『マリア、追うぞ！』

『了解』

ドルチェフ機はアーマードパーツを排除し、エンジン全開でマリア機と共にグランツ達を追う。

だが、残存部隊が2機の行く手を遮る。

「どけえええええ！」

ドルチェフ機とマリア機は、残存部隊の攻撃を次々とかわしながら残存部隊を撃墜してグランツ達の後を追う。

しかし、あと少しと言う所でグランツ達はスヴァール・サランに収容されてしまう。

「機体の収容、完了しました」

「よし、艦砲射撃、急げ！」

グランツ達の収容を確認後、スヴァール・サランの執拗な艦砲射撃が2機を襲う。

マリア機は必死に回避するが、やがて艦砲射撃が次々と命中する。

「ドルチェ……フ……」

マリア機は、火花を散らして爆発する。

「マリアアアアアア！」

共に戦い、そして自分を愛してくれた者が今、目の前で爆光の中に消えていく。

「うおおおおお！」

愛する者を失ったドルチェフは、怒りと悲しみの混じった感情を露わにする。

艦砲射撃をギリギリで回避しつつ、ドルチェフ機はスヴァール・サランに攻撃する。

生き残った残存部隊もドルチェフ機を食い止める為に迎撃に向かう。

次々と攻撃を食らい、満身創痍ながらもドルチェフは、トリガーから指を離す事なく

攻撃を続けて残存部隊を撃破し、スヴァール・サランを僅かながら小破させる。

やがて集中放火を浴びたドルチェフ機は、爆散して宇宙のチリと化した。

「敵ながら大した奴だ……」

ドルチェフの命を懸けた攻撃にテラードは感心する。

「このままヤツらの基地も攻撃するんだ」

テラードの命令で艦砲射撃は、惑星ローグ内のブラックバルチャー基地へと向けられる。

「照準完了」

「撃て！」

テラードの命令と共に多数のビームの雨が惑星ローグへと降り注ぐ。

艦砲射撃は、まるで流星群を見るかのような雰囲気だった。

「ねえねえ、流星群みたいなのが見えるよ」

外の様子を見ていたメイアがミラン達を呼ぶ。

「流星群？」

「こんなへんぴな惑星で流星群が見られるなんて珍しいですね」

メイアの呼ぶ声にミランや他の仲間達がやってくる。

「何だ、あれは？」

外の様子を見るなりミランは、流星群の様子に違和感を感じる。

その流星群は、徐々にミラン達の方に近付いて来ていたのだ。

「あれは……流星群じゃない、ビームだ！」

ミランの言葉に周りは混乱する。

しかし、そんな事もお構い無しにビームの雨は、ブラックバルチャー基地に降り注ぎ、施設を次々と破壊していく。

流星群がビームだと判明してミラン達は逃げようとするが、逃げる間も殆ど無い状況でミランやメイア、そして基地で待機していたラナ達もビームで一瞬に焼き尽くされていく。

惑星ローグのブラックバルチャー基地辺りの表面は、どんどん焦土へと変わっていく。

その様子をグランツ、ミネルバ、テラードが艦橋で眺めている。

「アハハハ、キレイ」

次々と起きる爆光を見てミネルバは、手を叩きながらはしゃぐ。

「ヒヤーツハツハツハ！ コイツは綺麗な花火だ。おい、テラード。もつとやれ！」

「わかっているさ」

テラードは、ゼントラーデイ兵に攻撃続行の指示を出す。

やがて、ローグの表面の半分以上は焦土と化していく。

スヴァール・サラン一隻による数時間に渡る艦砲射撃でローグは死の惑星へと変わってしまった。

「ハーツハツハ！ フン、俺達の手には掛かれば惑星の一つや二つくらい、こんなもんさ！」

死の惑星と化したログを見て、グランツは高笑いする。

「だが、テラード。こつちもかなりの被害は出ている。ヌージャデル・ガーだけでも50機以上は撃破されているからな」

高笑いするグランツにテラードは、冷静に被害状況を報告する。

100機近く搭載していた機動兵器の半数が1部隊によつて撃墜されている事は、それだけブラックバルチャー隊のパイロット達が優れている証拠でもある。

「……わかつてるよ。とりあえず補給をしに戻るぞ」

補給の為、スヴァール・サランはポイントアルファからフォールドアウトを開始する。こうして、統合軍の掃き溜めと呼ばれたブラックバルチャー隊は、タクヤとエスターを残して全滅する形となった。

なお、元々統合軍の掃き溜め扱いされている為、ブラックバルチャー隊が全滅した事は、統合軍本部にすら報告は挙げられていない。

## 第15話プロジェクト・エスペランサ

西暦2009年に勃発した第一次星間大戦を経て、人類は異星人の再来襲に対しての種の拡散を図り、宇宙への移民計画が実行される。

2012年を皮切りに宇宙移民計画により、人類は新天地を目指して宇宙へと旅立っていく。

それから26年後の2038年。

地球より第7次新マクロス級大型移民船団が旅立つ中、時を同じくして惑星エデンより第8次新マクロス級大型移民船団が旅立つ。

惑星エデンではマクロス6船団に続いて2番目の大型移民船団の旅立ちである。

今回の移民船団は新マクロス級大型移民船団での技術力や科学力の向上試験を行う為、惑星エデンからの全面的なバックアップにより、技術力や科学力は他の船団よりも高い技術水準を有しているが特徴である。

そのマクロス8船団艦長であるアンナ・エヴァンスは、新マクロス級大型移民船団では初の女性艦長であり、女性艦長はメガロード01の早瀬未沙以来である。

新マクロス級大型移民船団初の女性艦長としてマスコミからも大々的に取り上げら

れ、これは新統合政府と政府官僚の結託した、女性が積極的に社会貢献を促す為のアップールでもあった。

なお、市街地シティ8の市長は、夫であるマイルズが就任して行政も行っている。

統合軍士官学校特待科を首席で卒業後、数々の艦隊でオペレーターを務め上げ、後に26歳の若さで巡洋艦クラスの艦長を務めて多大な戦火や功績を残している。

見た目は穏やかな雰囲気を持つ彼女も戦闘時には凛とした雰囲気を持ち、的確に戦略を指示していく。

また、他の艦長と違い、部下達の提案や意見にも耳を傾ける事で部下達からの信頼も高く、上司からも一目置かれていた。

後に生まれ故郷でもある惑星エデンへ転属後、そこで行政書士であり幼なじみのマイルズと再会し、その2年後には結婚を果たす。

今までの功績を統合軍から高く評価されたアンナは、2038年にマクロス8艦長へと抜擢される。

夫であるマイルズも同船団のシティ8市長に就任し、行政を任される事となる。

マクロス8船団出航後、アンナはマイルズと協力して艦内職員や市民からの意見や声を聞き取り、常に環境改善に努めている。

その聞き取りが功を成し、一番住んでみたい移民船団でマクロス8船団は2位を大き



く突き放して1位となり、この事はマスコミやメディアにも大きく取り上げられた。

そのお陰で艦内職員や市民からの支持率は多く、一時期は支持率が95%を越えるくらいの時もあった。

マクロス8船団が出航してから3年後、兵器技術開発部門の主任兼技師長であるマニング・ステイブンより、船団独自での新型可変戦闘機の開発提案が挙がる。

その提案を受けたアンナは話を聞く為、艦長であるアンナを筆頭に船団上層部を交えての会議が開かれる。

元々技術系の家系を持つ彼は、ゼントラーディ技術を導入する航空メーカーであるゼネラルギヤラクシー社や現在の主力機である傑作機VF-11の開発を行った新星インダストリーを渡り歩いて様々な知識や技術を修得し、その後は惑星エデンの兵器開発技術部門へと配属し、新型可変戦闘機の開発に携わってきた。

彼の開発に掛ける情熱は目を見張るものがあり、一度何かに拘り始めると寝食を忘れる程である。

それ故に彼は周りからは、変わり者扱いされる事もしばしばある。

後にマクロス8船団の出航が決まると、彼はマクロス8船団兵器技術開発部門主任へと抜擢される。

新しい環境で主任として開発に携わる仕事に意欲を燃やすマニング。

そんな彼には、自らの手で思い描いた可変戦闘機を開発したいと言う夢があった。だからこそ、今回は彼にとつては願ってもないチャンスだった。

その思いを実現する為、彼は資料を作成して会議に臨む。

ディスプレイには、YF-23と表記された戦闘機が映し出されている。

「この機体は、惑星エデンで行われたプロジェクトスーパーノヴァでの試作機YF-19とYF-21の特徴を兼ね備えています」

武道派の外見を持ち、唯一掛けている眼鏡がインテリ感を漂わせる男、マニングはディスプレイを見ながら解説をする。

マニングが手元のリモコンボタンを押すと、ディスプレイに表示されているYF-23の両側にプロジェクトスーパーノヴァのコンペティション機であるYF-19とYF-21のモデリングが映し出される。

「YF-19の機動力とYF-21のBDIシステム。この二つの特徴を活かした機体があれば、様々な分野で活躍できると思います」

マニングの説明に耳を傾け、そして資料を見ながらアンナや上層部連中はメモを取る。

アンナはマニングの説明を聞きつつ、ボイスレコーダーにプレゼン内容を録音する等の徹底ぶりだった。

そして説明を聞き、資料を見ながら重要な部分に関してはメモを入れる等もしている。

アンナと対照的に上層部連中は、マニングの説明を真剣に聞いている者は少なかった。

その中には、眉間にしわを寄せる者もいたり、あくびや居眠りをする者もいる。

「YF-19は、高い機動力です。既存のバルキリーの中では最高速度を持ち、空力特性にも優れており、単独での任務遂行も可能なのが特徴です」

YF-19をポイントングデバイスで指し、マニングは機体特性を語る。

「YF-21は、脳波コントロールのBDIS(Brain Direct Interface System)です。」

操縦系統や火器制御関係を脳波コントロールで行う事でパイロットが機体操作時における煩わしさを軽減しています」

YF-19に続けてポイントングデバイスでYF-21を指し、マニングは機体特性を語る。

「この二つの機体の利点を兼ね備えたのが、このYF-23になります」

ディスプレイにYF-23の各形態が映し出される。

「主翼はデルタ翼を採用し安定性を高めつつ、エンジンはFF2500シリーズの発展

型のFF2600を搭載予定です」

ディスプレイには、ファイター形態とエンジンのモデリングが映し出される。

エンジンは、YF-19のエンジンをベースにした発展型を搭載する事で速度を高め、主翼をデルタ翼にする事で機体の安定性を保ちつつ加速性や高速域の運動性にも優れた性能を持たせた機体である事をマニングは説明する。

「続きまして、この機体の二つの特殊システムの説明に入らせて頂きます」

画面が切り替わり、ディスプレイにはシステム説明のスライドが映し出される。

「まず最初にETSから。正式名称『Eye Target System』。ミサイルや頭部レーザー機銃等のロックオンをレーダー感知やジョイスティック操作から視点操作で行う事ができます。これにより、わざわざターゲットをサーチしなくてもロックオンが可能です」

ディスプレイには、パイロットが視点を動かす事で視点に入った目標物が次々とロックオンされていくデモンストレーションの動画が映し出される。

「なお、このシステムを用いるには専用のヘルメットが必要です」

画面が切り替わり、ヘルメットの画像が映し出される。

「現在配備中のバルキリーでは、このシステムを搭載するのが難しい為、このヘルメットが必要となります」

バルキリーにETSを搭載するにも、そのシステムを搭載する為のキャパシティが無い事と、仮にキャパシティがあっても現在配備中の機体全てに搭載するのも時間効率が悪いのも一因である。

「最後にピンポイントバリアの多様化です」

画面が切り替わり、SDF-1マクロス、YF-19、YF-21が映し出される。

「SDF-1マクロスで発見されたバリアシステムをYF-19やYF-21では、小型化し搭載に成功しています。ただし、このシステムはバトロイド形態のみでしか発生させる事ができませんでした」

画面が切り替わり、デイスブレイにはYF-23の各形態が映し出される。

「その辺りを踏まえて、この機体は各形態でもピンポイントバリアの発生が可能であり、更に専用ガンポッドにピンポイントバリアのエネルギーを転換する事でビームの出力を上げる事も可能です」

画面が切り替わり、ガンポッドの全体イメージ図が映し出される。

「ガンポッドは、YF-21で採用されたカートレスタイプを採用しています。ピンポイントバリアのエネルギーはガンポッドのグリップ部分から注入される仕組みです」

バトロイドの手首部分が表示されてガンポッドを握るイメージに変わり、手首部分からガンポッドのグリップへピンポイントバリアのエネルギーが流れるイメージが映し

出される。

「また、専用アダプターをアタッチする事でビームキャノンタイプとしても使用可能で  
す」

画面が切り替わり、ガンポッド上部が展開するイメージが表示されてアダプターが差し込まれたイメージが映し出される。

「以上で説明を終わります。私個人としましては、開発自体は技術力の優れた、この船団内で行いたいと思っております」

マニングは、自信満々の表情をしてプレゼンテーションを終える。

彼のプレゼンテーションを聞き、配布された資料を見ながらアンナと上層部連中達は険しい表情をする。

特に上層部連中は、揃いも揃って険しい表情を見せていた。

「如何でしょう?」

マニングは、アンナ達に質疑応答を投げ掛ける。

「マニング君、君のプレゼンや資料を見て思ったのだが……」

年配の男は、資料を見て険しい表情をしながらマニングに話し掛ける。

「はい、何でしょう?」

「去年、統合軍本部から次期主力機としてVF-19が採用されたのは、君は知っておる

かね？」

「ええ、もちろんです」

年配の男の問い掛けにマニングは応える。

プロジェクトスーパーノヴァのコンペティションは、両試作機共に評価は互角ではあったが、コストの関係でYF-119が正式採用される事となり、現時点でVF-119は徐々に量産態勢に入っている。

「ならば何故、可変戦闘機をここで新しく開発する必要があるんだね？」

小太りで口髭を生やした男は、少々荒々しい態度でマニングに問い掛ける。

「私は、この機体で可変戦闘機としての技術や性能が、どこまでやれるかを見たいのです」

マニングのこの言葉に上層部連中は、呆れた表情をしだす。

「バカも休み休み言いたまえ。そんなバカみたいな理由で、この船団に割り振られた莫大な予算を使わせる気なのかね？」

細身に眼鏡を掛けた男がマニングを小馬鹿にする。

当たり前だが機体開発には、莫大なコストが掛かる。

配布された資料を見る限り、統合軍本部より毎年割り振られる予算の7割近くは使う可能性がある。

「確かにバルキリーは、巨人族に対抗する為に開発されました。しかし、ただそれだけの目的で終わらせるには、勿体無いと思いませんか？」

細身の男の批判にマニングは自論を力説する。

「マニング君。我々統合軍は、常に戦争に勝たねばならないのだよ。戦争に負けてしまつては、人類は死滅してしまふ。その為には、性能の良い機体が必要だ。君も技術屋なんだから、それくらい分かるだろう？」

マニングと同じく体格のガツチリした男は、見下した目でマニングを見ながら話す。

「ですが、可変戦闘機の技術を戦争以外に使う事も一つの方法だと思いませんか？」

「可変戦闘機の技術を戦争以外に？ 馬鹿も休み休み言いたまえ」

上層部連中は、マニングの意見を否定して笑い出す。

「……」

上層部連中の否定的な意見にマニングは黙り込む。

少しでも可変戦闘機の技術発展を目指して取り組んで来た事を意見も聞かずに真つ向から否定され、マニングは上層部に対して不信感を抱く。

「……艦長は、この件に関しては、どうお考えでしょうか？」

マニングは、アンナを見て重い口を開く。

「……私も、この件に関しては他の方の意見と同じです」



アンナの考えに上層部連中は当然だと言う感じで頷き、マニングは大きく目を見開き、がっくりとうなだれる。

「……そう……ですよね」

周りの意見を素直に受け入れ、マニングは虚しさと悔しさの思いでいっぱいだった。

そして、自分のやってきた事は、結局は自己満足である事も改めて受け入れる。

「ですが……」

アンナの補足の言葉にマニングと上層部連中は、アンナの方に視線を向ける。

「私個人としては、可変戦闘機の技術力向上と言う考え方や、あなたの向上心を高く評価したいと思います。だから、私は賛成です」

アンナの意見に上層部連中は呆気にと取られた表情をし、マニングは目を大きく見開き、表情が明るくなる。

「ありがとうございます！」

マニングはアンナに深々と頭を下げた後、更には土下座までし始める。

「艦長！」

「何を考えているんだ！」

アンナの肯定的な意見に上層部連中は次々と抗議を入れる。

「あなた達は、戦争を武力行使でしか解決できないとお思いですか？」

上層部連中達の抗議を遮り、アンナは上層部連中に問い掛ける。

「そんなの当たり前だ！」

「武力には武力でしか解決できる訳ないだろう！」

(……ホント、頭の固い人達)

上層部連中の答えにアンナは、内心頭を悩ませる。

現場上がりから艦長に就任したアンナとは対照的に上層部連中の殆どはコネ等で統合軍に入隊し、現場も全く経験が無いまま今のポジションに就いている。

だからこそ、現場の苦労など分かるはずも無く、簡単に戦争を武力行使で終わらせると言う短絡的思考しか持っていないのだろう。

「では何故、ゼントラーデイ人と地球人は分かり合えたかは、ご存知ですか？」

「それは、我々地球人の実力をアイツ等が受け入れたに決まっている」

「そうだ。我々地球人は野蛮なゼントラーデイ人よりも優れているからな」

(……この人達って、本当に力でねじ伏せる事しか頭に無いのね)

自己権力の強い上に周りの事を考えようともしない上層部連中の意見にアンナは、思わず深い溜め息を吐く。

「我々地球人とゼントラーデイ人が分かり合えたのは歌です。リン・ミンメイの歌があれば、地球人は滅んでいたかも知れませんが」

「バカバカしい、そんなのは一つのきっかけに過ぎない」

「歌で戦争が終わるなら、それこそ軍隊なんていらんじやないか」

もはやアンナの言葉すら上層部連中は、聞き入れようとはしなかった。

「わかりました。あなた方の意固地な考えが変わらないなら、私は彼の提案に賛成し  
ます」

「艦長、あなたと言う人は！」

「自分が何を言っているのか、分かっているのか？」

意固地な考えしか持たない上層部連中にアンナは、マニングの提案を全面的に受け入  
れる方針を伝える。

新しい事への挑戦は、大きなリスクが伴う為、どうしても保守的な考えになつてしま  
う。

しかし、いつまでも保守的な考えでいるよりは、時には新しい事にも挑戦する考えも  
必要である。

マニングの新型機開発の提案は、ある意味、新しい事に挑戦をしようとしている。

その芽を摘んでしまうのは、あまりにも勿体ない。

「まあ待て。どうせ、新統合軍本部で却下されるに決まっている」

細身の男は、アンナに聞こえないように周りにそっと耳打ちをする。

細身の男の耳打ちに上層部連中は、納得して不敵な笑みを浮かべながら頷く。

「艦長、我々は失礼する」

「まあ、せいぜい悪あがきでもするんだな」

上層部連中は、アンナやマニングに対しての文句を言いながら次々と席を立ち、会議室を後にする。

会議室には、アンナとマニングの二人だけが残った。

「艦長、申し訳ございません。私のせいで……」

マニングは、アンナに対して深々と頭を下げてお詫びする。

自分が提案をした事により、艦長自身の信頼や立場が脅かされる可能性がある事に罪悪感を感じていた。

「マニング技師長、頭を上げてください。今の統合軍に必要なのは、あの人達のような頭の固い人達よりも、あなたの様に柔軟性のある人だと私は思っています」

アンナは、優しい笑顔を見せながらマニングを励ます。

「は、はあ……ありがとうございます」

アンナからの励ましの言葉にマニングは恐縮する。

「あなたのプレゼンや資料は、とても分かりやすく纏められていると思いますので、この件に関しては、私から統合軍本部に掛け合ってみます。だから、あなたはあなたの仕事

をやり遂げてください」

「はい、ありがとうございます」

アンナの激励を受けてマニングは、自信に満ちた表情で会議室を後にする。会議後、アンナは統合軍本部へ会議の内容を伝える為に通信を入れる。

『こちら統合軍本部』

統合軍本部と通信が繋がり、机上に設置したモニターにオペレーターが映る。

『新マクロス級大型移民船団マクロス8艦長、アンナ・エヴァンスです。ワードナ大佐に繋いでください』

『かしこまりました。少々、お待ちください』

オペレーターは、ワードナを呼び出す。

しばらくして、モニターに口髭を生やしたロマンスグレーな男性が映し出される。

『こんにちは。ワードナ大佐』

『ああ、君か。珍しいね、君から連絡をくれるなんて』

『そうですね。そう言えば、最後に大佐とお話をしたのは、いつ頃でしたっけ?』

『そうだなあ……うーん……確か3ヶ月前くらいかな? 確かVF-19の運用試験の

時だった様な……』

『確か、そうでしたね』

久しぶりの会話にアンナとワードナは談話に花を咲かせる。

『どうかね？ VF-119は』

『ガーネットフォースの皆さんもVF-117と比べて凄い性能だと喜んでいましたし、性能テストの方も順調のようですよ』

『そうか。それは何よりで』

楽しそうに話すアンナを優しい瞳で見つめるワードナ。

それは、まるで父と娘の会話を連想させる様な感じだった。

『……それで今日は、君と世間話をする為に、わざわざ私に通信を入れたのかい？』

ワードナは、少し皮肉を混ぜてアンナに問い掛ける。

『いいえ。今日は、我が船団での会議提案の承認を頂きたいと思ひまして』

『会議提案？』

『実は……』

アンナは、マニングの提案した船団での次世代機関開発の内容をワードナに説明する。

『……顔に似合わず、かなり無茶なお願いを言うね』

アンナの説明を聞き、ワードナは苦笑いをする。

それもその筈、本来は統合軍本部の承認後は、開発メーカーに設計や開発を依頼するのがセオリーである。

しかし、今回は移民船団で独自で次世代機の設計と開発を行うと言う前代未聞の案件であるから尚更だ。

『無茶なのは覚悟しています。彼は武力としての次世代機開発ではなく、技術力向上としての開発を目指しています。だからこそ私は、その才能を戦力以外に使わせたいんです』

アンナは、真剣な眼差しでワードナに訴えかける。

『……その芯の強さは、変わらないな』

アンナの真剣な眼差しを見たワードナは、昔のアンナの面影を思い出す。

『わかった。なんとか参謀本部に掛け合ってみるよ』

『ありがとうございます。ワードナ大佐』

アンナは、深々と頭を下げる。

『君、君。まだ決まった訳じゃないから、お礼を言うのは早いよ』

『そうでしたね、ごめんなさい』

ワードナから注意を受けたアンナは、自分の頭をコツンとする仕草をする。

『じゃあ、近い内にまた連絡するよ』

『はい』

ワードナとの通信を終えたアンナは、録音したマニングのプレゼン内容を聞きつつ、

資料や仕様書に目を通す。

(よく見てみると、各ページに彼なりの考えが書かれてるわ)

各ページにはマニング自身のコメントが記載されていた。

—YF-119の機動力

時間を要する任務遂行にはYF-119の機動力は必要不可欠。

それ意外にも人命救助や輸送等は特に要する。

ただし、機動力が高くなれば、その分パイロットへのGに対する負担は増大するので、

コレをいかに減らすかが今後の課題

—YF-21のBDIS

VFシリーズは現行主力機VF-111でも新米パイロットには操縦し易くはなっているが、やはり操縦へのフラストレーションはある状態。

YF-21のBDISは操縦系統や火器制御を全て脳波コントロールする事でパイロットへのフラストレーションを減らしている。

このシステムは航空機以外にも必要性を感じる。

ただ、システム関連のメンテナンスの難しさや量産コストは莫大に掛かるのが最大の難点だ

各試作機に対しての特徴や課題点を大まかではあるが、所々にメモが書かれている。



「航空機以外の使い道を彼なりに色々と考えているのね」

アンナは、資料を読みながらマニングの考えに關心していた。

マニングのプレゼンテーションから一週間が過ぎた頃、統合軍本部より通信が入る。

「艦長、統合軍本部より通信が入っています」

「わかりました。今から部屋へ戻りますので、回線だけ回しておいてください」

「了解」

アンナは、ブリッジから自室へと急いで戻る。

部屋へと戻ったアンナは、机の上のモニターを通話に切り替えて回線を繋ぐ。

回線を繋ぐとモニターには、ワードナが映し出される。

『すまないね、連絡が遅くなって』

『いえいえ、とんでもない』

『とりあえず、結果だけを伝えるよ』

ワードナの結果発表にアンナの表情は固くなり、思わず固唾を飲む。

『一応、私なりにこのプレゼンテーションや資料を参謀本部に見せたけど、やはり反対意見が多数出たよ』

『……そうですか。やっぱり、そうですね』

アンナは、ワードナの交渉結果に肩を落とすも、元々が無茶な内容故に結果には納得

していた。

『ただし……』

ワードナは、思わせぶりの言葉を付け足す。

『ただし?』

『ガルス少佐をテストパイロットとして任命するなら、船団での次世代機の開発を許可するらしい』

『ガルス少佐を……ですか?』

ガルスと言う言葉にアンナの少し顔がひきつる。

『彼の父親でもあるバルディア中将は、このプレゼンテーションや資料を見て豪く気に入ったらしく、息子であるガルス少佐にも資料を見せたら、自分にやらせて欲しいと申し出てきたんだよ』

『は、はあ……』

ワードナの説明にアンナは、呆け気味に受け答える。

『バルディア中将の親バカぶりは、君もよくわかってるだろう』

『ええ、まあ……ガルス少佐も色々黒い噂が絶えませんかね』

アンナはガルスに対しての黒い噂を思い出して、苦笑いしながらワードナに応える。

バルディア中将は息子のガルスを溺愛しており、ガルスはそれを盾に好き放題やって

いるのが現状である。

無論ガルス本人は、父親の事を自分の都合のいい様に使える人物としか思っていないのは、ガルス自身の言動や態度から周りも理解していた。

『さて、長話しになったが結論を聞こう』

ワードナは、真剣な眼差しをアンナに向けて結果に対しての返答を聞く。

『え、今ですか?』

回答を迫るワードナにアンナは、思わず目を丸くする。

『仕方ないだろう。バルディア中将は、せっかちなんだから』

ワードナは困惑した表情で深く溜め息を吐く。

そんなワードナを見て、アンナは少し間を置き考える。

『……わかりました。マニング技師長の為にも、その条件を受け入れます』

アンナは、腹を決めてワードナの提示した条件を渋々受け入れる。

『わかった。参謀本部には、そう伝えておくよ』

『よろしく願います』

(彼がこの件を知ったら、どんな顔をするのかしら?)

恐らくマニングの事だから嫌な表情を見せる事は容易に想像できた。

ワードナとの通信を終えた後、アンナはマニングを自室へと出頭させる。

「マニング技師長。あなたのプレゼンテーションは、統合軍本部で採用される事になりました」

「本当ですか!」

アンナの報告結果にマニングは、嬉しさのあまり身を乗り出す。

「ただし、条件が一つだけあります」

嬉しさに身を乗り出すマニングを静止しつつ、アンナは真剣な表情をする。

「条件ですか? 何でしょう?」

「ガルス・バルディア少佐をテストパイロットにする事です」

「ガ、ガルス少佐を……ですか」

ガルスと言う言葉にマニングの表情が喜びから落胆した表情へと変わる。

(どうやら、彼もガルス少佐の事を快く思っていないのね)

マニングの表情を見たアンナは予想が的中したのか、思わず心の中で苦笑いする。

「わ、わかりました。プロジェクトの為です、その条件を受け入れます」

ここでプロジェクトを諦めてしまえば、自分が今まで努力した結果が全て水の泡と  
なってしまう。

テストパイロットの事さえ我慢すれば、プロジェクト自体は上手く行く。

せっかく巡ってきたチャンスが無駄にはしたくないと思ったマニングは、心の中で

靴意をして腹をくくる。

「では、正式にプロジェクトを統合軍本部に申請します」

「ありがとうございます。せつかく頂いたチャンスが無駄にしない様に精いっぱい頑張らせて頂きます」

「ところで……」

「はい」

「せつかくですから、プロジェクト名を決めておいた方がいいですね。プロジェクト名は何が良いかしら？」

「それなら既に考えています」

アンナにプロジェクト名の提案を聞かれたマニングは、自信に満ちた表情で応える。

「プロジェクト名はエスペランサでお願い致します」

「エスペランサ？ 確かスペイン語で……」

「希望です。開発機体のペットネームでもあります。このプロジェクトは、私にとっては希望なんです」

まさにマニングにとっては、今回のプロジェクトは希望そのものである。

こうして、マニングの提案したプロジェクト・エスペランサは始動する。

機体の設計・開発は、船団内の工場艦オービルに専用の機関を設け、そこに資材や機

材、人材を揃えた。

マクロス8船団の高い技術力を活かし、機体の設計や開発は徐々に進められ、アンナは開発進捗状況を毎月末に統合軍本部へと報告する。

プロジェクトの中心人物となり、自身にとつて待ち望んでいた機体開発にマニングは、時には寝食を忘れて没頭する事もあった。

そして、開発から約1年半が過ぎ、ようやく試作1号機が完成を迎える。

ただし、BDISやETS等の本来のシステム系統は搭載せず、あくまでもバルキリーとしての基本的な変形機構やオペレーション等のシステム構築を完成させた機体としてである。

(……ついに試作1号機の完成だ)

マニングは試作1号機を見て、今までの事を思い出す。

色々と苦労はあったが、その苦労の甲斐もあり、その結晶が目の前にあるのだ。

「マニング主任、おめでとうございます」

機体のお披露目案内を受けて、オービルに駆けつけたアンナがマニングに祝福の言葉を掛ける。

「ありがとうございます。ですが、まだ試作1号機ですので完成ではありません」

アンナの祝福の言葉を受けたマニングは謙遜する。

「そうね。まだ、第一歩ですよね」

アンナも試作1号機に視線を向ける。

YF-23 試作1号機完成から2日後、マクロス8船団にガルスがテストパイロットとして赴任する。

ガルスがマクロス8船団にやってくるのを知り、上層部連中はガルスに媚びを売り始める。

そんな様子をアンナとマニングは、冷ややかな視線で見ている。

アンナ達の存在に気付いたガルスは、アンナ達にゆつくりと歩み寄る。

「初めまして、ガルス・バルディアです。今回のプロジェクト・エスペランサのテストパイロットに選出頂き、光栄に存じます」

ガルスは、見下した感じの笑みをアンナとマニングに見せる。

（はあ……これから色々と頭が痛くなりそうだね）

ガルスの高圧的な態度を見たアンナは、一抹の不安を感じたのか、心の中で大きな溜め息を吐いていた。

無論マニングもアンナと同じ気持ちだったのは、言うまでもなかった。

「ほお、貴様が責任者か？」

マニングの姿を見るなり、ガルスは相変わらずな上から目線な態度を見せる。

「はい、プロジェクト・エスペランサ開発主任のマニングステイブンです。よろしくお願ひしま……」

「挨拶はいい、早く機体に案内しろ！」

マニングが挨拶をしているにも関わらず機体を早く見たいのか、ガルスはマニングを急かす。

マニングに案内され、ガルスは工場艦オービル内の技術開発部格納庫へとやってくる。

「ほお……」

YF-23 試作1号機を見るなり、ガルスはコクピットに乗り込む。

シートに座ったガルスは、操縦桿や操縦系統を触り、メインスイッチを入れる。

「ガルス少佐、シミュレーションは良いんですか？」

マニングは、いきなり発進しようとするガルスに忠告を入れる。

いくら試作機とはいえ、シミュレーションも無しで搭乗して機体を壊されてしまったのは元も子もない。

「うるさい、発進するから貴様はヘルメットを渡してゲートを開けろ！」

(やれやれ……)

せっかちなガルスに溜め息を吐きつつもマニングは、急いでヘルメットをガルスに渡



してゲートを開けに司令塔へ戻る。

ゲートが開くのを確認したガルスは、キャノピーを閉めた後、マニングから受け取ったヘルメットを被り、スロットルを開けて宇宙空間へ出撃する。

「うおお!？」

強烈なGがガルスの身体に一気にのし掛かる。

「うぐおおおおおおお!」

ガルスは必死にGに耐えつつ操縦桿を握り、機体を操縦する。

最初はフラフラだった軌道も徐々に慣れ始めたのか、自由自在に飛び始める。

「す、凄い………たった数時間で、あの機体を自分の物にするとは………」

マニングは、試作機であるYF-23をシミュレーションも行わずに短時間で乗りこなすガルスのパイロット技術に思わず固唾を飲む。

「フ、フハハハハ。面白い……VF-19も面白いが、この機体もなかなか面白いぞ」

ガルスは機体をガウオーク、バトロイドへと次々と変形させて動作確認を行う。

『おい、コイツに武器は無いのか?』

機体の操縦に飽きたのか、ガルスは司令塔にいるマニングに通信を入れる。

『申し訳ございません。この機体には、まだ標準装備の頭部レーザー機銃しか積んでおりません』

『ガンポッドくらい積んでおけ！ この役立たず！』

機体にガンポッドが搭載されていない事を不満に思ったのか、ガルスはマニングを怒鳴りつける。

そして、そのままガルスは、退屈凌ぎに無茶な操縦をし始める。

『ガルス少佐、無茶な操縦はおやめください！』

無茶な操縦をするガルスをマニングは咎める。

『機体に武器を搭載しない貴様が悪いんだ！』

(はあ……なんで怒られなきゃいけないんだよ)

理不尽に怒られる状況にマニングは、憤りを感じながらもテストの様子を見続ける。

『そろそろ帰還する。ゲートを開けろ！』

約3時間のテストを終えて、ガルスは格納庫へと帰還する。

ガルスの帰還命令を聞いたマニングは、慌てて格納庫へと向かう。

「お疲れ様です、ガルス少佐」

コクピットを降りるガルスをマニングは迎える。

ガルスを出迎えるついでにマニングは、チラッとYF-23を見まわす。

とりあえず、外見上は無茶な操縦をして機体が壊されている様子が無い事に内心ホッとしていた。

コクピットを降りたガルスは、無言でマニングに近付く。

「お、」

「な、何でしょう?」

無言で近付くガルスにマニングはタジタジだった。

また理不尽な理由で怒られるのではないかと思う思いが頭の中を駆け巡る。

「なかなか面白い機体だったぞ。完成が楽しみだ」

ガルスは、マニングを見て不敵な笑みを浮かべる。

「は、はあ……どうも」

ガルスの満足そうな笑みを見たマニングは、恐縮しながら軽く頭を下げる。

「機動性やGとか、操縦していて何か感じた事はありませんでしたか?」

マニングは、ガルスに機体への感想や意見を求める。

パイロットからのフィードバックは、今後の機体開発への重要な意見である。

「そうだな……次からはガンポッドを積んでおけ。以上だ」

「え、たったそれだけですか? 他にありませんでしたか?」

シミュレーターを使わず、ぶつつけ本番であれだけ短時間でYF-23を乗りこなした割にはフィードバックがガンポッドの有無だけしか言わないガルスにマニングは、思

わず呆気にと取られてしまう。

呆気にと取られるマニングをよそにガルスは、強引にマニングの胸倉を掴んで顔を近付ける。

「俺は、どんな機体だろうが乗りこなしてやる。だから貴様は、一刻も早く機体を完成させる事に集中しろ。いいな！」

「わ、わかりました」

気迫あるガルスの表情にガルスと同じ位の体格であるマニングは、押されるがままに応える。

「フーン！」

掴んでいた胸倉を離してガルスは、そのまま格納庫を後にする。

（ふう……こりゃ、先が思いやられるな）

これからテストの度に毎回毎回ガルスに理不尽な事で怒られなければならない事を想像して、マニングはプロジェクトを申請した事を今頃になって後悔し始める。

（いかんいかん、弱気になつては）

しかし、これくらいで諦めようとする自分に喝を入れて気合を入れ直したマニングは、スタッフにメンテナンスを指示する。

初の試験飛行から数日後、試験場所を訓練艦ガトウィック内の市街地訓練所へ移して

テストが行われる。

ガルススの注文通り、今回より機体にガンポッドを標準装備させてのテストだ。

大気圏内での試験飛行と簡易的な射撃訓練も兼ねたテストが開始される。

宇宙空間での操縦を物にしたガルスにとって、大気圏内での操縦も容易い物だった。

「凄い……」

次々とスピードタイムを更新するガルスにマニングは、思わず目を見張る。

スロットルを切るタイミングや、障害物を避ける感覚等、どれも絶妙だった。

『おい、貴様！ 俺の操縦技術に見惚れて、どうせ間抜けな顔をしていたんだろう？ 早く次の指示を出せ！』

何も指示が来ない事に腹が立ったのか、ガルススの罵声が司令塔に響く。

『わかりました、次は射撃訓練に入ります。これより標的を地上と空中に展開しますので撃墜してください』

マニングの通信が終わると同時に地上と空中に標的が出現する。

「面白くなってきたな」

ガルスは機体を一旦上空まで浮上しながら空中の標的を撃墜する。

一定の高さまで登ると同時に機体を反転させて、そこから一気に地上目掛けて急降下をする。

それと同時に標的を次々とロックオンして撃墜していく。

「もつと、もつとだ!」

まるで破壊を楽しむかの様にガルスは、次々と標的を撃墜する。

「お疲れ様です、ガルス少佐」

コクピットから降りて歩いてくるガルスにマニングが駆け寄る。

「それにしても流石ですね」

「俺は、どんな機体でも乗りこなすと言ったハズだ」

マニングの誉め言葉にガルスは、無愛想に応える。

「おい」

「何でしょう?」

「この機体の完成は、いつ頃だ?」

「そうですね……色々とシステムの組み合わせや調整を含めたら最低でも10年は

……」

「5年だ」

「ご、5年ですか?」

ガルスの無茶な要望にマニングの表情が引きつる。

「そうだ。それが出来ないなら、このプロジェクトは中止だ」

「そ、そんな……」

「お前なら出来るだろう。じゃあな」

ガルスはマニングにパワハラに近い無茶な要望を押し付けたまま、そのまま格納庫を後にする。

「はあ……」

マニングは、大きな溜め息を吐きつつも作業へと戻っていく。

それからのマニングは必死だった。

ガルスの横暴でプロジェクトが打ち切られると言う恐怖感と戦いつつ、機体の開発を進めていく。

後にその2年後の2045年にETSを搭載した試作2号機が完成を迎え、その3年後の2048年にBDIS搭載の試作3号機が完成を迎えようとする。

## 第16話アイドル・オーディション

西暦2046年、マクロス8船団が惑星エデンを出航してから8年が経過したある日の事だった。

部屋で一人の男がデイスプレイ越しに年配の男と会話をしている。

男は黒く少し長めの髪を軽く束ね、優しい目元に細身で長身が特徴的だった。

「ありがとう、父さん。貰ったコイツを培養して造ってみるよ」

「ネスティー、父さんが成し得なかったプロジェクトをなんとしても成功させてくれ」「分かってるよ。一緒に機体の設計図も貰ったしね」

ネスティーと呼ばれる男は、父親である年配の男に笑顔を見せる。

しかし、その眼は笑っていないかった。

「じゃあ、元気でやるんだぞ」

親子の会話が終わり、年配の男は通信を切る。

通信を終えたネスティーは、机の上に置かれた試験管を見る。

試験管の中には細胞の一片が入っており、時々脈を打っていた。

「プロトデビルンの細胞……コレさえあれば、サウンドフォースなんて目じやないさ」



ネスティーは、試験管を見つめて不敵な笑みを浮かべる。

プロトデビルの細胞を受け取ったネスティーは、コネクションを使つて密かに研究室を用意してプロトデビルの細胞を培養し始める。

父が成しえなかつた野望は今、息子であるネスティーが成し遂げようとしていた。

プロトデビルの培養が完了するまでの間、ネスティーは新たな企画を考案する。

その考案が纏まつた時には、既に年が明けていた。

その考案を発表する為、会議室には艦長であるアンナを始め、上層部連中も出席している。

「では、ネスティー大尉」

アンナに声を掛けられ、ネスティーはディスプレイに資料を映す。

「サウンド・プロジェクト?」

ディスプレイに映し出されるサウンド・プロジェクトと言う文字に周りは、ざわつき始める。

「ご存知では無い方もおられると思いますが、現在マクロス7船団は新たな脅威であるプロトデビルンと対峙しております」

ディスプレイには、巨大な怪獣や少女型の宇宙人が表示される。

「これは、マクロス7船団が遭遇した一例です」

「こんなバケモノ、統合軍の力を持つてすれば一網打尽に出来るではないか！」

小太りの男は、プロトデビルンの映像を見ながら勝ち誇ったように話す。

「お言葉ですが、ガーネフ大佐。残念ながら、この生命体には通常兵器はおろか反応弾すら全く効果はありません」

「なんだと!?!」

勝ち誇った表情をする小太りの男、ガーネフを否定するネスティーの言葉に周りは驚き、固唾を飲む。

「ネスティー大尉。マクロス7船団は、この生命体にどのようなようにして対処しているのかしら?」

プロトデビルンに反応弾が通用しない事に対して周りがざわつく中、アンナが質問を投げ掛ける。

「それに対してマクロス7船団は、現在サウンドフォースと呼ばれるサウンド遊撃隊で対処しています」

「サウンドフォース?」

サウンドフォースと言う聞きなれない言葉に周りは、なかなか理解できず困惑していた。

「ロックバンドFIRE BOMBERを中心とした部隊で、彼らはバルキリーに搭乗

し戦場で歌います。彼らの歌はプロトデビルンに対して、かなり効果があると言う検証結果があります」

デイスプレイには、サウンドフォースのバルキリーが映し出される。

「バカな……たかが歌ではないか」

「あの赤いバルキリーは、VF-19じゃないか。なんとも趣味の悪い……」

ネステイヤーの説明が受け入れられないのか、上層部連中は、お互いに顔を見合わせている。

「そこで、我々もいつプロトデビルンのような反応兵器の効かない生命体と遭遇しても良いようにサウンド遊撃隊を作るべきです」

ネステイヤーの主張に周りはざわつく。

「そもそも、メンバーはどうするのだね？」

細身の男は、ネステイヤーに問い掛ける。

「メンバーは、一般公募します」

「ネステイヤー大尉、市民を戦場で歌わせるなんて危険すぎませんか？」

アンナは、市民の安全を考えた故の意見を述べる。

「ご安心ください。メンバーには専用にカスタマイズしたVF-11に搭乗していただきますし、専属パイロットも付けます。また、護衛部隊としてガーネットフォースにご

協力をお願いしたいと思います」

「デイスプレイには、VF-111のカスタム機が映し出される。

「……それでも私は、民間人を危険な目に合わせる訳にはいきません」

アンナは、オペレーター時代での戦場の悲惨さを目の当たりにしているだけにネスティーの提案には賛成は出来なかった。

「アンナ艦長、私も民間人をみすみす危険な目に合わせる気はありません。もちろん、前線には出さずに後方支援で歌わせますし、搭乗機体も安全性を考慮します」

ネスティーは、機体に搭乗する民間人への安全性を全面に押し出してアンナに説明する。

「ネスティー君。君もご存知だろうが、我が船団は新型機の開発で予算が取れない状況だ。予算に関しては、どうするんだね？」

マクロス8船団は、試作可変戦闘機YF-23の開発に統合軍参謀本部より多額の予算を設けている為、細身の男はネスティーの提案の予算に対しての質問を投げ掛ける。

「それは重々承知しています。しかし、歌の力は今後も必要になると思います。第一次星間戦争において、リン・ミンメイがそれを証明しています」

「また、その話かね。前にYF-23の時も艦長は同じような戯言を言っていましたな」  
ネスティーの話に対してガーネフは、アンナの方を見ながら嫌味混じりで話し、その

言葉にアンナは苦笑しながらもネステイーの考えに対して共感していた。

「わかりました。あなたがそこまで仰るならば、やつてください。予算は私が統合軍本部に掛け合います」

「艦長！」

「また勝手な事を！」

アンナの承認に毎度の事ながら上層部連中は嘖みついてくる。

マニングの件で慣れてきたのか、アンナは上層部連中からの批判は無視していた。

「ありがとうございます、アンナ艦長」

自身の提案を承認してくれたネステイーは、アンナに深々と頭を下げる。

「毎回毎回、艦長は我々の意見を無視しおつてからに……」

細身の男は、アンナに聞こえるように嫌味を言う。

「私は自分の保身しか考えない人よりも、少しでも人の役に立つ考えを持つ人の味方です」

細身の男の嫌味に対して、アンナは笑顔を返す。

アンナの笑顔を見た細身の男は、悔しさのあまり歯軋りをする。

「まったく話にならない！ 私は失礼する」

細身の男は席を立てて会議室を後にし、残りの上層部連中も周りの顔色を窺いつつも

細身の男に続いて次々と会議室を後にする。

「ネスティ―大尉。プロジェクトの方は、統合軍本部より許可が降りるまでお待ちください」

「かしこまりました」

会議を終えた後、アンナは艦長室へと戻って統合軍本部へと連絡を入れる。

『こちら統合軍本部』

統合軍本部と通信が繋がり、机上に設置したモニターにオペレーターが映る。

『新マクロス級大型移民船団マクロス8艦長、アンナ・エヴァンスです。ワードナ大佐に繋いでください』

『かしこまりました。少々、お待ちください』

オペレーターは、ワードナを呼び出す。

しばらくして、モニターにワードナが映し出される。

『こんにちは、ワードナ大佐』

『君か……あれ？ YF―23の進捗報告は、この間頂いているが？』

既にYF―23の報告を貰っている筈なのに通信を入れてくるアンナにワードナは、疑問を感じていた。

『実は、今日は別件で……』

『……ぐ、また何かムチャなお願ひ事かい?』

アンナの申し訳なきような表情にワードナは、少々顔が引きつっていた。  
『ええ、やっぱり分かりましたか?』

ワードナの嫌そうな表情にアンナは、思わず苦笑いする。

『君が別件で私に通信を入れてくる時は、大概ムチャなお願ひ事だからね』

ワードナは、アンナに皮肉めいた言葉を掛ける。

『返す言葉もございませんわ』

ワードナの皮肉にアンナは、深く大きな溜め息を吐く。

『で、今回のお願ひ事は?』

『実は……』

アンナはネスティイーの提案資料とデータをワードナに送り、内容を説明する。

『その話なら前にマクシミリアン艦長からも伺っているから、多分提案は通りやすいと  
思うよ』

『本当ですか!』

承認が通りやすそうな話に思わずアンナは、目を輝かせて前のめりにディスプレイを  
覗く。

『そんなに目を輝かせて、こっちを見ないでくれ。まだ確定じゃないんだから』

アンナの様子を見たワードナは、思わずアンナを宥める。

『とにかく、参謀本部に掛け合ってみるから少し待っていてくれ』

『わかりました。朗報をお持ちしております』

アンナは、とびきりの笑顔をワードナに見せて通信を切る。

ワードナとの通信を終えたアンナは、ハーブティーを煎れてネスティーの提案書に目を通す。

「マクシミリアン艦長も凄い事してるのね。やはり、天才の考える事は常に私達の斜め上なのかしら」

アンナは提案書を読みながら、気になる部分に目印を付けていく。

「それにしても、このサウンドフォースのバルキリーって誰の趣味かしら？ 何だか現行機をここまで凄い形にした人の顔を見てみたいわ」

提案書に描かれたサウンドフォースのバルキリーを見たアンナは、思わず苦笑いする。

サウンドフォースのバルキリーのカラーリングは派手な塗装を施され、顔に至っては人間と同じ目と口と鼻が描かれていた。

「まだ、このジャミングバース用のVF-11の方がマシに見えてくるわね。確かネスティー大尉は、この機体を使うみたいだけど……」



アンナは、ジャミングバース用V F—11の仕様書に目を通す。

ジャミングバース用の機体は、主力機であるV F—11の複座型タイプの背部に大気圏外用装備であるスーパーパーパックとは違った、大型ブースターを搭載していた。

「それにしても……反応弾が全く効かないと言われているプロトデビルンという生物に、このサウンドフォース達の歌が有効だったなんて……」

マクロス7船団と対峙した謎の敵であるプロトデビルン。

通常兵器はおろか反応弾を以ってしても太刀打ち出来なかったプロトデビルンに唯一対抗出来たのが、ロックバンドF I R E B O M B E Rの歌であった。

「資料を見る限りだと、サウンドブースターと言うので対抗していると書かれているけど、あのブースターで歌を聴かせていたのかしら？」

アンナは、サウンドブースターを装備したサウンドフォースの機体が描かれた資料に目を通す。

「そもそも、こんな怪獣みたいな言葉が通じない様な相手が歌を聴いてくれるのかしら？」

考えれば考える程、アンナの頭の中はこんがらがっていった。

冷たく薄暗い部屋。

その部屋には、ネスティー以外にも数名の科学者が実験を行っていた。

その部屋でネスティーは、科学者達に父親から貰ったプロトデビルの細胞片を培養させていた。

培養液の入った大型試験管の中で、細胞片は少しずつ脈を打っている。

端末を操作しながら成長剤等の薬品を少しずつ投与していく。

投与後の細胞辺に關してのデータがディスプレイ上に表示され、そのデータを基に科学者達はデータ収集や確認作業を行う。

「細胞辺への投薬作業、完了しました。今の所は数値上での問題ありません」

「よし、そのまま続けてくれ」

「わかりました」

ネスティーの指示で科学者は、細胞の培養を続ける。

「このプロトデビルの細胞で作り上げた生命体があれば、統合軍にとって怖いものなんてないさ。いや……もしかしたら統合軍さえも私を恐れるかもね」

ネスティーは、大型試験管を見ながら時々不敵な笑みを浮かべる。

生まれてくる生命体が統合軍にとって脅威となり、やがて統合軍の政権を掴む自分の姿を思い浮かべていた。

「後は統合軍本部の回答次第かな」

ネスティーは、テーブルに置いてあるティーカップを手に取りコーヒーを飲む。

アンナが統合軍本部に掛け合ってから1週間後、ワードナから通信が入る。  
『すまないね、待たせてしまつて』

『いえ、気にしていませんわ』

『さて、統合軍参謀本部からの回答は……』

ワードナの回答発表にアンナは真剣な眼差しでワードナを見ながら固唾を飲む。

YF-23に続き、アンナにとっては結構無茶なお願いだけに承認されるかどうかの案件だった。

『安心しなさい、ちゃんと許可が降りたよ』

ワードナの承認回答にアンナは、満面の笑みを浮かべる。

『ありがとうございます』

アンナはワードナに深々と頭を下げて礼を言う。

『今回はマクロス7船団が有効的な結果を出していたからね。だから、提案も通りやすかつたんだろう』

『そうなんですわね』

『さて……すまないが、私は、そろそろ失礼させて貰うよ。今日は息子の誕生日なんですね。せめて、息子の誕生日くらいは祝ってあげないと』

『それはそれは、おめでとうございます。おいくつになられたのですか？』

『今日で16歳だ。今は士官学校で頑張っているみたいだよ』

『今日は、ご子息をいっぱい祝ってあげてくださいね』

『ありがとう、アンナ君』

ワードナとの通信を終えたアンナは、ネスティーに出頭を命じる。

「アンナ艦長、提案の件でしようか？」

ネスティーは出頭早々、提案の件をアンナに訊ねる。

「ええ、そうです。ネスティー大尉の提案は、統合軍参謀本部でも承認が得られました」

「そうですか、ありがとうございます」

ネスティーは軽く微笑み、アンナに頭を下げる。

「では、早速ですがメンバーの一般公募をしたいのですが……」

「そこは、私の主人にお願いして大々的に宣伝をさせて頂きます」

「確か、艦長のご主人は、シティ8の市長でしたね」

「ええ、広報関係もやってくれると思います。機体の手配は私がしておきますので、ネス

ティー大尉は、応募者からのメンバーの選定をお願い出来るでしょうか？」

「わかりました。オーディション関係の手配等は私がやっておきます。アンナ艦長、本

当にありがとうございます」

「ところで、グループ名は決まっていますか？」

「ええ、メンバーは男女混成の6名にする予定なので、六人にちなんでHEXAGRAM  
と言うグループ名です」

「六芒星と言う意味ね。ふふ、哲学的なグループ名ですね」  
「では、私はこれで失礼します」

ネスティーは、アンナに頭を下げて艦長室を後にする。

(これでいい……後は、例の物の完成を急がねば)

提案が承認され、順調に物事が進んでいくネスティーは、口元を緩ませて研究室へと  
戻る。

『なるほど、それは面白そうだね』

アンナの夫であり、シティ8市長でもあるマイルズは、アンナからネスティーの提案  
を聞いて興味を示す。

『でも、戦場で市民を危険に晒す可能性があるから、本当は私は……賛成はしたくなかつ  
た』

興味を示すマイルズと対照的に元々、一般市民を戦場に出す事にアンナは素直に喜ぶ  
事は出来なかった。

いくら一般公募でメンバーを募集するとは言えど、実際に戦場で歌わせるのはメン  
バーのメンタル的負担等のリスクが大き過ぎる為、アンナはその事が気に掛かってい

た。

『まあ……確かにね。でも、後方支援で専属パイロットや護衛も付けてくれるならリスクは低くなると思うんじゃないかな?』

『……』

マイルズの前向きな言葉にもアンナの表情は優れなかった。

『そうそう、ネスティー君から聞いたけど、審査員は僕と君も参加みたいだね』

浮かない表情をするアンナを元気づけようと、マイルズは話題を変える。

『ええ、そうみたいね。でも、私達なんかで大丈夫かしら?』

マイルズが話題を変えたお陰で曇っていたアンナの表情は、多少なりと良くなっていた。

少しだけ明るい表情を見せるアンナにマイルズは、内心ホツとしていた。

『ネスティー君も審査に参加してくれるから大丈夫さ。さあ、これから忙しくなってくるぞ』

初めての審査員の仕事にマイルズは気合いを入れる素振りをし、その様子にアンナは微笑む。

『じゃあ私、仕事に戻るわね』

『ああ、アンナもムリして身体を壊さないでね』

『あなたもね。お互いに気を付けましょう』

お互いに笑顔を交わして、二人は通信を終える。

ネスティーの提案が統合軍本部より承認を受けてから二日後、シテイ8の街中にH E X A G R A M オーデイション関係の広告が飾られ、T V C M も放送される様になる。

『地球統合軍／シテイ8主催 君の歌で銀河の平和を守ろう！ H E X A G R A M オーデイション受付開始！』

歌で銀河の平和を守ろうのキャッチコピーを前面に押し出して、色々な宣伝が街中を彩る。

募集期間は約1週間。

男性3名、女性2名の併せて5名を採用し、オーディションは書類選考、面接、歌唱力やダンス審査の順で行われる。

人々は色々な宣伝に目を向け、そして、興味ある者は希望を募らせてオーディションに応募する。

募集をかけた初日だけで約1, 000通もの応募が殺到し、マイルズやアンナもこの数には驚きを隠せなかった。

「1, 000通って数字は、実際に見ると意外に多いなあ……」

実際に届いた応募書類やメール等を見たマイルズは、その量の多さに圧倒する。

「マイルズ市長、まだ初日ですよ。期間は1週間ありますから、恐らくこの数の3倍以上は見ておいた方がいいかも知れません」

届いた書類の多さを見てもネスティーは、冷静にマイルズに言葉を掛ける。

「はは、ネスティー君は冷静だねえ……」

冷静に対処するネスティーにマイルズは、苦笑いする事しか出来なかった。

「さあ、届いている書類だけでも目を通して、ピックアップしましょう」

「ふう……やれやれ」

マイルズは、大きな溜め息を吐きながらもネスティーやマイルズの集めた100名近くの関係者らと共に応募書類を選考する。

選考作業は夜通し掛かり、全ての書類に目を通した頃には、ちょうど朝日が昇ろうとしていた。

「や、やっと終わった……」

夜通しの書類選考にマイルズの表情は、既に精気を失っていた。

「お疲れ様です、マイルズ市長」

そんなマイルズをよそにネスティーは、相変わらずのポーカーフェイスでマイルズを  
「ネスティー君。君、疲れたり、眠いとは思わないのかい？」



殆ど感情を表に出さずに作業をするネスティーをマイルズは、疑問に思っていた。

「もちろん、私だって疲れていますし、眠いですよ。それを表に出したら一気に気力が落ちるので、敢えて出していないだけですよ」

ここで初めてネスティーは、マイルズに優しく微笑む。

その表情にマイルズは、ロボットみたく作業をこなすネスティーにも感情があるんだなどと思う。

「なるほどねえ。僕もネスティー君を見習ってみるかな?」

マイルズは重い腰を持ち上げながら席を立つ。

そして、伸びをしながら軽くストレッチを行い、最後に疲労が溜まった腰の部分をく叩く。

「では、マイルズ市長。今日の夜もよろしくお願いします」

「!? あ、ああ……よろしく」

今日も昨日と同じくらい書類やメールが来る思うと、ストレッチをしたばかりの身体が急に重くなり始める感覚に陥る。

その事を思いながら表情が固まるマイルズをよそにネスティーは、部屋を後にする。

応募期間1週間の間に寄せられた応募は2万通を突破し、その間にマイルズとネスティーを中心に芸能関係者で毎日夜通しで書類選考を行い、2万5千通のうち書類選考

を通ったのは、わずか20名のみである。

書類選考が終わった頃には、さすがのネスティーも疲れを見せていた。

その様子を見ていたマイルズは、人間らしい表情を見せるネスティーに思わず笑みを見せる。

「これほど1週間が長く、苦しいと感じた事は、今まで無かったな」

応募期間と書類選考が全て終わり、マイルズはコーヒーを飲みつつ1週間を振り返る。

あれだけ夜通しで行った苦しい書類選考も、喉元を通り過ぎれば、いい思い出になりつつある。

「マイルズ市長、干渉に浸っている時間はありませんよ。明日からは、書類通過者の面接を行うのですから」

面接会場の打ち合わせや設定を端末でこなしながら、ネスティーはマイルズに話す。

「そうだったね。しかし、あれだけ多くの応募者から20人もよく絞れたものだね」

「それに関してはマイルズ市長を始め、芸能関係者の方々のご協力があればこそですよ」

ネスティーは、端末で作成したデータを1枚の紙に印刷してマイルズに渡す。

「マイルズ市長。書類の確認をお願い致します」

「これは？」

「明日の面接のチェックシートです」

「チェックシートねえ。どれどれ……」

チェックシートを受け取ったマイルズは、内容の確認を行う。

「ネスティール君、これは……」

最初の面接項目を見たマイルズは、思わず驚いて目を大きく見開かせる。

「マイルズ市長。世の中は綺麗事だけでなく事実を述べないと、戦いには勝てませんよ」

ネスティールは、夜空に輝く星を眺めながらマイルズに話す。

その表情は、どことなく冷たい感じがしていた。

そして、オーデイション当日。

オーデイション会場はシテイ8内の大型ホールで行われ、テレビ中継やマスコミ関係者の取材は完全シャットアウトの状態にしている。

一足先にマイルズとアンナは、オーデイション会場にやってきた。

会場では、スタッフ達が忙しそうに動き回っている。

忙しく動くスタッフに労いの言葉を掛けつつ、二人は面接を行う部屋へと入る。

「!? これは……」

部屋の中に入った二人の目の前には、大型のシミュレーターマシンが置かれていた。

「おはようございます」

部屋に入ったネスティーが二人に声を掛ける。

「ネスティー大尉、これはいったい……」

面接を行うのに、こんな大型の機械を持ち出す事にアンナは不思議に思っていた。

「ああ、これですか？ これは最初の面接で使うんですよ」

「ネスティー君、昨日のチェックシートを見せて貰ったんだけど……いくらなんでも、

初っ端から戦場のシミュレーションで恐怖感を与えるって、ムチャ過ぎないか？」

マイルズは、チェックシートを確認し直しながらネスティーに問い掛ける。

「いいですか、彼らは芸能界で歌うのと同時に戦場でも歌わなきゃいけないんです。敵の攻撃で毎回毎回、悲鳴を上げて歌う事すら出来ないのではダメなんですよ！」

ネスティーの力強い正論に二人は、ぐうの音も出なかった。

「ネスティー君。君の言いたい事は理解できるが、もう少し時間を掛けて戦場に慣れさせても……」

合格後のメンバーの精神的部分を考慮して、マイルズは意見を述べる。

「マイルズ市長。昨日も申し上げましたが、戦争は綺麗事では済まない事があります。

だからこそです」

マイルズの意見を受け入れず、ネスティーは自分の考えを押し通す。

いくら護衛が付いているとは言え、オーディションで選ばれた人達が戦場で歌うの

は、かなり勇気がある事でもあり、精神的負担もかなり大きい。

しかし、いつ攻めて来るか分からない敵に対しては、そうも言っていられないのも事実である。

戦場で歌えなかった故に戦況が悪化して、下手をすると全滅する可能性だつてあるからだ。

その為、マイルズの意見もネスティーの意見も正しい見解である。

過去にマクロス7船団でサウンドフォースに続いて結成されたサウンド遊撃隊ジャミングバーズが思ったほど戦果を上げられなかった事を父親から聞いていた為、ネスティーは今回のプロジェクトを何としても成功させたかった。

「わかりました。ネスティー大尉がそこまでお考えでしたら、私達はこれ以上は何も言いません」

「ありがとうございます」

お礼を言うネスティーにアンナとマイルズは、お互いに顔を見合わせて苦笑いする。やがて開始時間が近付き、会場に次々と書類審査合格者がやってくる。

そして、ついに面接審査が始まる。

「エントリーナンバー番。キール・スタイナーっす」

サーファーチックな容姿に軽いウェーブの掛かったブロンドの髪が印象的な青年が

部屋に入る。

「では、最初に応募動機をお聞かせ願えますか」

「応募動機？ あ、俺、ちよーいけてるって、みんなから言われてるんすよ。だから、テレビに出れば女の子にモテモテになれると思って応募したんすけど」

アンナの応募動機の質問にキールは、陽気に応える。

しかし、色々と突っ込みどころ満載でマイルズやアンナは、苦笑いしか出来なかった。「では早速ですが、この機械の中に入ってください」

「え？ いきなりこの中スか？」

ネスティーにシミュレーションマシンの中に入る様に促されたキールは、思わずシミュレーションマシンに指を指す。

「合否の結果は、この中で行います」

「は……はあ」

ネスティーの言葉にキールは疑問を持ちながらも、言われるままにシミュレーションマシンの中に入る。

シミュレーションマシンの中は暗く、うつすらと見える中には、シートが1席置いてあり、シートの上にはヘッドディスプレイが置かれていた。

『その装置を頭に着けてから、シートに掛けてください。準備が出来ましたら、声をお掛

けください』

マシンの中からネスティーの通信が入り、キールは不安な面持ちで言われるままにヘッドディスプレイを頭に被り、シートに腰掛ける。

『え……と、準備完了っス』

キールから準備完了の言葉を聞いたネスティーは、端末を操作し始める。

しばらくして、ヘッドディスプレイ越しに戦場のイメージが映し出される。

バルキリーとゼントラーディ軍の機体が両者入り乱れて戦闘しているイメージだ。

「おお、スゲエ……まるで映画見たいっスー」

イメージに映される戦場の様子にキールは興奮しており、その様子はネスティー達のテーブルに置かれたモニター上に映し出される。

「ところでネスティー大尉、あの装置は？」

アンナがキールの掛けているヘッドディスプレイの事が気になっている様子だった。

「あれは、ヘッドディスプレイ越しに実際の戦場を映し出しています。この装置には脳波コントローल装置を組み込んでいるので、実際の恐怖感を被験者に与える事で被験者の心理状態をデータとしても残せます」

アンナの質問にネスティーは黙々と答える。

黙々と答えるネスティーにアンナは、微妙な恐怖感を覚える。

「まだレベル1なので、コレくらいは序の口です。本番は、ここからです」

ネスティーは、端末を操作して装置のレベルを上げる。

ネスティーがレベルを上げると、ヘッドディスプレイ越しに映っていた戦場の様子は一転して、敵戦闘ポッドが攻撃を仕掛ける映像に切り替わる。

「うわ、こっつちくんな！」

映像が切り替わり、キールが動揺し始める。

「脈拍、心拍数共に上昇しています」

スタツフが端末でキールのデータを見ながら報告を入れる。

「ネスティー君、大丈夫かね？」

状況を見兼ねたマイルズがネスティーに声を掛ける。

「ご心配なく。死ぬ事はございませんので」

ネスティーは、冷ややかな表情でマイルズに応えながらも端末を操作してレベルを徐々に上げていく。

ヘッドディスプレイ越しの映像が切り替わり、敵戦闘ポッドは体当たりを仕掛ける行動を起こす。

敵戦闘ポッドが体当たりをする度にキールの座っているシートが映像とリンクして大きく揺れる。



「うわああああ！」

シートが大きく揺れる度にキールの大きな悲鳴がシミュレーションマシン越しから聞こえる。

「脈拍、心拍数、更に上昇」

「ネスティール君、本当に大丈夫かね？」

スタッフの報告を聞いたマイルズは、更に不安を募らせる。

そんなマイルズをよそにネスティールは、モニター越しにキールの様子を監視する。

それは、まさに怯える小動物を見るような目つきそのものだった。

「やめろ、やめてくれええええええ！」

キールの叫び声がシミュレーションマシンから聞こえてくる。

「ネスティール君！ 急いで中止したまえ！」

「しかし、まだ審査は……」

「早く！」

「……わかりました」

マイルズの呼び掛けにネスティールは、しぶしぶ端末を操作してシミュレーションマシンを止める。

「急いで彼の様子を！」

アンナの指示でスタッフは、急いでシミュレーションマシン内に入り、中からキールを救護する。

「やめろ……も、もう……やめてくれよ……」

キールは恐怖感に怯える目つきのまま、足元をふらつかせた状態でスタッフの肩に担がれてシミュレーションマシンから出てくる。

「お疲れ様。ちなみに戦闘の度にこのような事が毎回起きますが、如何ですか？」

「え?! い、いや……え、遠慮します!」

ネスティーの問い掛けに対してキールは、怯えた表情をして逃げるように会場を飛び出していく。

「やれやれ……」

逃げるようにして部屋を飛び出すキールの様子を見たネスティーは、深い溜め息を吐く。

「困るよ、ネスティー君。面接者に恐怖感を与えては……」

ネスティーの非情なやり方に対して、思わずマイルズは苦言を入れる。

「マイルズ市長。先ほども申し上げましたが、戦争は綺麗事ではありません。この恐怖感に打ち勝つ者が必要なんです。それに、これはただの芸能活動ではないんです」

マイルズの苦言にネスティーは、冷静な表情で自分の意見を述べる。

そんなネスティーに対してマイルズは、憤りを感じていた。

この様な状況では、合格者すら出ないまま終わってしまうのでは？と。

やがて2番目、3番目と次々と面接者はシミュレーションマシンに入り、殆どの者がリタイアをしていく中、7番目の面接者が部屋に入る。

「フェイル・羽柴です……よろしくお願ひします」

フェイルは、少し陰のある感じがする少年だった。

細く長い切れ目が印象的で、外見的にも冷たい感じが漂っている。

「では、最初に応募動機をお聞かせ願えますか」

「俺は……歌を歌いたい。俺の歌で人々を感動させて、俺を見下したヤツら見返したい。ただ、それだけです」

アンナの質問に対してフェイルは、黙々と応える。

その様子にアンナは、ただ茫然としていた。

「では、この機械の中に入って、シートに置いてある装置を頭に被ってからシートに座ってくれるかな」

ネスティーの指示を受けたフェイルは、無言でシミュレーションマシンに入り、ヘッドディスプレイを頭に被ってシートに座る。

『準備は良いかい？』

『いつでもやってくれ』

ネスティーの通信に対してもフェイルは、無愛想に応える。

やがてモニター越しに戦場の映像が映し出される。

しかし、フェイルは映像を見ても殆ど微動だにしない様子だった。

「脈拍、心拍数共に正常のままです」

「それは面白い」

スタツフの報告にネスティーはフェイルに興味を持ち、端末を操作してレベルを上げる。

レベル2になりヘッドディスプレイ越しの映像は、敵戦闘ポッドが攻撃を仕掛ける映像になるが、それでもフェイルは微動だにしなかった。

「ほほう……」

ネスティーは全く動じないフェイルを見て、口元を緩ませて嬉しそうな表情を見せて更にレベルを上げる。

フェイル以外の面接者は、この時点で悲鳴を上げる者ばかりいただけに、全く動じないフェイルが何処までのレベルに応じられるかを見てみたかった。

「凄いわ。レベルが上がっても彼、全く動じない……」

モニター越しで全く動じないフェイルの様子を見ていたアンナは、思わず固唾を飲

む。

「ほお……面白い」

レベルを3に上げてても全く微動だにしないフェイルにネスティーは、ついに面接者では初めてのレベルを4まで上げる。

「レベル4に上げるのは初めてなので、彼がどういう反応を示すか楽しみです」

ネスティーはマイルズとアンナに軽く微笑みながら、フェイルの反応をモニター越しに見つめる。

そんなネスティーとは対照的にマイルズとアンナは、不安な面持ちだった。

ヘッドディスプレイ越しにゼントラーディ艦隊が映し出され、大艦隊による一斉射撃が始まる。

フェイルの横スレスレを艦砲射撃のビームが次々と横切るが、それでも彼は動じなかった。

「もしかして彼、寝てるんじゃないのかい？」

全く微動だにしないフェイルを見ていたマイルズは、冗談交じりにアンナに話し掛ける。

「フフ、それは無いわ」

アンナは、マイルズの言葉に少し笑いながら応える。

「凄い……あれだけの恐怖感を与えても、脈拍、心拍数共にそれほど変化ありません」  
スタッフは、フェイルのデータを端末で確認して、驚きつつもデータの内容に感心していた。

「ならば、レベルを最大に上げましょう」

ネスティーは、端末を操作して最大レベルの5に上げる。

ヘッドディスプレイ越しにポドル級クラスの大艦隊、そして、敵戦闘ポッド群の激しい攻撃が映し出される。

攻撃を受けると同時に揺れるシートの揺れ幅もかなり大きく、悲鳴を上げてもおかしくない状況だった。

しかし、それでもフェイルは全く微動だにする様子はなかった。

「テスト終了だ。彼の様子を見てきてくれ」

ネスティーは、端末を止めてスタッフにフェイルの様子を見に行かせる。

しばらくして、シミュレーションマシンからスタッフと共にフェイルが出てくる。

しかし、その足取りはフラフラする事も無く、至って普通に歩いていた。

「おめでとう、君が初めての合格者だ」

「……ありがとうございます」

ネスティーから合格を告げられてもフェイルは、表情を変える事なく相変わらず、

ぶつきらぼうに応える。

「しかし、凄いなあ……シミュレーションとは言え、あんな状況にいたら僕だったら震えあがっちゃうよ」

マイルズは、シミュレーションに微動だにしないフェイルに凄く感心していた。

「でも、フェイルさん。仮に芸能界に入るなら、もう少し笑顔を見せた方がいいですよ」  
アンナは、一度たりとも笑顔を見せないフェイルに忠告をする。

芸能界に入る以上、テレビで見る視聴者に不愛想な表情では逆にクレームが来てしまい、芸能活動の妨げになり、自分自身の首を絞める事になるからだ。

「!？」

アンナの忠告に今まで無表情だったフェイルの表情は急に険しくなり、そのままアンナを睨み付ける。

「あ……気に障ったみたいでしたら、ごめんなさい……」

急に表情が豹変したフェイルを見たアンナは、言い過ぎた事を謝る。

「とりあえず、一週間後に二次面接を行うから、今日はこれで終了だ。お疲れ様」

「……お疲れ様です」

スタッフに案内用紙を渡されたフェイルは、不愛想な表情のまま一礼だけして部屋を後にする。

「何なんだ、彼の無表情っぷりは？」

不愛想な対応をするフェイルの態度にマイルズは、思わず不満を口にする。

終始笑顔を見せる事も無く、返事もそっけ無く、マイルズでなくとも同じ様に感じるだろう。

「確かにそうね……もしかしたら過去に何かあったのかしら？」

そんなフェイルにアンナは、他人事ながら心配していた。

「でも、彼のデータはとても貴重ですし、私は彼をメンバーに入れたいですね」

端末でフェイルのデータを確認しながらネスティーは、フェイルの環境適応能力に感心していた。

殆どの面接者がシミュレーションレベル2もしくは3でリタイアしていただけに尚更である。

「でも、あのような態度や表情でテレビに出られてもねえ……」

マイルズはフェイルの態度や表情がテレビ向きでは無いと感じ、ネスティーの意見には賛同できなかつた。

今の状態でテレビ番組に出たとしても、不愛想な表情や仕事に対しての姿勢が視聴者からクレームが来る事は目に見えていたからだ。

「時間があまり無いので、次の面接を行いましょう」



それから再び面接が始まるが、やはりシミュレーションマシンの映像に恐怖感を覚えてリタイアしていく者が多かった。

フェイルが予想外だった故に次々とリタイアする面接者を見たネスティーは、思わず深い溜め息を吐く。

結局、20名の面接を受けて合格者はフェイルのみであり、二人が仮合格だった。

仮合格者の一人、アンジェイ・カークスは応募者の中で一番の巨体であり、過去に統合軍に入隊希望をしていたが、巨体な体格と少しのんびりした性格であるが故にそれが災いして入隊を断られた経歴を持つ。

しかし、シミュレーションマシンではレベル4まで耐え抜き、フェイルに続いて好成績を叩き出している。

もう一人の仮合格者、終 弥生は少し勝ち気な性格だが、女性ながらサバサバした感じだった。

マクロス7船団で活躍するロックバンドFIRE BOMBERの活躍をギャラクシーネットワークで知り、熱気バサラの歌声に惹かれ、いつしか彼らに憧れてオーディションに応募。

シミュレーションマシンでは、アンジェイと同じくレベル4まで結果を出しており、本人は「スリルがあつて楽しかった」とコメントしている。

「ネスティー大尉、以上で面接者は全員終わりましたね」

全ての面接が終わり、アンナは腰掛けたまま思い切り伸びをする。

マイルズも同様に席を立ち、背筋を伸ばす。

結局20名の中から5名を選出する予定がシミュレーションマシンでの面接で合格者1名、仮合格者2名しか選出出来なかった。

アンナとマイルズは、シミュレーションマシンを持ち出しての面接だっただけに合格者は低いと予め予測していたが、ネスティーにとつては死活問題であった。

「ええ……残念ながら、本来の採用数にたっしていませんので、私の信頼できるツテの中から見つけます」

ネスティーは自身でメンバーを見つける為、急いで片付けをし始める。

「アンナ艦長、マイルズ市長。本日はお忙しい中、ありがとうございます」

二人に頭を下げてネスティーは、早足に部屋を後にする。

部屋に残された二人は、お互いに顔を見合わせて苦笑いをする。

ネスティーは自室へ戻る途中、知り合いに次々と連絡を入れてメンバーの候補者を探して貰うようお願いをする。

「これで少しは、面接よりもマシな候補者が揃ってくるとありがたいのだが……」  
期待と不安、両方の面持ちでネスティーは連絡を待つ事にした。

翌日、早朝から上層部の小太りの男、ガーネフがネスティーの部屋を訪ねる。

「すまないな、朝早くから」

「いえ。それで、どのようなご用件で？」

「君のプロジェクト、メンバーが揃ってないみたいだね」

ガーネフは、あざ笑うかのような目つきをネスティーに向ける。

「早朝からイヤミでも言いに来られる程、上層部は忙しいのですか？」

ガーネフのあからさまな態度にネスティーは、思わず皮肉を言う。

「いやいや、実は君に相談があつてだな……」

「相談？」

先程の態度とは打って変わり、ガーネフはネスティーに対して下手に出る。

「ウチの娘が芸能活動をしているのだが、全く売れなくてね。そこで……」

「娘さんをメンバーに加入させてくれ……と言う事ですか？」

ガーネフが自分の結論を言う前にネスティーが先に結論を言う。

「分かっているじゃないか、ネスティー君。どうかね？ 新たに募集をするよりは手っ

取り早いと思うんだが……」

ガーネフは、ネスティーにゴマを擦りながら話す。

「……わかりました。前向きに検討します」

「さすが、ネスティー大尉！ 君は話が分かる男だ」

ガーネフはネスティーの手を取り、思わず力強く握る。

「それから、もう一つ……」

「な、何ですか？」

ガーネフの話にウンザリしただしたのか、ネスティーは引きつった表情をする。

「実は、私の知り合いの芸能プロダクション社長の息子も……」

「メンバーに加入させろと言う事で、よろしいですか？」

ガーネフの言いたい事を理解したネスティーは、半ばヤケクソになりながら応える。

「ウム、その通りだ。よろしく頼むよ」

「……前向きに検討します」

「じゃあ、ネスティー君。君の結果を大いに期待してるよ」

ガーネフはネスティーの右肩を軽く何度も叩いた後、満足げな表情で部屋を後にする。

「まったく、人の計画をあれだけ散々バカにしていた癖に……」

ネスティーは、ガーネフの手のひらを返したような態度に苛立ち、思わず頭を抱え込む。

（こうなったら、一刻も早くアレを完成させなければ……）

思い立ったネスティーは早速、研究室に連絡を入れる。

『私だ、例の物は……』

『少しずつですが、なんとか人間体を構築しています。後は、人格をプログラムして培養し続ければ完成かと思えます』

『わかった。これから、そちらへ向かう』

通信を終えたネスティーは、支度をして研究室へと急ぐ。

## 第17話 デビル・オブ・エンジェル

培養液の入ったカプセルの中では、ほんの少し前まではひとかけらだった細胞が今では人型を形成している。

「素晴らしい……」

ネステイーはカプセルに右手を置き、上からなぞるように撫でる。

細胞は、ネステイーの動作に反応するかのように少しだけ脈を打つ。

「これより人格成型プログラムを投入します」

研究員は、端末を操作して人格成型プログラムを細胞へと投入する。

端末から人格成型プログラムが投入される度に人型細胞は、ビクツと脈を打ちながら反応する。

「プログラムの投入は完了しました。後は少しずつ細胞を培養すれば、2〜3日で完成すると思います」

「わかった」

研究員の説明を聞いたネステイーは、細胞の完成体を想像しながら期待感を高めて、ふと口元を緩ませる。

「部屋へ戻る。後の事は頼んだぞ」

「かしこまりました」

培養される細胞のカプセルを見つめながらネスティーは、研究室を後にする。

部屋へ戻る途中、長い廊下の窓に試作機YF―23の姿を見掛けたネスティーは、窓からYF―23を見る。

（所詮、可変戦闘機には限界が見えてくる。この世に必要なのは、歌とプロトデビルの力だ）

YF―23をあざ笑うかのようにネスティーは、自身のプロジェクトに絶大な自信を持っていた。

いくら最新の可変戦闘機を開発したとして、所詮は兵器の性能にも限界がある。

それを思うと歌の力は、まだまだ未知の可能性を秘めている。

しかも人類を窮地に追い込もうとしたプロトデビルンと組み合わせれば無限大だ。

ピリリリリリ……

YF―23を窓から眺めている最中、ネスティーの携帯電話が鳴る。

「知らない電話番号だな。誰だ？」

自身も知らない電話番号からの着信に疑問を持ちつつも、ネスティーは電話に出る。

『……………』

『ネスティー君、私だ』

声の主は、上層部連中の一人で小太りの男、ガーネフだった。

ガーネフの声を聞くなり、ネスティーの表情は途端に険しくなる。

『……何の御用ですか？』

嫌な予感を感じたのか、ネスティーの声のトーンが低くなる。

嫌な予感を感じると、大体の予想は当たる物である。

『今朝の件だが、今からどうかね？』

『……わかりました。では、会議室でよろしいですか？』

『ああ、構わんよ』

『では、後ほど』

電話を切った後、ネスティーは大きな溜め息を吐く。

(せっかく信頼できるツテがあったのに……仕方がない、全部キャンセルだ)

ネスティーは、信頼できるツテへキャンセルの電話をしながら会議室へと向かう。

「失礼します」

会議室にやって来たネスティーは、部屋をノックして中へと入る。

そこにはガーネフと少女、そして年配夫婦と男性がソファーでお茶を飲みながらくつろいでいた。



「おお、待っていたよネスティー君。まあ、こちらに來なさい」

ガーネフは手招きでネスティーに呼び掛け、ネスティーも言われるがままにガーネフの傍へとやって来る。

「ネスティー君、紹介しよう。ウチの娘のレナだ。ほら、ちゃんと挨拶しないか」

「……レナ・ガーネフです。よろしくお願ひします」

父親であるガーネフに急かされて、レナはネスティーに挨拶をする。

茶色の髪色に緩いウェーブを掛けたロングヘアに青い瞳。

そして男性を魅了するグラマラスなボディが一番の特徴な女性である。

パツと見では、とても父親とは似ても似つかぬ容姿だ。

だが、父親に無理矢理連れてこられたのか、彼女のその態度は、明らかに嫌がっているのは明白だった。

「そして、こちらがギャラクシーレコードの新城夫妻と息子の武君だ」

「初めまして、ギャラクシーレコードの新城と申します」

ガーネフに紹介をされて新城は、挨拶をした後にスーツの内ポケットから名刺を取り出してネスティーに渡す。

「ギャラクシーレコードと言えば、音楽業界最大大手の……」

「ああ、その通りだ。しかも、新城さんはグループ結成後にスポンサーになりたいと申し

出ている。これほど美味しい話は、無いと思うがねえ？」

ガーネフは、ネスティーに取り引きを持ち掛けて、いやらしく微笑む。

「紹介が遅れましたな。こちらが息子の武です」

「新城 武です。よろしくお願いします」

新城に紹介されて、息子の武がネスティーに挨拶をする。

礼儀正しくも、少し野性的な顔つきが特徴の少年だった。

「ネスティー君、悪い話ではない。この計画が上手く行つて昇進すれば、君の父であるバートン大佐もお喜びになるだろう。くれぐれも私に恥を掻かせるような事はしないでくれよ」

ガーネフの目つきは、間違い無くネスティーを抑制させるような目つきだった。

「……分かりました。引き受けましょう」

ガーネフの抑制する目つきに負けたのか、ネスティーはレナと武を引き受ける事を承諾する。

ネスティーの承諾にガーネフと新城一家は喜びに湧く。

「さすがネスティー君。君なら引き受けてくれると思つたよ」

ガーネフは、ネスティーの右肩に手を置く。

「……ただし、一つ条件があります」

ネステイヤーの言葉に周りは、一瞬にして静まり返る。

「何だね、条件とは？ 金かね？ それとも地位かね？」

面倒な事を手つ取り早く取り引きを終わらせようと目論むガーネフは、ネステイヤーに条件を聞きだす。

「違います。即戦力になつてもらおう為、HEXAGRAMがデビューする前に戦闘訓練をして頂きます」

「な!？」

ネステイヤーの条件に周りは、思わず言葉を詰まらせる。

「何を言っているんだね！ ワシの可愛い愛娘を殺す気かね!？」

「私の可愛い武ちゃんに何をさせる気なの!？」

ネステイヤーの条件にガーネフと武の母親は、ネステイヤーに抗議を申し入れる。

「ガーネフ大佐」

「な、何かね？」

「あなたは、私のプレゼンテーションをちゃんと聞いていましたか？」

「あ、当たり前だろう」

ネステイヤーの問い掛けにガーネフは、うろたえつつも応える。

「では、HEXAGRAMが芸能活動もしつつ戦場で歌う事もご存知ですよね？」

「う、うう……」

ネスティーの力強い問い掛けにガーネフは、額から冷や汗を流す。

ネスティーのプレゼン自体を殆ど聞かずにいた為、自信を持つて返事が出来なかった。

「ガーネフ大佐、話が違うではないか！」

ネスティーの条件を聞いた新城は、ガーネフを問いたです。

「い、いや……それは、その」

新城の質問にガーネフは、ますますうろたえる。

「な、なあ、ネスティー君。せめて二人を戦場に出さないように出来んのかね？」

今まで高圧的な態度だったガーネフが、急に牙の抜けたライオンの如くネスティーに對して下手に出る。

「残念ながら、それは無理です」

ガーネフの願いは、ネスティーにあっさりと一蹴される。

今まで自分の話を真面目に聞こうとしなかったガーネフへの、ネスティーなりのささやかな復讐だったのは、言うまでもない。

「ネスティー君、何とかしろ！」

ガーネフは感情的になり、思わずネスティーの襟首を掴んで詰め寄る。

「止めてよ、パパ。みっともない！」

ガーネフの態度を見かねたのか、レナが大声を出す。

そして、レナは、そのままネスティーの前へと歩み寄る。

「その戦闘訓練と言うのを受ければ良いんでしょ？」

「ああ。それと、歌やダンスのレッスンもだ」

「わかったわ」

「レナ！」

自分を無視して勝手に決めるレナをガーネフは一喝する。

「パパは黙ってて！ これは、私が決めた事なんだから」

しかし、レナの強い信念にガーネフは、思わず身体をちぢこませてしまう。

「武君は、どうしますか？」

自分の信念を突き通す姿を見せるレナに対して、ネスティーは武に視線を向ける。

「ここで引き下がったらカッコ悪いから、僕もやりますよ」

「武！」

武の決意に新城夫妻は、驚きの声を挙げる。

「バカな事は止めんか！」

「そうよ、武ちゃんにもしもの事があつたら……」

「父さんも母さんも、いい加減にしてくれよ！」

いつまでも子離れが出来ない両親に武はイラつき、思わず感情的になる。感情的になる武に新城夫妻は、そのまま口を閉ざす。

「これじゃあ、あのレナって娘にも笑われるだろ」

武の後ろでは、レナが微妙に小馬鹿にした感じで笑いを堪えていた。

それは、まるで「親離れできない子供」と言わんばかりの表情だった。

ネスティー自身も、レナと同じ心情だったのかも知れない。

「わかった。じゃあ、6日間後に歌とダンスの面接をするから、歌用のデモテープを用意しておいてくれ」

「わかったわ」

「わかりました」

ネスティーの説明を受けてレナと武は頷く。

「では、話は纏まりましたので、私はこれで失礼します」

黙り込むガーネフと新城夫妻をよそにネスティーは、そのまま会議室を後にする。

それから3日後。

研究室からネスティーに通信が入り、ネスティーは研究室へと急ぐ。

「お、おお……」

培養液の入ったカプセルには、10代半ばの少女が眠っている。

紺色のセミロングの髪、少し幼い感じが残る顔つきと体型が特徴的だった。

細胞の切れ端を培養してから約1ヶ月近く。

その切れ端が今では、少女の体型を形成している。

「培養液の排出を行います」

「やってくれ」

カプセルから培養液が抜かれ、カプセルの中から少女がゆっくりと出てくる。

全裸のまま立つ少女にネスティーは、自分の着ている上着を脱いで少女に掛けて顔を  
確認する。

「名前は言えるか？」

「メ……グミ……アク……セ……ラ」

少女は、片言の言葉で自分の名前をネスティーに言う。

「そうだ。お前の名前だ」

ネスティーは、メグミの頭を優しく撫でる。

「ネスティー大尉、少しお話が」

女性研究員がネスティーに声を掛ける。

「どうした？」

「一応、培養自体は成功しましたが、まだなにぶん組織細胞の構築が不完全な部分がありまして。もし、彼女に何らかの異変が起きた場合は、この薬の投与をお願いします」

女性研究員は、白衣からカプセル薬を取り出してネスティーに渡す。

「わかった。この薬の増産を頼んだぞ」

「わかりました」

薬を受け取ったネスティーは、メグミの方に視線を向ける。

メグミは状況が分かっていないのか、辺りをキョロキョロと物珍しそうに見回していた。

「後の事は私がやっておく。みんな、（うん）苦勞だったな」

研究員に労いの言葉を掛けてネスティーは、メグミを連れて研究室を出る。

自室へ戻る間もメグミは、辺りをキョロキョロと見まわしたり、ネスティーに笑顔を見せていた。

そんなメグミにネスティーは、ふと笑顔を見せる。

自室へ戻ったネスティーは、メグミを着替えさせた後、色々な端末が並ぶ仕事部屋へとメグミを連れていく。

「そこに腰掛けてくれ」

部屋に置かれたシートに座らせたネスティーは、メグミの頭に装置を被せる。



そして、端末を操作して人間に必要な知識等を直接脳にインプットさせる。

「インプット完了まで12時間か……」

ネステイは、メグミへの知識プログラム投入が完了するまでの間、資料を読み返す等をして過ごしていた。

「う……う、うあああああ！」

知識プログラム投入から約10時間が経過した時、メグミのいる部屋から叫び声が響く。

「どうした!？」

叫び声を聞いたネステイは、急いでメグミのいる部屋へと向かう。

ネステイが部屋に入ると、メグミの皮膚は組織崩壊を起こして変色し始めており、組織崩壊の痛みにメグミは、大きな悲鳴を挙げていた。

「二応、培養自体は成功しましたが、まだなにぶん組織細胞の構築が不完全な部分があります。もし、彼女に何らかの異変が起きた場合は、この薬の投与をお願いします」

「まさか、コレの事か」

女性研究員の言葉を思い出したネスティーは、貰ったカプセル薬をポケットから取り出して、急いでメグミの口へと投薬する。

カプセル薬をメグミに投与してから数分後、組織崩壊を起こして変色していた皮膚も元に戻り、メグミも痛みから解放されたのか落ち着きを取り戻す。

「やれやれ……計画通りには行かないな。これから先が思いやられる」

メグミを見ながらネスティーは溜め息を吐く。

せっかく培養して完成させたものの、組織崩壊が起こる様では元も子もない為、早急に対策を講じなければならない。

とは言え、今のネスティーの頭の中は、メグミの最終調整を行う事が最優先事項だった。

やがてメグミへの知識プログラム投入も完了し、ネスティーは色々とテストを行う。

プロトデビルの細胞の影響は大きく、10代女性の平均値を大きく上回るほどの身体能力を叩き出した。

「素晴らしい……私の予想以上の結果だ」

メグミのデータを参照しながらネスティーは、目を大きく見開き感心する。

どのデータも高い水準を叩き出し、想像以上の結果にネスティーは、満足していた。その隣でメグミは、虚ろな目をしたまま座っている。

「凄いいじゃないか、偉いぞ」

ネスティーは、メグミの頭を優しく撫でる。

「スピリチア……」

虚ろな目をしたままメグミは、ボソツと呟く。

「？」

「スピリチアが……欲しい」

「何だ、スピリチアと言うのは？」

スピリチアと言う物を求めて、メグミはフラフラと歩きながら部屋を出ようとする。

「待つんだ、メグミ！」

フラフラと外に出ようとするメグミをネスティーは、急いで止める。

「メグミ、どうしたんだ！」

ネスティーの呼び掛けにもメグミは、全く動じなかった。

ピンポン

『ネスティー大尉、資料をお持ちしました』

部屋のチャイムが鳴り、部屋の外から声が聞こえる。

モニターには、資料の入った封筒を持つている士官の姿が見える。

「入ってくれ」

ネスティーは、部屋のドアを開けて士官を中に入れる。

「失礼します。おや？ 可愛らしいお嬢さんですね」

メグミの存在に気付いたのか、士官は笑顔を見せる。

「スピリチアアアアア！」

「う、うわあああああ！」

突如メグミは士官に飛びかかり、身体を青白く発光させる。

発光体は士官を包み込むと、士官の身体から粒子となったエネルギーをどんどん吸収していく。

メグミの突然の行動にネスティーは恐怖感からか、その場から動けなかった。

無論、目の前で起こっている事も理解すら出来なかった。

最初は抵抗していた士官も粒子エネルギーを吸収されたのか、徐々に大人しくなっていく、やがて虚ろな目をして動かなくなる。

「……スピリチア、美味しい」

士官から粒子エネルギーを吸い取って満足したのか、メグミは元気を取り戻す。

「お、おい……しつかりしろ。おい、おい！」

ふと我に返ったネスティーは、倒れている士官に声を掛ける。

しかし、士官はネスティーの呼び掛けに反応をする気配はなかった。

「!? い、息はしている。で、でも全然動かないぞ」

息をしたまま動かない士官を見てたネスティーは、思わず息を飲みこむ。

そして、身体が急に震えだして動けなくなる。

「ま、マズい……と、とにかく救護班を呼ばないと」

状況を理解したネスティーは、急いで 救護班に連絡を入れる。

救護班に連絡を入れた後もネスティーは、恐ろしい光景を見た恐怖感からか、身体が

竦んで動けなかった。

数分後、連絡を受けた救護班がネスティーの部屋へとやってくる。

「と、突然、か、彼が私の部屋で倒れたんだ。い、急いで医務室へ運んでくれ」

ネスティーは、しどろもどろに救護班へ状況を説明し、士官を医務室へと運ばせた。

メグミの行動を説明したかったが、説明をしても誰も信用してくれないだろうし、逆に自分に疑いが掛けられてしまうと思うと、下手に言わないのは正解だと思った。

事の状況を見たネスティーは、急いで自分の仕事部屋へと戻って、メグミが入って来ない様に部屋の鍵を掛ける。

そして、父親であるバートンへと連絡を入れる。

『ネスティーか、父さんは忙し……』

『どう言う事だよ、父さん!』

バートンの言葉を遮り、ネスティーは興奮状態で問い詰める。

『どうしたんだ、そんなに興奮して?』

『父さんから貰った細胞を培養して作った人工生命体だけど、突然人を襲って生体エネルギーを吸い出したんだよ!』

『プロトデビルンは、スピリチアと言う生体エネルギーを主食にする生物だぞ。知らなかったのか?』

『……は?』

バートンの説明にネスティーは、しばらく呆気にとられる。

ネスティー自身、プロトデビルンの生態系や知識等は全く聞いてはいなかった。

『……そんなの初めて聞いたよ!』

そして、我に返ったネスティーは、机を激しく叩きながらバートンにツツコミを入れる。

『とりあえず、どうすればいいのさ? このままじゃ、今度は僕がやられる番だ』

ネスティーは、次は自分が狙われる事に恐怖感を覚えて身体をガタガタと震わせる。

『とりあえず、今から音楽データを送るから、それを聴かせるんだ。プロトデビルンにはコレが一番の対応策だからな。じゃあ、後は頼んだぞ』

バートンからの通信が切れると共に音楽データファイルが端末に送られてくる。

「この曲は……FIRE BOMBER……って、サウンドフォースの曲か」

ネスティーは、端末から音楽データを抜き取ってステレオにデータを移す。

そして、仕事部屋の鍵を開けて、ゆつくりと扉から頭を出して辺りを見回す。

相変わらずメグミは、部屋の中をキョロキョロと見回していた。

「メ、メグミ」

「どうしましたか?」

「ちよ、ちよつとこつちに来なさい」

ネスティーは、恐る恐るメグミを仕事部屋に呼ぶ。

そして、メグミが部屋に来たのを確認したネスティーは、送られてきた音楽を再生する。

—さあ、始まるぜ Saturday Night

調子はどうだい

ステレオからFIRE BOMBERの曲が流れる。

「全く、こんなくだららない曲が本当に効くのか?」

ネスティイは、しかめっ面になりながらもメグミの様子を見る。

一方のメグミは、FIRE BOMBERの曲に聴き入り、青白い発光体を出していった。

それを見たネスティイは、今度は自分が襲われると思ったのか、大型端末の陰に急いで隠れてメグミの様子を見る。

「アニマ……スピリチア」

メグミは、FIRE BOMBERの曲を聴く事で、どんどん元気になっていく。

「ゾクゾクする……こんなの初めて」

メグミの表情が徐々に赤みを帯びていく。

「いったい、どうなっているんだ？ しかし、これは凄いでぞ」

メグミが音楽を夢中になって聴いている間にネスティイは、近くに置かれた端末を手に取り、メグミについての分析データを端末に打ち込んでいく。

1 : 身体能力は10代女性の平均値を大きく上回る

2 : 約10時間毎にカプセル薬を投与しないと組織崩壊を起す

3 : プロトデビルンはスピリチアと呼ばれる生命エネルギーを主食とする

4 : なお、FIRE BOMBERの曲を聴かせる事でスピリチアを補給できるらし

い……？



「現段階で判明しているのは、こんな感じか……ふう」

端末にデータを打ち込み終わり、ネスティーは大型端末の陰からメグミの様子を伺う。

先ほどの青白い発光体は放出されず、メグミは普通に音楽を聴いていた。

「メ、メグミ……も、もう大丈夫なのか？」

ネスティーは、大型端末の陰に隠れつつ恐る恐るメグミに声を掛ける。

「はい、もう大丈夫です。ご心配をお掛けしました」

ネスティーの心配をよそにメグミは、元氣いっぱいの笑顔で応える。

その様子を見たネスティーは、ホッと胸をなで下ろしていた。

しばらくメグミは、組織崩壊を止める投薬と FIRE BOMBER の曲を聴かせる事によるスピリチア回復を行う事で日常生活を送り、ネスティーもそれに安心したのか、仕事に打ち込む事が出来た。

やがて数日が過ぎ、二次面接の日がやってくる。

一次面接を合格したフェイル、アンジエイ、弥生に加えてガーネフ大佐の愛娘レナと新城夫妻の息子である武、そしてメグミが面接を受ける事になる。

ただし、デビュー期間の関係等で新たに人員を募集する時間が無い為、この面接者は、ほぼ合格と言っても変わりはない。

面接会場はシティ8内の大会議室で行われる事になり、会場へやってきたアンナとマイルズは会議室へと入る。

「おはようございます」

「おはようございます。アンナ艦長、マイルズ市長」

会議室では、ネスティーとメグミが会場のセッティングしている所だった。

「あら、その子は？」

アンナは、ネスティーと共に会場のセッティングをしている少女の存在に気付く。

「この子は、私の姪です。今日のオーディションを特別に受けさせます」

「初めまして、メグミ・アクセラです。よろしくお願いします」

メグミは、二人に頭を下げて笑顔で挨拶をする。

「ふふ、可愛らしい子ね」

笑顔で挨拶をするメグミを見たアンナは、微笑ましい気分になる。

「ネスティー君、彼女に内容説明は？」

「もちろん、説明を聞いて了承済みです」

「そうか……」

マイルズは、あどけない少女が戦場へ出る事に憤りを感じていた。

見た感じ最年少であるメグミを戦場へ送り出し、その戦火の中で歌う恐怖感を彼女は

理解出来るのだろうか？

未だにマイルズは、市民を戦場の中で歌わせる事には反対だった。

しかし、リン・ミンメイの歌が戦争を解決出来た一つの方法として、マイルズは静観する事にしていた。

「そうそう、他にガーネフ大佐のご令嬢とギャラクシーレコード社長の御子息も面接を受けますよ」

「あらあら、随分と豪華ね」

有名な方の子供達も参加される事を聞いたアンナは、少しだけ驚く。

やがてメグミを除く四人も会場に集まり、面接が始まる。

面接のトップバッターは、レナからだった。

「さて、面接に入る前に君の経歴を色々と見せてもらったよ」

ネスティーはレナの経歴書を手に取る。

「そ、そう」

自分の経歴書を見せびらかすネスティーにレナの表情が引きつる。

「芸能界に入る為にガーネフ大佐のコネを使つたまでは良かったが、殆ど売れないまま  
で現在は開店休業状態って事もね」

ネスティーは、嫌みついたらしい口調と目つきでレナを見る。

「ネスティー君！」

ネスティーの態度を見兼ねたマイルズは、思わずネスティーを抑制する。

「あなた、ケンカを売ってるの？」

「事実を言ったまでさ」

レナの言葉に対しても、ネスティーは強気な態度を見せる。

そんなネスティーの態度にレナは、拳を強く握り締めて肩をプルプルと震わせる。

「とりあえず、歌かダンスを見せてもらおうか」

「いいわ」

レナはデモテープをスタッフに渡して、曲を再生させる。

「聴いてもらうわ、愛は流れる」

レナは、ネスティーの挑発で荒れた心を落ち着かせて歌い始める。

一時は流れる 愛は流れる……

先ほどまでネスティーに食って掛かっていた態度とは裏腹に、優しく透き通るような

声が部屋全体に響き渡る。

「綺麗な声ね」

レナの歌を聴き終えたアンナは、レナの歌声の余韻に酔いしれていた。

「ありがとうございます」

アンナの率直な感想にレナは、頭を下げる。

「続いてダンスをお願いするよ」

「クラシックバレエになるけど良いかしら？」

「構わない」

相変わらずのネスティーの態度にレナは、内心苛立ちつつも音楽に合わせて踊る。

ステップも軽やかに動き、そして、ストイックながらも綺麗な動きで踊るレナ。

そんな華麗で優雅な動きにアンナとマイルズは、思わず魅入っていた。

「いやあ、素晴らしい」

踊り終えたレナをマイルズは、拍手で讃える。

「本当ね。小さい頃からしていたのかしら？」

「はい、幼少の頃から……これでも、銀河クラシックバレエグランプリを3回は取って

います」

アンナの質問にレナは照れながら質問に答えつつも、さり気なく自慢を入れていた。

「なるほど、実力はよくわかった。後は、実戦の恐怖に耐えられるようにしておいてくれ

以上だ」

ネスティーは、特に誉める事も無く忠告をするだけだった。

「では、失礼します。本日は、ありがとうございました」

ネステイーの忠告を軽く受け止め、レナは三人に頭を下げて部屋を後にする。

「ネステイー君、あまり人を感情的にさせる様な言動は慎みたまえ」

先程のレナに対してのネステイーの態度にマイルズは注意を促す。

「お言葉を返す様で申し訳ないですが、あれくらいで感情的になる様では、芸能界ならびにHEXAGRAMでは上手くやっていけないと、私は思います」

少し煽られた程度で感情的になっていては、戦場では命取りになる事もネステイーは考慮していた。

レナと入れ替わりで次に部屋に入ってきたのは武だった。

「さて、レナさんと同様に君の経歴を見させてもらったよ」

「そうですか」

レナと違い武は、表情をあまり変えなかった。

「演歌界の大御所であり、ギャラクシーレコード社長の新城幸一郎を父に持ち、鳴り物入りで芸能界に入ったのは良いが、親の七光りで泣かず飛ばず……か」

「それが何か？ それより歌とダンスでしたね」

ネステイーの話にも武は、感情的になる事は無かった。

「ああ、お願いするよ」

「わかりました」

武はスタッフにデモテープを渡して準備をする。

「突撃ラブハート、行きます」

—LET, S GO つきぬけようぜ 夢でみた夜明けへ……

野性的な雰囲気を持つ武らしい選曲で、かつ声もパワー溢れる声だった。

しかし、武の歌い方をよく聴くと、所々で音を外した歌い方をしていた。

「ストップ！ 中止だ」

「え？」

「中止だ。曲を止めてくれ」

ネスティーは、スタッフに曲の再生を止めさせる。

「!? いきなり曲を止めて、何のつもりだ！」

突然曲を止められて、気分良く歌っていた武はネスティーに抗議する。

「なあ武君。君は、自分の歌った歌を聴いた事はあるかい？」

「いえ、全然。そもそも聴いた事すらありません」

自信満々に答える武にネスティーは、深い溜め息を吐く。

「君の歌い方……音が所々、外れている」

「はあ？ 何言っているんですか？ あなたは耳がおかしいんじゃないんですか？」

「りは歌が上手いと言ってくれて……」

周

「武君。周りの人が褒めてくれてるのは、社交辞令だって気付きなさい。残念ながら、君の歌唱力は幼稚園児並み……いや、幼稚園児の方が上手いかな？ そう思いませんか？」

ネスティーは、思わずマイルズとアンナに問い掛ける。

突然の問い掛けに二人は苦笑いしか出来なかった。

「な!？」

ネスティー達に現実を叩き付けられて、武は思わず身体が固まる。

「……」

幼い頃から周りに殆ど否定をされなかった武にとって、ネスティーの言葉は、かなり精神的に傷ついたらしく放心状態になっていた。

「次はダンスを見せてくれ」

放心状態になっている武にネスティーは、ダンスを踊るように指示を促す。

しかし、ネスティーの言葉を引きずっているのか、武は未だに放心状態になっていた。

「もういい、次の人を入れてくれ」

何もせずに立ち尽くす武をよそに次の面接者の弥生が部屋に入る。

「失礼しま……あの……この人、何してるの？」

部屋に入るなり立ち尽くす武を見た弥生は、武に指を指して問い掛ける。



「気にしなくていい。じゃあ、早速だが歌とダンスをお願いする」  
「はい」

弥生は、スタッフにデモテープを渡して準備する。

「MY FRIENDS いきまーす！」

元氣よく手を挙げて、弥生は歌い出す。

―恋をするように 目を重ねれば Kiss……

弥生の明るい歌声は、聴いている者を元気にさせるような感じだった。

マイルズは弥生の歌声を聴き、リズムに合わせて軽く首を振っていた。

やがて、歌を歌い終えた弥生は、ネスティー達に一礼をする。

「いやあ、元氣な歌声だね。レナさんとは、また違った素晴らしさだよ」

マイルズは拍手をしながら頷き、弥生の歌を評価する。

「そうね、私もそう思うわ」

アンナとマイルズは、お互いに顔を合わせて微笑む。

「続いてダンスを見せてくれ」

「はいはい」

BGMが流れ、弥生はステップを踏みながら軽やかに踊り出す。

軽快な動きを見せる弥生を三人は、じっと見つめる。

軽やかにステップを踏みつつも、躍動感とキレのあるダンスを弥生は踊る。

例えるならレナがクラシックバレエによる静の動きなら、弥生は動の動きだ。

しかも、そこそこ激しい動きがある物の弥生は呼吸が乱れている様子も無かった。

「なかなか良い動きだったよ」

「私も見ていて、動きが凄いと思ったわ」

踊り終えた弥生を見たマイルズとアンナは、率直な感想を述べる。

「ありがとうございます」

踊り終えた弥生は、三人に一礼する。

「歌もダンスも、まあ良かったよ」

二人とは対照的にネスティーは、感情を表に出さずに弥生を誉める。

「誉めるなら素直に誉めてよね」

感情を出さずに誉めるネスティーの態度に弥生は、不満そうな表情を見せる。

「とりあえず、今度は実戦でも活躍できるようにしておいてくれ。お疲れ様」

「はいはい、ありがとうございます」

三人に一礼して、弥生は部屋を後にする。

次に部屋に入ったのは、巨体が特徴的なアンジエイだった。

「えーと、彼は？」

弥生と同様にアンジェイも棒立ちする武に指を指して問い掛ける。

「彼の事は気にしなくていい。とりあえず、歌とダンスを見せてくれ」

弥生と同様にネスティーは、アンジェイにも歌とダンスを指示する。

「あ、あの……」

ネスティーの指示に急にアンジェイは、どもったような声を出す。

「どうした？」

「じ、実は俺……歌は、ニガテなんです」

「な、何だって！」

アンジェイが歌えないと分かった瞬間、ネスティーは思わず感情的になって席を立つ。

「いや……あの……アイドルグループでも、その……ダンスメインの人がいるじゃないですか。俺、それに憧れてて……」

巨体とは裏腹にアンジェイは、ごもごもと身体を縮こませながらネスティーに説明をする。

「……君、募集要項を読んだか？」

「は、はあ……まあ」

ネスティーは、感情を露わにしながらアンジェイに問い掛ける。

そんなネスティーを見兼ねたのか、アンナとマイルズは必死に抑える。

「まあまあ、ネスティー大尉も落ち着いて。せつかくここまで来たんだから、受けさせてあげましょう」

「……」

必死に宥めるアンナを前にネスティーは、不機嫌な表情をしながらも席に座る。

「まあ、いいでしょう。とりあえず、ダンスを見せてくれ」

「は、はい！」

アンジェイは、意気揚々に応えて準備する。

BGMが流れてアンジェイは、軽くステップを踏みながら 踊り始める。

その巨体からは想像できないくらいに軽やかなステップと力強い動き。

そして、アクロバティックな動きを三人に見せる。

「……いやあ、凄いなあ」

アンジェイのアクロバティックなダンスにマイルズは圧倒されていた。

「俺、前にストリートダンスをしていたんですよ」

褒め称えるマイルズにアンジェイは、少し自信あり気に話す。

「そうなの、とても素晴らしいわ。ねえ、ネスティー大尉。彼の歌は、レッスンで何とかならないかしら？」

アンナの要望にネスティーは、黙ってアンジエイを見る。

「……仕方がない。時間も他に人材が無いから、一応は合格だ」

「本当ですか？　ありがとうございます！」

ネスティーから合格の言葉を聞き、アンジエイは満面の笑みを浮かべて一礼する。

「良かったわね、アンジエイさん」

「はい！」

「とりあえず、ちゃんと歌えるようにする事と実戦での恐怖感に耐えられるようにしてくれ。じゃあ、お疲れ様」

「了解しました！　では、失礼いたします」

アンジエイは、敬礼をして部屋を後にする。

アンジエイと入れ替わり、メグミが部屋に入る。

「失礼します」

「とりあえず、その彼は気にしないでくれ」

メグミが問い掛ける前にネスティーは、先にツツコミを入れておく。

「は、はい」

ネスティーのツツコミにメグミは、少し苦笑いする。

「ネスティー大尉の姪っ子さんでしたよね？」

「え？ ええ……まあ」

アンナの質問にネスティーは、しどろもどろしながら応える。

実際は親族でもなく人造人間である為、ボロが出ない様にネスティーは、必死に誤魔化す。

「とりあえず、始めましょう」

話 が 長引くとボロが出ると感じたネスティーは、すぐに面接を始める。

「じゃあ、歌とダンスを頼むよ」

「はい、わかりました」

メグミは、スタツフにデモテープを渡す。

「曲はSUNSET BEACHです」

曲が流れ始め、メグミは歌い出す。

— 連れなく歩く あなたの後を……

可愛らしい声で歌うメグミにネスティーは、少しにやけた表情をする。

「姪っ子さん、可愛らしい歌声ですね」

「え？ ええ……」

「彼女、本当に覚悟を……」

「ええ、決めています」

マイルズに話し掛けられてネステイーは、少しにやけた表情を元に戻す。歌い終えたメグミは、一礼をする。

「可愛らしい歌声だね。これはファンも増えそうだ」

マイルズは、可愛らしい歌声を聞いて少しにやけながら話す。

デレデレするマイルズを見たアンナは、膨れっ面をしながらマイルズの右足を踏む。

「いたっ、いたたた！」

「あら、ごめんなさい」

アンナは、しれっとマイルズに謝る。

「次は、ダンスを頼むよ」

「はいー！」

メグミは元気な声で応え、BGMに合わせてステップを踏む。

そして、BGMに合わせてバク転をした後、一気に三回転宙返りを決める。

メグミの運動神経を見たアンナとマイルズは、思わず目を丸くする。

「いや、これは凄いなあ……」

「ええ……本当ね」

その後もメグミは、ブレイクダンスや4連続でバク転を決めたりと、とても10代の少女とは思えないくらいの運動能力をアンナとマイルズに見せ付ける。

メグミが踊り終えて一礼をした後もアンナとマイルズは、まだ呆けた表情をしていた。

「いやいや、これは驚いたなあ」

「ええ……メグミさん、凄い運動神経ね」

「ありがとうございます」

「なかなかだったぞ、メグミ」

珍しくネスティーが笑顔を見せてメグミを誉める。

「メグミ、後ほど連絡をするから、先に私の部屋へ戻りなさい」

「はい、失礼します」

ネスティーに諭されて、メグミは部屋へと戻る。

「ネスティー君。彼女、凄いね」

「いやいや、それほどでも」

マイルズにメグミを誉められ、ネスティーは自分の娘が誉められているかのように笑顔を見せて喜ぶ。

あまり笑顔を見せないネスティーを見たアンナは、普段の冷静なネスティーを見ている故に、彼も人としての感情を持っている事を改めて感じていた。

「彼女は、何かをやつてらしたのかしら？」



「いえ、特に。恐らく彼女の生まれ持った才能ですよ」

「それでも凄いなあ」

なかなか出そうもない逸材を見たマイルズは、メグミに対してえらく感心を見せていた。

「……そろそろ、入っていいか？」

ドアを半開きにしたまま、身を半分乗り出した状態のフェイルが話し掛ける。

「ああ、すまないね。入りなさい」

ネスティーの了解を得て、フェイルは部屋へと入る。

立ち尽くしたままの武を見る事も無く素通りしたフェイルは、ネスティー達の前までやってくる。

「じゃあ、早速だが歌とダンスを……」

「悪いが、俺はダンスは踊る気は無い」

ネスティーの話を遮り、フェイルは踊らない事を表明する。

「いいか、募集要項は……」

「俺は歌が歌いたい。ただ、それだけだ。それに歌で銀河を救うんだろ？」

再びネスティーの話を遮り、フェイルは話し続ける。

「確かに君の言う通りだ。だが、普段は芸能活動も行うんだ。ただ突っ立って歌うアイ

ドルグループなんて殆ど無いだろう」

「……フン。ならバンドグループを募集すれば……」

「バンドグループだと応募者のパイが狭くなるだろう。それに、このプロジェクトは全員の歌エネルギーが重要だ。それも10代〜20代の男女の異なった歌エネルギーがね」

HEXAGRAMは男女混成グループを主軸にしている。

男性、女性、そして年齢により、それぞれの声質は異なり、それが合わさる事で歌の力であるエネルギーは強くなる。

父親が提案したアイドルグループは、思った程の成果が成し得なかつた故にネスティーは、それを教訓として戦場でも恐れずに歌える人材が必要だった。

「……だが、俺はダンスがニガテだ」

「さっきのアンジェイ君も歌がニガテだと言っていた。だから、後で戦闘訓練以外に歌の特訓もさせる。だから、君もダンスの特訓をさせるから覚えておきなさい」

「……」

ネスティーの説明にフェイルは、少しだけ納得したのか黙り込む。

「それに……歌で見返したいんだろう?」

ネスティーの言葉にフェイルは、ハツとした表情をする。

ネステイの言葉で、どうやら自身が歌う目的を思い出したようだ。

「……ああ」

「なら、ダンスも頑張れ」

「……わかった。極力、努力する」

ネステイの説得に納得したのか、フェイルは頷く。

「じゃあ、歌を聴かせて貰おうか」

「ああ」

フェイルは、スタツフにデモテープを渡す。

「聴いてくれ……MY SOUL FOR YOU」

フェイルは背中に背負っていたギターを構えて、デモテープの曲に合わせてギターも弾き始める。

デモテープの曲は、自分でミキシングをしたのか、敢えてギター部分だけが抜かれていた。

自分で楽器を演奏し、自分で歌おうとするフェイルの姿勢にアンナとマイルズは、フェイルの音楽への情熱に関心を向けていた。

その一方で、ネステイは、特に関心を寄せている様子は殆ど見られなかった。

—お前が風になるなら 果てしない空になりたい……

フェイルの歌声は、悲しく切ないが、その声の中に秘めた熱さが聴く者に徐々に伝わっていく。

アンナとマイルズがフェイルの歌に聴き入っている中、ネステイーも目を閉じてフェイルの歌を聴いていた。

## 第18話HEXAGRAM

歌い終えたフェイルをアンナとマイルズは、拍手で労う。

「君の歌声、とても胸に響いたよ」

「本当に素晴らしかったわ。何て言うのかしら、歌い方は静かなのに聴いていると、段々と胸が熱くなるような感じがしました」

「ありがとうございます」

フェイル本人も久しぶりに歌を歌って褒められて嬉しいのだが、どうも素直に喜びが表現出来なかった様で、少し照れながら二人に礼を言う。

「君の歌いたい気持ちは、よくわかった。だから、歌以外にもダンスの方も頑張ってくれ」

「……努力する」

ネスティーに対して相変わらず、ぶっきらぼうな返答をするフェイル。

しかし、最初の頃に比べると、多少なりとも親しみやすい雰囲気になりつつあった。

「……失礼します」

フェイルが部屋を後にしても、残された武は未だに呆然と立ち尽くしていた。

「武君、いつまでそこにいるつもりだ」

ネスティーの問い掛けにも武は、未だに全く動じなかった。

「彼、大丈夫かしら？」

動かない武をアンナは、少しだけ心配する。

「ネスティー君の言葉が、よほどシヨックだったんだろうねえ……」

マイルズもアンナと同じく心配そうに武の様子を伺う。

「おい、しつかりしろ」

全く動じない武にネスティーは、近寄って武の身体を揺さぶりながら声を掛ける。

「俺はできるんだ……俺はできるんだ……」

武は、小声でブツブツと独り言を呟っていた。

「いい加減にしろー！」

ネスティーは武の頬を思い切り叩く。

「……」

ネスティーに頬を叩かれた武は、視線をゆつくりとネスティーの方へと向ける。

「父さんや母さんにもぶたれた事が無いのに何をするんだ！」

そして、頬を叩かれた事に気が付いた武は、思わず感情的になつてネスティーに食つて掛かる。

状況を見兼ねたアンナとマイルズは止めに入る為に立ち上がるが、ネスティーは左手を二人に突き出して来ると言う合図を見せる。

「そんな感じだから、ちよつと批判されたから落ち込むんだな」

「なんだと!」

「あの時、私に見せた心構えは口先だけか?」

「くっ……」

ネスティーに詰め寄られた武は、そのまま言葉を詰まらせる。

「あの心構えは、女性にカッコよく見せる為のアピールか?」

「……」

どうやら凶星なのか、武の目が徐々に涙目になっていく。

(……何だよ、本当に凶星なのか)

その様子を見たネスティーは、心の中で溜め息を吐く。

「身体は一丁前に大人でも、中身は子供か……やれやれ、これでは先が思いやられるな」  
ネスティーは、大きな溜め息を吐く仕草をする。

「う、うるさい……」

「凶星で涙目になるなら、少しは努力したらどうだい? アンジエイ君やフェイル君は、

どちらか片方しか出来なくても、努力しようと言う心構えは見せていたぞ」

「……」

ネスティーの話に武は、涙目ながらも下を向き考え始める。

「いいか、このプロジェクトは武君の力も必要だ。だからこそ、みんなで努力をして成功させたいんだ」

ネスティーは武の前に歩み寄り、そのまま武の右肩に手を置く。

「ぼ……僕、頑張ります！　だ、だから……やらせてください！」

ネスティーの励ましに吹っ切れたのか、武は顔を上げる。

その瞳は、少年の目の様にキラキラと輝いていた。

「なら、歌とダンスの特訓と戦闘訓練……頑張れよ」

「はい！」

武の力強い返事を聞いたネスティーは、少しだけ笑顔を見せる。

「今日はもう帰りなさい。後程、詳しい日程は、こちらから連絡する」

「はい、ありがとうございます。では、失礼致します！」

ネスティーの励ましで元気になった武は、そのまま部屋を後にする。

「お見苦しい所を見せて、申し訳ございません」

武との会話を終えたネスティーは、二人に頭を下げて自分の無礼を謝罪する。

「素晴らしかったわ、ネスティー大尉」



「ああ、あそこまで落ち込んだ彼を立ち直らせるとは、大したものだよ」

失意で呆然とする武を何だかんだ言いつつも説得して立ち直らせたネスティー。

厳しい事を言いつつも、何気にネスティーの氣遣う本心をアンナとマイルズは気付いたのだろう。

「……あ、ありがとうございます」

ネスティーは、少し照れながらも席に戻って端末を操作する。

「デビューは3ヶ月後を予定していますので、アンナ艦長は機体の手配とガーネットフォースへの訓練依頼をお願いします」

「そこは、大丈夫です」

「私は後日、新城夫妻とスポンサーの件で打ち合わせをします。では、本日はお忙しい中、ありがとうございます」

「お疲れ様」

「なんだかんだで楽しかったよ、お疲れ様」

ネスティーは二人に一礼をした後、再び端末を操作し始める。

アンナとマイルズが部屋を後にして一人になっても、ネスティーは部屋で打ち合わせ資料を作成していた。

（メグミは大丈夫だろうか？　ちゃんと薬やスピリチアの事は教えたから大丈夫だと思

うが……)

資料を作成しながらもネスティーは、メグミの事を心配していた。

マクロス8船団の中核を担うバトル8。

マクロス8船団所属のエリート部隊ガーネットフォース隊員三人がアンナの命令で会議室へと出頭していた。

「先日、お願いしていましたHEXAGRAMのメンバーが決まりました」

アンナがボタンを押すと、ディスプレイにメンバーが映し出される。

「ビューッ！ 結構、可愛い子や綺麗な子じゃないですか」

少し浅黒い肌の青年は、女性メンバーを見るなりテンションを上げる。

「新城武って、もしかしてギヤラクシーレコードの新城幸一郎の……」

右目が髪で隠れている青年は、武の映像の名字を見て、思わず指を指す。

「ええ、その通りよ。ちなみにこのレナさんは、ガーネフ大佐のお嬢さんよ」

「ええ!! あのガーネフ大佐のですか? し……信じられん」

赤いバンダナがトレードマークの青年は、レナがガーネフの娘である事を知り、驚きのあまり椅子から転げ落ちそうになる。

「1週間後には皆さんに辞令と訓練スケジュールを出しますので、その間に訓練の準備をしておいてください」

「了解」

「ネスティ―大尉曰わく、『例え訓練でも手を抜かないで欲しい』そうです」

アンナは、少し笑いながら話す。

「戦場で歌う……か。確かマクロス7船団が、それを実践していますよね」

右目を髪で隠している青年がアンナに話し掛ける。

「ええ、そうよ。何でも、その歌エネルギーでプロトデビルンと言う怪物を撃退してるらしいわ」

「は、はあ……撃退……ですか」

「アスタル中尉。にわかには信じられないかも知れないけど、これは事実です」

右目を髪で隠している青年、アスタルはアンナの話に驚きつつも信じられない様な表情をしていた。

「でも戦場で歌うのって、怖くないのかなあ？」

赤いバンダナの青年は、椅子にもたれながら話す。

実際の戦場でも生きるか死ぬかの瀬戸際の状態を体験している故に、パイロットでもない民間人が歌うのは、間違いなく恐怖以外の何物でもない。

ましてや、自分達ですら混戦状態になった時にHEXAGRAMを守り切れるかすら不安である。

「ボウウエン、お前やってみたいか？」

少し浅黒い肌の青年は、赤いバンダナがトレードマークの青年、ボウウエンに問い掛ける。

「いやいや、俺はバルキリーに乗って歌うなら普通に歌いますよ。グレン隊長は、やりたいですか？」

ボウウエンは、苦笑いしながら少し浅黒い肌の青年、グレンに逆に問い掛ける。

「うーん、そうだなあ……俺なら志願するかな。それで女の子にモテモテになるのも悪くないなあ」

グレンは、HEXAGRAMに加入して女の子達にモテている自分を重ね合わせてニヤニヤしながら話す。

そんなグレンをアスタルとボウウエンは、お互いに顔を見合わせながら苦笑いする。

「とりあえず、説明はこれくらいですが、何かご質問は？」

アンナの問い掛けにガーネットフォース隊員は誰も手を挙げなかった。

「では、以上です。お疲れ様でした」

「お疲れ様です」

アンナとガーネットフォース隊員は、互いに敬礼をしてガーネットフォースメンバーは艦長室を後にする。

「HEXAGRAMにしろサウンドフォースにしろ、戦争に市民まで協力を求めなきゃいけないなんて。統合軍も変わったわね」

今までの資料によれば、巨人族であるゼントラーディは文化を知らない種族故に歌による音響攻撃、通称ミンメイアタックと呼ばれる方法で撃退してきた。

しかし、マクロス7船団が遭遇したプロトデビルンには通常兵器が効かず、ましてや本当に民間人の歌の力で戦争を終わらせているのだ。

それを過信した統合軍が更に悪い方向へ行かないかと言う不安で、アンナは深い溜め息を吐く。

二次面接から2週間が過ぎ、ついにHEXAGRAMの訓練が始まる。

訓練は訓練艦ガトウィックで行われ、メンバーはパイロットスーツに着替えて格納庫に徴収されていた。

格納庫にはネスティー大尉を中心にアンナとガーネットフォース隊員。

そして、HEXAGRAMメンバーが搭乗する機体のパイロット六名がネスティーの横に立つ。

「まずはHEXAGRAMメンバーへの合格おめでとう。これから先は厳しい訓練やレッスンを待っている。だが、辛い事から逃げずに、それを乗り越えた時こそ君達は、一人前になれるから心掛けて欲しい」

挨拶を終えたネスティーは、マイクをアンナに渡す。

「メンバーの皆さん、合格おめでとうございます。ネスティー大尉のお言葉と被ってしまいますが、あなた達は数多くの中から選ばれた事を誇りに思っ、厳しい訓練やレッスンを頑張ってください。私からは以上です」

挨拶を手短に終えたアンナは、マイクを再びネスティーに渡す。

「早速だが、これより戦闘訓練を始める。各員機体に搭乗後、発進準備！」

HEXAGRAMの六人は副座機VF-11D改の後部座席に搭乗し、続いて各パイロット達も機体に搭乗して出撃準備を始める。

HEXAGRAM達が出撃準備に入っている間にネスティーとアンナは司令塔へ向かい、ガーネットフォース隊員も出撃準備へと入る。

『ヘキサ1、準備完了。いつでも出撃可能です』

『ヘキサ2、同じく準備完了です』

各パイロット達から出撃準備完了の通信が司令塔に入る。

『全機出撃！』

ネスティーの掛け声と共にバルキリーは次々と出撃する。

HEXAGRAMメンバーは、初めての戦闘機の乗り心地とGの体験に不安な面持ちを見せる。

ガーネットフォースのVF-119は、先に格納庫から出撃して機体をバトロイドに変形させて、HEXAGRAMの搭乗機であるVF-11D改が到着するのを待ち構える。

『G1から各機へ、訓練だからって手加減無用だ。ただし、可愛い子ちゃんには手加減しろ。以上だ』

グレンの通信内容にアスタルとポウウエンは苦笑いする。

やがて6機のVF-11D改が到着を確認すると同時にガーネットフォースは攻撃を開始する。

ガーネットフォースの攻撃に6機のVF-11D改は、次々とバトロイドに変形して応戦し始める。

「キヤアアアアア！」

「うわあああああ！ と、父さん、母さああああん！」

レナと武が恐怖のあまり悲鳴を上げる。

「こんな事で悲鳴を上げるな！」

「訓練如きで男のクセに怖がるな！」

レナと武の搭乗機パイロット達は、二人の悲鳴を聞いて怒鳴り散らす。

『G1から各機へ、これよりミサイルによる模擬戦闘に入る』





ネスティーは嫌味つたらしくレナと武に話し掛ける。

「し、仕方な、ないでしょ……は、初めて、な、なんだからー！」

レナは身体を震わせつつ、時々嘔みながらネスティーに訴える。

武の方は完全に意気消沈し、目も虚ろになっていた。

レナと武の様子を見たネスティーは、深い溜め息を吐く。

「よし、今から30分間の休憩。その後、基礎体力訓練だ」

ネスティーの指示でレナと武以外のメンバーは、格納庫を後にして休憩に入る。

休憩時間になってもレナと武は、その場を動こうとしなかった。

「ネスティー大尉、レナさんと武さんは大丈夫でしょうか？」

訓練の様子を見ていたアンナが二人を心配する。

「最初にあの二人にも意志の確認はしましたし、時間があまり無いので、例えどんな事が

あろうとやり遂げさせます」

心配するアンナをよそにネスティーは、プロジェクトの事の方が重要だった。

休憩時間も終わり、六人は基礎訓練室に集まる。

相変わらずレナと武の表情は冴えない感じだった。

「次は基礎体力訓練だ。あそこにあるベルトコンベアの上を20分間走ってもらう」

ネスティーが指差す方向には、大型のベルトコンベアが置かれている。

「アイドルグループなのに何でそんな事をする必要があるのよー！」

ネステイーの指示に不満があるのかレナが食ってかかる。

「君らはアイドルグループでもあり、パイロットでもあるんだ。基礎体力が無ければ話しなければならないだろう。レナは芸能活動していた時にやらなかったのかい？」

「そんなのやる訳ないでしょー！」

(……とことん親のコネで芸能界にいたんだな)

レナの返答にネステイーは、内心頭を痛める。

恐らく芸能界に入っても殆どは、ガーネフの娘であるが故にレッスン等はやっていない事は容易に想像が出来ていた。

「つべこべ言わずにやるんだー！」

ネステイーの叱咤にレナはネステイーを睨みつつも渋々命令に従う。

「全員、訓練開始ー！」

ネステイーの命令で六人は、全員ベルトコンベアの上に移動する。

六人全員がベルトコンベアの上に乗ったのを確認したネステイーは、ベルトコンベアのスイッチを入れるようにスタッフに手で合図する。

やがてベルトコンベアは動き出し、全員ベルトコンベアの上を走り出す。

開始3分くらいの速度は緩やかなので、特に誰も息が上がる者はいなかった。

しかし、4分後……

「きゃああああああ！」

レナが足をもつれさせて転び、ベルトコンベアに流されていく。

「もう、何なのよ！」

ベルトコンベアに流し落とされたレナは、八つ当たりに叫びながらジタバタする。

「早く戻りなさい！」

ネスティーは、八つ当たりをするレナに駆け寄る。

「もうイヤ！ 私、もう帰る！」

レナは立ち上がり、そのまま帰ろうとする。

「待ちなさい！」

そんなレナをネスティーは、肩を掴んで止める。

「離してよ、パパに言いつけるわよ！」

「ふう……君といい、武といい……親のコネを使うとワガママになったり天狗になったりするのは本当だな」

「なんですって！」

「あの時のガーネフ大佐の反対を押し切って加入した意気込みは、あれは嘘だったのか？」

「!?」

ネステイーの言葉にレナは顔を背ける。

「やっぱり嘘だったか……あれか、パパの手前で意地を張っていたただけか？」

「……」

ネステイーの挑発的な問い掛けにレナは黙り込む。

「……わかったわよ。やればいいんでしょ？」

レナは振り向いて、そのままネステイーを睨みつける。

「ああ、そうだ」

「見てなさい。いつか私の实力を見せて、目の前で土下座させてやるわ！」

「ああ。楽しみにしているよ」

ネステイーに挑発されてやる気を出したレナは、そのまま訓練へと戻っていく。

(そう、それでいいんだ)

必死に特訓に食らいつくレナを見たネステイーは、口元を緩ませる。

長い訓練が終わり、メグミを除く五人は全員ヘトヘトになっていた。

「ねえ。君、メグミちゃんだっけ？ あれだけ厳しい訓練だったのに平気なの？」

全く疲れる様子を見せないメグミに思わずアンジェイが問い掛ける。

「はい。私、まだ頑張れます！」

アンジェイの問い掛けにメグミは、ガッツポーズを見せる。

「女の子なのに凄いなあ……」

自分よりも小柄な少女が頑張っている姿にアンジェイは、感心しつつも内心は自分の体力の無さを悔やんでいた。

「みんな、お疲れ様。明日も今日と同じく8時にガトウィック格納庫に集合だ。では、解散！」

ネスティーの解散命令を聞いたメンバーは、フラフラと更衣室へ戻る。

「ネスティー大尉、お疲れ様」

1日の訓練課程を終えたネスティーをアンナは労う。

「アンナ艦長も貴重なお時間を割いて訓練をご覧頂き、ありがとうございます」  
「皆さん、かなりお疲れでしたね」

「初日は、そんなものですよ。訓練を重ねれば、みんな段々と慣れてきますよ」  
「だと良いんですけど……」

ヘトヘトになって戻っていくメンバーを思い出したアンナは、メンバーの体調やメンタル部分を気遣う。

「では、私はデータ分析をしますので……」

「遅くまでお疲れ様です」

アンナと別れたネスティーは、そのまま自室へと戻る。

部屋に帰ると、先に帰っていたメグミがFIRE BOMBERの曲を聴いて自らスピリチアを放出して吸収していた。

「ただいま」

「お帰りなさい」

ネスティーの帰宅に気付いたメグミは、とびきりの笑顔を見せる。

純真無垢なメグミの笑顔にネスティーは、どことなく癒された気分になっていた。

「メグミ、身体は大丈夫か？」

「はい、大丈夫です。今日の訓練は楽しかったですよ」

「楽しかった……か」

まるで訓練を遊びの一つとして思うメグミに対して、ネスティーは少し笑みを浮かべる。

「これから色々大変だろうけど頑張りなよ。それから薬も飲み忘れないように」

「はい！」

（この様子なら大丈夫そうだな）

メグミの素直な返事に安心したネスティーは、部屋でデータ分析を夜通しで行っていた。

次の日も、また次の日も訓練は続く。

当初は悲鳴を上げていたレナと武も段々と慣れてきたのか、悲鳴を上げる回数が徐々に減ってきていた。

「二人とも何とか様になってきたか」

モニターでデータを確認したネスティーは、少しだけ満足そうな表情をする。

訓練を続けて3週間が過ぎたある日。

いつも通りに戦闘訓練を終えた六人は、格納庫に集合する。

「今日から歌とダンスのレッスンを追加する。その歌とダンスを指導する先生を紹介しよう」

ネスティーに紹介され、二人の女性が前に出る。

「こちらが歌のレッスン担当のセレナ」

「よろしくお願ひします」

ロングヘアーを緩く束ね、落ち着いた表情の女性セレナが挨拶をする。

「もう一人がダンスレッスン担当のローザだ」

「よろしくー!」

ショートカットにボーイッシュユで若干勇ましい感じの女性ローザは、右親指を前に突き出して挨拶する。

「二人の實力は折り紙付きだ。彼女達の指導を真面目に受ければ、間違いなく實力が付くはずだ」

元々二人は、武の父親である新城が息子達の為を思う親心で派遣している。もちろんネスティーは、その事については敢えて説明はしていない。

この事を説明してしまえば、メンバー達が武に対しての不満を漏らすだろうし、何より武がレッソンの手を緩めるのは間違いないと睨んでいた。

「それと、これから渡す紙が君達のデビュー曲だ」

ネスティーは、六人に順番に用紙を渡す。

「Shooting Star……流星か」

貰った用紙を見てフェイルが呟く。

「そうだ。君達の歌声を流星の如く聴いている者に降らせて、心を動かして欲しい。作詞作曲はセレナが担当している」

六人は、ネスティーの話を聞きながら貰った用紙を閲覧する。

「今から5分休憩に入る。休憩後は全員、体育館に集合だ」

ネスティーの指示で六人は、それぞれ休憩に入る。

休憩を終えた六人は、ガトウィック内の体育館に集まる。

「これから歌のレッソンを行います、まずはデビュー曲を全体を通して聴いてくださ



い」

セレナは、ラジカセのスイッチを入れて曲を流す。

全体的にアップテンポな曲調であり、途中のサビでバラード調を織り交ぜた感じの曲だった。

曲を聴いてメンバーは、それぞれの反応を示す。

フェイルとレナは曲を聴きながら、歌詞を見ながら口ずさんでいる。

弥生とアンジエイは、目を閉じて曲を聴きながらテンポに合わせて首を上下に小刻みに振る。

メグミは目を輝かせながら曲に聴き惚れ、その隣で武は、少しかつたるような表情をしながら曲を聴いていた。

曲を聴き終えた後、早速レッスンが始まる。

軽いストレッツチから始まり、腹式呼吸や発声練習等の基本的な部分のレッズンを六人は行う。

ここでもメンバーは、色々な反応を見せていた。

フェイルは、元々バンドをしていた為、基本的な部分は難なくこなしていた。

レナもフェイル程ではないが、フェイルに負けじとレッズンをこなしている。

弥生は、腹式呼吸も発声練習もそつなくこなしていた。

アンジエイは、腹式呼吸は出来ているが、発声自体がただ怒鳴っているだけとセレナに注意されている。

メグミは、両方の練習をほぼ完璧にこなしてた。

一方の武は、どちらも中途半端な感じである。

「はい、今日のレッスンは終了です。休憩を挟んで次はダンスレッスンです」

レッスンを終了後、ネスティーはセレナに話し掛ける。

「いかがですか、彼等は」

「そうですね……皆さん、それぞれ良かったのですが、アンジエイさんと新城さんは発声練習はまだダメですね。特に新城さんは、喉から声を出している感じですね」

「……そうですね」

セレナからレッスンの感想を聞いたネスティーは、予想通りの不安が的中させていた。

同じ親のコネがあるレナは、歌もダンスも面接ではそれなりの成果を見せたが、武は歌は所々で音を外し、ダンスは結局見る事が出来ないままだったからだ。

「彼が一番のネックか……」

一番のネックである武をどうするか、ネスティーは頭を悩ませる。

「すまないが、彼を徹底的に鍛えてもらえないだろうか」

「わかりました」

ふと武の方を見ると、武は気だるそうな表情をしながら大きな欠伸をしていた。

その態度にネスティーは、深い溜め息を吐く。

休憩が終わり、ダンスレッスンが始まる。

ストレッチから始まり、流れる音楽のリズムに合わせて肩や膝を動かす等の基本的な部分から行っていく。

ダンスが苦手と公言していたフェイルは、時々テンポが遅れたりしながらも必死にリズムに合わせて動作をする。

一方の武は、リズムに合わせて動作が出来ず、途中から周りに合わせて適当に動作をし始めていた。

その武の様子をネスティーは、見逃さずに見ていた。

やがて本日の訓練とレッスンが終了し、メンバーは更衣室へと向かう。

「武、待ちなさい」

更衣室へ行こうとする武をネスティーが止める。

「何ですか？　これから父さん達と食事に行く約束があるんですけど」

「父さんと食事……か。ふーん、いい気なものだね」

「どういう意味ですか？」

ネステイーの態度に武は、ムツとした表情を露わにする。

「今日の歌とダンスのレッスンを見させてもらったけど、君はやる気はあるの？」  
「ありますけど」

「へえ……その割には、発声練習は、ただ怒鳴っているだけだったし、ダンスレッスンの時は適当に動いていたよね」

「!? そ、そんな訳ないですよ」

ネステイーに手を抜いていたのを見透かされて、武は動揺する。

（わかりやすい表情だ）

動揺する武を見て、ネステイーは苦笑いする。

「私が全く見てないと思っただら大間違いだから、そこは覚えておきなさい」

「わ、わかりました」

ネステイーに釘を刺され、武は怯えた表情で更衣室へと一目散に走る。

「……ふう。あの様子じゃ、まだまだ先が思いやられるな」

ネステイーは、溜め息を吐きながら武を見送る。

そして、2日後。

六人は、いつも通りにガトウィックの格納庫に集合する。

「本日より戦闘訓練の内容を変更する」

「変更？」

ネスティーの突然の訓練内容の変更に六人は、お互いに顔を見合わせる。

「機体に搭載されたサウンドブースターを使用する為、戦闘訓練中に歌ってもらおう」

「あのブースターって、何か意味があるんですか？」

アンジエイがサウンドブースターに関してネスティーに質問する。

「あれは、君達の歌をエネルギーに変換する為の装置だ」

「そのエネルギーで、何が出来るんですか？」

アンジエイに続いて弥生が質問をする。

「そのエネルギーは、歌の感情として相手の心に直に訴えかける事が出来る。分かり易く言えば、直に歌を聴かなくてもその歌エネルギーを浴びる事で、歌の感情を直に感じ取る事が出来ると言う事だ」

「う、うーん……歌の感情を直に感じる事が出来る？ 何かイマイチよく分からないなあ……」

ネスティーの説明を聞いた弥生は、説明の内容が理解出来ずに頭の中が混乱していた。

もちろん弥生だけでなく、他の五人もネスティーの説明を理解している者は、一人もいなかった。

「準備が出来次第、全員出撃」

ネスティーの命令を受けて、六人は機体に搭乗して次々と出撃を開始する。

HEXAGRAMの搭乗するVF-11D改は出撃後、機体をバトロイドへと変形させる。

「全機、サウンドブラスター展開」

6機のVF-11D改がバトロイド形態に変形が完了したのをモニターで確認したネスティーは、サウンドブラスター展開の指示を出し、VF-11D改の機体背部に装備されたサウンドブラスター先端部分が展開する。

それと同時にBGMが流れ始め、HEXAGRAMは歌い出す。

―果てしない空に 輝くShooting Star……

HEXAGRAM達が歌い始めて、しばらくするとメグミとフェイルの搭乗機から歌エネルギーのオーラが放出される。

青白い光を放ち、その光は少しずつ大きく膨れ上がっていく。

「凄……」

歌エネルギーを初めて見るスタッフ達はモニターで確認して、その輝きと圧倒的な大きさに思わず息を飲む。

「やりましたね、ネスティー大尉」

「いや、ダメだ。全員の歌エネルギーを放出しなければ意味が無い」

スタッフ達が歌エネルギーに一喜一憂する中、ネステイターだけ表情を変えずにモニター越しに歌エネルギーを放出しない機体を見続けていた。

しばらくして、メグミとフェイルに続き、レナ搭乗機も歌エネルギーを放出し始める。

それでもネステイターの表情は、微動だにしなかった。

「おはようございます。遅れてごめんなさ……」

訓練開始から少し遅れてアンナが司令塔へ入る。

そして、眩く輝く歌エネルギーを見たアンナは、少しだけその光に見惚れていた。

「……あれが、その歌エネルギーですか？」

歌エネルギーを初めて見たアンナは、放出されている光に指を指してネステイターに質問する。

「そうです。5万チバソングを越えると、サウンドブースターから歌エネルギーが放出されます」

「チバソング？」

アンナは、初めて聞く言葉に疑問を感じる。

「あの歌エネルギーは、マクロス7船団の軍医であるDr千葉が発見したと言われています。その歌エネルギーを測定する単位がチバソングだそうです」

「そうですか……でも、チバソングだなんて何だか変な測定単位ですね」

「それに関しては、私もそう思います」

「アンナのチバソングと言う単位に対しての否定的な意見にネスティーも即答で応える。」

訓練から30分が経過して何度もHEXAGRAMが歌い直す中、やっと弥生の搭乗機も歌エネルギーが放出され始めた。

「やはり、個人個人の歌への感情が足りないからなのか……」

すぐに歌エネルギーを放出しないメンバーや全く歌エネルギーを放出しないメンバーを見たネスティーは、苛立ちを覚える。

約1時間の戦闘訓練を終えて、六人はネスティーの元に集合する。

最終的にアンジェイと武だけが最後まで歌エネルギーを放出する事も無く訓練は終了した。

結果に満足出来なかったネスティーは苛立ちが隠せず、その不満そうな表情は、HEXAGRAMやスタッフ達にも伝わってきていた。

「先程の訓練を見て色々と思ったが、君達は歌う時に感情を込めているか？」

「感情って言われても……」

「なあ」



ネステイーの問い掛けに対して六人は疑問を持ち、お互いに顔を見合わせる。

「歌エネルギーは、HEXAGRAM個人個人の歌の感情が高まった時点でサウンドブラスターから発生する仕組みだ。メグミとフェイルは歌い始めてから発動に1分。他の者は5分以上掛かっている」

「そんな事を言われなくても、私達は真剣に歌ってるよ！」

ネステイーの言葉に不満を持ったのか、弥生が強く反論する。

「弥生の言う通りに真剣に歌うのは、もちろん必要だ。だが、それ以外にも歌う時にもつと感情も込めて歌って欲しい」

「感情も込めてって……言うのは簡単だけど、いきなりは無理よ！」

「そうですね、ネステイー大尉」

ネステイーからのお願いにレナとアンジエイは、ただ困惑するだけだった。

二人の言う事も正論ではある。

しかし、敵は歌エネルギーが出るのを待ってくれないのも事実である。

「とにかく、歌への情熱を持ってみるんだ。そうすれば、何かが変わるかも知れない」  
メグミを除く五人は、ネステイーの言葉に不信感を持ち始める。

このまま戦場で歌う事に本当に意味があるのかと。

その日からボイストレーニングを重点的に行い、夜遅くまで残つての特訓が始まっ

た。

ネスティーも共に残ってメンバーやスタッフに差し入れをしたり、挫折しそうなメンバーには、激励をして励ます等のメンタル面のサポートを行う。

それは、少しでも歌エネルギーを完全な物に近付けたいと言うネスティーの思いでもあった。

その様子を見ていたメグミも自ら積極的にネスティーのサポートをしたり、メンバーを元氣付けていた。

そんなメグミの頑張りにネスティー自身も感謝をしていた。  
居残り特訓を始めて5日後、ついにその成果が見え始める。

なかなか歌エネルギーを放出しなかった武やアンデイも放出をし始め、当初に比べて全員の歌エネルギーの放出までの時間がおおよそ3分まで短くなった。

この様子を見て、徹夜続きで寝不足状態のネスティーは一気に目が覚める。  
「ついに……ついにやったか！」

6機のVF-11D改は、皆それぞれの歌エネルギーを放出していた。

六人は放出されるお互いの歌エネルギーを見て確認しあう。

「皆、よくやったな」

珍しくネスティーが笑顔で六人を迎える。

普段、あまり見せないネスティーの笑顔にフェイルを除く五人は、お互いに顔を見合わせて笑顔を見せる。

最初のうちはメグミ以外のメンバー全員が疑心感を持っていたが、ネスティーの献身的なサポートを受けていくうちに徐々にその疑心感は解消されていった。

だからこそ、今の五人はネスティーの笑顔も受け入れられているのだろう。

「だが、まだこれは始まったばかりだ。明日からは模擬戦でも歌って、歌エネルギーを出してもらおうからな」

先程まで笑顔を見せていたネスティーは、再びいつものクールな表情に戻す。

「えええええ！ せっかく歌エネルギーも出せるようになったばかりなのに、それは勘弁して欲しいなあ」

ネスティーからの忠告に弥生は、嫌そうな表情をする。

「弥生、あまり時間が無いんだ。我慢してくれ」

「ぶー、わかったわよ」

弥生は少し口を尖らせる。

本来はサウンドブースターを使用して全員が歌エネルギーを出すのを3日以内にする予定だったのが、実際には5日も掛かってしまっている。

このペースのままでは、HEXAGRAMのデビューに間に合わなくなり、HEXA

GRAMや自身の信頼関係に大きく響いてしまう為、それだけは避けなくてはならないのだ。

HEXAGRAM結成から2ヶ月が過ぎ、厳しい訓練やレッスンを経て、ついにデビューシングルのレコーディングが始まる。

レコーディングは武の父が経営するギャラクシーレコードの貸しスタジオで行われる。

HEXAGRAMメンバーも待ち望んでいたレコーディングに期待に胸を膨らませていた。

「紹介する。彼が君達のマネージャーになるファニー鈴木さんだ」

「ファニーって呼んで良いわよ」

ネステイーに紹介された男は、細身でナヨナヨした身体とワカメのような髪。

そして、独特のオネエ言葉が特徴だった。

そんなファニーを見て、メグミと武以外はドン引きしていた。

「まあ……彼の姿は置いといて、マネージメントは目を見張る物があるから、ちゃんと言う事を聞くように」

ネステイーも彼に対しての対応の仕方が分からないらしく、とりあえずマネージメント部分を推していた。

「あくら、武ちゃん。久しぶりね」

メンバーの中から武の姿を見たファニーは、懐かしさからか声を掛ける。

「お久しぶりです、ファニーさん」

「あーたの姿を全然見ないから、アタシてつきり引退したかと思っちゃったわよ」

「いえいえ。また、よろしくお願ひします」

ファニーの皮肉めいた言葉にも武は、全く動じる事無く挨拶をする。

メグミはファニーが珍しく見えたのか、ファニーの周りをキョロキョロと見つめていた。

「ちよつと、何よ……あーた。アタシの事をそんなにジロジロと見ちゃって」

自分をキョロキョロと見回すメグミをファニーは不審に思い話し掛ける。

「ファニーさんは、どうしてそんな話し方をするんですか？」

何も知らないメグミは、ファニーの話し方が珍しく思っているようだ。

「まったく、失礼な子ね。フン、アタシは女とガキは嫌いだから答えてやんない」

メグミの質問に対してファニーは、素っ気ない対応をする。

「……ひどい。そんな言い方しなくてもいいのに……ひどいです」

ファニーの素っ気ない対応にメグミは、思わず涙目になる。

「ちよ、ちよつと、アンタ泣かないでよ。いい、この話し方になったのは、アタシも色々

とあったのよ。わかった？」

涙目になるメグミを見たファニーは、焦りだしてメグミを宥める様に質問に応える。

「はい……ありがとうございます、ファニーさん」

涙目になりながらもメグミは、ファニーに礼を言う。

「まったく……あの娘といると、こっちまで調子狂っちゃうわ」

ファニーは、溜め息を吐きながら音響室に入る。

レコーディングスタジオには、ネスティーの他にも新城夫妻やガーネフ大佐も姿を見せていた。

「ネスティー大尉。ウチの息子は、頑張っていますか？」

「ええ。武君は、最初の頃に比べてかなり良くなっています」

当初は戦闘訓練で悲鳴を上げたり、レッスンでは途中で手を抜いたりしていた武も、この2ヶ月で悲鳴を上げなくなり、レッスンも夜遅くまで行ったお陰で音外しも徐々に減ってきていた。

「ただ……」

「ただ？」

「その、ダンスがまだ……」

ネスティーは、苦笑いしながら応える。

歌声や声量に関して、レッスンの積み重ねにより周りと同等にはなってきたが、ダンスは下手をするとオーデイションで自身でダンスが苦手だと告白したフェイルよりも劣っていた。

「そうか……よくよく考えると、私が甘やかしすぎたのも原因の一つかも知れんな」

自ら息子を芸能界に入れて特に厳しく指導せずに好きな様にやらせていた事を幸一郎は、心の底から深く反省する。

しかし、ネスティーのお陰で自分から取り組もうとする武の姿の話を聞いて心から感謝はしていた。

「なあ、ネスティー君。ウチの娘はどうかね？」

どうやらガーネフも娘の事が気になるようだった。

「レナさんは元々の素質が高いのか、かなり良い線まで来てますね」

「そうだろうさうだろ。ワシの娘だからな」

ネスティーの誉め言葉にガーネフは、自慢げな笑みを浮かべる。

「ただ……」

「ただ？」

「あのワガママな性格、本当に何とかありませんか？」

ネスティーは、溜め息を吐きながらガーネフにお願いする。

レナ自身はフェイルと同等の歌唱力を持ち、かつクラシックバレエの経験のお陰で新しいダンスの飲み込みも早く、HEXAGRAMメンバーの中で一番実力があるとネステイーも思う程だ。

しかし、何かにつけて反発してなかなか言う事を聞かない為、ネステイー自身も手を焼いている。

「いやあ、あれはワシも手を焼いているんだよ。ネステイー君の方で何とかしてくれんか？」

ネステイーのお願いに対してガーネフは、頭を掻きながら苦笑いして逆にネステイーにお願いをする。

そんなガーネフを見たネステイーは、思わず呆れ顔をしていた。

何だかんだ言いつつもレコーディングも無事に終了し、メンバーも胸を撫で下ろす。

デビューまで1ヶ月を切り、メンバーは訓練やレッスンにネステイーはフアニーを連れてのスポットナー各位への挨拶まわりに大忙しだった。

そして、迎えたデビュー当日。

シテイ8市役所内の大講堂で記者会見を兼ねたパーティーが開催される。

艦長であるアンナや市長のマイルズを始め、各音楽業界関係者やマスコミ関係者も一同に集まる中、ネステイーがステージへと上がり挨拶をする。



「本日はお忙しい中、HEXAGRAMのデビュー記者会見にお集まり頂き、誠にありがとうございます。このメンバーは芸能活動以外にも戦闘中に歌い、外的生物への精神的な効果を訴えかける活動も行います。この活動に関しては色々と非難はあるかも知れませんが、どうか温かい目で見守りくださいますよう、よろしく願います」

周りから盛大な拍手を受けて、ネスティーは一礼する。

自身で企画を立ち上げてデビューまでの約3年近く。

当初は上層部から反対意見がある中、艦長であるアンナだけが認めてくれた喜び。

そして、オーディションを踏まえて結成されたHEXAGRAM。

自身で造り上げた人工生命体であるメグミを除くと、色々と個性が強すぎるメンバーだったが、それでもネスティーは色々とメンバーのサポートをして、ここまで築き上げたのだ。

それ故に胸に込み上げる感情もひとしおだった。

「では、HEXAGRAMに歌っていただきます。タイトルはShooting Starです」

ネスティーの紹介を受けてHEXAGRAMは、ステージに登場する。

それぞれが華やかな衣装を身に纏い歌い始める。

「これは、まだ始まりに過ぎない。これからだ……」

その様子を見てネスティーは、ポツリと呟いていた。

AD2048年7月7日。

七夕当日、HEXAGRAMはデビュー曲のタイトル通りにデビューを果たす。

## 第19話 ニュー・ホーム

マクロスと巨人族の争いが激化する中、銀河中に少女の歌声が響き渡り、男と女に分かれて争いをしてきた巨人族は争いを止めて少女の歌に耳を傾ける。

そして、その歌声にのせて巨人族は手を取り合い、マクロスと共に敵基幹へと向かう。

巨人族の協力を経たマクロスは、ついに敵基幹の突入に成功する。

少女の歌にのせて、1機のバルキリーが敵中枢部目掛けて飛ぶ。

道中の猛攻を次々とかわしてバルキリーは、敵中枢部へと辿り着く。

少女の歌もクライマックスを迎えると同時にバルキリーは敵中枢部を攻撃する。

敵側の断末魔が轟き、ついに戦いは終局を迎えるのだった。

その様子を少年は、目を輝かせながらテレビ画面越しに見つめていた。

「ママ、僕も大きくなったらバルキリーのパイロットになる！　それで、パパを殺した奴をやっつけてやるんだ！」

少年は、銃を構えて撃つ素振りを母親に見せる。

「ママ、僕もバルキリーのパイロットになれるよね？」

「ええ、タクヤならなれるわ」

母親はタクヤの頭を優しく撫でながら、タクヤの問い掛けに微笑みながら話す。

……クヤ

「絶対に守ってやる」

……クヤってば！

「パイロットになるんだ……」

わあああああああつ！

「どわあああああああ！」

突然の大声にタクヤは、驚いて目を覚ます。

『やっと起きた』

モニターに少し笑ったエスターが映る。

『んだよ、びつくりするじゃねえか！』

気持ちよく眠っていた所を邪魔されて、タクヤは怒りを露わにする。

『だって、タクヤは普通に起こしても起きないじゃない』

『ぐ……』

エステーの言葉に凶星を突かれたのか、タクヤは言葉を詰まらせてしまう。

『……なあ、俺達って今は何処を飛んでるんだ？』

『ごめん、僕も分からないよ』

ゼントラーディ人グランツの罠にハマり、苦戦を強いられたブラックバルチャー隊は、タクヤとエステーを逃がして壊滅した。

そして、ブラックバルチャー隊基地が存在する惑星ローグもグランツの艦砲射撃により壊土と化す。

二人は、ブラックバルチャー隊が完全に全滅したのをまだ知らない。

『一応、付近の統合軍基地やステーションに呼び掛けてはいるんだけど……応答が全然返ってこないんだ』

統合軍との通信が繋がらない状態にエステーは、不安な表情を見せる。

『とにかく、何回か通信してみるよ。何処かの基地が拾ってくれるかも知れないし』

『意外にゼントラーディの基地に拾われたりして』

『タクヤ……怖い事を言わないでよ』

タクヤの冗談にエステーは、思わず身を震わせる。

しかし、その冗談も本当になる事もあるので、油断は出来ない状態だった。

『ねえ、タクヤ』

『何だよ?』

『僕達、どうなるんだろう……』

『バカ、不安を煽るんじゃないよ!』

不安を口にするエスターをタクヤは叱咤する。

しかし、タクヤ本人も内心は不安感が募っていた。

何処からも救援が無い場合、このまま野垂れ死ぬのは明白だった。

「しかし、こうも静かだと不気味だよなあ……」

辺り一面、音もなく深い闇に包まれ、時々デブリや星屑が見えるだけだった。

『ねえ、タクヤ』

不安げな表情でエスターが通信を入れてくる。

『ん?』

『隊長達……無事だよね』

『あ、ああ……大丈夫だって、あのおっさんが簡単に死ぬ訳ねえって。今頃はゼントラーデイを追っ払って、基地でふんぞり返ってるって』

ドルチェフ達の安否を心配するエスターにタクヤは、冗談混じりに話して励ます。

どんな危機的状況も仲間達と共に乗り越えてきたドルチェフ。

タクヤ自身も、その実力は認めており、そう簡単に死ぬ様な人物ではないと内心思っ

ていた。

『……なら、良いんだけど』

タクヤの冗談混じりな話でもエスターの心には、何一つ通じていなかった。

『とりあえず、何回か通信して呼び掛けるしか他に方法は無いんだろ?』

『それしか無いよね』

『じゃあねえなあ。じゃあ、交代で呼び掛けてみようぜ』

二人は、少しでも活路を見出す為に交代で救難通信を手当たり次第に出す。

「くそ、コレが最後のメシか」

タクヤは非常食のチューブを絞り出すようにして強く吸う。

そして、吸い終わった非常食のチューブを後部座席に放り投げる。

「あー、腹減ったなあ……エスターなら予備を持つてるかな?」

非常食を全部食べ尽くしたが、それでもお腹の虫が鳴っていたので、タクヤはエスターに通信を入れる。

『エスター』

『どうしたの?』

『悪い、非常食の予備持ってない?』

『え? もう食べちゃったの?』

タクヤの言葉にエスターは、思わず呆気に取られる。

『しゃあねえじゃん、育ち盛りなんだからさ』

能天気に見えるタクヤにエスターは、深い溜め息を吐く。

『もう……じゃあ、今から渡すから止まって』

『サンキュー』

2機は、エンジンを止めてエスターは、自分の分の非常食を持って機体から外に出てタクヤ機に向かう。

タクヤは、機体のキャノピーを開けてエスターから非常食を受け取ると手を振って合図する。

「助かった助かった」

タクヤはエスターから貰った非常食のキャップを開ける。

『タクヤ』

突然、エスターから通信が入る。

『な、何だよ』

『少しは我慢しなよ』

非常食のキャップを開けようとしていたタクヤをエスターは咎める。

『はいはい、わかりましたよ』



素っ気ない返事をしてタクヤは、非常食を後部座席にに放り投げる

「え？」

「何だ？」

突如、2機のレーダーが機影をキャッチする。

『エスター』

『何だろう？ データ照合しても味方でもないし、ゼントラーデイの機体でもないみたい……』

エスターがデータ照合をするも、その機影に該当するデータは一切表示されていない。なかった。

『ちよ、もしかしてヤバイ感じじゃねえか？』

『僕も分からないよ。しかも、結構速度が速いし……あと30秒で、こっちに向かってくるよ』

徐々に近付いてくる機影にタクヤとエスターは、迫り来る恐怖感に思わず固唾を飲む。

『……5、4、3、2、1……来た！』

『うわああああ、助けてくれー！』

恐怖感で顔を強張らせる二人の前に近付いてきた機影は、特に二人に何かをする訳でも無く、猛スピードでそのまま通り過ぎて行く。

『え?』

『あれ?』

そのまま通り過ぎる機影を二人は、振り返って追い掛けるも既に姿は見えなくなっていた。

『何だったんだ?』

『さ……さあ?』

二人は、お互いに顔を見合わせつつも何事も無かった事に胸を撫で下ろす。

『なあ、さっきの奴さあ……凄くボロボロだったよな』

『一瞬しか見えなかったけど、そうなんだ』

『あと、21って数字が書いてあったぜ』

『21?』

『ああ』

『あまり分からなかったけど、動体視力凄くいいんだね』

音速の速さで通り抜けた機影の特徴を語るタクヤの凄さにエスターは感心していた。

「ん?」

謎の機影が通り過ぎて数時間後、2機のレーダーに三つの機影らしき物が映る。  
『タクヤ』

レーダーを確認したエスターから通信が入る。

『俺達、助かったぜ!』

タクヤは、救難信号が届いて救援が来たと思いき喜ぶ。

『え……本当に救援なのかな?』

喜ぶタクヤを後目にエスターは疑問を持つ。

先方から全く連絡が来る事なく、そのまま機影が近付いてくるのは、どう考えても怪しかった。

『馬鹿だな、絶対に救援に決まってるって!』

タクヤは、完全に救援と決めつけていた。

『待つて、タクヤ……レーダーの機影スキャンでヌージャデル・ガーって出てるよ』

『……マジっスか?』

エスターの言葉にタクヤは、そのままレーダーを確認する。

レーダーには、機影がゼントラーデイ軍のパワードスーツ兵器ヌージャデルガーである事を表記していた。

『ちよっ、マジかよ! やべえって!』

敵機をリーダーで確認したタクヤは、慌てふためく。

タクヤ達を確認した3機のヌージャデルガーは、二人が戦闘態勢をする間を与える事なく攻撃を開始する。

『タクヤ、戦うしかないよ』

『くっそー、武器も燃料もそんなに無いのに！』

2機は、散開して迎撃態勢を取る。

グラントとの戦いやここまで逃げ延びた状況で弾薬もプロペラントタンクの燃料の残りも少ない状況だった。

2機は散開後、3機のヌージャデルガーを囲むように飛行する。

『タクヤ、このままフォーメーション12』

『おうー』

3機のヌージャデル・ガーの真横にきた状況で、2機はいつきにミサイルを撃ち込んでそのまま反転行動をする。

3機のヌージャデル・ガーは迎撃行動や回避行動をするものの、そのうちの1機は墜落され、それぞれがタクヤとエスターに仕掛ける。

エスター機は、追い掛けて来るヌージャデル・ガーの攻撃をかわしながらミサイルを撃ち込みつつガンポッドで応戦する。

対するヌージヤデル・ガーもエスターの攻撃をかわしながら格闘戦に持ち込もうとする。

「もう少し……」

ヌージヤデル・ガーの攻撃を回避しながらエスターは、ヌージヤデル・ガーとの距離を確認する。

「今だ」

ある程度の距離をレーダーで見計らったエスターは、操縦レバーを引きつつ逆加速させながら機体をバトロイドに変形させて反転させる。

そして、機体を反転させた勢いに任せたまま格闘戦を仕掛けて来るヌージヤデル・ガーに体当たりを食らわせる。

体当たりを食らって態勢を崩すヌージヤデル・ガーの隙を突いて、エスター機はガンポッドで攻撃して撃墜する。

『タクヤ、そっちは大丈夫？』

敵機を撃墜したエスターは、そのままタクヤに通信を入れる。

『こっちは、マジでやべえよ！』

プロペラントタンクの推進剤が少ない為、思うように出力が上がらず、タクヤ機はヌージヤデル・ガーの攻撃を避けるのがやっとだった。

『タクヤ、僕が行くまで何とか頑張って』

『へっ、エスターの助けなんか借りなくたって大丈夫だよ!』

自身で敵機を撃墜したい意地があるのか、タクヤはエスターの救援を断る。

「それでも喰らいやがれ!」

後ろから追跡するヌージャデル・ガーにタクヤ機は頭部レーザー機銃で応戦するが、簡単に避けられて瞬く間に間合いを詰められる。

「なら、こいつで」

タクヤは以前使ったガウオーク・ファイターに変形しての逆加速で相手の隙を突く戦法を試みる。

しかし、逆加速をするタイミングが早すぎたのか戦法を読まれてしまい、ヌージャデル・ガーはタクヤ機を上から羽交い締めにする。

「しまった!」

『タクヤ!』

タクヤの救援に追いついたエスターは、ガンポッドでタクヤ機を羽交い締めにしていくヌージャデル・ガーを狙おうとする。

しかし、エスター機がこつちを狙っているのに気付いたヌージャデル・ガーは、羽交い締めにしたタクヤ機を盾にする。

「これじゃあ、タクヤに当たっちゃう」

タクヤ機を盾にするヌージャデル・ガーを見たエスター機は、ガンポッドを撃つの躊躇う。

「くっそー、これでも食らえー！」

タクヤは頭部レーザー機銃の発射ボタンを押すが、ヌージャデル・ガーに羽交い締めされた時に壊されたのか、ボタンを押しても発射されなかった。

「ゲ、何だよこんな時に使えねえ……じゃあ、何とか足だけでも動けー！」

タクヤ機は、バトロイドの右膝を曲げて振り子の原理で脚部を振り上げて、そのままヌージャデル・ガー目掛けて一気に振り下ろす。

機体上部しか掴んでいないヌージャデル・ガーは、タクヤ機のキックを喰らい、一瞬だけ隙が出来る。

「よっしや、今だー！」

一瞬の隙を突いたタクヤ機は、もう片方の足でヌージャデル・ガーを蹴って、そのままエンジン全開で急速離脱する。

『エスター、撃てー！』

タクヤ機がヌージャデル・ガーから離れるのを確認すると同時にエスター機は、ガンポッドを撃ち込み撃破する。

「ふうー……」

危機的状況を回避し、タクヤは胸を撫で下ろす。

『大丈夫？』

エスターが心配しながらタクヤに通信を入れる。

『ああ、大丈夫。サンキューな』

『もう、あまり無茶しないでよ』

『悪かったよ。エスターには、ホント感謝してます』

モニター越しにタクヤは両手を合わせる素振りをエスターに見せる。

『うかうかしていたら、またやって来るから急ごう』

2機は、再び宛もなく宇宙を跳び続ける。

『こちら統合軍ブラックバルチャー隊、応答してください』

相変わらずエスターは、可能な限り無線で呼び続ける。

そんなエスターとは対照的にタクヤは、呑気に大きな欠伸をしていた。

『どうだ、エスター』

『駄目、全然繋がらないよ。はあ……』

いつまで経っても繋がらない通信にエスターは、大きな溜め息を吐く。

『なあエスター。そんなにせかせかせかしたって何も変わらないんだし、少しはのんびりし



ていようぜ』

『……うん、そうだよね』

『そうそう』

エスターは気楽にしているタクヤに呆れつつも、その気楽な考えに少しだけ納得して気を休める事にする。

「あゝあ、それにしてもヒマだなあ。何かラジオやってないかな？」

何もする事が無く、退屈になったタクヤは、コンソールパネルを弄ってラジオの周波数を色々合わせせる。

「やっぱ、全然繋がらないか……お？」

『皆さん……は。今週も始ま……シテイ8ミュージック……この番組はマクロス8内シ……ら全銀河の……範囲へ向け……』

ちょうどラジオ周波数が合ったのか、パーソナリティの話声が聞こえる。

しかし、殆どノイズ混じりの為、時々途切れて聞こえる。

「んだよ、殆どノイズばっかじゃねーか！」

タクヤは途切れ途切れに聞こえるラジオにイラつき、コンソールパネルを思い切り叩く。

「って、待てよ……」

流れて来るノイズ交じりのラジオを聞いたタクヤはふと閃き、エスターに通信を入れる。

『なあ、エスター』

『なあに?』

『今、ラジオを聴こうとしたらマクロス8船団っぽい所からのラジオが繋がったから、もしかしたらマクロス8船団が近いかも知れないぜ』

『本当!?!』

タクヤの通信を聞いたエスターは、僅かな希望を持つ。

『ああ、嘘だと思うなら周波数を合わせてみなよ』

『う、うん』

タクヤに言われるがままにエスターもコンソールパネルを弄ってラジオの周波数を色々と合わせる。

しばらくすると、ノイズ混じりに音楽が聴こえてくる。

『今、ミンメイの天使の絵の具ぼいのが聴こえているけど、これがそうなのかな?』

『ああ、多分それそれ』

『じゃあ、救難信号と通信をしてみるよ』

『ああ、よろしくな。繋がったら教えてくれよ』

エスターが再び救難信号を入れる事を確認すると、そのままタクヤは通信を切る。  
(タクヤ、一緒にしてくれないんだ……)

結局口だけで協力すらしてくれないタクヤにエスターは、深い溜め息を吐きつつもマクロス8船団への救難信号と通信を入れる。

先程の戦闘で既にお互いに弾薬もスーパードパックの燃料も底を尽き掛けていた為、エスターにとっては藁にも縋る様な気分だった。

新たな新天地に向けて銀河を航海中のマクロス8船団。

今日も平穏無事に広い銀河を航海していた。

今の所は特に大規模な戦闘も無く、殆どが哨戒任務を主としている。

「あら、救難信号?」

ブロンドヘアーに髪を緩くウェーブにし、小麦色の肌が特徴的な女性オペレーターはエスターからの救難信号に気付く。

「どうしたの、カレン」

紫色のロングヘアーに大きなリボンが特徴の女性オペレーターがエスターの救難信号に気付いたカレンに声を掛ける。

「ラーラ、何か救難信号が出てるみたい。ちょっと確認してくれる」

カレンからの救難信号確認うを受けて、ラーラはレーダー探索を行う。

「うん……あ、ホントだ」

レーダーには、救難信号を発信している機影がハッキリと映し出されていた。

「艦長、2000km11時の方向より救難信号をキャッチしました」

救難諡号をレーダーで確認をしたラーラは、振り返って艦長であるアンナに救難信号の件を報告する。

「救難信号ですか？」

「はい、識別コードは統合軍からです」

「分かりました。では、こちらからも通信を入れてください」

「了解。こちら、第8次長距離移民船団マクロス8船団です。応答してください」

ラーラは、救難信号を出しているエスターへ通信を出して呼び掛ける。

『……こちら……船団……して……マク……応……』

マクロス8船団の通信が僅かながら聞こえてくる。

「!？」

マクロス8船団からの通信にエスターは、驚くと同時に安堵感を感じていた。

『タクヤ、マクロス8船団に……マクロス8船団に繋がったよ！』

嬉しさのあまり、エスターは思わずタクヤに通信を入れる。

『マジか！ やったな、エスター』

『うん!』

エステルは、マクロス8船団からの通信に応答する。

『こちら、統合軍第427航空部隊所属ブラックバルチャー隊。マクロス8船団応答願います』

『……ち……8船……回線……ので聞き……』

相変わらず回線状況が悪い為、マクロス8船団からの通信はノイズ混じりだった。

「やはり、もう少し近付かなきゃダメかな」

エステルは回線状況が良くなるまで必死に通信を繰り返す。

『タクヤも通信してよ』

先程からコクピットで欠伸をしているタクヤにエステルは通信を入れて、マクロス8船団に呼び掛けるように促す。

『ええー! 俺もやるの?』

『当たり前でしょ』

『何か、めんどくさ……』

面倒くさい態度を取ろうとするタクヤにエステルは、睨んだ目付きで訴えかける。

『わ、わかったよ。やればいいんだろ』

エステルに睨まれたタクヤは、まるで蛇に睨まれた蛙の様に大人しくなり、黙ってマ

クロス8船団へ通信を入れ始める。

『……ら、ブラッ……ワード……願い……』

『……タク……聞こ……して……』

マクロス8船団も同様にエスター達の通信は、殆どノイズ混じりで聞き取れなかった。

「艦長、ノイズが酷くて通信が出来る状況じゃありません」

通信を続けるカレンは、通信状況の酷さをアンナに報告する。

「分かりました。では、救援部隊を向かわせましょう。カレン少尉、救難信号の発信源は？」

「現在、発信源は12時の方向を2, 500kmです」

「わかりました。近隣の部隊を至急救援に向かわせてください」

「了解。こちらバトル8ブリッジ、12時の方向2, 500kmにて救難信号をキャッチ。至急、救援部隊を発進させてください」

アンナの指示を受けたカレンは、救援部隊の発進を要請する。

『こちらライジングリーダー。丁度これから偵察任務へ行くところだ。偵察ついでに救難信号の発信源へ向かいます』

『バトル8ブリッジ了解』

「これで一安心ですね」

ライジンググライダーとカレンの通信のやりとりを聞いたアンナは、ホツとした表情をしていた。

ライジンググライダーとの通信を終えたカレンもアンナの方を振り向いて笑顔を返す。

数分後、第三次防衛ライン駐在のステルスフリーゲート艦よりライジンググライダー率いる3機のVF-11がエスター達の元へ向けて発進する。

「ノイズが酷いから、もっとマクロス8船団に近付かなきゃ」

エスターはマクロス8船団に早く近付く為、エンジンの出力を上げる。

しかし、プロペラントタンクの推進剤が底を尽きそうな為、思うようにエンジンの出力が上がらなかった。

「僕の機体も推進剤が無くなったか……」

モニターにプロペラントタンク内の推進剤容量が0に近付いているのを確認し、エスターは溜め息を吐く。

「?・機影」

リーダーが3機の機影を捉える。

『エスター、リーダー見たか!』

リーダーを確認したタクヤがエスターに通信を入れる。

その表情は、迫り来る恐怖感に怯えていた。

『う、うん……さつきから僕の方にもレーダーアラートが鳴っているよ』

『なあ……もしかして、敵なんじゃね？』

先程の戦闘を思い出したタクヤは、不安な表情を見せる。

『こ、怖い事を言わないでよ……もう弾も燃料も殆ど無い状態なんだから、ここで戦っても勝てるかどうか微妙だよ』

先程の戦闘でお互いに殆どのガンポッドとミサイルを打ち尽くした為、ガンポッドの弾も10発撃てるかどうかの状態であり、プロペラントタンクの推進剤は無いに等しい為、逃げる事も出来ない状態だ。

『うあああああ、俺、まだ死にたかねえよおおお！』

どうする事も出来ない状況にタクヤは、絶望感を感じて泣き叫ぶ。

『こちらマクロス8船団所属ライジング小队。聞こえるか、どうぞ』

男からの通信がタクヤとエスターに入る。

「……………え？」

絶望感に打ちひしがれていた二人は、男の通信に目が点になる。

レーダーには、3機のVF-11の機影がスキャンされていた。

「た、助かったあ……………」



リーダーに映った機影が味方と分かると、タクヤは安堵感から身体がヘナヘナと崩れていく。

「よ、良かった……本当に良かった」

エスターは、味方の救援通信である事に涙目になって喜びを噛みしめていた。

『おい、生きているのか？ 生きているなら返事をしろ！』

再びライジングリーダーから通信が入る。

『す、すみません。こちら、統合軍ブラックバルチャー隊のエスター・ワードナとタクヤ・バーズラッド二名です』

エスターは、ライジングリーダーからの通信で我に返り、慌てて通信を返す。

『おお、生きていたか。二人ともマクロス8船団まで飛べるか？』

『すみません、プロペラントタンクの推進剤も底を尽きそうなので、正直飛べるかどうか……』

『そうか。なら、今から船をこっちに寄越すように手配をするから待つてろ』

『ありがとうございます』

『イヤッホー！ 船だ船だ』

お礼を言うエスターとテンションを上げて喜ぶタクヤをよそにライジングリーダーは、マクロス8船団へ回線を開ける。

『ライジンググリーダーよりバトル8ブリッジ』

『こちらバトル8ブリッジ』

ライジンググリーダーの通信にラーラが応じる。

『連絡のあった、やつこさんを確認。どうやら推進剤が切れてるらしく、そっちへの巡航は困難と思われる。すまないが船を1隻手配をしてくれ』

『了解』

通信を終えたラーラは、アンナの方を振り返る。

「艦長、ライジング小隊が救難信号場所に到達して生存者も確認したそうです」

「そう、それはよかった」

救難信号を出した生存者を確認出来た報告を受けたアンナは、ホッと息を吐く。

「それから救難信号の機体が推進剤が切れて航行が難しい為、救出にフリーゲート艦の手配依頼が来ています」

「わかりました。後方支援部隊の1隻を至急向かわせてください」

「了解」

アンナの指示を受けたラーラは、後方支援のフリーゲート艦に通信を入れる。

『バトル8ブリッジより、Dフィールド艦隊へ。12時の方向2, 500kmの救難信号発信源へ1隻を向かわせてください』

『こちらDフィールド艦隊。これより救難信号発信源へ向けてフリーゲート艦を1隻向かわせませす』

ラーラからの通信を受けたDフィールド艦隊は、哨戒任務待機中の艦隊の中から1隻のフリーゲート艦を選出してがタクヤ達の元へ向かわせる。

『船の手配は済んだから、しばらく待っていてくれ』

『ありがとうございます』

『船が来るまで俺達が護衛しているから休んでいてくれ』

『でも……』

エスターは、わざわざ救援に来て貰いつつも護衛をしている中、自分達が休むのも申し訳ないと言う気分だった。

『いいじゃん。せつかく休めって言ってくれているんだからさ。お迎えが来るまで休んでいようぜ』

『そうそう。休めるうちに休んでおくのも大事だぜ』

タクヤの提案にライジングリーダーも賛同していた。

『……分かりました。では、お言葉に甘えて休ませて頂きます』

ドルチェフの命令で戦場から離脱し、宛もなく宇宙をさまよっていた二人は、余程疲れたのか、しばらくして眠りに入る。

『あー、こちらブラックバルチャー隊のタクヤ・バースラッド。どうぞ』

『こちら第8次長距離移民船団マクロス8船団所属、小型フリーゲート艦ナギサ。艦長の命令で貴君のお迎えに上がりました。これよりカタパルトを展開しますので、サーチライトに合わせて着艦願います』

『りよーかいりよーかい。すぐに向かっちゃいますよ』

ナギサからの通信を終えたタクヤは、エスターに通信を入れる。

『おいエスター、迎えが来たぞ』

『……』

タクヤからの通信にエスターからの反応は無かった。

ふとエスター機の方を振り向くと、エスターは深い眠りについていた。

恐らく、今までの緊張感からの解放から疲れが一気に来ていたのだろう。

『おい、エスター。起きろって!』

「ん……」

タクヤの通信にエスターは、目を覚ます。

『迎えが来たんだね』

『ああ。着艦許可が降りてるから行こうぜ』

ナギサからのサーチライトを頼りに2機は残りの推進剤を使って、そのままカタパル

トへと着艦する。

着艦後、二人は案内係に部屋へと案内されてマクロス8船団到着まで部屋でくつろいでいた。

「あー、やつとラクになったあ〜♪」

タクヤは、部屋のベッドに寝転がり開放感を実感する。

約3日間、二人は救難信号を出しながら遭難生活を強いられていたので、まさに地獄から天国の様な感じだった。

「移民船団に拾って貰えて良かったよね」

「ホントホント。コレが変な部隊とかだったら、また同じ事の繰り返しだったかもなあ」

「……隊長達、無事だといいいね」

自分達が無事に助かった事で安心したのか、ふとエスターはドルチェフ達の事を思い出す。

「……ああ」

エスターのドルチェフを心配する言葉にタクヤも心の奥底では、ブラックバルチャー隊の仲間達の無事を祈る。

グランツ達の奇襲から約3日間が過ぎており、二人はブラックバルチャー隊が奮闘してグランツ達を追い返している事に僅かな望みを賭けていた。

力不足な自分達を囿になって逃がしてくれた仲間達を早く助けに行きたい気持ちが一層強まる。

しばらくしてナギサは、マクロス8船団に到着する。

初めて見る大型移民船団にタクヤとエスターは、キョロキョロしながら興味津々に眺めていた。

「すっげー、これが大型移民船団かあ……」

タクヤは大型移民船団の凄さに思わず溜め息を漏らす。

様々な戦艦や空母や色々な施設艦が駐留しており、色々と目移りしてしまう。

「今までテレビとかでしか見てなかったけど、実際に見ると凄いよね」

エスターもまた、タクヤと同じく目に映る移民船団の様子に思わず見入っていた。

ピピー

部屋のインターホンが鳴り、エスターは対応する。

『はい』

『間もなくバトル8に到着しますので、下船準備をお願いします』

『わかりました』

『それから、艦長があなた方にお会いになりたいそうなので、後程お部屋までご案内致します』

『はい、わかりました』

「何だつて？」

会話の内容が気になったのか、タクヤがエスターに話し掛ける。

「もう少し到着するから降りる準備をして欲しいのと、何でも艦長が僕達に会いたいから後で案内してくれるらんだつて」

「あー、そうなんだ。どうせ、艦長つたつて厳つい顔のおっさんか、むさ苦しいおっさんだろ？俺は別に会いたくもないんだけどなあ……」

エスターの話聞いたタクヤは、さほど興味を示さずにそのままベッドの上でゴロゴロと横になる。

別に艦長と会った所で何かしてくれる訳でもなく、何が悲しくてむさ苦しいおっさんと楽しくもない話をしなければならぬんだと。

どうせ話をするなら可愛い女の子が艦長だったら良いのに……と叶わぬ願いを心の中で思っていた。

「でも、助けてもらったんだから、お礼くらい言わないと失礼だよ」

ヘソを曲げて艦長に会いたがらないタクヤをエスターは注意する。

「はいはい、わかりましたよーだ」

エスターの注意もタクヤには全く意味も無く、タクヤ本人も上の空で聞いていた。

エスターは乗り気の無いタクヤを連れて、部屋を出て迎えに来た係員と合流する。

その間にナギサは、バトル8付近で巡航を一旦停止し、バトル8との通路ゲートを展開する。

通路ゲートが開通後、タクヤとエスターは係員に案内されてバトル8内へと搭乗する。

係員の後をタクヤとエスターは着いてくる。

「すっげー！ こゝがバトル8の中かあ〜♪」

タクヤは、物珍しそうにキョロキョロと艦内を色々と見渡す。

エスターもタクヤほどではないが、艦内を色々と見ていた。

テレビ等でしか見た事が無く、余程の事が無い限りは大型移民船団の中核であるバトル級クラスの中を自分達が歩いている事自体が夢のように思っているのだから、二人がキョロキョロするのも無理はない。

やがてタクヤ達は、部屋の前にやってくる。

「艦長は、少し遅れてくるそうなので先に部屋の中に入ってお待ちください」  
係員に案内されてタクヤ達は、部屋の中に入る。

広い部屋には、大きめの来客用ソファとテーブルが置かれていた。

「では、失礼いたします」



係員が部屋を後にして、とりあえずタクヤは、大きなソファアーに腰を下ろす。

「うお！ このソファアーすっぱーフカフカしてて気持ち良い！」

タクヤは、ソファアーの座り心地を実感していた。

「エスターも座りなよ。マジでフカフカしてて気持ち良いぞ」

タクヤは、子供っぽくはしゃぎながらソファアーに座って跳ねたりする。

「タクヤ、みつともないから止めなよ。それに艦長が来たら怒られちゃうよ」

ソファアーの上ではしゃぐタクヤをエスターは咎める。

「そんな細かい事は、気にすんなって。」

エスターの話を無視してタクヤは、ソファアーに座ったまま跳ねて無邪気にはしゃぐ。

「もう……」

話を全く聞かないタクヤにエスターは、深い溜め息を吐く。

コンコン

ドアのノックが聞こえてタクヤとエスターは、急いでソファアーに腰掛けて姿勢を正す。

先程まで子供の様にはしゃいでタクヤも急に姿勢を正していた。

「タクヤ、はしゃいでいても良いんだよ」

「バカ言え。そんなみつともない事出来る訳ねえだろ」

先程まで気にするなど自分で言っていたのに誰かが着た途端に急に態度を変えるタクヤの姿にエスターは、思わずクスクスと笑う。

「入ってもよろしいかしら？」

「ど、どうぞ」

「失礼します」

ドアが開き、女性が部屋の中に入る。

艦内職員とは違った制服を着用し、橙色の少しウエーブの掛かったミディアムショートヘアが特徴的だった。

「初めまして。マクロス8船団艦長、アンナ・エヴァンスです」

部屋に入ったアンナは、二人に敬礼をする。

二人はアンナが艦長だと知り、驚きのあまり目を白黒させる。

特にタクヤは艦長に関しては厳つい顔のおっさん、もしくは、むさ苦しいおっさんの固定概念があったのと、入って来た艦長がその固定概念と違い美しい女性である為、尚更である。

「は、はじ、初めまして。ブ、ブラックバルチャー隊所属、タ、タタ、タクヤ、タクヤ、バーズラッド伍長であります！」

タクヤは急に立ち上がり、アンナに敬礼をして元気な声で自己紹介をする。

しかし、緊張しているのか声の上擦っており、アンナもそれに気が付いて思わず苦笑いしていた。

「ウフフ。バードブラッド伍長、そんなに緊張しなくても大丈夫ですよ」

「は、はい！　じ、じじ、自分、自分は、だ、だだ、大丈夫であります！」

「タクヤ、落ち着きなよ」

「ば、ばばば、馬鹿言うなよ、エスター君。俺……じゃない、じ、自分はお、落ち着いているぞー！」

いつもの悪ふざけは成りを潜め、タクヤは言葉遣いまで丁寧だった。

エスターには、そんなタクヤの姿が滑稽に見えた。

「初めまして、艦長。自分は、統合軍第631特務部隊ブラックバルチャー所属エスター・ワードナ伍長です。この度は危ない所を助けて頂き、ありがとうございます」

タクヤに続いて、エスターもアンナに敬礼をして自己紹介をする。

「ワードナ……もしかして、あなたはエステイマ・ワードナ大佐の？」

「はい、息子です。父をご存知でしたか？」

「ええ。昔、同じ艦隊で一緒にだった時の先輩でした。あの時は本当に色々とお世話になって……」

エスターがアンナの先輩の息子だと分かり、アンナとエスターはタクヤそっこのけで

ワードナ大佐の話で盛り上がる。

「それにしても色々な経緯はあれど、ワードナ大佐のご息子が私達の移民船団に来られるなんて。お父様が聞いたら、さぞビックリするでしょうね」

「い、いえ……そんな。自分なんて父に比べたらまだまだです」

「ウフフ。ワードナ大佐の言う通りね」

「父が？」

「『エステルは、私にとって自慢の息子だ』って褒めていました」

「あ、ありがとうございます」

アンナ経由で父親の自慢話にエステルは、耳まで真つ赤だった。

(……もしかして、俺ってハブられてる?)

タクヤは、いつの間にか自分が会話に入れずにハブられてる事に気付き始めていた。

「エステル、ちよつといいか？」

アンナと話の花を咲かせるエステルにタクヤは話し掛ける。

「どうしたの？」

「なあ……お前、お偉いさんの息子だったの？」

「う、うん……ゴメンね、今まで隠してて」

「何で、それを早く言わねーんだよ！」

今まで身分を明かさなかつたエステルにタクヤは思わず激高する。

「だって、クラスメートに僕の身分を明かしたら、みんな遠慮して普通に接してくれなくなるし……」

「その気持ち、何だか分かる気がしますわ。身分を明かしたら、きつと周りも気を使つてしまわれて、エステルさんも学校生活も楽しめなかつたかも知れませんか」

エステルの内に秘めていた葛藤を聞いたアンナは、その内容に納得する。

「な、なあ……エステル」

「なあに？」

「お、俺さ、お前に今まで色々と酷い事をしたりもしたけど、もしかして……その事を父ちゃんに……」

タクヤは、今までエステルにしてきた事を思い出して恐る恐る話す。

もしかしたら、その事が父親の耳にでも入っていたら、後でとんでもない事が自分に降り掛かるのではないかと思つていたので。

そんな事を考えているうちにタクヤの顔が、みるみる青ざめ始めていた。

「嫌だなあ。僕は、そんな事でいちいち告げ口をする程、子供じゃないよ」

タクヤの問い掛けにエステルは、笑つて応える。

「ほ、ホントか？」

「本当だよ」

「実は、陰で俺の事を……」

「タクヤ、いい加減にしないと怒るよ」

不信任感を募らせるタクヤにエスターは、ジト目でタクヤを見る。

「わかった、お前を信じるよ。やっぱり、持つべきは友達だよな！」

安心しきったのかタクヤは、笑顔でエスターの右肩を叩く。

「!? そうだ、艦長。一つお願いがあります」

アンナやタクヤと会話をして本来の目的を忘れていたエスターは、思い出したようにアンナに話し掛ける。

「何かしら？」

「僕達ブラックバルチャー隊は、現在ほぐれゼントラーディ部隊の奇襲攻撃を受けて苦戦を強いられているんです」

「それは大変。すぐにでも援軍を手配します。場所は？」

「ポイントアルファ、惑星ローグです」

「わかりました」

アンナは、部屋の回線を使用して急いでブリッジへ連絡を入れる。

『こちらバトル9ブリッジ』

『アンナです。至急援軍の手配をお願いします。場所はポイントアルファ、惑星ローグです』

『了解。至急、駐在艦隊を手配します』

アンナの通信を受けたラーラは、駐在艦隊へ援軍の手配を始める。

「あなた達を迎えに来た船をまた手配しておきますので、あなた達も急いでください」

「はい。急ごう、タクヤ」

「ああ」

二人は部屋を後にして、元に来た場所へと戻る。

心の中で自分達が駆けつける間に少しでも仲間達が無事である事を祈りながら、二人は必死に駆け出す。

二人が戻る頃、ちょうどナギサへのゲートが開通しており兵士が立っていた。

「間もなく出撃しますので、お急ぎください」

「ありがとうございます」

兵士に急かされて二人は、再びナギサに搭乗する。

出撃準備が整ったナギサを含む4隻のフリーゲート艦は、惑星ローグへ向けてフォルドを開始する。

タクヤ達が惑星ローグからマクロス8船団までバルキリーで約3日くらい掛かった

距離をたった1回のフォールド航行を行い、約数分で辿り着いた。

ポイントアルファ付近に辿り着いたタクヤ達は、そこで惑星ローグの状況を目の当たりにする。

「これは……」

「何て事をしやがるんだ……」

ポイントアルファ付近には機体の残骸が散らばり、惑星ローグの表面は壤土と化していた。

「エスター、ローグに行こうぜ」

「う、うん」

タクヤ達は部屋を飛び出してブリッジへと急ぐ。

ブリッジに入ると同時にタクヤ達は、艦長に出撃許可をお願いする。

「艦長、俺達をローグに行かせてくれ！」

「お願いします」

「今は状況が分からないし、危険だからそれは出来ないよ」

「もしかしたら、生存者がいるかも知れないだろ！」

なかなか出撃許可が下りない為、タクヤは苛立ちを見せる。

「お願いします。僕達にとっては、思い出のある場所なんです」



エスターは、艦長に頭を下げ、必死にお願いする。

「お願いします」

タクヤもエスターにならって艦長に頭を下げる。

「……わかった。ただし、あまり時間は掛けないでくれ」

「ありがとうございます」

艦長の許可にタクヤとエスターは、頭を下げ、礼を言う。

出撃許可を取った二人はブリッジを後にして格納庫へ向かう。

格納庫で自分達の機体を見つけて、機体は着艦時のそのままの状態だった。

「この機体じゃ、すぐに燃料切れを起こしちゃうよ」

「くっそー、どっかに予備機とか無いかなあ……」

タクヤは、辺りを見回して予備機を探す。

ちやうど格納庫の奥に副座機のVF-11Dが配備されているのをタクヤは見つける。

「エスター、あの機体を借りちゃおうぜ」

「そうだね」

VF-11Dを借りる為にエスターは、近くのメカニックマンに声を掛ける。

「すみません。艦長から発進許可を貰っているんで、この機体をお借りしたいのですが

……」

「あの機体かい？ ああ、使っていいよ」

「ありがとうございます」

メカニックマンに使用許可を貰い、二人はVF-11Dに搭乗する。

操縦担当の前部座席にエスター、後部座席にタクヤが搭乗し、エスターはエンジンを入れて、ゆつくりと機体をカタパルトデッキへ向かわせる。

エスターは、そのままナギサブリッジに通信を入れる。

『艦長、エスターです。これからローグへ向けて発進します』

『わかった。気を付けるんだぞ』

『はい』

カタパルトデッキの発進準備ランプがレッドからグリーンに変わるのが確認したエスターは、スロットルを回して機体を発進させる。

発進後、エスターは惑星ローグに機体を向けて、そのまま大気圏に突入する。

惑星ローグの成層圏内に入り、タクヤとエスターは辺りを見回す。

あれほど生い茂っていた森林やひび割れていた大地は壤土と化し、草の子すら生えていない状態だった。

「ひでえ……」

「……………うん」

二人は、悲惨な状況を目の当たりにして思わず言葉を詰まらせる。

「!? おい、あれって……………」

タクヤが後部座席から指を指した先には、建物の残骸が散らばっていた。

「……………ブラックバルチャー基地だ」

建物の残骸を見たエスターは、ポツリと呟く。

自分達が本来還るべき場所は、見るも無残な姿と化しており、基地の残骸を目の前にして二人は、仲間達の生存に絶望を感じていた。

基地付近に降下した二人は、それぞれ基地の周りを調べる。

建物の殆どは崩れてしまっているが、所々に基地の面影は残っていた。

「!?」

タクヤはボロボロになった帽子を見つけて拾い上げる。

その帽子は、タクヤやエスターにとって見慣れた物だった。

「ミランさん……………」

タクヤは拾い上げたミランの帽子を眺め、いつしか涙を流していた。

「クソっ、クソっ、クソおおおおおおお！」

仲間を殺したグランツ達への怒りと何も出来なかった自分に対しての自責で、タクヤ

は泣きながら怒りに任せて壁を思い切り殴っていた。

## 第20話ボーイズ・ミーツ・ガール

「ミランさん……みんな」

ミランのトレードマークでもある帽子は、多少焼け焦げてはいたが、運よく原形を留めていた。

「……俺は……俺は、みんなを殺した、あのゼントラーデイが許せねえ！ 今度会ったら絶対にぶつ殺してやる！」

タクヤは仲間を殺したゼントラーデイ人、グランツに対して怒りを露わにし、肩を震わせていた。

「……」

その様子を見ていたエスターは、居たたまれない気持ちになり、何も声が掛けられなかった。

ミランの帽子を形見に二人は、惑星ローグを後にする。

二人は後ろを振り返りつつ、ブラックバルチャー基地の残骸を見えなくなるまで見続けた。

ポイントアルファ付近ならびに惑星ローグを哨戒調査を行った結果、特に異常が確認

されなかった為、ナギサを含む四隻のフリーゲート艦はマクロス8船団へと帰還する。その帰路の中、タクヤとエスターは待機室の中で仲間の死を受け止めて、お互いに黙り込んでいた。

マクロス8船団へ戻った二人は、艦長室へと案内されてアンナにポイントアルファの状況報告をする。

「そうですか……」

二人の報告を受けてアンナは、やり場の無い悲しみを感じていた。

実際に共に戦った仲間達を失った二人は、ただ悲しみの表情に満ちている。

「……これが、唯一の形見です」

タクヤは、基地の残骸から見つけたポロポロのミランの帽子をアンナに見せる。

「……大切な仲間を亡くして辛いでしょうけど、早く元気になってくれる事を願っています……ありがたいな言葉しか掛けて上げられなくて、本当にごめんなさい」

「いえ。お心遣い、ありがとうございます」

彼女なりの心遣いにエスターは、こぼれ落ちそうな涙を堪えてアンナにお礼を言う。

「艦長、もしよかったですら……ブラックバルチャー隊のみんなの墓を建てたいんですけど」

タクヤはブラックバルチャー隊メンバーの事を思い、安らかに眠れる場所の提供を艦長に願う。

「わかりました。その件については、私の方から手配しておきます」

「ありがとうございます」

「今日は色々とお疲れになられたでしょうし、シテイ8内の統合軍施設に部屋を用意しておきます。ゆつくりと休んで疲れを癒してください」

「ありがとうございます」

アンナの心遣いに二人は敬礼する。

『アンナです。統合軍施設に二名分の部屋を用意してください。それから迎えの車も』

アンナは係員に通信を入れて、部屋と送迎の手配をする。

連絡を入れてからしばらくして、係員が艦長室にやって来たので、二人は艦長室を後にして、そのまま係員の後を着いていく。

「こちらのお車にお乗りください。施設までご案内致します」

二人は係員の案内で車に乗り、シテイ8内の統合軍施設へと向かう。

道中、市民達が平和に暮らす街並みが二人には新鮮に見えていた。

タクヤ達が配属していたトラックバルチャー隊基地のあった惑星ローグには、街もななく、いつも訓練や任務が日常であり、たまの休日が自室でのんびり過ごすくらいだったからだ。

「どうですか？ シテイ8は」

車を運転しながら係員が二人にシテイ8の街並みの感想を聞く。

「いやあ、俺達のいた惑星ローグに比べたら雲泥の差ですよ」

先程の悲しみの表情から一転、タクヤはいつも通りの明るい表情に戻っていた。

「そんなに酷かったんですか？」

あまりに酷い生活環境を知らない係員は、思わずタクヤに聞き返す。

「そりゃあ酷いもんですよ。空は紫色だし、周りに街なんて全く無くて、あるとしたら木ばかりだったしね。それからさあ……」

タクヤは惑星ローグの不满を係員に色々とぶちまける。

不満のぶちまけ過ぎなのか、係員は若干引き気味で苦笑いしていた。

エステーも係員同様に苦笑いしていたが、いつもの調子に戻っていたタクヤを見て安心していた。

しばらくすると、大きな統合軍マークが描かれた建物が見えてくる。

統合軍マークの描かれた建物の入り口前で車は止まる。

「到着しました」

係員は運転席付近のボタンを押して、後部座席のドアを開ける。

自動で後部座席のドアが開くのを確認した二人は、車から降りて建物を見渡す。

「はえー、でっけえなあ……」



「う、うん」

「俺達のいたブラックバルチャー基地よりも大きいよなあ」

「かなり大きいよね」

統合軍施設の大きさに二人は、思わず圧倒する。

二人が配属していたブラックバルチャー隊基地の5倍以上の大きさである為、驚くのは無理も無かった。

「俺達、これからここに住むんだよな」

「うん」

「中を御案内します。こちらへ」

係員に案内されて二人は、施設内へと入る。

施設内はブラックバルチャー基地と違い、明るく綺麗で二人は物珍しそうに辺りを見渡す。

「鍵を貰ってきますので、しばしお待ちください」

係員がフロントからカードキーを貰いに行っている間も二人は、施設内を物珍しそうに見ていた。

「お待たせしました。こちらです」

フロントでカードキーを受け取った係員に案内されて二人は、係員と共にエレベー

ターに乗り込む。

エレベーターは3階で止まり、再び係員の後を二人は着いていく。

「こちらです」

係員は部屋の前に立ち、カードキーでドアの鍵を開ける。

「どうぞ、お入りください」

ドアが開き、タクヤを先頭に続いてエスターが部屋に入る。

「おお、結構綺麗じゃん！」

「本当だね」

ブラックバルチャー基地に比べて部屋からはカビ臭い匂いは無く、部屋も適度に広げて明るかった。

「こちらと隣りがお二方のお部屋になりますので、ご自由にお使いくください。こちらがそれぞれの部屋のカードキーになります」

「ありがとうございます」

エスターは、係員から部屋のカードキーを受け取る。

「では、明日の午前9時に再びお迎えに上がりますので、よろしくお願いします」

係員は二人に明日の予定を告げて、そのまま部屋を後にする。

「うっひょーっ！ こりゃいいや！ 俺、この部屋にしようっ」と

タクヤは、部屋に備え付けのベッドにダイビングして跳ねて遊ぶ。

子供の様にはしゃぐタクヤを見たエスターは、少しだけ悲しい思いが癒された気分になり、いつまでも仲間を失った悲しみで落ち込まずにタクヤを見習おうとも思っていた。

「なあなあ、せつかくシテイ8に来たんだしき、街の中を見てみようぜ」

「そうだね、気分転換も必要だよね」

「じゃあ、10分後に俺の部屋に集合な」

「うん、わかった。タクヤ、カードキー置いておくね」

エスターは自分の部屋のカードキーを持って、タクヤの部屋を後にする。

「とりあえず、新しく住める場所も見つかってよかった。もし、このまま漂流していたら、どうなっていた事か……」

グランツ達の襲撃から逃げ出し、先の見えない逃亡生活からマクロス8船団に拾われて新しい居住先を見つけたエスターは、心の底から開放感を感じていた。

「げ、ヤベエー！」

隣の部屋から突然タクヤの大声が響く。

「え？ なになに？」

タクヤの大声を聞いたエスターは、部屋を抜け出してタクヤの部屋に急ぐ。

「タクヤ！ タクヤ、どうしたの？」

エスターは、タクヤの部屋のドアを叩いて呼び掛ける。

「あ、あのさ、エスター……」

エスターの声に気付いたのか、ドア越しからタクヤが話し掛ける。

「う、うん」

「俺達って……荷物持たずに来ちゃったよな」

「う、うん。あの時は救難信号を受けて、そのまま出撃しちゃったしね。それでゼント

ラーデイ軍の急襲を受けて、隊長の命令で今まで逃げて来たんだし」

「つまりさ……今は無一文だよな」

「う……うん。そうだね」

「基地も、もう無いよな」

「うん……基地も壊滅しちゃったしね」

「つまり、何も無いからお金を下ろして、全て買い直さなきゃダメって事だよな」

「……うん、そうなるよね」

「はあああああ……」

結論に辿り着いたのか、タクヤは大きな溜め息を吐く。

「ねえ」

「あん？」

「もしかして……それだけの為に大声を出していたの？」

「あ、ああ……」

タクヤは自分の行動を恥ずかしく思ったのか、声のトーンも低かった。

「はあ……」

エスターは、呆れながら溜め息を吐く。

いつもの事とは言え、それに毎回付き合う自分にも嫌悪感を示すも、それでも何だかんだ言いつつタクヤを放っておけない自分がある事も認識していた。

「悪いエスター、そこで待っていてくれ」

「うん、わかった」

タクヤ自身もエスター同様に新しい居住先を見つけて心が安らいでいた。

だからこそ、大声を上げて驚ける余裕があつたのだろう。

しばらく待つと、タクヤが部屋から出てくる。

「エスター、今から銀行に行こう」

「そうだね、お金が無いと何も出来ないしね」

財布すら持っていない二人は、まずは銀行を探してお金を引き出す事を目標にする。

街頭地図を見たり、街行く人々に尋ねたりして、何とか二人は銀行に辿り着く。

「とにかくワケを話してカードか通帳を作ってもらおうぜ」

「うん」

二人は銀行に入り、受付に今までの経緯を話す。

「色々大変でしたね。では、この書類に必要な事項を入力頂いて提出をお願いします。発行まで少し時間が掛かるので、しばらくお待ちください」

受付に同情されつつも、二人は書類を作成して待つ事にする。

「はあ……腹減ったなあ」

マクロス8船団に到着する前に非常食を食べて以来、全く食事をしていない為、タクヤの腹の虫は鳴りっぱなしだった。

書類関係の手続きなどで時間が掛かり、タクヤにとっては1分ですら長く感じている。た。

時々、時計をチラ見しては殆ど過ぎていない時間にタクヤは深い溜め息を吐く。

「早くカードと通帳できねえかなあ……腹減ったよお……」

なかなかカードと通帳が出来ないと空腹の為、次第にタクヤはうなだれ始める。

「とりあえず、お金を下ろしたら何か食べようよ」

「ああ」

空腹で元気が出ないタクヤは、うなだれたままエスターの話に応える。

「タクヤ・バースブラッド様、エスター・ワードナ様」

「待ってました!」

約1時間後、受付に呼ばれたタクヤは、喜び勇んで受付に向かう。

念願のカードと通帳を手にした二人は、早速ATMで現金を下ろす。

「よっしゃあ! 金も手に入ったし、飯だ飯!」

「タクヤ、待ってよ」

お金を手にしたタクヤは、勢いよく銀行を飛び出して飲食店を探しに行く。

その後をエスターは、必死に追い掛ける。

「さあて、何を食おうかなあ〜♪」

飲食店街に辿り着いたタクヤは、辺りの飲食店を見回す。

その目は、まさに獲物を狙う野獣のような目だった。

「マクロスナルド、デリーズ、ブランコビリー、流星ラーメン、うー……色々あつて決められねええええええ!」

タクヤは飲食店が決められず、頭を抱えて悩んでいた。

空腹も極限状態に来ている為、今のタクヤには、どの飲食店の料理も美味しそうに見える。

そして、更にタクヤのお腹の音が鳴り響く。

「……幸せな悩みだね」

そんなタクヤを見ていたエスターは、思わず苦笑いをする。

「いらつしやいませー、銀河最大規模のチエーンを誇る中華飯店娘々でーす」

少し離れた場所の店からチャイナドレスの少女の呼び込み声が聞こえる。

「中華なら腹いっぱい食べそうだし、あの子は可愛い」

タクヤの脳内で中華料理がインプットされる。

そして、タクヤの視線は呼び込みをしているチャイナドレスの少女に向けられる。

少し幼い感じがする可愛らしい表情。

長い髪のお団子に結った髪型。

まさに中華料理店のイメージぴったりの雰囲気。タクヤは、次第に少女の魅力に惹かれていく。

「タクヤ・バーブラッド、これより中華料理店に向けて出撃しまーす！」

目標を決めたタクヤは、チャイナドレスの少女に向かって一目散に走り出す。

「え？ ちよつと、待つてよ！」

突然一目散に走り出すタクヤをエスターは、必死に追い掛けだす。

「いらつしやいませ、いかがですか？」

店に向かって走るタクヤに少女は、呼び込みを掛ける。



「もちろん、ここで食べていく！」

「ありがとうございます、一名様ですか？」

「いや、ほれ」

タクヤは、右親指を突き出して後ろに向ける。

その向けた先には、タクヤを追い掛けてくるエスターのがあった。

「はあ……はあ……置いていかないでよ」

タクヤに追い付いたエスターは、その場で息を切らす。

「かしこまりました。二名様、ごあんない」

少女は、二人を店内へと入れて空いた席へ案内する。

「さあ、いっぱい食うぞ」

席に着くなりタクヤは、置かれたメニューを広げて目を輝かせて見た後、すぐさま

テーブルの呼び出しベルを鳴らす。

その間、約10秒だった。

「ご注文どうぞ」

チャイナドレスのウェイトレスがオーダーを聞きにやってくる。

「とりあえず、娘々ラーメンと麻婆豆腐と餃子と肉まんとマグロまん」

「かしこまりました。そちらのお客様は？」

「じ、じゃあ、娘々ラーメンで……」

「かしこまりました。しばらくお待ちください」

オーダーを聞き終えたウェイトレスは、厨房へと向かう。

「タクヤ、あんなに注文して食べられるの？」

「何か、めっちゃ腹減ってるから食べるさ」

心配するエスターをよそにタクヤは、余裕の表情を見せていた。

「お待たせしました」

ウェイトレスがオーダーの品をワゴンに乗せて運び、テーブルの上に次々と置かれていく。

「じゃあ、いただきますー」

タクヤは、割り箸を手にとって二つに割って食べ始める。

その姿は餌に群がる肉食動物を連想させていた。

「……」

肉食動物のようにガツガツと食べるタクヤをエスターは、物珍しそうに見ながらラーメンを啜っている。

「あー、食った食ったあー！」

オーダーした食べ物は、運ばれてからものの数分でタクヤに食べ尽くされていた。

「お姉ちゃん、杏仁豆腐追加！」

通り掛かったウエイトレスにタクヤはオーダーを追加する。

「え!? まだ食べるの?」

「甘い物は別腹って言うだろ」

かなりの量の料理を食べた状態で更にデザートを注文するタクヤにエスターは、思わず目が点になる。

「お待たせしました」

ウエイトレスが杏仁豆腐を持ってくると同時に小さな人形を持ってくる。

その小さな人形は、髪の毛をお団子に結びチャイナドレスを着ていた。

「それって、ミンメイ人形ですか?」

人形に気付いたエスターがウエイトレスに話し掛ける。

「はい。只今、3000ギヤラン以上お食事をされた方にプレゼント中です」

エスターにミンメイ人形の説明しながらウエイトレスは、杏仁豆腐をテーブルの上に置く。

「小さい頃、持っていたなあ。確か背中の紐を引っ張ると私の彼はパイロットを歌ってますよね?」

「実はコレ、娘々特製のバージョンなんですよ」

「娘々特製？」

「紐を引つ張ると娘々CMソングが流れるんですよ」

ウエイトレスは、ミンメイ人形の背中の紐を引つ張る。

『はおちーらいらい めいくーにゃん にゃんにゃん にゃんにゃん にゃんにゃん にゃんはおにゃん』

ゴージャス デリシヤス でかるちゃ〜♪』

可愛らしい電子音声で歌が流れる。

「へ、へえ……色々と変わったんですね」

自分が知っている物がいつの間にか別の物に変わっていた事にエスターは、少しだけ軽いジエネレーションギャップを感じていた。

「では、こちらをお受け取りください」

ウエイトレスは、タクヤにミンメイ人形をプレゼントする。

「ああ。俺、いらねえからエスター代わりに貰ってくれよ」

杏仁豆腐を口いっぱい頬張りながらタクヤは、ミンメイ人形の受け取りを拒否する。

「では、どうぞ」

ウエイトレスは、ミンメイ人形をそのままエスターに渡す。

「ありがとうございます」

ミンメイ人形を受け取ったエスターは、懐かしさを感じたのか少しだけ微笑む。

ミンメイ人形を渡した後、ウエイトレスはオーダー伝票をテーブルに置いて、そそくさと厨房へと戻っていく。

「タクヤが貰えるものなのに、何だか悪いなあ……」

「気にすんなよ。男の俺が持つていたつて変だろ？」

「それを言ったら僕だつて……」

「お前は外見が女つぽいから大丈夫だつて。それに元々は、女だつたんだろ？」

「……う、うん」

タクヤの女だつたと言う言動にエスターは、言葉を詰まらせる。

食事を終えた二人はショッピングモールへ向かい、服や必要な物を買ひ揃えて施設へと戻つていった。

二人が施設に着いた頃には、時計は21時を回つていた。

「ああー、やっぱり街があるつて良いよなあ〜」

久しぶりの食事や買い物にタクヤの表情は、ご満悦だった。

惑星ローグには娯楽自体が無かつた為、尚更タクヤにとっては、ちよつとした娯楽施設でも充分に楽しんでた。

「タクヤ、本当に楽しそうだったよね」

今日一日のタクヤの行動を思い出して、エステルも釣られて笑顔を見せる。

「じゃあ、また明日」

「じゃあな〜」

タクヤと別れてエステルはドアの鍵を開けて部屋に入る。

エステルは、そのまま脱衣場に行き、服を脱いで備え付けの洗濯乾燥機に放り込む。

脱衣場の鏡に映る自分の裸体を見て、エステルは動きを止める。

「お前は外見が女扱いから大丈夫だって。それに元々は女だったんだろ？」

タクヤの言葉が脳裏を過ぎる。

中性的な顔立ち、腰のくびれは女性並に細く、このまま女性物の服を着て女性と言っても誰もが信じてしまうくらいの外見だった。

(もし、この身体が女性のままだったら、どうなっていたんだろう)

そんな事を考えつつ、エスターはシャワーを浴びる。

本来、女性として生まれたエスター。

しかし、幼い頃にフォールド航行中によるフォールド断層の影響を受けて、性別や体つきが男性へと性転換してしまい、今に至る。

(このまま女性だったら僕は、タクヤの事を……)

いい加減で少しイキっている所もあるが、時折見せる男らしさにエスターは少しだけタクヤに恋心を覗かせていた。

シャワーを浴び終え、洗濯機のスイッチを入れてエスターはそのままベッドに寝転がる。

ふと、娘々で貰ったミンメイ人形を手にし、人形の背中の紐を引っ張る。

ミンメイ人形から可愛らしい電子音声で娘々のCMソングが流れる。

翌朝、エスターはモヤモヤした気分で見目を覚ましながらも支度をする。

「タクヤ、まだ寝てるだろうなあ……」

支度を終えたエスターは、タクヤの様子を見にタクヤの部屋へ向かう。

タクヤの部屋の前に来た途端に昨日のタクヤの言葉が頭をよぎるもエスターは、頭を左右に振り、そのまま深呼吸をする。

「うん……もう大丈夫……」

そして、自分自身に言い聞かせる形でモヤモヤ感を打ち消す。

「タクヤ、起きてる?」

ドアのチャイムを鳴らすも返事のないタクヤにエスターは、理解しつつも溜め息を吐く。

エスターが自室へ戻ろうとした時、丁度係員がやってくる。

「おはようございます」

「おはようございます」

「昨日は、ゆっくり出来ましたか?」

「はい、お陰様で」

「それは良かったです」

エスターからの返答を聞いた係員は笑顔を見せる。

「あと、相方がまだ寝てるみたいで……」

エスターは、苦笑いしながら係員に話す。

「かしこまりました。では、フロントで合い鍵を借りてきます」

「すみません」

係員は、合い鍵を借りにフロントへ向かう。

「タクヤ、起きてくれないかなあ……」



係員がフロントへ合い鍵を借りに行っている間にエスターは、チャイムを鳴らしたり、ドアを叩いたりするがタクヤからの反応は全く皆無だった。

しばらくして係員が合い鍵を持って戻って来る。

「ありがとうございます」

「いえ、お気になさらず」

部屋の鍵を開けて、係員とエスターはタクヤの部屋に入る。

部屋の中では、案の定タクヤはベッドの中で爆睡していた。

「タクヤ、タクヤ。ねえ、起きてってば」

エスターは、タクヤの身体を揺さぶって起こす。

相変わらず身体を揺さぶってもなかなか起きないタクヤの熟睡っぷりは、感心するくらいだとエスターも内心思っていた。

「……うるさいなあ、もう少し寝かせろよ」

「お迎えも来てるよ」

「……うっさいなあ……俺は、まだ死んでねえよ」

「そつちのお迎えじゃないよ」

タクヤの寝言にエスターは、冷静に突っ込みを入れる。

「すみません、なかなか起きなくて」



る。

「彼の支度が終わるまで、我々は外で待機しましょう」

「はい」

タクヤの支度が終わるまで係員とエスターは部屋の外で待つ。

しばらくして、支度を終えたタクヤが部屋から出てくる。

「艦長がお待ちですので、急ぎましょう」

タクヤが出てきたのを確認した係員は、タクヤとエスターを迎えに来た車でシテイ8からバトル8へと向かう。

先程の件でタクヤは妙に大人しくなっており、その姿にエスターも係員も苦笑いしていた。

バトル8に到着後、係員の案内で二人は艦長室へと向かう。

「では、私はここで」

「ありがとうございます」

係員と別れて、エスターは艦長室のドアをノックする。

「タクヤ・バーブラッド、エスター・ワードナ二名。只今到着いたしました」

「どうぞ」

「失礼致します」

艦長室からアンナの声が返ってきたのを確認して、タクヤとエスターは艦長室に入る。

「おはようございます」

「おはようございます。昨日はゆっくり休めましたか？」

「はい、おかげさまで」

「しつつかし、シテイ8って凄いですね。ブラックバルチャー基地と比べたら雲泥の差ですよ」

シテイ8の街並みの凄さをタクヤは、興奮気味に話す。

「そうですね、それは良かったわ」

タクヤの話にアンナは笑顔で応える。

「立ち話もなんですから、お掛けになって」

「はい、失礼します」

「失礼します」

アンナに勧められて、二人はソファに腰掛ける。

「さて、今日お呼びしたのは、本日よりお二方には新しい部隊に配属して頂きます」

「かしこまりました」

「そうだよな。ブラックバルチャーも壊滅しちゃったもんなあ……」

タクヤは、頭の後ろに腕を組みながら話す。

既に所属していた部隊も壊滅し、新しく移民船団に配属となった二人にとって、新しい部隊は期待と不安感が募る。

特にタクヤにとっては、次の新しい上司が気になっていた。

ドルチエフみたいな厳しい隊長になるのか、それともまた違った感じになるのかと思う思いが頭の中を巡っていた。

「あなた達の上司となる方も、もうすぐ来ますので、しばらくお待ちください」  
時計を見ると8時55分を表示していた。

「失礼します」

ドアがノックされ、部屋の外から女性の声が聞こえる。

「どうぞ、入ってください」

アンナの了解を得た後にドアが開き、中から一人の少女が入室する。

少女は青いロングヘアを緩く束ね、左目下の泣き黒子が特徴的だった。

「あ……」

タクヤとエスターは、少女の顔を見るなり、驚いたように目を大きく見開く。

「え？」

一方の少女もタクヤとエスターを見るなり、タクヤ達と同じ様な驚いた表情をする。

「ク……クリス……」

「タクヤ……それにエスターまで」

「あら、三人共お知り合いだったのかしら？」

三人のやり取りを見ていたアンナが声を掛ける。

「え、ええ……まあ」

クリスは少し引きつった表情をしつつ、しどろもどろしながら応える。

「本時刻を持つて、あなた達三人は新規部隊レッドアップル小隊へと配属になります。

小隊長はクリスチーナ・プレセアに任命します。また、階級もクリスチーナ軍曹は少尉へ。タクヤ伍長、エスター伍長は軍曹へ昇格となります」

「りよ、了解」

アンナから新規部隊の小隊長に任命され、クリスは狼狽えながらも敬礼する。

「こちらが辞令ですので、受け取ってください」

三人は、順番にアンナから辞令を受け取る。

辞令を受け取る三人の内のタクヤとクリスの表情だけは、凄く重たい感じの雰囲気と表情にエスターもアンナも、その理由に気付く事は無かった。

「あなた達の機体も手配が済んでいますので、後で確認をしてください」

「ありがとうございます、艦長」

部隊も新しく変わり、タクヤは他の部隊のお下がりではなく完全な新品の機体が配備される事にワクワクしていた。

「あの、艦長」

エステルがアンナに話し掛ける。

「どうされましたか?」

「あの……僕達が今まで搭乗していた機体は、どうなるんでしょうか?」

エステルは、自分達が搭乗していた機体の行方が気になっていた。

「この船団には残念ながら、あなた達の機体の弾倉や予備部品の資材が無いので申し訳ないですが廃棄処分になります」

「……そうですか」

アンナの回答にエステルは、少し表情を陰らせる。

今まで自分でメンテナンスをして、ある程度愛着が湧いてきた機体が、こうもあっさりとは廃棄処分されると思うと心の中で寂しさを感じる。

既にV F-111自体もエステルが搭乗していたB型ではなく、アビオニクス等のソフトウェア面をアップデートされたC型へと配備変換されているので無理も無かった。

「では、艦長。私達は機体の確認に向かいます。タクヤ、エステル、行くわよ」

「三人共、新しい部隊で頑張ってください」

クリス達三人は、敬礼して見送るアンナに敬礼をして、そのまま艦長室を後にする。

「それにしても、まさかクリスが俺達の隊長になるとはなあ……」

タクヤは、クリスが自分の隊長になっている事に未だに不満を漏らしていた。

「何よ私が隊長じゃご不満かしら？」

タクヤの不満にクリスは食ってかかる。

「べつつにい〜」

そんなクリスに対してタクヤは、あつけらかんと応える。

「それにしてもクリスがマクロス8船団でパイロットをしていたなんてビックリしたよ」

「うん、まあ……ね。本当は特務部隊に配属だったんだけど、ちょっと色々あつてね。

その時にアンナ艦長が私をマクロス8船団へ配属させてくれたの」

「……クリスも色々あつたんだね」

エスターは、自分の心境の様に重ね合わせて話す。

エスター自身も本来は、特務部隊へ配属される予定だったが、タクヤの事を踏まえてあえて特務部隊配属を辞退しているからだ。

格納庫に辿り着いた三人は自分達の機体を探す。

「ど、どれなのかしら？」



周りは、一般機の機体色が茶褐色のVF-11ばかりで見分けが付かなかった。

クリスは、近くのメカニックマンに自分達の機体の場所を聞く。

「すみません」

「はい」

「私達、本日付けでレッドアップル小隊に配属ですけど、私達の機体は何処なんでしょう？」

「ああ、レッドアップルね。こっちですよ」

メカニックマンの手引きでクリス達は機体の場所へと案内される。

三人の前に白地の機体色に脚部と機体上部のラインカラーがそれぞれ赤、青、緑のVF-11が並ぶ。

「えーっと、クリス少尉がラインカラーが赤のS型で、エスター軍曹が青、タクヤ軍曹が緑の機体ですね」

メカニックマンは、メモを確認しながら搭乗機体の説明をする。

「ありがとうございます」

「後程、3機共にスーパーパックの換装作業に入りますので、よろしくお願いします」

メカニックマンは、換装作業の案内をしてからクリスに敬礼して作業をしに去っていく。

「うっひょー！ おニユウの機体だぜ！」

綺麗に整備された新品の機体にタクヤのテンションは否が応でも上がる。

その一方で、エスターは今まで自分達が乗っていた機体がキャリアーで別の場所に移動されるのを目撃する。

自分でメンテナンスをして愛着が湧いていた機体が処分されると思うと胸が痛く感じていた。

「さて、機体確認も終わったし、これから艦内を案内するから着いてきて」

タクヤとエスターは、クリスの後を着いて艦内を回る。

更衣室やシミュレーション室等の主に一般隊員が使用する施設をクリスは案内する。

「大型移民船団って今までテレビでしか見ていなかったけど、改めて見てみると凄く広くて大きいね」

色々な施設を周りながらエスターは、興味津々で艦内施設を見る。

「おい、お前達」

突然後ろから声を掛けられて三人は振り向く。

そこには、三人の女性が立っていた。

「アスカ中尉、どうされました？」

クリスが声を掛けた女性に対応する。

声を掛けた女性、アスカは大柄で見た目は野蛮そうなイメージが特徴的だった。

「クリス、風の噂で聞いたが、ブラックバルチャーとか言う部隊にいたのは、この二人か？」

「ええ、そうですけど」

「おい、お前達」

クリスに内容を確認をした後、アスカはタクヤとエステルに声を掛ける。

「な、何だよ……」

「何でしょう？」

大柄な女性に声を掛けられてタクヤは、少しビビっていた。

アスカ自身は、パツと見で体格も良さそうに見える為、下手な対応したら殺されかけないと思っていたからだ。

それとは対照的にエステルは、いつも通りの対応だった。

その辺りが二人の普段の人との接し方で分かりやすい反応だろう。

「ホラ、フィリア」

アスカは後ろでモジモジしている女性、フィリアに声を掛けてタクヤとエステルの前に突き出す。

アスカに突き出されてフィリアは、よろけながら二人の前に出る。

「え、え……と、そ、その……」

赤い髪色にお団子頭が特徴のフィリアは、顔を赤らめてモジモジします。

二人に対して何か言いたい感じだが、なかなか言い出せない。

「な、何の用っスか？」

「僕達で分かれば良いんだけど……」

二人はモジモジして、なかなか話そうとしないフィリアにヤキモキする。

「あ、あの……あの……マ、マリ、マリ……」

「マリ？」

「え、と……その……マリじゃなくて……その……」

「だあああああ、じれってえええええ！」

モジモジしながら話すフィリアにタクヤは苛立ちを見せる。

「大人しくしなさい！」

苛立つタクヤをクリスが後ろから羽交い絞めにして抑える。

「ありがとうございます、隊長。フィリアさん、ゆっくりで良いですよ」

苛立つタクヤをクリスに任せてエスターは、フィリアを宥めながら話す。

「あ、ありがとうございます。え……え、と……その、マ、マリアお姉ちゃんは……その、げ、元気……ですか？」

フィリアのマリアと言う言葉にタクヤとエスターの表情が固まる。

「待てよ……マリアって……」

「あの……フィリアさん」

「はい」

「マリアって、もしかして……マリア・ランカスター大尉の事ですか？」

「は、はい！ マリア・ランカスターは、わ、私の……お姉ちゃんです」

フィリアがマリアの妹と分かると同時にタクヤとエスターは、お互いに顔を見合わせる。

グランツ達の襲撃でブラックバルチャー隊共々マリアは、既に殺されている為、エスターはこの状態をどう説明すればいいのかと考える。

「フィリアさん……落ち着いて聞いてください」

エスターは、真剣な眼差しでフィリアに話し掛ける。

「は、はい」

「マリア・ランカスター大尉は……3日前のゼントラーデー軍の奇襲攻撃で、僕達二人を逃がす為に……隊長と一緒に」

エスターは、途中で涙を流しながら状況をフィリアに伝える。

「俺達が……俺達が不甲斐ないばかりに」

タクヤは顔を伏せたままフィリアに話す。

タクヤとエスターの話を聞いたフィリアは、話の内容を理解したのか、思わず後退りをする。

「……お姉ちゃんは……マリアお姉ちゃんは……死んだのですか？」

「……は、はい」

恐る恐る問い掛けるフィリアに対して、エスターは首を縦に振る。

「いや……いや、いやあああああああ！」

マリアの死を知ったフィリアは、その場にしゃがみ込み大声で泣き出す。

「お姉ちゃん、お姉ちゃんああああん！ うわああああああん！」

泣き叫ぶフィリアを見て、タクヤとエスターは居たたまれない気分になっていた。

直接的ではないとは言え、間接的にマリアを見殺しにした様な形だから尚更である。

「おい、テメエ！ 不甲斐ないとか良いながら、本当はこのこと逃げたんじゃないだろうなあ？ ああ!？」

状況を見たアスカは、怒りに任せてタクヤの胸倉を思い切り掴む。

「お、俺だつてなあ、最後まで戦いたかつたんだ！ でも、隊長が俺達二人だけでも逃げろつて言うから……それで」

アスカに胸倉を掴まれつつも、タクヤは必死に訴えかける。

仲間達が戦っている中、自分だけコソコソと逃げるのは、タクヤにとっては一番嫌な事だった。

「僕達の力不足なのは認めます。本当に申し訳ございません！」

エスターは、フィリアの前で土下座をして謝る。

仮に自分達が加勢したとしても戦況が変わる訳がなく、そこには自分達の実力不足に對しての悔しさもあった。

「お、俺も……申し訳ない！」

アスカに胸倉を掴まれたままタクヤも必死に謝る。

「……」

二人の必死のお詫びを見たアスカは、タクヤの胸倉を掴んでいた手を離す。

「……アンタ達、もういいよ。悪かったな」

アスカは、感情的になってタクヤの胸倉を強引に掴んでしまった事を詫びる。

「フィリアも、もう泣くのは止めなよ」

アスカは、座り込んで泣きじゃくるフィリアを宥めるようにして起こす。

フィリアは、アスカに起こされるも足元をふらつかせて倒れそうになり、そのままアスカに身体を抱えられる。

「レイナ、フィリアを連れて行け」

長身でボーイッシュな雰囲気を持つ女性、レイナは無言でフィリアを宥めながら連れて行く。

「二人共、辛く当たって、すまなかったな」

「い、いえ……こちらこそ」

「じゃあ、私はこれで」

二人に謝罪したアスカは、フィリアとレイナの後を追い掛けるように去っていった。

クリスは、言葉の掛け様の無い雰囲気にとだ立ち尽くすだけだった。

「……すまねえな、カッコ悪い所を見せて」

クリスに背を向けて、タクヤは顔を伏せたままクリスに話す。

その背中の雰囲気は重苦しい雰囲気を漂わせていた。

「僕は、二度と同じ過ちを繰り返さないようにしなきゃね」

エスターは涙を拭いながら立ち上がる。

「あ、あなた達も色々辛い事があったのね。う、うん……とりあえず、元気出そう。ね

！」

クリスは、この重苦しい雰囲気を少しでも和ませようと自分なりに必死に二人を励ま

す。

「ありがとう、隊長」



クリスの励ましにエスターは、少しだけ笑顔を見せる。

「い、一応、私だって隊長なんだから、これくらいは出来ない」と

少しだけ笑顔を見せるエスターにクリスは、内心ホツとしていた。

「うーん……でも、やっぱり顔馴染みにいきなり隊長って言われるのは、何だか変な気分になるわね」

士官学校時代の顔馴染みが自分の部下になり、しかも隊長と呼ばれる事にクリスは言葉に表せない恥ずかしさと違和感を感じていた。

「やっぱり、そう感じるのかな？」

クリスの思いに対してエスターも少なからず同じ様に感じていた。

「だって、今までお互いに友達同士でやっていたのに急に上司と部下って、やっぱり変な感じよ」

「んなの気にしないで、クリスはクリスで良いじゃねーかよ」

さつきまで落ち込んでいたタクヤが、急にいつもの調子でクリスに話し掛ける。

先程まで落ち込んでいた様子からの立ち直りの早さにクリスは少し驚く。

「立ち直り早いわね」

「いつまでも辛気臭い事考えても面白くないだろ？ そんな事より隊長って呼ばれるよりもクリスの方がいいだろ？」

「……やっぱり、隊長って呼びなさい。馴れ馴れしく思えるし、それに他の人達に示しが付かないわ」

「はあ？ 何だよそれ」

「親しき仲にも礼儀ありって言うじゃない。いい？ 私は隊長でああなたの上司。OK？」

「……はあ？」

クリスは、少し自信満々な笑顔をタクヤに見せる。

そんなクリスにタクヤは、不満そうな表情を見せる。

「とにかく、最初は慣れないかもしれないけど、練習でもいいから言いなさい」

不意にクリスは、タクヤに顔を近付ける。

顔を近付けるクリスから漂うフレグランスの香りにタクヤは、少しだけ顔を赤らめる。

普段、女性が間近に顔を近付けるシチュエーションが無い為、尚更だった。

「どうしたの？ 顔を赤くして」

「な、なんでもねえよ！ 顔近いし、離れろよ！」

顔が赤い事をクリスに気付かれたタクヤは、少しだけクリスと距離を置く。

「さあ、練習練習」

そのクリスの笑顔の裏には、見えない圧力がある事をタクヤは、少なからず感じていた。

「……た、隊長」

タクヤは、恥ずかしさからかボソツと呟く。

「んー？ なあに？ 全然、聞こえませーん」

クリスは、左耳に左手を当ててタクヤの顔付近まで近寄る。

クリスが顔を近付けてきたのを確認したタクヤは、意地悪そうな表情をして思い切り息を吸い込む。

「たああああいいいいいいちよおおおおおおおおおー！」

「キヤアアアアア！」

そしてクリスの耳元で怒鳴るように叫び、突然の大声にクリスはひっくり返る。

「ちよつと、な、何すんのよー！」

左耳を塞ぎながらクリスはタクヤを睨みつける。

「へっへ〜んだ。誰がクリスを隊長なんて呼んでやるもんかよ。あつかんべー」

タクヤは舌を出してクリスを挑発して、そのまま逃げだす。

「ちよつと、タクヤ！ 待ちなさいってばー！」

逃げるタクヤをクリスは、必死に追い掛ける。

(相変わらずだなあ、あの二人……)

士官学校時代から二人の関係があまり変わっていない事にエスターは、苦笑いしながら見ていた。